

---

# 水色と灰色と赤の旅～かの人記憶流れ行くと共に

古川まこと

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水色と灰色と赤の旅〜かの人の記憶流れ行くと共に

### 【Nコード】

N5832F

### 【作者名】

古川まこと

### 【あらすじ】

旅をするヨウと、それを追い旅に出たカイと獣。彼らの旅の出会いの中で、二人の共通の知人である、ある青年の記憶が蘇る。

## 始めの話（前書き）

真つ赤な瞳が、空を見上げた。

ただっ広い草原の中、ぼつりと目立つ赤い頭が点のように存在していた。

「天気、いいな」

誰に言うでもない。これはただのひとり言だ。

ヨウは手で影を作って空を見上げる。

白い雲がところどころ目につく青い空。

日差しは柔らかく暖かい。

前の町で金銭の補充と、鞆、靴の買い替えはできた。

この旅の目的ももう果たされている。

あとは、この少年次第ということだ。

ヨウは口の端を持ち上げた。

「俺次第、か」

悪くないな、と、少年はその道を進みゆく。

今日一日歩けば、次の町が見えてくる予定だ。

## 始めの話

「この野郎！！ 待ちやがれ！ くそお！ このくそ餓鬼があ！！」

男はこめかみに青筋を立てて怒鳴った。

その前方には、なんとも驚異的な速さで走る黒い塊。いや、それは子供のようだった。頭をすっぽりとフードで覆い、容姿という容姿は全く見えない。

そして、その隣には当たり前のように子供と駆ける獣がいた。大きな灰色の犬……いや、狼だ。その口には何かを啜え、まるで主人が投げたボールをちゃんと拾ってきた時を思わせる、満足げな顔をしていた。楽しげとも言えようか。

「こおのくそ餓鬼ー！！ ただじゃおかねえー！！」

男の必至の形相を振り返り、子どもは走りながらため息をつく。

「まいったなあ、うまくいったと思ったのに、」

「どうやってまごうか？ と獣に尋ね、子供は大通りの人波を早々と駆ける。

なんとも器用というか、その姿はまるで猫から逃げるネズミのごとく、だ。軽々と障害物を避け、どんどん男との距離をとっていく。

バサア……………

人を避ける際に起きた風が、子供の被っていたフードを持ち上げた。ぶわりと吹いた風。布の音と共に子供の頭部が露わとなる。

「まずい……！！」

“カイ”は、フードも何もかぶるものの無くなった自分の頭に触れる。その指に触れたのは、触り馴れた自分の髪の毛。

男に追われて走るのは、15〜16歳ほどの子供だった。その容姿は男とも女ともとれる。だが、一番に人々の目を引いたのは、その子供の“色”だった。

黒や紺、茶色などの頭が多い中、その子供が持つ髪の色はなんとも透きとおった冷たさを思わす水色。よく見ればその瞳も同じ色をしている。

キヤア！ ワア！ と驚きに人々が声を上げる中、焦げ茶のコートを身にまとった子供は速度を緩めることなく駆けた。通り過ぎていく人々の波。その中からは、ちらほらと『化け物』と呼ぶ声も聞こえてくる。

「おい、どうする?! どこか人目のない場所は、」  
少し焦りながらカイが尋ねると、横を走る獣はくいつと行く道をそれ、路地へとはいつて行った。

姿は見えないが、あの男が追ってきているはずだ。  
カイは獣の後を追いながら自分の後方へ視線を流す。

「よし、これなら逃げ切れ、……………おい、」  
最後の言葉は呆れていた。速度を変えず走る前面、見えたのは堂々と道をふさぐ高い壁。

これはどうということかと獣を見ると、獣はカイを振り返ることもなく、その壁へ猛スピードで駆けて行った。そのしなやかな体は、壁を三〜四回蹴り、ひらりとその向こう側へ消えてしまう。

「あいつ……………」  
私にあれを越えろってか、とカイは頭を掻いた。

カイは人間だ。先ほど人々が呼んでいたように『化け物』でもなければ獣でもない。それどころかまだ成人もしていない子供である。いったいなせこうも気を使ってはもらえないのだろうか、と呆れながら、カイはコートの中の自分の腰へと手を伸ばしていた。

「崖から突き落として育てるって、やつか」  
まったくもう、と腰から抜いたのは3つのナイフ。柄には紐が結ばれていた。

「私は、お前みたいにひらひら行けないからな!」  
言わなくとも分かっているだろうかと、内心でわかりながらも口に出し、カイは「待ってるよ」と獣に告げた。

まだあの男は追いついていないのだ。

カイは減速しないままに壁へと駆けた。目の前に迫る壁へ持っていたナイフを投げる。タン、タン、タン、とテンポよく突き立ったナイフは、ちょうどいいくらいの間隔を取って足場を作った。だが、所詮はナイフだ。足場としては小さすぎる。カイは手にもう一つナイフを持つと、その自分が創り出した小さな足場へと思いつき駆けあがった。

( 1つ目！ )

ガリツ……………と持っていたナイフを壁に刺しバランスを取る。

そして素早く抜き取ると、次の足場へとジャンプした。

( 2つ目！ )

少し距離が足りなかったものの、持っていたナイフで壁にぶら下がり、なんとか足を伸ばしてつま先で触れた。だが、このままナイフにぶら下がり、足場に触れているだけではいられない。片足を引き寄せると、カイは開いている方の手でその靴の下に触れた。そこから足場として使われているものより少し小さめのナイフがでてくる。カイはそれを握ると、壁に突き立て、両手でザクザクと壁を突き刺しながら、何とか自分を足場に重心を置ける場所へと移動した。

「よし、」

そして、隠しもっていたナイフを靴の下へとしまい直すと、少し手前、少し高めの位置につき立てられた足場へと飛び移った。

( これで、ラスト )

3つ目の足場に飛び乗ってすぐ、壁の縁へと手を伸ばす。ざらりと砂っぽいそれをぐっと掴み、カイはそのままひらりと壁の上に乗った。

足をだらりと下にたらし、大きく息をつく。

「良かった、……………準備しておいて」

準備とは足場用のナイフのことだった。柄に結ばれた紐は、カイの手元へとつながっている。

「回収回収」

グイツと手に握った紐を引くと、壁に突き立てられてたナイフはそこから抜けた。カいは紐を引き寄せて、ナイフを一個二個と腰にしまう。

壁の反対側を見れば、下で獣がお座りをして待っていた。その口にはちゃんと“あれ”が加えられていた。

「ったく。無理させないでくれよ」

カいは最後のナイフを腰に収め、ひょいっと壁の上から飛び降りた。

反対側では、今しがた追いついたのか、あの男の騒がしい足音が聞こえてきた。

「くっそがあ！！返せ！泥棒！」

まるで目に見えるかのように、地団太を踏む音が壁を通して伝わってくる。

「何が泥棒だ」

カいは「ふんっ」と鼻を鳴らした。

「先に泥棒したのはそっちのくせに」

そう言うと、獣が加えていたものを受け取り、慣れたように首にかけた。首にかけられた石はあるべき持ち主の胸の上でころりと転がった。その石肌は少し白くくすんでいるものの、透明な内側がうつすらと透けて見えて綺麗だった。

\*\*\*

ミネはカいの水色の髪を切りながら、「短い方が似合いますよ」と言っただけほほ笑んだ。

自分と同年の、自分より背が低めの彼女。

自分が幼い頃にこの家にやってきた彼女は、これからこの町を出

ようとしている。

そこまで知っていながら、ミネはカイをとめようとはしない。いつ戻ってくるかもわからない、親友であり家族である彼女がいなくなる事には、とてつもない寂しさがあるというのに。

『ミネ』

カイはミネの真つ黒な瞳へ、様子を伺うように視線を投げ掛けた。ミネの瞳にカイの瞳が映る。

『なんです？』

ミネのいつも通りの柔らかい言葉。そしていつも通りの柔らかい笑顔。

『えーと。………なんとなくなんだけどさ、』

少々目付きの悪い二つの水色が申し訳無さそうに泳ぐ。だが、それはすぐに改められ、悪戯っ子のように笑いながら、ミネを真つ直ぐと見つめた。

『ちょっと旅して見ようかな、なんて』

そのあっけらかんとした笑顔に、ミネは寂しさを忘れ噴き出した。なんてこの子らしいのだろ、と思わず心からの笑顔を漏らす。

## 0 【赤の話】

「なあ、僕。この村の子だね」

優しく微笑む、見慣れない男がいた。

そこから少し距離を置いた場所に、真つ赤な髪を風に揺らせる少年。

少年は無表情なその赤い瞳を見知らぬ男に向ける。

「ちよつと道案内をしてほしんだ。おじさん、あちらの山に行きたいんだけど」

そう言つて大股で近づいてくる男を、少年は黙つて見上げていた。まだ4つか5つ位の年頃だ。

自分よりはるかに大きな男を見上げ、少年は後ろを見る。

そこには彼の村があつた。だが、彼とその男の様子に気が付いているものはいないよう。誰かに助けてもらつてもらうつもりはないが、村の大人たちならどういふ態度をとるだろうかと、少年は想像を膨らます。

「さあ、頼むよ」

男は動こうとしない少年の腕を引いた。

その力が強すぎたのか、少年は痛そうに顔をゆがめる。だが男はそんなことに気を使おうとはしなかった。彼は、とりあえずこの少年をこの場所から少しでも遠ざけたかったのだ。

「ほら、早く」

男のせかす声。

子供は派手な抵抗はしないものの、男の引かれるままにいるものと、地面につく足へ力を入れた。

だがそんな小さな努力もむなしく、子供の体は男によりずると引きずられる。

「な………」

少し驚いた声と、突然止まった男の足。

子どもがいったい何だろうと覗きこむと、男が向かおうとした道の先に、一人の老人が立っていた。

背筋をぴんと伸ばし、真っ白な顎鬚を蓄えた、背の高い老人。

老人は威厳のある声で男へ訪ねる。

「うちの孫に、何か用ですかな」

男は一步後ずさった。

「……………ウチの孫老長」

子どもは小さくつぶやくように声を漏らす。

「ヨウよ、勝手に一人で村の外に出るなど、何度言ったことか」

「……………ごめん」

男の横で、少年はうつむく。男は老人を見つめたまま、少年の腕をつかむ手に“ぐっ”と力を加えた。どこか悔しそうに、その唇は引き結ばれている。

老人は、さらに一言問いかける。

「さて、見知らぬ人よ。あなたはなぜわしの孫の腕を引く」

「いや、俺はただ道案内を……………」

「なら、私がして差し上げよう。それとも、この村の大人にでも頼みましようぞ」

「べ、別にそんな気を遣わせるわけにゃ」

「ほう。村の大人たちには気を使いたくないと。ですが、そんな小さな子どもには甘えるおつもりですか」

「い、いや、俺は単にこどもが好きだから……………」

「立ち去りなさい」

ぴしゃりと老人は言った。

その瞳はまだ色あせることのない赤茶で、見知らぬ男を威嚇するように睨みつけた。

「今ならまだ許されましよう。さあ、今すぐこの場所から、私の目の前から立ち去りなさい」

男は悔しそうに足もとの少年をみて、また老人をみた。

そして、小さな葛藤の後、「ちっ」という舌打ちを残して道の向

こうへと駆けて行ったのだった。

周りの家々とはそう変わらない様子の家に入り、老人は少年を椅子に座らせた。

老人が片手を燭台のほうへ払うと、ろうそくに火がつき室内を淡く照らし出した。そこにはライターもなければマツチもない。老人は手を軽く払うのみで、当たり前のように明かりを作り出したのだ。「……………ヨウよ」

老人が少年へ、低く語りかける。

「ヨウよ、いいかい。私たちは英雄の血を受け継いでいる。この村ではそう珍しくない赤い髪も、赤い瞳も、褐色の肌も、外からしては珍しいものなのだ。だから、ヨウよ。気をつけなくてはいけないよ。自分の身を自分で守れるようになるまでは、決して村の外を一人でうろついてはいけない。わかったね」

少年は聞き飽きた言葉に、いつものごとく頷いた。

老人はその燃えるような赤の頭をなでてやる。

「お前はきつと強くなる。そしたら、自由に外にでるといい」

その言葉にも飽きたように、少年はただじつと、椅子に座って窓の外を眺めていた。

## 1【化け物が潜む街：前】

珍しい客が来た。

ここ十年近くこの街で宿をしているが初めて見る容姿だ。

赤い髪に赤い目。日に焼けたような肌。あちらの大陸から来たのだろうか。

「泊まりたいんだけど」

客はふて腐れたくま様にそう言った。

あまりじろじろ見たので気を悪くしてしまっただろうか。何しろ本当に珍しいもんだから、つい。

この街は結構大きいのが、やはり、この客の様な容姿は一人も居ないだろう。

\*

「お客さん、旅の人かい？」

熊の様な亭主は、ヨウに鍵を渡しながら尋ねた。

「どれくらい泊まってくかね？」

「その時になつたら出ます」

「そうかい。わかった」

はつきりしない返答だったが、亭主は黙って頷いた。

何しろこの街は人の出入りが多い。そういつた場所にはいろんな人間が集まるものだ。

今回のような人間も少なくはない。ふらりと現れたかとおもうとふらりと出ていく。この宿は、というより、この街の宿は、そういう客には慣れていた。

「じゃあ出る時に言ってくれ。勘定はその時するから」

「わかった」

「部屋は二階の一番奥だ」

ヨウは頷き、鍵を受け取る。二階へ行く途中「珍しい子だねえ」というお女将さんの声が聞こえた。

「はあ……」

まったく、と息をつく。

この宿に来るまでヨウは、この人通りの多い街をフードでやり過ごして来た。彼的には自分の容姿をあまり気にはしてはいないが、この街の子供はどうやら積極的な傾向があるらしい。わざわざ下に回り込み、顔を覗き見ては声をあげるし、気を引こうと足下をうるちよろしたり。

「蹴飛ばしてやれば良かったか」

ヨウは疲れたようにつぶやく。今の彼なら、きっと本当に子供を蹴っ飛ばしてしまいそうだ。

まあ、いい……。ヨウは呟く。

この宿は当たりだろう。亭主も変に口を出してこないし、あと一二年とはいえ未成年の自分へ子供扱いもない。

ヨウはコートを脱いで、適当に放った。ばさりと音を上げ、コートはベットの木枠へと引っかかる。

もう少し暗くなったら外へ行こうか。

今は少し休み、それからどうするか考えたい。それに、動き回るならやはり人眼は引きたくない。この容姿ではどうしても人目を引いてしまうし、暗い方が好都合ではあった。まあ、この街にはフードをかぶった人間はたくさんいる。昼間でも目立つこともないし、便利な場所だ。

(フード、か)

一瞬、ヨウの頭に水色の頭をした人影が浮かび、すぐに消えた。

「……………汗でも流すか」

\*

暗くなったというのに、人通りは減る事がなかった。  
仕方無くヨウはコートフードを被る。

(昼よりマシかな)

暗いし、フードを被っていても全く怪しまれないし。  
街の人通りは変わらないが、雰囲気はかなり変わっていた。

昼間の楽しそうともいえる賑やかな空気は一転して、子供が言う  
「大人の空気」になっていた。

開いてる店の前を通る度に、煙草やアルコールの匂いが鼻を刺す。  
ヨウは特に気にとめた風もなく、そんな夜の街を歩き回った。

どんつ、と音を立て人がぶつかる。背丈からしてそれはまだ子供  
だった。上から薄汚れた布をかぶり、顔を隠している。

ヨウは謝るところか、その相手の腕を荒々しく掴んで引き止めた。  
「返せ」

ヨウの一言に相手は硬直する。  
多分一人での犯行だろう。仲間はいないはずだ。多分。

ヨウは腕を掴む力を強める。  
「聞こえたる。返せ」

頭に布を被った、自分の胸辺りの身の丈の相手。その喉が、ごく  
りとなった気がした。

通り過ぎる人間が、邪魔だと言わんばかりの視線を投げ掛けて来  
る。

「ちっ」

ヨウは舌打ちし、相手の腕を強く引いて近くの路地裏に入った。

そこには飲んだくれが酔い潰れている以外誰も居ない。

「ほら、返せ」

ヨウはフードを外し、正面切つて相手を睨み据えた。相手の胸倉  
を掴み、壁へと押し当てる。なんとも乱暴なその様子は、どちらが  
悪者だか分らない。

相手は「本当は嫌なのだが仕方ない」とも言いたそうに、のろの  
ろと手の中にある物を寄越した。

ヨウの財布だ。財布といっても適当な巾着に小金を詰めた物だが。中からはがちゃがちゃと景気のいい音が聞こえた。

ヨウはそれをポケットに突っ込む。そして何も言わずその場を後にしようとした。

「待ってよ！」

路地裏に高めの声が響く。

呼び止めに応え、ヨウは面倒臭そうに頭だけで後ろを向いた。

いましがた自分の財布を掏<sup>す</sup>ろうとしてきた相手。それが頭の布を取って自分を強く見つめてる。

「お願いだ、待って！」

「お前……………」

ヨウは言葉を切った。

目に入ったのは水色の……………、いや。白い頭だった。暗がかりということもあり、見間違えたのだろう。

ヨウは、一瞬誰かと間違えそうになった己を恥じた。水色の誰かと。

だがよく見れば全くの別人。と言うより、よく見なくとも全くの別人ではないか。年も背丈も違うのだ。

水色の姿を思い出してしまった自分へ、ヨウは不愉快そうに眉を寄せ、また歩き始める。

「待て、待ってくれ！」

白い頭の少年はヨウの腕を引く。

「なんだよ」

ヨウは興味なさげに、足を止める事なく返す。

白い頭は半ばヨウに引きずられている状態だ。

「俺、奴等に仕返ししたいんだ！ あんた強そうだし、手伝ってくれよ！」

「奴ら？」

「俺を化け物とか呼ぶ奴らだよ！ この奴らは皆そうだ！！ 物語をネタにして、俺をのけ者にしようとする！」

なるほど。「水色の化け物の話」か。

(あいつと同じだな)

ヨウは少年の白い頭と、記憶にある水色とを比べる。

確かに。眼の前の白は、周りの色を反射し水色に見えなくもない。これなら苛めの獲物としては最適だろう。

だが、それだけだ。自分には関係ない。

「嫌われ者、か……………」

ヨウのこの言葉には、興味というものが全く含まれていない。

ただ漠然と、少年の姿を見て「こうなるのが普通なのだろう」と頭の片隅でそう思うのみ。

そしてやはり、一つの水色の姿を思い出してしまふ。

人眼から隠れる様に移動し、自分を悪く偏見する奴を恨み、憎しむ。危害を加えてきた人間たちへ復讐の念を燃やし、負の感情に駆られ生きる。普通は、普通なら、そうなるのだろうに。この、白い髪をもって生れてしまった子供のよう。

(……………)

ヨウはわしゃわしゃと頭を掻き、腕にしがみつくと少年に目をやっ

た。

「お前、男だよな」

「は？」

少年は訳が分からなくて目を丸くする。

「あ、当り前だろ！」

からかわれたと思ったのか、少年は顔を赤くして怒鳴った。

「分ったから大声出すな」と、ヨウはうるさい蠅を払う様に手を振り、少年に尋ねる。

「家どこだ」

「送ってくれるの？」

少年の期待のまなざしがヨウへと注がれる。

それを見て気が変わったのか、ヨウは不愉快そうに「まさか」と応え、また歩き出だした。

「頼むよ、いいだろ?! 手伝ってくれよ!」

人込みを避けながら、少年は諦めずフードをかぶった赤の後ろを歩く。

ヨウはあくまで、その少年の姿が見えていない様に振る舞った。

なぜ自分が赤の他人を連れまわしているのか。この状況が全く理解できない。

(……………面倒だ)

宿へ戻ろう。

ヨウは歩調を早め、路地裏に回り、少年には飛び越えられそうにない適当な壁を見つけ、ひらりとその向こう側へ跳んだ。その動作はすべて無駄がなく、一瞬の閃きにもかかわらず計算された通りに行われた。

「……………あつ、待って!」

壁の向こう側で声上がる。

ヨウはそんな声に耳も貸さず、さっさと自分の宿へと駆けて行った。

## 2【化け物の潜んでいた村】（前書き）

水色と灰色と赤の旅を読んで頂き誠にありがとうございます。

この話についてですが、【化け物が潜んでいた村】は【化け物が潜む街】の間話です。直接話の流れにはつながっておりません。間をおかずに【化け物が潜む街】を読みたい方は、「3【化け物が潜む街：後】」へお進みください。

でわ。

## 2【化け物の潜んでいた村】

\*\*\*

そこには小さな村があった。小さくて古めかしくて。青年は故郷を思い出し、目を細める。

「……………懐かしいな」

だが、自分の故郷はもつと干からびた地にあった。こちらの大陸のように、水に恵まれ、緑が生い茂ってなどはない。とくに、自分があので立ち去ってからどうなったことか。

クスリ……………

彼は苦笑を洩らした。

「おかしいな。まったく。過去には引きずられないんじゃないじゃなかったのかよ、俺」

私は知っている。

彼は、優しくかった。

いつも笑っていて、微笑んでくれて。たまに、どうしてか寂しそうな顔をして。

「どうしたんだい？ ぼーっとして」

彼が、……………シンが、私を見下ろしている。

そしてあるうことが、その温かで優しい手を、私の頭にさせてくれた。

「君を見ていると、誰かさんを思い出すよ。弟のように慕っていた、彼のことを……………。多分、キミと同年だ。子供のくせに、世間を斜から見下ろしたような眼をしてさ。本当に。ホント生意気だったな。でも、正義感は一歩強かった。本人にその気はなかっただろうし、そういうの嫌うタイプだったけど。……………きっと今も、変

わっていない、そう願いたいよ」

シンといると、月の出ていない夜も明るく感じた。暗闇を怖いと思ったことはないけど、でも、なぜか、彼のいる夜に比べると、彼のいない夜はとて冷たくて暗くて、どうしようもなく寒々しいものに思えた。

「もしも彼が変わってしまつてたとしたら、それは多分、きつと……………」

きつと、俺のせいだな

その話に聞く“彼”とやらは、シンにとても思われているのだなと感じた。

いや、“彼”だけじゃない。シンはきつと、いろんな人のことを思っている。いろんな人に優しく、暖かくて。それがまるで太陽みたいで、自分にはまぶしすぎる者のように思えて……………」

「……………い、……………イ。なあ、聞いてるか？ カ……………」

\*\*\*

カイは目を覚ました。

(私、まさか……………)

寝てた。

がたがたとゆれる車の音。決して寝心地のいい場所、場面ではないはずなのに、と、今見ていた夢がどうも良い内容だったような気がして不思議に思う。なぜまったく内容を憶えていないのか、と悔やむ暇はない。

ただ、気持ちのいい余韻に浸りながら今いる場を見渡せば、目の前でくつくつと笑う20代半ばほどの青年と、檻に入れられた獣つれの

姿。

この青年とはあつて間もない。しかも、あつてすぐに嫌いになつた。

赤茶色の髪を後ろの低い位置で束ね、背中に流しているそれは、記憶の中のある人と同じ髪型だった。だが、この青年は何をどうしたって好きにはなれないのだ。

今日の前にあるその顔は、カイにとって今一番見たくなく腹立たしいものだった。

青年は笑いかみ殺しているのだろうが、肩がああも揺れていれば、声を殺したところで意味がない。笑っているのはばればれだ。

目の前の男は口の両端をつり上げ、面白そうに私に尋ねる。

「寝てたろ」

その言葉、その表情。どこまでも自分を嘲るその瞳。

カイは気に入らなそうに目を逸らす。

今は夕刻。

タイムリミットは迫っていた。

### 3【化け物が潜む街：後】

「おはよう」

亭主のご機嫌な声。

「おはようございます」

ヨウは愛想なしに答え、一階にある朝食の席に座った。

丸テーブルが幾つかおいてあるそこは、他の客で少し賑わっていた。

周りを軽く見渡したヨウの様子を見てか、主人はそつと尋ねる。

「すまんね。何なら自分の部屋で食うかい？」

「ここで良いです」

「そうかい？」と主人は首を傾げると、ヨウの前にできたての朝食を置いた。

\*

賑やかな朝食。そこに、賑やかとは違う騒々しさが飛び込んで来た。

店の外。少し先の道から、何かが走って通り過ぎる。それとともに悲鳴を上げる者もいた。少し遅れて、役場の制服を着た人間も駆けつけてきた。

「どうやら先ほど走り去った何かを追っているらしい。」

「なんだ？ 朝っぱらから」

宿の主人は呟く。

同じように、宿の他の客たちも口々に今去って行った人影について話していた。

「子供だぜ」

「は？ 子ども？」

「ありゃ誰か殺ったな」

「何でんなこと分かるんだよ」

「見えなかったのか？ 血で真っ赤だったぜあいつ」

「……………」

「ん？ お客さん？」

ヨウは立上がり、走り去った騒ぎの元凶を追った。

\*

(やった、遂にやったんだ！)

ぜいぜいと荒い息を抑え、薄暗い路地裏の壁の隙間に身を潜る。

追って来た人間を上手く撒いたのを確信すると、満足感が胸に溢れた。

「何をしてる」

「……………」

驚きのあまり、少年は言葉を失った。が、落ち着いて見れば、そこにいたのは昨日の旅人だった。

薄暗くて顔はよく見えないが、この赤い髪は間違えようもない。

「は、はは、驚かすなよ兄ちゃん」

安心からか、少年の体から力が抜ける。

ヨウは黙って少年の腕を掴んだ。

「わっ」

隙間から引つ張り出され、少年は声をあげた。

ずるっ、という音と共に、少年の体から壁の圧迫感が消える。隙間より広い空間に出ると、彼は地面にへたれこんだ。

「…………… 兄ちゃん、これ見ろよ」

少年は誇らしげに、手に握った物をヨウに見せる。

赤い瞳に、自分へ掲げられた血だらけのナイフが映った。

白い髪に赤黒い斑模様がよく目立つ。

「出来たんだぜ……………、俺、一人で、…出来たんだ」

少年の顔は笑おうとしたのだろうが、失敗しておかしく歪んだ。

「誰のだ？」

堅い声が「誰の血だ」、と。そう尋ねた。

「街長ちやくちやうにさ、俺と同じ歳の子供がいるんだ」

なぜがヨウの胸に不快感が浮かび上がる。

「あいつ、あいつら。良い者顔でいつも俺の事馬鹿にして。街長の癖に」

少年はおかしな表情でヨウを見上げた。笑ってる様な、泣いてる様な表情。

「この奴等、俺の事化け物とか呼ぶから、……………だから…だから本当にやってやったんだ」

さまあみる。

頭を俯かせ、掠れた声で少年は言った。

ヨウはそれを、冷めた目で見下ろした。

「……………馬鹿が」

少年は弾かれたよう赤を見上げた。

「なんだよ、兄ちゃん」

細い脚は、ふらふらと立ち上がる。

「……………なんだよ、解ってくれると思ったのに」  
だらりと下げられた両手。

下を向いて、押し殺した様に言う。

「初めてだったのに。俺を見て驚かない人間。……………兄ちゃんが、初めてだったのに……………」

虚ろな瞳はさびしげだった。

悲しげで、切なげで。

だがそれは一転して、怒りや憎しみの色に変わる。

「……………やっぱり…、やっぱり、解る筈なかつたんだ……………。この気持ちは、誰にも、…誰にも!!」

少年はヨウの服を掴む。そして手に握った血だらけのナイフを、自分より背丈の高い目の前の胸に当てた。まるでそれは、相手を脅

したいがための行動に見えた。自分を怖がれと、自分を恐れると。

「馬鹿が」

静かな声。

「うるさい！ 黙れ！」

少年は吠えるように怒鳴り、ヨウを睨み付けた。

強く睨み付けたはずの少年は、ヨウの目を見て固まる。

「う、ああ……………」

まるで恐怖からこぼれ出てしまったかのように、少年の口から言葉とならない声上がる。

表情の消えた、赤い目が二つ。それは、興味が無さそうに白い頭に向けられていた。その赤は、もう「馬鹿」とさえ言わなくなり、一切口を開こうとはしない。

少年はヨウの服を放し、静かに一步後退った。

少しでも赤い目から逃れようと、自分の前に手をかざす。

「な、んだよ……………、怖がれよ、…怖がれよ！ 俺は、化け物なんだ……………俺は、」

ふらふらした足取りで後ろに下がるが、壁にぶつかり、少年は行き場を無くした。

ずると壁にそって地面に腰を落とすと、とつとつその瞳からは涙が零れ落ちた。

「俺は、俺は化け物何だ……………」

その白の姿は、人によつては「惨め」といえる代物で、ヨウの知る水色からは決して想像の出来ない姿だった。

\*

「居たぞー！」

奥から人の声上がる。

役場の人間が到着したのだ。着いたばかりの3人は、少年を囲み

嫌なものでも前にするかのように見下ろす。

その中で一番年配の一人が、一步ヨウの前に出た。

「ご協力感謝します。是非街長に、顔を合わせに行って下さい。きつと旅の方のご協力という事で、とても喜ぶと思います」

「ああ、……………そうですか」

気の無い返事。

「俺、失礼します」

その言葉に、役場の男は片手を胸に当て、きばきとした動作で敬礼をする。

ヨウはその敬礼の向こう側の少年を一瞥すると、薄暗い路地裏を後にした。

背中から少年を罵倒する役人の声が聞こえた。

\*

ヨウは、表の通りに出ると、裏の路地と比べて随分明るく感じるその空を見た。

高い場所から降り注ぐ暖かい光。

それがとても眩しい。

この光りはこんなに強く明るく輝くのに、なぜ暗い場所までは届かないのだろう。

なぜ届いているかもしれない光に、気づく人間と、気付けない人間とが分かれてしまうのだろう。

なぜこんな事を思うのだろう。

赤い旅人は小さく苦笑とも見える嘲笑を漏らした。

(……………そんなの、ただの偶然だろ)

偶然。

人の経緯なんて、それで充分だ。

#### 4【匂いをたどる途中：商人と出会って】

町から随分離れた草原を、獣の後ろに付いて歩く。

それは14、15歳位の子供だった。

水色の髪と瞳を、高く昇った日に照らし、気持ちの良い風にござっぱりした短髪を揺らしていた。普段ならフードをかぶり、「水色」を隠しているのだが。今は気分上の問題で何も被らないでいた。

「なにしろいい天気だし……………」

カイは気持ちよさのあまり、ぐっと伸びをする。その眼にじんわりと涙が浮んだ。

(この調子じゃ、あいつに追いつかないよなあ)

と、思つものの、コートと簡単な小荷物という身軽な格好にも関わらず歩調はゆっくりだ。

ふと獣が振り返る。カイもそれにならって後ろを見る。

涙でぼやけた視界の奥に、小さな黒い点があった。

「車かな」

耳を澄ませば微かだかエンジンの音がする。

ぶるるる……………、という埃っぽい音をあげ、それはとうとうカイ達を追い抜いた。少し先に止まり、窓から運転手が首をだしてこちらに手を振っていた。

カイはどうしたら良いか判らず、曖昧な表情を浮かべ中途半端に手を振り返した。

中型のトラック。

底から顔を出す運転手に身振り手振りと呼ばれ、カイはそばへ寄った。

「旅か？ 坊主」

熊のような印象、とでも言うべきか。

日に焼けて浅黒くなった肌は、あちらの大陸を思わせた。

一瞬赤い髪の少年の姿が頭に浮かぶが、軽く首を振ってその姿を一掃する。

そしてカイは正面の男を見上げると、素っ気なく返した。

「別に」

その少々冷やかな返答にも、運転手は動じない。

「この先に町がある。どうだ、乗ってくか？」

何とも気のいい言葉がカイへ返された。

「うん」

これは即答だ。

素直なんだか無愛想なんだか良く解らない子供へ、運転手は人懐っこそうに笑った。

「よし来た！ じゃあ後ろの荷台に乗れ。荷物は適当に除けてくれな」

カイは車の後ろに回ると、布の垂れ下げられた入口を覗きこんだ。箱やら筒状に巻いた布やらが乗せられている。商人だろうか。

「お前、どう思う？」

カイの問いの先にいたのは獣 灰色の狼 だ。彼は運転手の目を避けるように、荷台の荷物影へと入り込んでいた。獣は真丸の目をくると瞬かせ、カイの言葉に首をかしく。

カイはくすりと笑った。

「だよな。考えるだけ無駄だ。そんな時はそんな時って、ね、」

カイは“タンツ”という音と共に、二台へと飛びのった。その腰に、古びた装飾がされた短剣と、大きめのナイフがちらりと覗く。さらにその後ろには、同じ型の三本のナイフが収められていた。カイが腰に下げているナイフは計五本だ。

カイは適当な箱に座り、荷台に付いた小さい窓から外を見る。

歩いている時とは比べ物にならないペースで、車は順調に野原の先へと進んでいた。

「匂いから外れたら、教えてくれな」

荷物の影に潜む獣に声をかける。返答は無いが、了解してくれた筈だ。

カイは車の振動に体を預けながら、ただ外を見ていた。

\*

辺りが暗くなると車は止まった。

「すまん。連れと落ち合う手筈だったんだ」

運転手はすまなそうに頭を掻き、暖かい飲み物を持ってきた。

ココアだろうか。

カイはマグカップを受け取り、その柔らかく甘い匂いのする飲み物を覗きこんだ。

「ありがとうございます」

コップに軽く口をつけ、カイはそれを両手で包みこむように握った。

運転手はそれを見ると、小さく微笑む。

あたりは本当に静かだった。

虫が鳴き、たまに風が吹き草草が揺れる。

カイには一体、ここがどこなのか見当もつかない。

ただ、自分の出てきた町からはもう随分離れたのだろうな、という漠然とした予想くらいしか頭に浮ばなかった。

「俺はな、町へは行かないんだ。町へ行くのは連れの方だな。その連れの荷物を受け取って他に運ばなきゃならん」

尋ねてもいないのに、運転手が口を開いた。

カイは「そうですか、」と短な返答しか返さない。

そんな子供へ、運転手はすまなそうな笑みを浮かべて頭を掻いた。「だからな、すまんが坊主も少し待っていてくれ。連れが来たらすぐに乗り換えてもらうことになるが、良いか？」

「うん」

「ありがとな」

そう言って運転手は自分の席へとへ戻って行った。  
外は外灯もなく真っ暗だった。

少しすると、今自分が腰掛けている車とは別の車の音が近付いてきた。

カイは荷台から頭を出し、音のする方を見る。垂らされた布から埃っぽい空気が漂って来て、彼女は小さくせき込んだ。

咳に細められた視界の奥、車のライトが小さく二つ浮かび上がっていた。

「遅いぞ！」

運転手の声が草原に虚しく響く。

カイはその様子を静かに荷台から眺めていた。

「す、すいません」

青年は小型のトラックから降りるなり、荷台を開けて、急いで荷物を運び出す。

「すまんな坊主、手伝ってくれ！」

大きな荷物を抱える運転手に呼びかけられ、カイは少し急ぎながら荷台から飛び降りた。

「わ、わかった………？」

一瞬視線を感じた。

カイは目を細める。

なんてこともない。小型トラックから出てきた青年だった。

カイは軽く自分の髪を摘む。視界の端に、小さな束で水色の毛並みが見えた。

(まだ慣れないな)

幾ら経とうとも、詮索するような人の視線には落ち着けないものだ。

出てきた町、親友の言葉が耳に残る。

『良いですか。この町はカイの存在になれてますけど、外は別ですよ。特に年配の方々は昔話に敏感ですし。あなたが自分の過去に蹴

りをつけたと言つても、時と場合を考えてフードはつけるようにしてくださいね。あと、私からのプレゼントもなくさないことです。もしなくしてもしたら、町の外にしようと、どこにしようとする？」

「たまつたもんじゃないな」  
気の強い笑顔を思い出し、カイは苦笑した。その胸元には、例のプレゼントである“石”がごろりとゆれる。

（フード、かぶつとけばよかったのかな）  
でも、天気良かったし、今更手遅れだし、まあ良いか、水色は開き直った。

視線ももう感じない。カイは小型トラックの青年を手伝いに向かった。

荷物は大きささまざまで、あまり多い訳では無かった。カイには大きい荷物は重すぎて運べないため、比較的小さな物を頼まれた。

「……………ふう」  
中型トラックに最後の一つを運び終わると、彼女は深く息をつく。車の下には獣の気配があった。いつでもカイのそばに身を潜めているのが彼だ。安心したように、カイはくすりと微笑んだ。

「坊主！」  
呼ばれて弾かれたように水色は顔をあげる。

男が手招きしているのを見て、カイは小型トラックへと小走りで行った。

「手伝わせてすまんかった。ほれ、こいつが連れだ」  
指差された青年は軽く会釈する。

男と同じく、とても人懐っこそうな笑顔だ。だが、その肌は男ほど浅黒くはない。

「いたって普通の好青年、とでも言おうか。」  
カイもつられて会釈した。

「じゃあ坊主、さっそく乗ってけ。そっちの方が小さいが、荷物が無い分広い筈だ。ここらは獣もでる、乗った乗った」

………獣。

(ははは………)

カイは連れの事を考えて、他の2人に見えないように苦笑いした。カイの気も知らず、中型トラックの運転手の後ろ、獣は一足先に小型トラックの荷台へ乗り込み“はっはっ”と舌を出していた。

「ようし。じゃあな坊主、元気だな！」

運転手は中型トラックに乗り込むと、会った時と同じく大きく手を振り、エンジンをかけて走って行った。

「待たせてごめんね。すぐ出るよ」

青年は運転席から荷台へと声をかけた。荷台からは運転席を覗く小さな窓があったため、カイにはそこから呼びかける青年の後頭部が見えた。

水色の瞳はふつとその後頭部から逸らされ、荷台の壁、小さな窓へと注がれる。

真っ暗な外が見える。

「何か見えるかい？」

青年が運転しながら尋ねてきた。

(こいつ、いちいち私の行動目で追ってるのか?)

運転席のミラーに映った黒い瞳を見て、カイは少々あきれれる。

「いや。なにも」

「そりゃそうだ」

青年は軽く笑うと運転に集中しはじめた。

\*

むくり、と側にいた獣が急に起き上がるので、カイはどうしたのかと視線で尋ねた。

獣は小さく唸り、外を見つめる。

始めは何かがいるのかと思ったが違った。鼻を押しつけて来る獣

を見て気付く。

「匂いから、ずれたのか？」

獣は尾を一振りした。Yesの合図だ。

獣が見ている方は、たぶん、先ほどまで乗っていた中型トラックが走って行った方だと思われる。

(乗り換えなきゃよかったか?)

「わかった」

カイは素早く腰を持ち上げ、運転席に呼び掛ける。

「すみません」

「どうしたの？」

「ちよつとトイレに、」

「ああ、ごめん。あの人トイレの時間も取ってやんなかったのか」  
青年は中型トラックの運転手をたしなめるような事を言い、素直に車を止めた。

「あまり遠くに行かない方が良いよ。獣が出るから」

「わかりまし、た………?」

差し出された手を見て、そして水色は青年を見る。

「女の子だろ? あの人鈍感だから」

あの人、とはやはりあの中型トラックの運転手だ。

なるほど。この手は女性に対するマナーか。とカイは納得する反面、馴れない感じにむず痒くなった。

「大丈夫です」

水色ははぴょんと荷台から飛び下りる。が、着地に失敗してどさりとこけた。

くつくつという笑い声が、車の中から聞こえた。

( ! ? )

カイは一瞬目を丸くする。

「ははは、大丈夫かい？」

車の方を見ようとしたが、青年が覗き込んできたために何も見えなくなってしまう。またも手を差し出してくれた青年を、カイは

戸惑った風を装い断る。

「えっと、いや、大丈夫、です」

「荷物持っていくの？」

不思議そうに尋ねる声。

「大事な物が入ってるんです」

コートを羽織りながら、カイは答えた。

「信用されないなあ」

青年は苦笑をしていた。

カイは「すみません」とも言いたげに会釈し、夜の闇へと歩き進めた。後ろへ遠のく車から「気をつけてねー」という青年の呼び掛けが聞こえた。

## 5【匂いをたどる途中：商人と別れて】

(もう一人、居た)

カイは歩きながら思う。

その隣に獣が尾を左右にゆらゆらと揺らしながら並ぶ。

隣の獣へ視線を投げかけることもせず、水色は顎に手を当ててじつと闇の先を見つめていた。

あの笑い声。

彼女はトラックを出て来る時、運転席の隣りの補助席に、もう一人誰か居るのを見た気がした。

いや、居たのだ。

居眠りしていたのか、頭に何かの本を開いたままかぶり、腕を組んでいた。あの一瞬だったが、そこまで記憶に焼き付いている。あれは、見間違いでは無い筈だ。

カイは腰にかけられた短剣とナイフをそっと撫でた。

不思議と冷や汗が額に浮かんだ。

「どこまで行くの」

( ?! )

ぞくりと身震いし、カイは弾かれたように振り返る。

「なかなか戻ってこないから、どこまで言ったのかと思ったよ」

少し離れた場所に、青年がいた。

困ったように、だがやはり人懐っこい笑みを浮かべ。

(あの笑い方、ミネとは違う)

いつもニコニコしていた親友。だが、青年の笑顔はその親友の者とは全く異なっていた。

(……………好きじゃ無い)

水色は目を細める。だがそれも一瞬。すぐに表情を和らげ、ごまかすように頭を掻いた。

「すいません。気が変わって、なんか歩きたいなあ、なんて」

彼女の苦笑交じりの回答に、青年もまた苦笑した。

「だめだよ、危ない。女の子が一人で」

青年は優しい雰囲気を保ち、カイの目の前に歩きゆく。そして、近すぎるのではないかと言う距離でやっと足をとめ、水色の髪を持つ少女を見下ろす。

カイは微動だもせず、まん前に立つ青年を見上げた。

水色の瞳はそつと温度を下げる。

青年の顔から笑顔が消える。

「いつから気付いてた？」

その口から出てきた言葉は先ほどまでと打って違って薄っぺらく冷たい物だった。

「何が？」

カイはうそぶく。

「君は、本当は意識の無い状態で引き渡される筈だったのに」

青年の言葉。水色が思い出したのは暖かいマグカップだった。

「お生憎、トラックの荷台に置きっぱなしだった」

カップを口に付けたのは、その匂いと温度を近くに感じるため。

口には含んでいない。

カイの口元に浮かぶ笑みを見て、青年は困ったように、また先ほどの優男を気どる。

「あの人、甘いからなあ。本当、困るよ」

爽やかな笑顔。

そして“どすつ”という重く静かな音。

青年の手から放たれたそれは、カイを外れ地面に刺さった。

水色の瞳は首を動かさずに視界の隅でそれを見た。

「麻酔銃……………」

これはまだ脅しの段階だ。

瞳はまた正面へと向けられる。

「避けなくてくれるかい？ 大丈夫。痛くないから」

カイの前で、青年は危険な笑みを浮かべた。

\*

そもそも始めの中型トラックからして真に信用して無かった。何か理由をつけて抜け出す事が出来ればいいと思っていたが、まさかこんな事態になるとは。

自分の考えの甘さに呆れる。

「全く、うるちよると！」

麻酔銃が当たらず苛ついてきたのか、青年の口調は初対面の時は180度変わっていた。

カイは腰からナイフを取り出す。夜の暗闇に慣れたカイは、麻酔銃をよけながら素早く青年の後ろに回った。

「う、……………あ」

青年は首筋のひやりとした感触に声を洩らす。

ナイフの「ピイイイン……………」という高い音が静寂を作り出した。

青年の喉元にナイフを当てたまま、カイは動きを失う。

(……………どうしよう)

相手の動きを止めたは良いが、この先の行動が思いつかない。追いかけてくるなど言っても聞くような相手ではないし、まさか、このまま一緒に連れていくわけにもいかない。

一番簡単なのは、そう…………… 殺スコト

カイはぶんぶん頭を振った。

(それは弱い人間がすることだ)

気を失わせるのが一番今にあっていないかと思いついた頃、青年が「おい！」と慌てた声をあげた。

カイは青年の蒼白した表情を見て視線を落とす。

そこには手柄を立てたといわんばかりに、楽しげな眼を向けてくる獣がいた。どうやら獣が青年の手から麻酔銃を奪ったらしい。それを銜えたままお座りをし、カイをじっと見上げていた。

「頭いい！」

カイはナイフを固定したまま、それを受け取る。

「お前、なにして……………」

どすっ

青年の、まだ放たれることもなかった命乞いにも耳を貸さず、カイは無情にも麻酔を撃ち込んだ。

青年は膝からくず折れるように前へ倒れる。水色は草草の上に目を開けたままヒクヒクしている青年を見下ろし、にやりと笑みを浮かべた。

「だいじょーぶ。痛くないから」

先ほどの青年の言葉を真似し、「ざまあみろ」と口外に告げる。体が動かせないだけで、青年には意識があった。カイの言葉に、彼は不愉快そうに顔をゆがめた。

それを見ただけで、水色はもう充分だった。これ以上相手を痛めつけようとは思わない。カイは獣の頭をわしゃわしゃ掻き回し、また歩き出す。

「今日は野宿かな」

獣がいれば暖かいだろうし大丈夫だ。

カイは道を進んだ。さっきの麻酔銃は、護身用のため銃口を下にポケットに突き刺されている。

水色の先には何も見えない夜道が続いていた。

星は出ている。だが月は細い。

ここは先を獣にゆだね、自分はその後に続くべきだろう、とカイは一步後ろに下がる。

カイの視線の先、尻尾の尾がふさふさと揺れている。迷った様子もなく、彼はカイへ行くべく道を示しだす。

「すごいよ、お前は」

カイは獣の嗅覚に呆れながらも感謝した。小さな頃から一緒にいてくれた、家族とも呼べる友。

(……………ん?)

獣の動きが止まり、カイは首を傾ぐ。

また何かあるのだろうか。

どすっ

カイは動きを止めた。

(麻醉銃の音)

しかも先程より大きい。標的は獣だった。

灰色の毛並みをかすむように、麻醉針は飛んでくる。いや、獣がすれすれで避けているのだろうか。

獣は身軽に避けて、麻醉が飛んできた方を見る。

そこには、カイが頂いたものより一回り大きめの銃を握った青年がいた。

歪んだ表情。

まるつきし化けの皮がはがれている。

まだ膝が震えているのを見るとしびれは抜け切れていないようだ。

カイは呆れた。

「しつこいな」

片手にナイフ、片手に銃を握り、カイは相手の全体像を眺める。

青年の手には銃。そして腰には無線機……………だろうか？ とりあえず黒い箱のようなものが、ザーザーと砂嵐のような音を発してぶら下がっていた。

薄い上着を羽織っているが、その内側に胸ポケットがあるのが偶然だが見えた。何か入っているようだ。

「なんで動けるの？」

カイは銃を相手に向ける。

青年は構わず自分の銃を撃つ。

獣へ向けられた針は軽々とよけられるばかりだ。

(くそっ、さつきは撃てたのに……………)

カイの手の中で、麻醉銃がガチャガチャと音を立てる。撃ち返そうと思ったが、どうも使い勝手がよくわからない。

そんな水色を見てか、青年は嘲笑のようなものを浮かべて答える。  
「自分の使う道具だ。解毒剤くらい持ち歩いてる」  
そりゃそうか。

(あの内ポケット)

カイは納得した。

青年は獣に狙いを定めてまた撃つ。獣は余裕といった感じだが、  
自分もどうにか参戦しなければ。

どすっ

やっと麻醉銃を撃つことができたカイだが、彼女は銃など握った  
ことはない。

「くそ、当たらないな」

しかも麻醉針ももう空らしい。

(……………焦れったい)

カイは麻醉銃を投げた。

地面へではない。青年へだ。

「ははっ、銃の使い方知らないらしいな」

青年はそれを自分の銃でなぎ落とし、子供のいた場所へと視線を戻  
す。

「ちっ、またか」

だがそこには子供の姿などない。

すぐに視線をあたりに走らせるが、それを邪魔するように視界に  
獣が飛び込んできた。

青年はあわてて獣へとまた銃を向ける。

カイは、獣へと夢中になつてる青年の背後にまた軽々と回り込む  
こんだ。

「甘いな。学習しろって」

水色はつぶやく。

余裕の笑みを漏らそうとしたが、その瞬間、青年を挟み込んで反  
対側に獣の姿が見えた。

青年の放つ麻醉をよけようともせず、まっすぐにこちらへ向かっ

て来る。いつも優しい、茶色の瞳。それが、見るからに焦っていた。様子が、おかしい。

たくさんの針を体に受け、だがそれでも倒れることもせず、真っ直ぐに、まっすぐに、自分の元へ

どすっ

体の中に、鈍い音を感じた。

「……………え」

水色は目を見開く。

これは、麻酔の刺さる音だ。

獣……………ではない。

自分の、体から。

\*

青年の後ろ。カイは足にうまく力を入れられず、彼に寄りかかるようにその場にくず折れた。

(く、そ……………)

青年にもたれかかったまま手に握ったナイフを彼の背にあて、針だらけの痛々しい獣を見る。

「やめろ……………」

カイの口から、苦しげな声が漏れる。

もうこれ以上、獣が撃たれるのは嫌だった。麻酔とはいえ、たくさん受ければ死んでしまう。

「この野郎！」

青年はナイフの感触に気づき、動き少なく首だけでカイを振り返る。

どすっ

「……………っ」

また、カイは背中に音を感じた。

(おかしい。こいつはまだ、一発も私には……………)

体の自由が利かなくなる。

じわじわと、じわじわと、体の中に薬が広がっていくのがわかった。

おまけに視界も白濁し、何も見えない。

(……………だめ、だ。まだ……)

カイの体は、ずるりと青年の背をたどり、地面へと膝をつく。力の入らない手が、青年の上着を引っ張る。

どすっ

まただ。青年は自分の正面にいる。なのに、麻酔は後ろから……

……

「……………ま、だ……………」

水色は地面へと倒れこみ、完全に動かなくなった。

彼女が倒れる瞬間に見たのは、体中を麻酔針だらけにした獣が、

怒りをあらわに青年の首筋へ飛びかかる光景。

『甘いな』

自分の言葉が頭の中響く。

じゅめん

一番甘いのは自分だった。

## 6【村へ向かう途中】

これは、今彼がいる時間より、さらに遡った過去の話。

ヨウは使い古した鞆に先程購入した荷物を入れる。

鞆の淵は、所々切れたり糸くずがほつれてはみ出したりしていた。そろそろ買い換えどきか。

ふと視線を送った先で、白昼堂々人身売買が行われていた。

中型トラックに、人懐っこそうな笑顔をたたえた、がたいの良い男。

戸惑った様子の少女が、見ず知らずの男に引き渡されていた。混乱した瞳をトラックの男へ送る。

「大丈夫だ。これからその人が家まで案内してくれる。すぐにかーちゃんに会えるぞ」

(人売りか)

あんな男に付いて行って、母親に会えるはずも無い。とんだ嘘をつくものだ。

ヨウは助ける気もなく、その光景を眺める。

(捕まる方が悪い)

少女はトラックの男へ恋しそうに視線を送り、今会ったばかりの男に手を引かれるままに付いて行った。

ヨウは視線を外し、町を出るため歩きだす。

道の端で、二丁三人の男がちらちらとこちらを見て話し込んでいるのが見えた。

\*

町を出る直前、声をかけられた。

「よう坊主。旅か？」

人懐っこそうな笑顔。先程の人売りだ。

「どうだ？ 近くの町まで送るぞ」

「いい」

短く答えて歩き出す。

「おいおい、固い事言つなよ。あんた、その赤い髪、あちらの大陸の人だろ？ 良ければ道案内でもするぜ？」

にこやかな表情を浮かべ、男はヨウの肩に手を置いた。

「触るな」

鋭い一言。

ヨウの殺気に男は言葉なく固まった。

男の手を払い除けると、ヨウは何もなかったように歩き出す。

誰がお前らなどにこのこ付いて行くか。そもそも見えず知らずの人間を頼るのはただの馬鹿だ。

加害者に対してというより、被害者に対しての非難。

ヨウはいらいらとした様子で男を無視し、町を出ていく。

次はどこへ行こうか。彼は町を出て少し考える。

そういえば、それ程近くは無いが、あの村もこちら辺にあったはず。確か、そこへ向かう赤い髪の青年を見かけたという話を聞いた。それに、あの翡翠の婆も湖の町がどうか言っていた。

(……………シン)

一瞬、赤い瞳に怒りの色が浮かぶ。

その詳細を、いどこを、早くつきとめなくては。そして追い詰め、『鍵』を取り戻す。

「とりあえず、村だな」

ついでに靴と鞆もそこら辺で買おうか、とヨウは次の目的地を決めて歩き続けた。

\*

その後彼は、訪れた小さな村で、灰になった小さな民家を見つけた。

けどこれは、また別の物語。

## 7【匂いをたどる途中：商人に捕まって】

辺りは暗く、何も見えない。

（もともと何も無い草原だし当たり前か。この場合何かある方がおかしい……………）

見慣れない青年は獣に押し掛かれた仕事仲間を見下ろし興味がなさそうに尋ねた。

「大丈夫かあー？」

彼は小型トラックを運転していた青年とはまた別の人物。長い髪を後ろの低いところで括って背中に流している。赤茶の髪は夜闇のせいで今は黒にしか見えない。

連れに適当な声をかけるが、彼の「心配」はこれっぽっちも感じられなかった。

彼にとって、心配なのは“こちら”なのだ。

（よくもまあ、こんな暗闇であんなに動けるもんだな）

遠目から眺めていた光景に感嘆する。

彼は仲間がやられている様を二度も観戦していた。カイに麻酔を撃たれた運転手の青年に解毒剤を打ってやったのはほかでもない彼だ。だが、薬は打ってもそのいざこざに手を貸してやる気にはなれなかった。

なにしろ、彼にとって運転手の青年は偶然仕事が被っただけの他人でしかないのだから。

むしろ興味があつたのは予定になかった獲物の方。

無線で年配の同業者から連絡が入り、偶然見つけたとかいう商品を引き取りに来たら……………どうだろう。

これだ。

「今日についてるな」

青年は地面に転がるカイを持ち上げようと手を伸ばした。

ぐるる……………

麻酔針を体中に受けた獣が、なおも麻酔が効いてないかのよう  
に身構える。その牙は運転手の青年の首に当てられており、「水色に  
触れれば仲間の喉をかみ砕いてやる」と言っているかのようにだ  
った。髪を括った青年はあざけた顔で口を開く。

「おいおい、冗談だろ？ 俺にこいつ（同業者）と仲良しごっ  
ころってか？」

獣に喉元を狙われている青年は、余裕な表情の彼を睨みつける。

「いいか狼。不利なのはお前たちのほうだ。そいつに人質の価値は  
ない。だからな、お前の対応によっちゃあ、この坊主の命はないっ  
てことだ」

人質があるにも関わらず、青年はカイの胸倉をつかんだ。そして、  
彼女の腰から短剣を引き抜くと、それを彼女自身の首筋にあてる。

獣はそれを見て下敷きとなる青年の首筋に、傷一つつけることな  
く口を閉じた。

「へえ〜。なかなか話がわかるみたいで安心したよ。俺を脅したい  
なら俺自身を人質に取るべきだったな、狼」

そついうと、彼は短剣をカイの首筋から離れた。  
そしてその子供の体を軽々と持ち上げ肩に担ぐ。

「ほら、さっさとそいつから降りて俺についてこい。大人しくしな  
いとお前のご主人さま死ぬぞ」

まあ嘘だけどな、と青年は内心舌をだす。

「おい。行くぞー」

青年はふらふらの相方を振り返りもせず、獲物を抱えてトラッ  
クへと歩いて行った。

まだ痺れの残る体を持ち上げ、運転手の青年は唇をかむ。

「あの野郎……………」

（俺に、人質としての価値がないだど？）

麻痺して痛みの感じない唇は、いとも簡単に血を滲ませ口の中に  
鉄臭さを漂わせた。

彼の瞳に、先を行く同僚の一本結びと、獣の灰色の尾がゆらゆらと映る。

\*

(う、…うっ…)

なんだろうか。頭が痛い。

「お前が居眠りなんかしてなけりや、俺はこんな目に遭わなかつたんだ！」

遠くから声がする。

「違うね。あんたが弱すぎたんだ。見てたぜえ？ あんな子供に軽くあしらわれちゃってよお。かつこわりー」

「見てたのか！ 何で助けなかつた?!」

「助けたろ？ ちゃんと解毒してやったじゃん」

だんだん声が近付いてくる。

頭に響く。

うるさい。

「いい加減にしろ、人の事からかいやがって！ だいたい俺の方が二つ年上なんだぞ!？」

「そうでしたっけねえ、先輩。からかつてるように聞こえたなら頭下げて謝りましょうか」

意識がだんだんはつきりしてきた。

聞き覚えのある声と、聞き覚えの無い声。聞き覚えのある方はやけに怒鳴り散らしていた。聞き覚えの無いほうはそれに対して妙に余裕を感じる。まるで喚く子供をあしらっているようだ。

(……………なん、だ？ 仲間割れ、か?)

カイはだんだんとはつきりしてくる記憶の中で、小型のトラックを降りてきたときの光景を思い出した。

嫌に人の良さそうな笑顔を振りまく青年。運転席の隣、助手席に見えた人影。雑誌を顔に被せ、寝ていたそいつ。確かに感じた、雑

誌の下からの鋭い視線。

そして、荷台の着地を失敗した時も、運転手の青年とは別に笑い声を確かに聞いた。

（やっぱり、“アレ”仲間だったのか）

カイは瞼の感覚を思い出そうと顔を動かす。

まだ痺れは抜け切れていないようで、自分の体が今ここにあるのかも不安だった。

カイが体の感覚を取り戻そうとしている間にも、声と声とのやり取りは続いていた。

（耳はちゃんと聞こえる）

あとは眼でも開いてくれれば、とカイはどうか自分の瞼の感覚を探した。

「お前、寝首には気をつける事だな！！！！」

そしてようやく、知ってる声の怒りが頂点に達したところ、カイの視界は少し明るくなる。

視界に溢れるのは、淡いオレンジだった。

「……………あれ。起きた」

聞き覚えのない方の声。

「お前、話をそらす気か！」

「違うつつうの。おっと、『違いますよ』か、先輩。ほら、坊主が目を覚ましましたよ？」

わざとらしい敬語はまるで相手を挑発しているかのよう。

「フン、だからなんだってんだ！ くそっ、おもしろくも何ともねえ。そんな餓鬼さつさと売り飛ばして金に換えちまえればいいんだ。

どうせならうんと趣味の悪い中年のおやじにでも買われればいいんだ。俺に恥をかかせやがって。売り飛ばす前に指の一本や二本貰っておきたいもんだ……………」

話の腰が自分のせいであらしく、知る声の主は仲間に当たり散らすのをやめて、一人ぶつくさ言いだすのが聞こえた。

カイの横で「面倒くせえ奴」という冷めた声が小さくつぶやく。

そこでカイはあることによようやく気がついた。聞き覚えのある声より、知らない声の方がはっきり近くに聞こえるのだ。眼は開いている。

カイは自分が車の揺れを感じ取れていることを確認し、めいいっぱい力で体を転がし、後ろを向かせた。

「おお。凄いなお前」

軽く驚いた声。

やはりだ。この声の主は今自分とともに荷台にいる。というか、今自分の正面にいる………はずだ。

カイの掠れた視界、淡いオレンジの中、黒い影がぼわりと表れた。自分の真横に座っているのだろうが、まだ目が慣れずはつきり顔が見えない。

「しっかり見張れよ！」

聞き覚えのある青年の声が、壁の向こうからくぐもって聞こえてきた。多分運転席にいるのだろう。

確認のため頭を持ち上げてみようとするが、やはりだめだ。それどころか手や足の感覚もまだ戻っていない。

（くそ。手だけでも動いてくれれば解毒を………）

車の走る振動が、ごりごりと頭と床を擦りつけた。

「無理すんな。お前も本も麻酔撃たれたんだぜ？ 今そうやって動けただけでもすごいくらいだ」

横に座る青年が軽い口調でそう言った。カイは悔しくて力の入らない唇を噛み締める。

\*

無駄に見えやしない目を閉じ、しばらく経った。わずかではあるがわかる。手の感覚が少しだが戻ってきていた。

どうやら自分は今、手首を縛られているらしい、とカイは手首の不自然さから察した。

「なんだあ。また寝ちまつたのかこの餓鬼」

近くでつまらなそうな声が聞こえるが、それに応えてやるつもりもない。

(……………この分だと足も縛られてるかな)

カイはただ、じつと眼をつむり感覚を手へと集中させていた。

(あのと看、確かに盗れてたはず)

あの時。つまりは、「あの時」だ。自分が倒れた時、ナイフをあ  
の男の背に押し付け、そして撃たれ、青年にもたれかかるように倒  
れ

(あつた……………！)

解毒剤を見つけたのだ。

指にそれらしきものが当たった、気がした。

小さな銃のような形をした、皮膚に打ち付けるタイプの解毒剤。

体の自由は利かないが、このタイプの解毒剤なら自分で打てる気がした。

そう。自分はその時、確かにこれを青年からかすめ取ることができたのだ。

そして背中へ、ズボンへと挟んだ。

手が縛られているのは背中側だ。縛られる時に相手に気づかれていなかったとすれば、この手元にあるのは確かに解毒剤ということになる。

(行ける！)

カイはしびれた指先の感覚を頼りに、引き金を探してとっかかりというところを探した。

そして中指の感覚がほかの指よりクリアになってきたころ、ようやくその解毒剤の全貌を指先だけで理解できた。

カイは解毒の針が出てくるであろう面を自分の背中に当てる。

“ぶしゅっ”と小さな音が背中から聞こえた。

体のしびれがまだ抜けていないこともあり、無事に針が自分に刺さったかは不安だった。

(痛みを感じないってのは不便だな)

カイはじつと目を閉じて待つ。

自分の中でいろいろな感覚が再起動しだすのを静かに感じた。

耳の奥から体の節々の軋みが聞こえてくるようだ。

ためしに手をグーパーさせてみるが、先ほどより明らかになめらかなものだった。

指が掌に当たる感じも、それにより手首に巻かれた紐が皮膚を擦る感じもわかった。

( よしっ!!! )

カイは思いつきり体を動かす。

「お、おい！」

隣で青年の驚きの声が聞こえた気がした。

……………?!

そして“ダンッ”と景気のいい音も聞こえた。

じわじわと後頭部におかしな感覚が伝わって来る。

痛みだ。

そう気づいたとき、ようやくカイは自分が真後ろにあつた壁に頭をぶつけたのだと理解した。

「…っ痛うー…」

(痛みを感じるってのも、不便だ……………)

浮かび上がってくる痛みに涙が浮かんだ。

カイは後頭部を抑えようと身を丸めるが、手足が縛られているのでそれができない。

うずくまる様に体を折り曲げる水色の隣で、青年は「ぷっ」と噴き出した。

隣りから上がる、なんとも楽しそうな笑い声。

カイはそれを無視し「くそお…」と悔し気につぶやく。

(体のしびれさえ取れば何とかかなると思うってたけど、忘れてたな)

……………縛られていたこと。

抜けていく痺れと頭にキンキンと響く痛み。

カイはようやく本当の現実が目が覚めたような気がして、はつきりとした視界を見渡した。

一番に目に入ったのは隣に座る青年だ。彼は腹を抱え、おまけに目に涙を浮かべ笑っていた。

(そんなに面白いことしてないだろ)

カイは内心頬を膨らます。

感覚や頭の中が平常に戻ってきたこともあり、カイはしっかりと相手を見上げることができた。もちろんその視線に友好的という言葉は当てはまらない。

青年を見上げ、そしてその束ねられた茶色い髪を見た。

(少し赤味があった……。あっちの大陸の人間か)

カイの頭に無愛想な一つの影が浮かぶ。だがそれよりも先に、憧れていた人の笑顔がよみがえる。

(なんだろうなあ、このタイミング)

町を出てきてもう10日は立っているはず。

カイは、随分昔にその町に訪ねてきたあちらの大陸の青年のことを思い出す。そして、ついこの間出会ったばかりの気がする、自分と同じ年暗いの少年、ヨウ。“彼”はヨウと同じ故郷の人間だった。赤い髪に赤い瞳の青年は、自分とはまるで反対側のような人だった。

(けどあいつときたら、)

ヨウの姿を思い浮かべ、カイは深く息をついた。

(ま、あいつのことはともかく、今は、“今”、だ)

カイは今自分の横にいる青年を見上げる。

(シンもこいつみたいな髪型だったな)

今はもう短い水色の髪。

町にいる間は少し伸ばしてみようかと、短い髪を無理やり束ねていたのだが、旅に出ることを決心して、親友のミネに切ってもらったのだ。

カイはぶつつと息をつく。

つい思い出に浸りそうになった自分を叱咤した。

(今はそれどころじゃない)

カイは不機嫌に相手へ視線を投げかける。

基本的に赤や茶色、黄色といった髪はあちらの、青や黒、緑といった髪はこちらの大陸の人間だ。この青年はヨウと同じ大陸出身なのだろう。

カイの視線に気づき、青年はくつくつと笑いながら「ああ、わりい」と詫びた。

全然謝っているようには見えない。

というか、そんなに面白かったのだろうか。

青年は涙をぬぐい、腰を軽く浮かせ座りなおした。もう声をあげて笑ってはいないが、彼はヘラヘラとした表情はやめようとしないう。赤茶の瞳はカイを見下ろす。

「お前、その様子だと解毒できたんだな」

(……………なっ)

なんでその事を、とカイは言葉を失う。

小さく驚いたように開かれた口。

そのなんとも間抜けな表情に、青年はまたくつくつと笑い出した。「正直なやつだなあ。お前、まさか背中そのれ、気付かれてないとも思っただのか？」

青年はカイの背中から解毒剤の空となったものを取り出した。

「あいつは間抜けだから気づいてなかっただろうがさあ。俺はこれくらいじゃ欺けないよなあ」

あいつとは今このトラックを運転している青年のことだろう。

水色は小さく舌を打った。

(こいつ、知っててほっといいたのか)

カイの内心に気づいてか、青年は余裕の笑みを浮かべた。

「お手並み拝見と思っただよ。この状況でお前が自力で解毒できたら面白いとおもってさ」

「な、面白かっただろ？」と尋ねる青年へ、カイは声に出さず否

定した。

「まあありがたいと思えよ。俺もあいつも、お前を解毒してやるうだなんて優しさは持ち合わせちゃいなかった。だから、お前があいつからこれを擗らなきゃ、お前の体が元通りになるのは売り飛ばされてからってことになってたんだぜ」

つまり、この男はカイが自力で取った解毒剤だからこそ、没収しないで行ったのだと言っているのだ。

（神様気分か？）

確かに相手に分があるのはみとめる。だがこの人を見下した感じは気に食わない。

水色の瞳は相手を睨みつけるばかり。その喧嘩腰な眼に、青年はまた楽しそうな表情を浮かべるばかり。

「全部見てたぜえ。引き渡された時から、あのアホと遊んでくれる時。んでもって一発目の麻酔針が刺さって倒れる瞬間、“コレ”を掠め取った時もなあ」

（なるほど。全部お見通しだった、てか）

青年は麻酔銃を荷台の隅へと放る。

もう中身の無いそれはただのゴミでしかない。ガタガタと揺れる荷台。その小さな銃型のごみはこつこつと小さくはねた。

それを見てカイはあることを思い出す。とても大切なことだ。

このふざけたような相手へ口を開くのはしゃくだったが、そんなつまらないプライドよりももっと重要なことだった。

「あいつは?!」

（あいつ、あいつの方が私よりよっぽどひどかった）

「あいつ?」と首をかしく青年は、カイの必死な顔を見て「ああ、」と思いだしたように楽しそうに顔をゆがめた。

青年はカイの「あいつ」をちゃんと理解できたのだ。

「狼か?」

カイはじつと青年の顔を眺める。

そのまっすぐな瞳に、青年はくつつと笑い、答えた。

「死んだ」

「嘘だ」

カイは即答だった。

青年は困ったように頭をかく。

「ったく。そんなに必死になっしてくるから、からかいがあると思えば、」

カイは焦れるようにもう一度訪ねる。

「あいつは？」

「死んでも不思議じゃないくらいの麻酔を打ったんだぜ？　なのに」

青年は「まったく」と腰を上げる。

その後ろには、というより、カイとは反対側となる青年の隣には、布をかぶせられた四角いものがあった。

カイはまさか、とその布を凝視する。

「なのによお。どうだ？」

布がばさりと外された。そこには何もなかったかのように籠の中で眠っている獣がいた。

自分の腕に自分の頭をのせ、目を閉じていたのだろう。だが、布を外され、彼は瞼を持ち上げた。

その茶色い瞳に、手足を縛られ横たわる水色の姿が映る。

彼はその隣に並ぶ青年をちらりと睨んだ。口元は忌々しそうに歯を小さくむき出し、低いうなり声をあげている。

「な？　こいつ痺れさえしてやいない。いったいどういう体してるんだか」

青年は面白そうに水色を見下ろす。

カイは無事な獣の姿に安堵し、顔を緩めていた。

そんな彼女の表情に、獣の瞳も和らぐ。唸るのをやめ、彼はまた、素知らぬ顔で瞼をとじた。だが寝てはいない。その証拠に尾は八タと左右に揺られていた。



## 8【匂いをたどる途中：商人に賭けられて】

「お前、いいの持ってるよな」

青年は獣の籠を親指で示した。

獣は彼など相手にしていないかのように伏せている。だがカいは、獣を“物”の様にいわれ、少しいらついていた。

「こいつさあ、幾ら麻酔撃っても効かないし、拳句の果てに普通の籠じゃ噛み壊しちまうし。大変だったんだぜ？」

楽しそうな青年の顔に腹が立つ。絶対この面殴ってやろう。カいはぐつと胸に誓った。

後ろに縛られた手を腰へ伸ばす。

予想通りとでも言おうか。そこにナイフはなかった。それどころかあの短剣さえもない。

「お探し物はコレかな？」

視線を上げると、楽しそうに短剣を振る青年がいた。

(こいつ！)

カいは“きつ”と相手を睨む。

「悔しかったら取り返してみよ、坊主。…………おっと、女だったな」

挑発的な相手の発言へ、カイもまた挑発的に答えた。

「望むところだ」

青年はその水色の瞳に、自分の体がぞくりと粟立つのがわかった。

(やっぱり)

こいつ、おもしれえ…………

くつくつと青年が笑いを抑える中、カイは縛られた両足を壁に当て、その身をぐつと縮める。(せーのっ！)と頭の中で掛け声をあげ、カイは力いっぱい壁を蹴ると、青年の体に体当りで突っ込んだ。

「うわっ」

気を抜いていた青年は横倒しになり、短剣が床に転がった。カイはそれを銜えて見事青年から取り戻してみせた。

「おお！」

青年は楽しそうな声をあげる。

「やるやるやる！ お前凄いな！」

青年は興奮気味に両手を叩いて喜んだ。まるで子供だ。

カイは短剣を銜えて青年を睨む。

「いいだろ。それはお前に返してやる。お前が取り返したものだ」  
なんて気前のいい言葉だろう。

だが誰が見ても青年が水色の子供に対し手加減してやっているのがわかった。

先ほどの体当たりだって、青年はよけられたはずなのだ。だが彼はよけなかった。

(こいつ、どういっつもりだ?)

カイは眉をよせ、顔をしかめる。

\*

「お前、本当おもしろいもん持ってるよ」

青年は珍獣でも見る様にカイを観察していた。

カイはその正面で、堂々と縄を切ろうと切磋琢磨していた。青年にそれを止める気配はない。

「名前は？」

青年が尋ねる。

カイはそれを無視した。

「俺は　　ンだ」

カイが答えようとしないので、青年は自ら答えた。だが、車ががたりと揺れたせいで、その言葉はうまく相手に伝わらない。

(　　ン)

水色は一瞬動きを止める。“　　ン”という音の響きが“シン”に聞こえたからだ。

「……………し、ん…シン?!」

水色の無表情な瞳が青年へ向けられる。

「は？ センだよ。セーン。シン？ 誰だそれ」

「セン”……………？ なんだ」

カイは興味を無くしたのか、手元の短剣をまた手首の縄にあてて上下させ始める。

その内心で“シン”ではなくて良かった、と少し安堵していた。

(こんなアホそうな奴とシンが同名だっていつたら、シンが可哀そうだもんな)

カイは短剣を上下させ、縄がいつ切れることかとその行動を続ける。

水色の背中からじりじりという音が上がり、道の凹凸で車が多まにがたごとと音を上げる。

荷台の中はセンが黙ると静かなものだった。

だがこの男、暇は嫌いな性質らしい。話題をそらすように自分のズボンのポケットへと手を突っ込むと、またカイへとちょっかいを出すようにその手の中のをぶら下げた。だあ、カイはもちろん、こんな男の行動に目を向けてやるうともしない。

(いちいち構うだけ無駄だ。疲れる)

何があっても無視をきめこもうと決めたカイだったが、残念なことに、次の言葉には反応せずにはいられなかった。

「これ、水の音石だろ？」

水色は「はっ」と目を見張ると、自分の胸元に視線を走らせた。

「……………お前!!」

短剣やナイフだけでなくそんな物まで盗られていたのか、と声を荒げる。

「いい表情だ」

センはカイの肩の服をつかんだ。

突然手を出され、カイは身を揺らして驚く。そのままごろりと、青年により向きを変えられた。

突然のことに訳のわからないカイは、ただ呆然とするばかりだ。センはカイの背、正しくは後ろ手に縛られた手首を見てやはりあざけた様に口を開いた。

「無駄だよ。この紐はこれくらいじゃ切れやしない」

だがすぐにその後、「やべ、でも少し切れてるな」と少々焦った声も付け足された。

「やっぱり没収だ。ほら、大人しくお喋りでもしてようぜ」

センは呆然とするカイから短剣を取り上げ、またごろりと転がし元通りの向きへと戻した。

カイは呆れたように目を座らせていた。自分はこの男の暇つぶしの道具でしかないのだろうか、と惨めな気持ちになる。

センは短剣を面白そうにカイの鼻先で振り、悪戯っ子のように笑みを浮かべていた。

「声が出るなら話そうぜ、どうせ暇だろ？」

(こいつ……………)

カイは心からこの青年が嫌いだと思った。

\*

センはカイの目の前に石をぶら下げて尋ねる。

「知ってるか？ この石の名前の由来」

「当たり前だろ」

カイはぶっきらぼうに答える。

水の音石はこの大陸でも滅多に取れない高価な物だ。“使い”の人間が水を使う時だけ、水滴の落ちる音を発する。だから「水の音の鳴る石」と書いて水ノ音石なのだ。

「なんだ、知ってるのか」

「ほれ」と言ってセンは石をカイへ放った。

かつかつかつ、と木製の床を叩きながら、それはカイの目の前に転がる。

ミネの耳飾りを加工して作った首飾り。町を出る時さんざん大切にするように言われていたのだが。

(早速この様か……………)

カイは自分の今の状況に心底呆れた。

「でさ、お前。その石持つてるって事は水使えんの？」

水色の心境なんてお構いなしだ。この男はどこから話題を見つけてきているのだろうか、とカイは疑問に思った。

「使えないよな？」

青年の問。

カイは無言で相手を見上げた。

「やっぱりな！ 正直な奴ー！ だよな。使えてたらとっくに使ってる筈だ」

(私、何も言っていないぞ)

だが青年の中ではもう水色は力が使えないものと断定させられている。

「隠したってむだだろうに。短剣一本に、サバイバルナイフが一本。ダガーが3本と、靴底からもちっこいのが2本と。こんなに獲物持ちあるいてりゃ、『水が使えません』って言ってるも同然だよな」  
カイはむすりと頬を膨らませた。

青年の解釈が間違っではないから、余計不愉快になったのだ。

\*

短剣を奪われ、縄を切るものも身近に見つからず、適当な時間が過ぎていた。

今が何時頃かはわからないが、外にはいつの間にか日も昇っている。朝日だろうか。

だがセンは荷台に置かれたランプを消そうともせず、その灯りを

カイから奪った短剣の刃に反射させ眺めていた。

ずっとそうだ。何がそんなにも彼の気を引いているのか、カイにはわからなかった。

まさかあの柄に掘られた装飾、値が張るものともいっただろうか？

(……………んなわけないか)

先ほどから青年が見ているのは刃の部分だ。装飾部には見向きもない。

カイは相手を眺めるのもやめだらりと視線を床に流す。

起き上がる事も出来ない。相手を睨む事にも飽きた。

ぼんやりと目に入ってきたのは水ノ音石。カイはそれをただどうしようもなく眺める。そんなカイを視界の隅に、センは飽きる事なく奪った短剣の刃の部分を、ちらちらと角度を変えたりしながら眺めていた。

そのままずっと、意味のない時間が過ぎるのだろうか、とカイは少々うんざり気味に考える。

(打つ手なし、か……………)

そしてふと視線を上げると、気のつかないうちにセンが自分の正面にしゃがみ、嫌な笑みを浮かべていた。

水色はいやな予感をその笑みに感じ、冷や汗を浮かべる。

「いったい何の用……………」

「賭けだ」

「は？」

カイは意味が分からず目を丸くする。

「は？」というカイの疑問に、センは口の端を小さく上げた。

「賭けだ。お前、もう一度訊く。水は使えないんだよな？」

「……………ああ」

カイは不服そうに答える。

「よし。なら決まりだ」

センはどさりと腰をおろす。

「明日中には町に着くだろう。だから、それまでにお前が水を一度でも使えたならお前の勝ち。その縄をほどいてやるよ。そんなでも、もしタイムオーバーとなったつら……」

センのふざけていた表情が消える。

水色の鼻の先に短剣を構え、冷めた瞳で床に転がる子供を見下ろした。

「お前に、死んでもらおうか」

この言葉にカイは、ひやりとした寒気を感じずにはいらなかった。

その冷たい声音と眼差しをもつ人種をカイは知っていた。

そう。カイの感じたその時のセンは、人を殺すことに慣れた、無情な人間でしかない。

\*

「『命』を代償にすりゃ、言葉通り命がけでお前はこの賭けに取り組める。要するに、賭博師である俺らは心の底からこの状況を楽しめるって事だ」

カイは黙って鼻先に構えられた冷めた温度を見つめた。そして青年の言葉に耳を傾ける。

「使ったかどうかは石の音で判るだろ。どうだ？ おもしろそうだろ？ ……どうせなら今ここで、この刀、血で汚してやってもいいんだぜ？」

（……………脅しのつもりか？）

「……………」

水色の瞳と赤茶色の瞳が視線を交える。

カイは楽しそうな青年の、悪戯っ子のような笑顔を見つめた。

黒く、冷たく、鋭く。それはとてもじゃないが無邪気とは言い難

い物。だが、純粹に今を楽しんでいる。

(冗談だとしたら笑えないな)

カイは鼻先に刃が置かれていることも気にしたふうもなく、大きくひとつ溜息をついた。

カイが見上げた先。そこには青年の冷たく楽しそうな笑顔。その瞳には自分が映っていた。剣先を向けられているというのに、命の危険も感じてなどいなさそうな自分の水色の瞳。

こんなときでも、自分の表情はあまり変わりはないのか。

水色の髪を持つ子供は、口の端を小さく吊り上げる。

(良い度胸じゃんか、自分)

その瞳はまっすぐに自分へ凶器を向ける青年へと向けられていた。

「どうした？ まさかそんな眼付きしといて『怖気ずいてます』なんていう気じゃ……………」

「……………」

車はがたごとと揺れていた。

「は？」

聞こえなかった言葉に、センは冷たい瞳を向けるのみ。

カイはそれをにらみ返す。

「負けて、たまるか」

つく、…つく、くくくく……………」

「交渉成立だ」

センはくつくつと笑い、カイの正面に向かう壁へ背を預けて座りなおした。

「思う存分頑張るといいさ。俺はここで見ていてやる」

「見てればいい。この賭け絶対、私が勝つ」

強気ににらみ合う二人を遠目から静かに眺めるのは、のんびりと

籠の中であくびをかく灰色の獣。  
車はがたがたと草原に行く。

## 9 【匂いをたどる途中：商人に笑われて】

しばらくすると朝食とやらが与えられた。

ビスケットのような携帯用の食料だが、自分の手足は縛られていて食べられない。

カイは自分の腹の音は聞こえるが、手を出そうにも出せずにいた。そんな子供へ、運転手の青年は冷めたように言い離す。

「二、三日食わなくなつたて死にはしないだろ」

どうやら麻酔に撃たれた件でご立腹なようだ。

もう出会った当初の気のいい笑顔はない。

カイは内心で舌を打ち、車の外で食事を済ませる二人を物音だけで感じていた。

自分と獣以外誰もいなくなった荷台。

目の前に置かれた薄っぺらい食事が、カイにとっては腹立たしくて仕方がない。まるで餌の前に“待て”をきめこまれている犬のようではないかと自分で思う。

やがて荷台へとセンが戻ってきた。彼はカイをちらりと見ると、ワザとらしく「うまかつたなあ」と満足そうにほほ笑んだ。いや、にやりと笑った、という方が適切であろう。

カイは彼を力の限りに殴ってやりたい、という衝動にかられた。

「行くぞ」という声が運転席から投げかけられる。

「はいはい。どうぞいつでも」

センは気のない返事を運転手へ返し、またトラックは平坦な野原を走り始めた。

何もない野原。動けない自分。籠の中の獣。気に食わない見張り番。

カイはぼーっと町でのことを思い出す。

水の使い方は以前ミネに教わったし、試したこともある。

この石を鳴らすことくらいなら自分にもできると知っていた。  
だが、その一歩手前に進むことができないのだ。  
(やるだけ、やってみるかな)

水色の頭は正面に置かれた水ノ音石をぼんやりと眺める。

ぼっん

心地よい音が一つ、微かに小さく聞こえた気がした。

\*

カイは“はっ”と目を開き頭を持ち上げた。

丁度よく荷台がガタリと揺れ、水色の頭は木造りの床にたたきつけられる。

「くっつ

カイは顔をゆがめた。

それは痛みへもあるが、それだけではない。

今まで自分が何をしていたか、漠然と、だがこれ以上になくはつきりした言葉が頭に浮かんだ。

寝てた。

「くっそ

呆れて声が漏れる。その声音からも表情からも悔しさがにじみ出ている。

くっくつという音にひかれ正面を見れば、例の商人の肩が震えていた。

青年は押し殺すように片手を自分の口元にあてているが、ああも肩が揺れていたら意味がないではないかとカイは思う。

カイの視線に気づき、彼は顔をあげた。

その口元は、くつと吊あげられ開かれる。

「寝てたろ」

『寝てたろ？ 寝てたんだろ？ 寝てたよなあ？ こんな状況でお前は確かに寝ていたぞ。間抜け面ですやすや寝息を立て、そりゃもうぐっすりとなあ』と笑われているのがわかり、カイは盛大に「ふんっ」と鼻をならし目を逸らした。

センはまたくつくつと笑い始める。

荷台についた小窓を見れば、外は赤く染まっていた。今は夕方だろうか。

赤みを帯びた外の明かりが小窓を通り、床に四角く切り取られへばり付いている。

カイはぼんやりとそれを眺める。

(ばかだ。最悪だ。寝るなんて……………)

水色の頭がのそりと持ち上がる。

センは不思議そうにその行動の行き先を眺めた。

だん！！

水色の頭は荒々しく床にたたきつけられる。自分で自分の頭を痛めつけるとは、と一瞬センは言葉を失う。

「……………そんなに、シヨックか？」

くつくつという笑いの声に、カイはむすりと頬を膨らませる。もちろん不愉快なああの青年には見えないように。

視線を感じ、目を向けると籠の中の獣と目が合った。

(わかつてるよ、時間がない)

カイは床にへばり付く外の光をぼーっと見つめる。

水色の瞳に赤紫が映り込む。

(まだ眠い、のかな)

起きたばかりだというのに。

\*

静かな車内。相手は向かいに座り床を見つめたまま動かない。

(暇だ)

センは内心でつぶやく。

だが、目の前にはつつけばいくらでもネタが出てきそうな子供がいた。

明日に生か死かを迎える子供が。

(水色……。化け物か。ずいぶん懐かしい物語だな)

あの物語をまともに聞いたのはいつのことか。センは記憶を巡らせた。

だがそれはずいぶんと昔の話。

子供のころから今の職に手を染め始めていた彼は、もう鮮明な記憶としてその時のことを覚えてはいなかった。

(まあ、いいか)

ふう、と息をつき座りなおす。

偶然水ノ音石に目がいき、センは先ほどのことを思い出した。

あの水色が居眠りをしてしまう少し前。でなくては、居眠りをはじめたころだ。

(気のせいか、石になった気がしたな)

だが、子供はそれに気づいていないようだった。自分も確実に聞いたものかは知れない。何しろ音はとも小さく、しかも一度きりだったのだから。

にやり、と青年の口端がつりあがる。

(まあいい、か)

まだ自分は、満足していないのだから。

\*

外は朱い。紫がかった朱。

(…そうだ、…水……)

カイは小さく口を動かす。だがそこからは音は出ない。

(ぼーっとしすぎたかな)

自分の命がかかっているというのに、なんて危機感がないんだろ

う。

彼女は自分へと嘲笑った。

「なあ、」

「……………」

声と呼ばれカイが視界をあげると、思った通り小窓の横に人影があった。

カイの頭の中、一度に「セン」「商人」「腹立つ」という三つの言葉が自然と浮かぶ。

小窓から入る光は、だんだん弱まりつつあり、淡く頼り無い光りの束が小窓から入り青年の横に半透明の棒をつくっていた。

「なんだよ」

カイは不機嫌そうに答える。

商人だという青年の顔は、いつもいつも、見る度にいろいろな笑顔を浮かべている。ミネもよく笑んでいたが、それとは全く種類が違う笑みだ。それはどこか相手を挑発した笑いで、仲間であろう運転席にいる青年へ向ける笑みも変わらない。

「お前さあ、なんで旅なんかしてんだ？」

センの問い掛けに、カイは小さく息を吐く。答えるのが面倒臭いと思った。

「なんとなく」

カイは自分でも適当だか本当だかわからない答えを返す。

「ふーん。俺はてつきり追い出されたんだと思ったな」

追い出された。

カイはすぐにその言葉の意味を解した。

「そのカツコだと、随分周りに嫌われてたんじゃねえの？」

何かを知ってるような口調。それと視線。

(しゃくに障る奴)

カイは眼を細めた。

その正面でセンはやはり意地悪く笑っていた。

よくいえば「悪戯っ子のよう」だが、いかにも思考の回ったような目をしている。それは「悪戯っ子」といった甘いものとは決して違う。

その考えを巡らせ切ったような目は、カイの姿を捕らえ、ニツと細められる。

「お前の短剣、これ、ホントにお前のか？」

カイはわけが判らず、思わず「は？」と聞き返した。

何も分かっていなそうな返答に、青年はふうつと息を吐き、カイから取り上げた短剣を手に持ってちらちらと見せつけた。

「これさ、……………お前」

センはまた短剣を近くの明かりに照らし、光を反射させて遊びだす。

「お前」と言ったまま言葉を切ったかと思うと、少し短剣を弄んだ後やつと口を開き、「お前、ホントいいの持ってる」と呟いた。

(その犬といい、石といい、コイツといい)

センは腕を伸して短剣を高く掲げる。ちらちらと刃の面に外の光を反射させる様子が、カイにもよく見えた。外の光といっても、もう月明かりに近い弱いものだ。

だがなぜだろう。荷台に置かれたランプに照らされる時より、小さな月明かりに照らされているときの方が鋭く輝いているように見える。

「なあ、お前」

「……………」

こちら見ずで声をかけてくる青年へ、子供もそちら見ずで、しかも声もさえもなく無言で返す。

「ヒト殺した事あるか」

「……………はあ？」

思いもよらない言葉への、間の抜けた返答。

センがその声に目を丸くして子供を見ると、子供も同じように目

を丸くしていた。

その顔には「こいつ何言ってるんだ？」と大きく書かれていた。

(なんだ？ ハズレか？)

一瞬青年はそう思った。だが、また自身に満ち溢れるように口端をあげ、(いいや、俺の勘がハズレる筈ないね)と自分へ訂正を入れる。

「お前、そこに何がしみ込んでるかわかるか？」

シンは短剣を床に置き、低い天井に下がるランプへ手を伸ばした。カイはそれを目で追う。

「普通の間人が、普通に暮らしているだけじゃ刃物はそうならない」小さくなりかけていたランプの灯は、シンの指先で一瞬小さくその身を震わせ、わずかに音を上げたかと思うと、また新しい炎が加えられたかのように一回り大きな明かりであたりを満たし始める。

(こいつ、“赤使い”か)

カイは悔し気な感情を押し殺す。

「なにが言いたい」

それは、興味がなさそうに言い放した問。

\*

座り直し、ナイフをランプへかざしてセンは言った。細められた眼は笑んでいるのに、どこか触れたら切れそうな空気をたたえている。

「いろいろ、染みてるんだよ」

鮮やかな赤、濁った悲鳴、恐怖、混乱、神にも継るような思い。

死に直面した人間の念

「何したんだ？」

茶色い瞳はランプの黄色に照らされ、悪戯に笑う。

カイは余計な感情を表に出さないように声を出す。

「お前、本当に商人か？」

水色の子供は訊尋ねる。青年の問いには答えず、自らも問い返す。その表情に非難の色は混ざっていないし、青年への警戒も濃くなつた様子はない。

ただ伺えるのは単純な疑問だけ。

センは虚を削がれたように一瞬目を丸くする。

だがすぐに、その真つ正直で単純そうな水色の瞳を見て、くつくつと笑いだした。

彼の中で何かが訴えかける。

こいつは、

こいつはちがう。

そこら辺に群れるくだらない人間どもとは違う。

自分の言葉に翻弄され、くだらない末路をたどつた人間どもならいくらでも見てきた。だが、目の前のこいつは違う。

抗おうとしている。

目の前につるされたチャンスを握りしめ、俺に抗おうと……

(同じ匂いだ)

短剣から漂う香り。人を本気で睨んだ時の、威圧的な鋭い空気。

こいつは、違う。

そう訴えかける。

こいつは化け物だ、と。

昔々の物語。

水のように澄んだ美しい毛を身に纏つた、それは愚かではそれは憐れな、一匹の獣の話。

10【匂いをたどる途中】

(こいつが“化け物”、か……………)

正面で床に頬をつけて横たわる子供。その姿に“化け物”という言葉は、どうも不釣り合いに思えた。

だが、それでも何かがある気がして、青年は期待せずにはいられないのだ。なぜだろう、と彼自身が自分に問う。

(どう見たって“化け物”っていうより……………犬っころ、だよな……………)

……………くっくくくつ、と突然笑いだした目の前の青年に、カイはぎよっとしつつ不快そうに眉を寄せた。

(なんだこいつ)

不審者だ。

漠然とそんな言葉が頭に浮かぶ。

「俺はなあ、」

青年は楽しそうに笑いながら、ずいぶん前に問われたようにも思える質問に答える。

「俺なあ、実は商人じゃない。少なくとも、『本職ではない』って意味でだな」

もつとも、今は商人だけど。という言葉に、「ふーん」という水色の返答が入った。青年の打ち明けに対して返ったのは「そうか」という薄い反応だけ。「つまんねーやつだな」という青年の言葉を無視して、「それなら、」とカイは尋ね返す。

「そっちは……………、お前の方こそ、人を殺し馴れてそうだ」

「あ？ ああ。そりゃそうさ。多分お前より数倍は経験豊富だな」

自慢げに、冗談っぽさをたたえながら青年は言いが、多分真実を述べてるのだろうなと、カイは思う。

「お前も同じだろ」

青年の言葉が、視線が、す…っと冷たく、重々しくなった。

何が。

水色の瞳は問う。声に出さずに。

「俺と同じさ」

どこが。

澄んでいた水の色が。日に当てられたように柔らかかった色が。暗がかりで静かに凍りつく水のように温度を下げる。

「周りなんてどうでもいい。自分なんて幾らでも装える、だろ？」  
何で。

水色の瞳は、水ではなく、“氷”を宿していた。

「周りが必要無くなれば、消せば良い。そうだろ？ それがお前の本心だ。綺麗事を嫌い、すべてを疑って生きている。そうしなけりゃ生きていけないから、当然のことだと自分に言い聞かせながら」  
静かに、静かに、相手を貫く静かな視線。ランプのせいではない。青年の瞳がギリリと輝いた。

「お前からは、恨みと恐怖で死んでいった人間どもの匂いがする…  
……」

少女は表情を崩さない。

車内を照らすランプの灯が、ふっと消えた。

暗闇に、「ポツン」と水の落ちる音が響く。

\*

ガタン

車体が大きく揺れ、音を立てる。

「おい、どーした？」

大したことではないだろう、と高をくくったように平常を装い、センは小窓から外を覗く。

車内も外もすっかり真っ暗だ。でなくても砂埃や排気ガスやらで

汚れている小窓からは、外の様子など全く持って見えやしなかった。外からいらいらとした様子の声が、のんきに荷台で座っている青年へと向けられる。

「お前も出て手伝え！」

「……………はいはい」

(良いところだったのによ)

センは面倒くさそうに頭をかきながら立上がり、カイを振りかえった。

「坊主、ちょっと待って……………」

……………な。

最後の一言は音として発せられる前に暗闇へ溶けた。

なぜだ。

センの表情は凍りつく。

なんてことはない。ただの車のエンスト、でなきや泥濘や穴にタイヤがハマってしまっただけだ。

なのに……………

なのに。ただの“それらの出来事”から、どうしてこいつが出てこようか。

「つたく、何の冗談だよ」

引きつった笑顔の正面、そこには“あの獣”がいた。低く唸り、牙をムキだしにし、殺意さえ漂わせている。

あれから出たというのか？ 一体どうやって。

「……………！！ そうだ、あいつは……………」

あいつはどこだ。あの子供は。

センの視線は真つ暗闇の荷台の中を見渡す。だが暗闇に慣れ切っていない眼は何も見つけだすことができなかつた。

「くそつ……………」

仕方なく、普段あまり使わない力を使う。マッチもライターもな

いその掌に、ぼつ、と小さく灯が宿った。夜風に揺らめき、ゆらゆらと青年の赤茶の瞳の先を照らし出す。

自らが生み出した明かりに照らされ、荷台の中は先ほどよりよく見渡せた。

だがそこには子供の姿は全くない。

あるのは壊れた檻に、噛みちぎられた縄。空になり転がる解毒剤。そして牙をむく獣。

「……………!!!」

外から声がした。あの同僚の声だ。叫ぼうとして止められたのか、それは中途半端に空気を揺らし、静まりきったこの場所でなければ自分のものまで届かないくらいの音で終わった。

「やられた、のか？」

まさか、と疑うセンの脳裏にある光景が浮かぶ。

出たというのか。

少し目を離れた隙に。

あんな一瞬で。

俺の隙を突いて　　？

声の上があった方へ行けば、口うるさい同僚がお気に入り、の麻醉銃でお寝んねときた。

「こいつ本当に役にたたねーな」

センは呆れて頭を掻く。

その頭を、何かを踏み台にしてひらりと舞った。それはキレイのいい音をたて、地面へと着地する。

獣だ。口にはカイが没収されていたナイフの数々がひと束になって銜えられている。どうやら獣の飼い主は、身近な荷物しか持っていなかったようだ。

そういえば、と自分の手元を見て、センは「くそっ」と毒づいた。  
(そういえば、車が揺れたとき、あの短剣床に置いたな、俺)

センは半ば八つ当たり気味に獣へと視線をもどす。その表情は明らかに不機嫌だ。

「この野郎、いい度胸じゃねえか。俺の頭をふんずけるたあ、………  
…覚悟、できてるんだろうな？」

獣はその真ん丸な瞳をセンへと向ける。じつと動かないまま数秒が立つと、センは空を切るように右腕を思いつきり横へと薙いだ。

ぼっ、という音が幾つか聞こえ、その音と同じ数だけの火が青年の周りを照らした。

獣はそれを見て背を低くする。まるで構えるようなその姿勢に、センは口端を吊り上げる。

「上等な毛皮にしてやる！ 感謝しろよ！」

ぶわりと風を起こして炎が獣へと襲いかかった。

獣はひらりひらりと尾を引く火の玉を避けて、少し距離を離れたところで青年を睨み据えた。「くるか？」と青年がまた身構える。

だが、獣はやる気満々の青年を一瞥すると、そのまま闇の奥へと駆け、溶てしまった。

「俺は相手にもされず、か」

センは踏まれた頭をはたき、既に空となった荷台へ乗り込んだ。

「何をしたんだ？ あのガキ」

彼は今、好奇心で満たされている。

（一体どうやって外へ出た？）

壊れた籠に手を触れる。

「大きな穴だこと」

呆れながら手に取った金属製の格子は熱かった。いや、冷たかったのだ。

試しに靴で軽く蹴ると、衝撃を受けたそれはパリンという高い音を上げ、粉々になった。

「ガラス並みだな」

センは興味深そうにそのかけらをつまみ上げる。

多分車が揺れた折、壁にぶつかり格子が壊れたのだろう。でなければ獣か水色が自分で衝撃を加えたか、だ。という事は。車が揺れる前から、格子はもうこの状態にあったということになる。

「いったいどんな手品を使った……………」

青年は、まるで少年のように楽し気な笑みを浮かべる。

センは、外に出て車を確認した。

「……………やっぱな」

小さなトラックのタイヤは、根元からしっかりと凍り付いていた。

あの車体の揺れだ。じつくりと時間をかけた凍り方ではない。突発的に、一瞬で凍りついたのだ。突然タイヤを止められた車は、慣性の法則だかなんかである揺れだ。

氷。

いや、凍らせる力？

「違う」

確かに聞こえたあの音。

水ノ音石。

(水を使った、のか……………?)

確かに、強い力を持つ人間なら、このくらいの車、幾らかの水をタイヤに絡ませればとめられるかもしれない。

(けど、)

けど。だが。しかし。

青年は目の前にあるものを見る。

これは氷だ。水ではない。

これも力の一つだというのだろうか？ 水ノ音石がもしこの現象に反応して音を鳴らしたのだとしたら、そうと認めるしかない。

(つたく……………、)

呆れたような笑みが自然と浮かぶ。

これは計ってなされた事か？ それとも、偶然か？

くつくつと、青年は声をあげて笑い出す。

よくもまあ、こつも呆気なく逃げられるとは。

くつくつ、くつくつ、という笑いはしつとりとした夜の暗闇に溶けた。

ナイフを持っていながら、同僚にある外傷は麻酔針によるものだけ。胸を一突き。たったそれだけが出来ない筈もないだろうに。

くつくつくつ……。笑いが止まらない。

「くつそが」

センは雲に隠れる月を見上げた。

何年ぶりだろう、こんなに楽しいのは。

「くつそ……………」

青年はなぜ悔しくないのだろうか、と疑問に思うことも忘れ、腹を抱えて笑い呆けていた。

\*

またなあ、坊主！

そう夜闇に響き聞こえてきた楽しげな声は、先ほど自分が逃げた車からだった。

「つたく、誰が坊主だよ。もうごめんだって」

カイは取り戻した短剣、ナイフの類、水ノ音石を指定の位置に戻し懲り懲りとした様子でつぶやく。

縛られていた手首をほぐすように回すと、中の組織がきしきしときしむのがわかった。

（自業自得、かな）

始めの中型トラックで気付いていながら、こいつらを利用すれば楽して次の町までいけるかもしれない、とか思った自分がいけなかったのだ。

（もっと慎重になれってことか）

カイは雲に覆われた月を見上げる。

『必要無くなれば、消せば良い』

あの青年の声が蘇る。そして、まるで自分の中を抉り出すような

赤茶の瞳も。

「…………ちがう」

その瞳はまっすぐと前を見る。

カイは地平線に沿うように並ぶ町の明かりを頼りに歩きだした。

10【匂いをたどる途中】（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます！

はじめての人もそうでない人も、こんにちわ。秘密基地のイラストコーナーでたまに出現させていただいています。イージーこと古川です。

まだまだ未熟ながら執筆をさせていただいています。「水色と灰色と赤の旅」いかがだったでしょうか？

まだまだ面白いとっていただけには程遠いともいますが、実力向上のためにもこの話、ちゃんと完結させようと思います。

ところで、この何日かで10話目まで更新してまいりましたが、次の更新まで少しじかんをあけようと思います。話の流れをじっくり考えたいのもあるんですが、ちょっとから私生活の方が忙しくなりそうなので。

いや、師走ですしクリスマスですしでいろいろと面倒臭いんですよね。仕方がないさと自分に言い聞かせて我慢します。

でわ、皆さんもお体等に気をつけて、良い年越しをお過ごしください（気が早い？）

でわ、また機会がありましたら！

## 0【化け物の話】

むかしむかし、この世界がまだ一つの大陸だった頃。

吹く風は清く透明で、流れる水は冷たく濁り無い、それわそれわ美しい場所があったそうなの。

だがそこに人間が住む事は無かった。  
なぜならそこには

\*

「化け物だ！」

語り場。

それは昔からの物語を、次の世代を継ぐ子供たちに語る場所。  
そこで今まさに始まりつつあった物語へ、一人の子供の声が乱入した。

老婆の朗々とした静かな声が途切れる。

語りべである老婆のその視線は、話を途切った原因ともいえる男の子へ行き、そしてその子の指に示された“モノ”へと移った。

他の子供達の視線も一斉にその“モノ”へ集まる。

それは一人の子供だった。5つ位の、幼い子供。

髪が短いせいか、それともその齡よわいが幼いせいか。男とも女とも取れる風貌の子供がいた。その瞳はどこか冷めたく無機質。たぶん“水色”という珍しい色のせいもあるだろう。だが、老婆は感じていた。その冷たさは、単に色だけのせいではないことを。

子供たちの間に「化け物だ！」という言葉はあつという間に伝染した。したかと思うと、すぐにそこには罵声まで聞こえるようになった。

「あっち行け化け物！」

「こつちくるな！」

「お前なんかやつつけてやる！」

子供達は出てくる限りの罵声をその子供に向けた。老婆は止めない。

水色の子供は凶器の言葉をその一身に浴びる。老婆はそれをただ見つめるばかり。白濁したその瞳が濁って見えるのは歳のせいだけでは無いはずだ。彼女の顔は「罵声を浴びて当然だ」と言いたげに強張っていた。

周りの罵声を無視したように、子供はじつと老婆を見る。子供と老婆の二つの視線がまっすぐにぶつかり合い、まるでそこに、静かで固く冷たい空間ができていくかの様になった。

その間も、子供たちの罵声は幾つか投げかけられていた。だが、その空間に輝を入れることはかなわない。

白濁した瞳が表情をしかめる。子供が、まるで自分の心を見透かしているかのような目で自分を見ているように感じたから。

老婆の干からびた手がそっと持ち上げられた。その瞬間、子供と老婆の間にあった冷たい空間が割れて溶けた。

まわりの物音は普通に存在し、子供たちのざわめきもつるさい位に聞こえていた。

老婆はしかめ面のまま、持ちあげた手を“しっしっ”と振った。まるで迷い混んで来た汚い野良猫を追い払うかのように。

「ほら、用がないならあっちへお行き」

冷たいその言葉に子供は何も言わず、頷く事さえなく足を一步後ろに引いた。そしてそのまま駆けて行く。その動作には、一切の振り向きも存在しなかった。

老婆はほうと息をつく。

「さあ、お前たちももうお静まり」と、子供達の行き交う声にざわめくこの空気を、静かな声で確かなだめた。

そして何も無かったかのように、物語はまた始まる。

\*

むかしむかしにあった美しい場所。そこには恐ろしい化け物がいた。

化け物はその昔、神に大切に大切に飼われていた獣だった。

神の加護を受けていたその毛並みは、滑らかで美しく、澄んだ水の色をしていた。

だがある日、神が地上に「命」を作り出した時の事。神は己の体を突き刺し、その血を雨として地上に降らせた。雨は地上のどこかしこに降り注ぎ、「命」は世界に息づいた。

そして、その場にいた神の獣は、なんとも香しい血の匂いに酔ってしまった。だが地上に降り注ぐ我が命に気を取られていた神は、獣のそれに気付くことができなかった。

獣ははじめ、なんとか自身の欲求を押さえ、神のなさる執行を静かに見守っていた。だが、だんだんとその香しい匂いに耐えることが苦痛となり、獣の中に宿った“欲”は大きく穢れていく一方だった。

神の執行が終わるかと思われたころ、獣は血の匂いに惑わされ、ついに神の喉元に噛みついた。

神は痛みに叫んだ。その叫びは雷となり地上に落ちた。それは「苦しみ」として命に溶けこんだ。

そして、獣の噛みついた神の喉元からは黒く澱んだ血液が流れ出した。それは「命の雨」とともに地上に降り注ぎ、「痛み」を生んだ。そこには獣に宿りあふれ出るばかりに大きく積もっていた“悪しき欲”もともに溶け込んでいた。

獣は神の創り出した命に「苦しみ」と「痛み」と「悪しき欲」を植えつけてしまった罰として、地上へと追放された。

そして獣は、地上で見つけた神のいた場所と同じ香りのする美し

い湖へと住み着いたのだ。

美しい水の色の毛並みに、人々は始め、その獣こそが神ではないのかと思つた。

だがその外見とは合い余らず、化け物の心は黒く澱んで荒みきつていた。

化け物は美しい場所に立ち入ろうとする人間を容赦なく食い殺し、その血を嘍すすつた。

人々は、その水色が赤で染まる度に、内から込み上がる恐怖に体を震わせていた。

人々はひたすら祈つた。

どうかあの化け物をどこか遠くへ追い払つて下さい。私達に与えられたはずのあの美しい場所を、どうか取り戻させて下さい。と。

そしてある日、偉大なる神はその言葉を聞き入れた。

神は人々の夢に現れるとこう告げた。

一番高い木を探しなさい。

その木の天辺に、青々とした大きな葉を見つけなさい。

そこに、花々からくみ取つた朝露を注ぎ、一か月間祭壇に奉りなさい。

その一ヶ月、子供と女以外は、決して寝つてはいけけない。

男達は夜が来るたびに月に祈りなさい。

女達は朝が来るたびに太陽に祈りなさい。

次の日人々は一番高い木を探し、天辺に大きな葉をさがした。

二週間かけてやっと見つけたそれは、肉厚がしっかりとっていて、本当に立派な葉だった。だから人々はそこに沢山の朝露を集めなければならなかった。

甘く心地よい香りを漂わせる沢山の花々の朝露は、その大きな葉

に恭しく注がれた。

人々はそれを祭壇に奉り、女と子供以外は一か月寝ずに過ごした。男たちは夜が来るたびに月に祈った。女たちは朝が来るたびに太陽に祈った。

一か月が経つと、偉大なる神は夢の中でまた人々に言葉を残した  
いった。

その水を、10人の人間で分けて飲みなさい。

その葉を燃やして出来た灰を、10人で分けて浴びなさい。

人々は全て言われた通りにした。20人の若者を選び出し、10人に水を、10人に灰を飲ませた。

\*

「そして力を授かった」

老婆がそつと前に差し出した手

その平の上にはどこから現れたのか、水が球状になって浮いていた。

老婆がその形を指でくるとなぞる。その度に水は鳥になったり、四つの脚を持つ生き物になったり、と形を変えた。

この光景に子供達は見慣れたもので、老婆のパフォーマンスなど気にしたようもなく続きを急かす。

彼らにとって、話はこれからがいいところなのだ。

\*

人々はその20人の若者を送り出した。

向かうは美しい場所。

汚れた化け物に愛でられた、憐れな場所。

化け物は人々の匂いを嗅ぎ分け、身を翻した。いつもと違う人々の匂いに震え、戦うためではなく、逃れるために走った。

だが人々は化け物を逃すことをしない。

今まで殺されてきた仲間を思い、果敢に戦った。逃げようとする化け物を、ある者の水が追った。火が追った。

ある者の水は、鞭のように化け物の体を締め付けた。

ある者の火は、礫つばてとなって化け物の体を焼いた。

\*

子供達は楽しそうに声をあげる。

初めて聞く話では無いだろうに、その表情には生き生きとした笑顔が満開に花開いていた。

\*

今まで沢山の仲間を殺めてきた化け物必死に闘い、20人の勇敢なる仲間をも傷付けた。

ある者は腕を無くした。

ある者は脚を無くした。

またある者は化け物の鋭い爪により、光を失った。

仲間は少しずつ減って行き、遂に一人となった。

20人の勇敢なる若者たちを前にしたというのに、化け物の毛皮は毛並みを乱すこともなく清らかに、まるで水面を揺らすかの様になびいていた。

化け物に19人の仲間を殺された勇敢な一人は最後の力を振り絞り、怒り狂う炎で化け物の瞳を焼いた。

だが化け物は、目を失ってもなお、鋭い嗅覚を持つ鼻で勇敢な一

人の場所をつき止めるのだった。

そして、化け物は勇敢な一人の腕に食らい付いた。

抵抗する勇敢な一人を大きな四肢で抑え込み、決してその腕を放さなかった。

身動きの取れない勇敢な一人は炎を放った。

力一杯の炎をその身から絞り出し、全てをおのれの腕に食いつく化け物へと向けた。

毛皮は燃やせないものの、その炎は勇敢な一人の腕から獣の口へ流れ込み、体内を焼いた。

化け物は熱さにのたれ周り、食いついた腕を離そうとしたが、逆にその腕に口の内部を　喉の肉を強く掴まれ離せないでいた。

化け物はたまらず腕を食いちぎろうとした。体中を炎に包まれてなお、勇敢な一人の腕に牙を突き立てた。

悲しくもがな。

勇敢な一人はこの戦いで腕を失った。

だが腕が食い千切られるのと、化け物が息絶えるのとは同時だった。

化け物はその美しい水色の毛皮だけを残し、灰となって風に消えた。

勇敢な一人は英雄となった。

美しい場所に、化け物はいなくなつた。

\*

「その後、化け物の毛皮は英雄の手により神へ献上された。神はその褒美に、人々へ「可能性」をお与えになつた。だれもが力を使える可能性だ。月日が経ち大陸は二つに分かれ、一つの大陸に10人の王が君臨なさつた。こちらの大陸が水を使い、あちらの大陸が火

を使うようになったのはそれからのこと。英雄の一族は今も息づき、その太陽の化身ともいえる赤い髪と日に焼けた肌を受け継いで

子供達はもう老婆の話を聞いてはいなかった。それぞれがそれぞれの話に夢中になっている。子供達は誰が化け物役になるのか、誰が英雄役になるのかで揉めていた。

老婆は溜め息をつく、困った様に手を叩く。

パンパンパン、とその音は子供たちの気を自然に引いた。

「ほら、もうお帰り。暖かな夕飯が待ってるよ」

子供達はわらわらと去って行く。

一人になり、老婆はほうつと息をついた。

目をつむり、瞼の上から優しく瞳をマッサージする。すると、なぜかあの子供の姿が甦る。

脳裏から消えることのないあの二つの瞳。

ぞわり

老婆の肌が粟立った。

それは老婆だから感じることできたもの。とった歳の数だけ積み重ねてきた経験と、磨きをかけられた水の力。それらが合わさって初めてはつきりと感じることでできる何かだ。

二年前にこの町に来た子供は、家を賊に襲われたとかで家族を失っていた。

その家を町長と一緒に見に行った時の光景は、未だはつきりと記憶にこびりついていた。

脳裏に焼き付き離れない、悲惨な光景

長老である老婆は身震いした。

気付けばもう日が沈んでいるではないか。室内へ戻ろうか。このまま体を冷やせば、この歳だ。風邪をひいてはなかなか治すのは大変であろう。

のそりと立ち上がり、老婆の影は小さな長方形の光の中へと消え

る。

誰もいなくなった語り場は、言の葉の中で戦った化け物と英雄の面影も何も窺えない。

あたりまえだ。

それはただの昔話。

ただの迷信。

化け物を失った美しい場所がどうなったのか、誰も知る筈もない。

化け物の記憶など、この語り場で語られる事は無い。

誰も化け物の事は、知ろうとはしない。

## 11【化け物のいた街：前】

珍しい客が来た。

ここ十年近くこの街で宿をしているが初めて見る容姿だ。

水色の髪に水色の目。自分が古い考えの人間だと思ったことはないが、さすがの俺もあの“物語”を思い出さずにはいられなかった。

まだ12〜13歳くらいだろうか。背もそんなに高くないし、声変り前のようにも見える。犬にしては少し大きめの獣を連れているが、これは護衛用と言ったところだろうか？

「泊まりたいんだけど」

呆然とその容姿に目を奪われていた俺へ、客はふて腐れたくさ様にそう言った。

あまりじろじろ見たので気を悪くしてしまっただろうか。何しろ本当に珍しいもんだから、つい。

この街は結構大きいが、やはり、この客の様な容姿は一人も居ないだろう。

……………そう言えばこんなこと、ちょっと前にもあったな。

\*

「お客さん、旅の人かい？」

熊の様な亭主は、カイに鍵を渡しながら尋ねた。

「どれくらい泊まってくかね？」

カイは腕を組んで少し考えた。そして、熊のような亭主を見上げ、小さく小首を傾げる。

「なんだ？」

亭主もカイにつられて小首をかしげた。カイは一拍置いて「いえ、別に」と言うと、小さく苦笑いを浮かべ、「取りあえず3日位にしておきます」と答えた。

「そうかい。わかった」

亭主は二階を指さし、水色の客人へ目を向ける。

「部屋は二階の、階段の左脇だ」

カイは頷き、鍵を受け取った。二階へ行く途中「縁起の悪い子だねえ」というお女将さんの声が聞こえた。

カイはまた、苦笑する。

部屋へ行くと、カイは自分の髪をわしゃわしゃとかき乱した。獣ははっはと舌を出しそれを見上げる。

「ここ、いい宿だな」

カイは獣へちらりと視線を投げかけ、荷物を置いてベッドに腰を下ろす。

「少しぽかんとしてたけど、ちゃんと客として受け入れてくれたし、お前の事も嫌な顔せずに入れてくれたし」

獣は首を傾げる。全く言葉を理解していないだけかもしれないが、その様子を見ていると随分ととぼけているようにも見えた。カイはくつくつと笑い、窓の外に目を向ける。

日が沈みきつてもいないのに、空に比べ地上はずいぶんと明るかった。人通りも多く、道にはたくさんさんのランプがつり下げられて柔らかな黄色があたりを照らしている。

カイがフードを外したのは店内に入ってからだ。さすがにあの人のみの中でどうどうと歩く勇氣はなかった。

(…………… あんなことがあった後じゃな。流石に警戒しないと)

人売りやらそう言った裏に繋がりのある商売をしている人間にとって、自分は恰好の獲物なのだ故郷を出てやっと痛感したようだ。カイは「まったく、まいったな」と疲れたように項を垂れる。

宿に入って店内を見て、他に人の姿がなかったので、カイは迷わずにフードを外した。そして、内心躍起になって、というより少しか腰だったのかも知れない。もしも色や獣の事でぶつくさ文句を言いだしたり、卑しい目で見てくるような亭主だったら、カイは

喜んでその場を去ろうと思っていた。もしかしたら、誰でもいいから喧嘩をしたかっただけかもしれない。

この街に来る途中、気に食わない商人に出会って以来、カイは中途半端に自分の中に残ってしまった不快感を消せずにした。

だが、挑むように見上げた亭主はすいぶんと人が良さそうで、何一つ自分の容姿にも触れることなく鍵を渡してくれたのだ。

(…………… 大人げ、なかったよな)

なにかまだ割り切れていない自分へ、カイは「はあ……………」と一つため息をついた。

少し休んだ後、カイは部屋を出た。他の客の気配をかんじ、フドをかぶり階段を降りる。

外へ出ようとしたとき、宿の亭主が人懐っこそうな笑顔を向けて口を開いた。

「散歩かい？」

「はい」

カイは足を止める。

「そうかい。そろそろ日も暮れるし、気をつけてそれだけだろうか？」

カイはくすりと笑う。

「ありがとうございます……………あ、あと、」

扉に手を当て、カイは思い出したように主人へと顔を向けた。フードの影に隠された瞳の色を、確かに知っているこの宿の主人へ。

主人は「なんだい？」とカイへ尋ねる。

「……………ここ、良い宿ですね」

カイはそのまま相手の反応など見ることもせず外へと出た。あとから聞こえたのは、亭主の「ありがとよ」という嬉しそうな声と、女将さんの「なかなかいい子じゃないか」という奥のから投げかけられたであろう声だった。

(詫びのつもりか?)

カイは自分に呆れ、息をつく。

「まあいいか。嘘じゃないし」

外はまだ明るく、オレンジに染まった街並みがきれいだった。

気を取り直し、カイは自分のいた町よりそこそこ大きく、そこそこ綺麗な町を見回した。なにしろ旅にでて初めての“街”なのだからしかたない。田舎者丸出したが、本人もそれに気づきながら自重はしなかった。こうしてはしゃぐことは大切だと、なんとなく思っ  
てしまう。きつと、今まで大人すぎたせいだろうな、とカイは苦笑する。

隣では獣が尾を振り落ち着いた様子で歩いていた。町の子供は好奇心旺盛で、カイの横を歩く獣を見て、触ろうとはしないが物珍しそうにうろちよるとその周りを駆け回っていた。皆、はじめは獣の存在にぎよつとするものの、主であるう子供カイの横を大人しく歩く姿を見て、「よくしつけされた犬だな」と感心していた。

もちろん、カイはそんな周囲の反応に気づいている。

(犬、か……………)

くつくつと笑うカイを、獣は不思議そうに見上げて首を傾げた。

(まあ、都合がいいし、このまま犬でいてもらおうかな)

カイは獣の頭をわしゃわしゃとなでて、目についた屋敷へと足を向けた。

「……………でかいな」

カイはその屋敷の前に呟く。でかい、と言っても他の家々に比べると、という意味だ。建物として大きいものならこの街を歩いているときに点々と見てきた。だが、それらは明らかに共同生活よりの家だ。今前にする屋敷のように、一軒まるまるに個人または一つの家族だけが住んでいるようには思えなかった。

「金持ちの家、か？」

カイが首をひねって呟くと、近くにいた警備の男がくすくすと笑

った。

「あんた、旅人さんか。ここはな、この街の今の長の家さ」

「長？」

カイは白い煉瓦を積み重ねられた壁を見上げた。綺麗な配置の窓。少しくすんだ青の屋根。自分の知っている長の家とは随分と違った。

(ミネ、元気かな)

あそこを出て来て、実際にはまだそんなに経っていないはずなのだが。どういうわけだろう。もう遠い思い出みたいだ。

(こんなこと言ったらミネに怒られるな)

カイは苦笑いを浮かべる。

世話になっていた家。あそこも長の家だった。だが、長というのは家系や血筋ではなく“力”で決まる。だから、町長だからと言って家が大きいとは限らないのだ。ということは、この屋敷の人間は血筋にも恵まれていて、そして“力”にも恵まれているということだろう。

「すごいな」

カイは曖昧な気持ちになった。

小さな村の小さな家の出のカイとしては、“血筋”という言葉に随分と距離を感じた。そして、ある意味“力”も、自分とは程遠い存在だった。

「すごいだろ？　すごいだろ？」

警備の男は自分のことのように自慢げだった。なんであんたが嬉しそうなんだよ、とカイは内心で笑った。

「で、旅人さん。あんたは長に何か用かな？」

「あ、別に。ただ、立派な屋敷があったんで見にきただけっていうか」

「そうかいそうかい。ま、最近長は旅人さんに借りが出来たばかりだ。きつと旅人とあらば誰にでも気を良くすると思っぞ」

それは顔を出してみたらどうかと、言外に進めているのだろうか？

カイは少し考え、警備の男へ視線を戻した。

「何の用もないのに会いに行くっていうのも変な話ですし、私はこれで失礼します」

カイは向きを変えた。警備の男は気のいい笑顔で手を振る。道の先からこちらに向かって歩いてくる男が見えた。きつとあの屋敷に行くのだからなと思いつながら、カイがその男の横を通り過ぎたとき風が幾らかカイのフードを揺らせた。

(あぶないあぶない)

カイはフードの端を抑える。

「誰だあれは？」

門の前にたどり着いた男は、警備の男に今過ぎ去った見知らぬ人物について尋ねた。警備の男は「ああ、あれはただの………」と笑みを浮かべて答えようと口を開いた。その時。

「……………?!」

びゅうつ、と一つ風が吹いた。警備に話しかけていた男は、道の先に見た光景に言葉を失う。

警備の男もその視線を追って道の先にあるものへ視線を向けた。そして、彼もまた言葉を失う。

カイは、小さな風が過ぎるとフードから手を放した。

「ふう、」と安心し、息をついたのもつかの間。タイミングを計ったように大きな風が向かいとなって吹いてきた。

「ありかよ?!」

カイは驚きを声に出す。

あわててフードを抑えようとのばされた腕もむなしく、隣の獣が聞いたのは、「ばさり」という布の音だった。

そして、今後にした道の向こうから、「やつを、奴を取り押さえろ!!!」というどなり声も聞いた。

「……………は？」

風が過ぎ去った後にカイが見たのは、屋敷から出てくるたくさん警備員と彼らに指示をする、先ほどすれ違ったばかりの男だった。

\*

(でもってでもって……………)

水色の頭をした子供は、冷たい地面に座り込んだ。

「……………今あるコレが現状ですか」

(一体私が何をしたよ)

カイは「はあ、」と息をつく。

怒鳴り散らす男。集まる警備。いつの間にかどこかへ行ってしまう  
つた獣。

カイは何が何だかわからないままに、この街の役場にある牢の中へと入れられていた。しかも随分と奥の方らしく、燭台に照らされた小部屋の中には、人相が悪そうな男たちの姿が点々とあった。(これって“重罪人”ってやつじゃ……………)

まさか、私も同じ扱いなのだろうか？ と誰にとも言わず問うが、答えてもらわなくともわかる。ここに入れられたという以上そういうことだろう。

なんなんだかなあ、とカイは頭を垂れた。

「おまえ、化け物だろ」

後ろの方からの声に気づき、カイは顔を上げる。

そこにいたのは子供だった。

## 12【化け物のいた街：後】

「化け物って、随分な言いようだな」

カイは牢屋の隅に、膝を抱えて座る少年へと言葉を返す。薄暗いところの暗さではない。燭台以外に光源がないここでは、牢屋の隅というのはもう闇の塊だった。

暗がりにおいて、その影と声からしか子供としか判断できない。

「お前、なんでこんなところに居るんだ？ 何したんだよ」

カイは隅に座る少年へと問う。

少年は壊れたような干からびた声で笑った。

「……………何って、人殺しだよ」

カイはすつと表情を消す。

少年はひきつった笑みを浮かべ、立ち上がった。

「あんたなら、わかるよな。だってあんた……………。俺さ、嫌いだったんだ。街長の息子。同い年のくせに偉ぶって。だからさ、」

ふらりと歩み出た足は何も履いてはいなかった。カイは煌々と燃える燭台を背に、闇の中立ち上がった子供をただ見つめる。

「……………嫌いだったんだ。みんな、みんな。街長だって、長のくせに、偉いくせに、何も分ろうとはしなかった。悪いのは全部俺。汚いのは全部俺。救われないのも、全部、俺……………」

ふらり、ふらり、と子供は闇から浮き出てくる。

「だってさ、俺」

燭台に、子供の全貌が照らし出された。

「化け物だから」

「……………お前」

カイは自分の前へと歩き出てきた子供を見下ろした。その背は自分の胸下あたりまでしかなく、まだまだ幼さないとしか言いようのない顔つきだった。そして何より、目を引くのはその髪の色。

「……………白いん、だな」

カイは誰に言うでもなく小さくつぶやいていた。少し憐みを含んだように。

少年は乾いた笑みを浮かべカイを見上げる。

「そうだろ。白いんだ、俺。お前みたいに、完璧な化け物じゃないんだ」

なのに……………、なのに……………。

少年はこぶしを震わせていた。

カイは何も言わずにそれを見つめる。

「可笑しいだろ？　なんで俺、化け物って言われて、罵られて。俺は何もしてない。俺は何も選べなかった」

少年はカイの服をつかむ。

「わかるよな、あんたなら。あんたは、だって、……………だってあんた、俺よりももっと化け物だ」

「……………そうだな」

カイの声は小さい。

少年はひくひくと笑いだす。

「俺のせいじゃなかったんだ。全部偶然だったのに。……………物語なんて、水色の化け物なんて、あるからいけなかったんだ。なあ、化け物、だよな？　俺は何も間違っていない」

カイはまた、「そうだな」と答える。

「全部、全部お前のせいだったんだ。お前が、お前なんかいるから、……………俺は、俺は……………」

少年は笑みを浮かべながら涙を流した。

あんたのせいだ、あんたのせいだ、と下から聞こえてくる少年の声に、カイは何も言わない。

「うつせえんだよお！　くそ餓鬼！！」

向かいの牢から、人相の悪い男が怒鳴りだす。

「コレだから嫌だったんだ！　ったく。そんな気持ち悪い色した子供が向かいに入るなんてよお？！！　さっさと処刑されちまえ、このくそ餓……………」

「……………少し、黙っててくれ」

ついつと向けられた水色の瞳に、向かいの牢の中の男は途中の言葉  
を忘れたように口を塞いだ。

男が黙ると、また牢の中はしんと静まりかえる。

「お前のせいで、お前のせいで、……………この、この化け物め……………」  
服を強くつかみ、力なくこぶしをぶつけてくる少年へ、カいはそ  
つと目を細める。それはどこか冷たく、どこか悲しく。沢山の感情  
が混ざりあったような色を浮かべていた。

細く小さな少年の肩へ、カいは静かに手を載せる。

「……………お前は、なんでここにいる」

少年は顔をあげた。白い瞳と水色の瞳との視線が交わる。

「何でって、……………だから、だから俺は、」

「殺したんだろ、人を」

水色の瞳は、冷たくも強い力を宿していた。その脳裏には、懐か  
しい笑顔が浮かびあがる。一人になった自分を引き取ってくれた“  
彼女”。町長の娘で、多分自分と同じ年で。いつも明るくて、優し  
くて、人々から好かれていて。なのに、なのに“化け物”というレ  
ッテルを貼られた自分を、決して化け物とは呼ばなかった“彼女”。  
「殺したのは、同年年っていう街長の子供か？」

少年はぴくりと肩をゆらした。

「だから、私も入れられたんだな。ここに」

自分の息子を“化け物”とやらに殺された街長。その時期に現れ  
た完璧な水色。

（ただの飛び火じゃないか）

カいは頭の片隅で毒づく。

少年はずると、今いる場所に膝をついた。カいの服はつかま  
れたままで、「こりゃ伸びるな」と内心でカいは気にしたふうもな  
くつぶやいていた。

「仕方ないだろ。あんたは化け物だ。……………俺も、化け物だ」

「だから、こうなるのは当たり前前って？」

「ああ、いいザマだよ……………っ?!」

ぶんと風を切る音が少年の耳に届いた。そして、その直後、少年の襟首は強く掴みあげられ、無理やりその場に立ち上げさせられていた。

「……………っ、なんだよ、あんたも、自分を棚に上げて俺を馬鹿にする……………」

「馬鹿だろ」

「?!」

『馬鹿が』

少年の記憶から眩きかける、赤の旅人の声。それが今いる水色のものと重なった。

「おまえは馬鹿だ」

『馬鹿が』

馬鹿。ばか、ばか、ばか、ばか……………

「馬鹿、か。つく……………」

少年はきつく襟首を掴む水色の手を握る。その口端は、歪んだ笑いを浮かべていた。

「あんたもかよ。兄ちゃんもわかってくれなかった。同じ化け物の、あんたまでわかってくれなかった。馬鹿なのは……………馬鹿なのは、俺じゃない!!」

少年のどなり声はキンキンと牢屋に響いた。他の牢の中にいる罪人たちが、まばらに毒づく。

「俺は馬鹿じゃない! 化け物でもない! みんなみんな、何もわかってない!!」

「わかってないのはどっちだ」

カイは声を荒げもせず、手をふることもせず、静かに言葉を言

葉で返した。

だが、少年はその声音と瞳に確かな怒りを感じた。そう。あの時と同じだ。自分を見下ろす旅人の、真っ赤な真っ赤な鋭い瞳。

「お前は、」

水色の口が動く。一瞬、あの旅人の声が重なって聞こえた。

「お前は、悔しかったんだろ。馬鹿にされて、蔑まれて。なら、ならなんで」

カイは少年を自分の顔へと引き寄せた。

「なんでわざわざ負けを認める様な事をした？」

「……………負け？」

少年は白い瞳を一瞬丸くする。

「そうだろう。馬鹿にされて、蔑まれて、苛められて。それでお前は怒りにまかせて躍起になって。……………全部、…全部思い通りじゃないか」

周りの期待に踊らされ、周りが喜ぶような結果を出した。それはなぜか、カイに無意識に“負け”と感じさせた。

「お前は負けたんだ。周りにも、自分にも……………。流されるだけ流されて、逆らうことを止めて、諦めて。お前は自分から負けを認めただんだ」

少年は言葉を失っていた。何を言われたのか。何をどうかえすべきなのか。彼は言葉を返すのに少し時間がかかった。

「でも、でもそんな俺には関係ない！」

やっと出てきた言葉はそれだけだった。時間をかけて、やっとやっと出てきた言葉。彼には、それ以外思いつくことができなかった。だがまた即答で返る水色の言葉。

「関係……………そうだな。私の考えは私の考えだ。お前の考えなんか私にはわからないし、私の考えなんかお前にはどうでもいいかもしれない。でもな、これだけはわかる。……………お前。お前は、」

カイは更に少年へ顔を近づけた。

「人を殺して、楽しいって感じたか?!」

初めて声を荒げたカイへ、少年はびくりと肩を揺らした。

周りの牢からは、冷やかすような、嘲笑うような声も聞こえた。

水色の瞳を見る。そのまま動けずに、呆然と立ち尽くす。無理やりつかまれた襟首は、肌に食い込んでいたが痛みも忘れていた。

「他の奴ら何かどうでもいい。でも、お前はどうかだったんだ。楽しかったか？ すっきりしたか？ 相手の最後の顔見て、ざまあみろって、今でもそう思えるか？」

白い瞳は震えていた。

カイは目の前にある少年の顔を少し話す。相手を押しやり、自分も後ろへと下がった。少年は、自分が解放されていることにも気が付かず、呆然と自分の手を見つめていた。

「快感だったろ？ 自分の嫌いなものがきれいになくなったと思っ  
たとき。……………それで？ その後は？ 今はどうだ？ 何を思った  
？」

静かだった。とても。今いる場所がどこかわからなくなるくらい。静かで、暗くて、冷たかった。

少年はじつと手を見つめたまま動かない。思いだす感触、色、温度。記憶の中から、あの時の叫び声も聞こえた。

「……………あんたは、あんたは分かるって言うのか？ 今の俺が、あの時の俺が」

「……………知らない。私はお前じゃない。……………でも、なんとなく想像はつく」

「想像？」

「虚しさと、不快感」

「……………」

静かな水色の瞳に、少年は黙りこむ。自分の足元を見つめ、じつと動かない。

カイは、少年に背を向け、格子の外へと目をやった。正面の牢に入った男と目が合うが、男は何も言わずに目をそらし、明かりの届かない暗闇の奥へと消えていった。カイは興味なしに正面の牢から

目をそらす。

見つめるのは牢の右手。通路の奥だ。かちやかちやと、小さくだが通路の壁に反響して聞き覚えのある音が聞こえた。

(あいつ、)

冷たい眼差しに温度が蘇る。

音はだんだん近づいてきて、やがてはその犯人の姿もはっきりしてきた。獣だ。このかちやかちやという音は、獣の爪が地面をける音に他ならない。

牢はざわざわと騒いでいた。なにしろ、鍵を加えた犬のような影が奥へ奥へと走ってきたのだから。

獣は、周りから伸び出てくる手など全くの無視で真っ直ぐにカイの前へとたどり着く。

「やっぱりお前凄いや」

カイはわしやわしやと牢の中から獣の頭を撫でてやった。獣はその手に鍵を預ける。カイはそれを受け取ると、「この中から探し当てるって?」と苦笑を浮かべた。何しろ、預けられたのは20個はありそうな鍵の束だ。その中から一発でこの牢のカギを当てるのは無理だろうな、と思いながらカイは端から鍵を試していった。

やがて、6個目くらいで鍵はカチャリと音をたて、続いてキイイイ……という高い音をたててその戸をあけた。

「よっし。……さて、行くか」

カイは自由になったことを実感するように両腕を広げ伸びをした。正面の格子の向こうから、男が一瞬物欲しげな視線を向けてきた。だが、カイが何か言わずとも、彼はすぐに視線をそらし、何も見なかったように雑魚寝を始める。

他の牢からはギヤーギヤーと騒ぎ立てるものもあった。だが、どういうわけか役場の人間は来る気配がない。

(こいつ……)

カイはちらりと獣へ視線を向け、内心にやりと笑う。

もうこんな場所に用はない。早々に立ち去るうではないかと戸を

しめなおした。中で、少年はカイを見ようとせせずに俯いていた。  
「あれ、こここの鍵……あーあ。どれがどれだかわかんないな。面  
倒くさいから私は閉めてやんないぞ」

「……………っえ、」  
はじかれたように顔をあげた少年の前には、もう水色の姿はな  
かった。

残ったのは一人分の足音と、かちやかちやと獣が地面を蹴る高く  
小さな音だけ。

少年は仁王立ちで燭台の炎を見つめる。

真っ赤な炎。真っ赤な瞳。

そして今消えていった水色の背中。

なんで。……………なんで、こんなに遠く感じるんだよ。

開けようと思えば開けられる扉を前にして、少年は悔しげに自分  
の拳を握りしめた。

この村は小さく古い。

昔、化け物を倒した英雄の末裔が暮らす村だと言われている。

パラリ。本がめくられる。

辺りは眩しすぎる陽ざしに照らされていた。こちらの大陸特有の日差しだ。

そして大地は干からびていた。だがそんな環境だからこそ、命は強く生きている。木々は干からびたような木肌をしているが、その中心からは水の流れる音が聞こえてくるよう。その葉は水分がしっかり保たれる様にと肉厚だ。

その木陰には小動物の巣であろう穴。

子どもたちはそこに木の枝を突っ込み、中の様子を見ようとしていた。

皆、日に焼けて健康そうな色をしている。

パラリ。本はまためくられる。

この土地は恵まれていた。

あちらの大陸程ではないが、雨は降るし、作物も育つ土がある。

砂漠が多いこちらの大陸では、この土地は本当に恵まれているとしか言いようがない。

パラリ。

ページは重ねられる。

本は、そのたくさんの紙片とインクの染みで事を伝える。

子どもたちは木の棒の先に何かを見つけた。

いかにも悪戯っ子といった顔つきの少年が、それへ手を伸ばす。

その後ろに3人の子がたかり、それを覗きこもうとつま先立ちになっっていた。

そしてさらにその3人の後ろに、一人、覗きこむこともせず立

つ少年。彼は不安げな表情をして、目の前の4人を見守っていた。パタリ。本は閉じられる。

青年は屋根の下、屋外に置かれた椅子に腰掛け、本を膝に乗せる。まだ読み終わってはいない分厚い本。それを彼はずっと読んでいた。中は小さな文字の羅列。楽しい代物とは決して思えない。

彼は肩の凝りをほぐすように、手で軽く叩いた。

「シン……!!!」

青年が顔をあげると、3人の少年と、2人の少女が自分の方へと駆けていた。

一番前をかけるのは、この村一番の悪戯っ子、ティダだ。

ティダは嬉しそうな笑顔を満面にたたえ、その手に小さな毛むくじやらを握っていた。

そしてその後ろに続くのが元気そうな二人の少女と一人の少年、さらに最後尾にあの気弱そうな少年。

彼らはシンを囲むようにその場に立つ。

そしてやはり、その真ん中に立つのはティダだった。

ティダはその手の中にあるものを見せる。

「みてみて！ ティダが捕まえたの！」

隣の少女、ティダの幼なじみのレーレーは興奮気味に声を上げた。その柔らかい甘栗色の髪は短く、ぴよんぴよんと外側にはねていた。

ティダはえへんと胸を張り、軽く目にかかる深い赤色の髪を手で払った。

「ねえ、でもその子の巣を見つけたのは私よ」

レーレーの隣、チエツは頬を膨らます。

彼女もまたティダと同じ髪色をしていた。ティダとチエツは双子の兄弟なのだ。

シンはほほ笑む。

「また君が見つけたのかい？ でもおいしい処を持つてくのはいつもティダなんだね」

「そうよ！ ティダって本当にずるいの！」

チエツが身を乗り出すと、一つに結ばれた後ろ髪がふさりと揺れた。

「チエツがどんくさいだけだろ」

ティダは唇をとんがらせる。

その隣、赤い髪の少年はティダの言葉に軽く笑った。

「あんた、またティダの肩を担ぐ気？」

むすりとするチエツに、少年は「もちろん」とうなずく。

「で、あんたはどうなの？」

チエツは自分たちの後ろで指いじりをしながら不安げにしている少年を振り返った。

ケルクだ。

ケルクはぼさぼさの黒髪に眼鏡をかけていた。いかにもがり勉、とても言おうか。

彼はしどろもどろに、「いや、僕は、その…」と言葉を濁らす。

レーレーは「もういいわよ」と言って手を振る。その横でチエツは「はあ、」とため息をついていた。

シンはそんないつもの子供たちの様子にくすくすと笑う。

「もういいだろ？ その子、巢に返してあげなよ」

ティダは自分の手の中を見る。

スナホリネコの子は、キーキーと声をあげて鳴いていた。

「でも、せつかく捕まえたのに…」

ティダは嫌だという瞳をシンへと向けた。

レーレーは鳴きやもうとしないその頭を、よしよしとなでていた。

シンは優しく目を細める。

「家族がいるんだ。帰しておあげ」

「でも！」

「ほら！ いいから帰すの！」

嫌だと続けようとしたティダの耳を、姉のチエツが摘まんでひっ

ばる。

「いててててて!!!」

ティダは嫌がおうにも無理やりそちらへと歩かされた。

「あ、私も行く!」

それを追ってレーレーが後を追う。

赤髪の少年はそれをその場に立ったまま、腹を抱えて笑っていた。

「ヨウ」

シンは彼に声をかける。

ヨウと呼ばれた少年は顔をあげた。その一瞬の彼の笑顔は消えていた。その眼には小さな敵意が浮かぶ。

「何?」

シンはその短な言葉に苦笑した。

「君は、俺が嫌いだろう?　なのに、毎度毎度会いに来てくれるね」

ヨウは顔をそむける。

「別に、あんたに会いに来てるわけじゃないよ。ただ、ティダ達があんたを好きだから、それに付き合ってるだけだ」

シンはくすくすと笑う。

「仲間思いはいいことだ」

「ふん」

ヨウはサヨナラも言わずにその場を走り去って行った。

「あ、まって……………」

それを追って、じつと後ろで待っていたケルクもその場を後にする。

シンは小さく苦笑した。

少年たちがいなくなつて静かになつた場で、青年は手を止めていた本をまた開きなおす。

口元に楽しそうな微笑みをたたえ、彼はまた古い言葉の続く世界へのめりこむ。

\*

俺は、仲間思いでも何でもなかった。

ヨウは手元にある本を開いた。

ここは商人達がよく行きかいする休憩用の街だ。

そこに、大陸を超えて故郷の本を見つけたとしても、なんら不思議とは思えなかった。

ヨウは古臭い本のページを、ぺらぺらと二、三枚めくる。

『昔々の物語。神が世界を創造し、人々に力を与えた物語』  
物語の出だしはいつもこうだ。

むかしむかし、この世界がまだ一つの大陸だった頃。

吹く風は清く透明で、流れる水は冷たく濁り無い、美しい場所があったそう。

だがそこに人間が住む事はありませんでした。  
なぜならそこには

ヨウはつまらなそうに、一気にページを飛ばす。

そして、偶然開いたページには一人の男と獣の絵があった。  
物語の挿絵だ。

男はぼろぼろの皮鎧のような物をまとっていた。その左腕は失われ、茶色の絵具で赤く染められていた。だが、それ以上に強調された赤が髪と目に使われていた。肌は茶色く焼けている。

その足元には水色の獣。

苦しげに目をつむり、頭を男に踏みつぶされていた。

空には薄い衣をまとった老人が両手を拡げて陽光を浴び、神々しく描かれている。

これは、神と英雄と化け物を描いたものだ。

物語が最終的にまとまる姿。

「安くしとくよ？ どうする？」

露店を出していた主人が軽快な声でヨウに尋ねる。

「いや、遠慮しとく」

ヨウは本を元あった場所にもどした。

「惜しいことしたなあ、旅の方あ」

主人は去りゆくヨウへとはたはたと手を振る。

14【町と病と虫と罪と・前】（前書き）

ザアーーー……

雨が降っていた。

ヨウは無表情にその教会を振り仰ぐ。

小さな町。

何もない町。

誰もいない町。

「……………行くか」

雨の止みそうもない空の下。

ヨウはフードをかぶることもせず、燃えるような赤い髪を濡らしてその町を後にした。

## 14【町と病と虫と罪と：前】

ここは教会。古くて、風通りが良くて。もう随分と人が来てない気がする。

もうそろそろ引き上げ時なのかも知れない。

ギィィィ……………

俺はもたれかかっていた椅子から腰を上げた。小さく吐かれたため息は白く靄をつくり、顔の前から消えていく。

ああ、もう随分とくたびれてしまった。

「もう、誰も来ないんだろうな」

なあ、お前もそう思うだろ？

ステンドグラスから入り込む光に包まれ、俺の視線の先でその棺はただただ静かに横たわっていた。

\*

（随分とさびれた町だな）

ヨウは「はあ」と息をつく。金銭と食料の確保は期待できそうにない。とつとと突き抜けて次の土地へと行くべきだろうかと思きながら考える。

通り過ぎていく景色の中に人の姿はなく、もう誰も住んではないようにも思えた。

（流行病にでもやられたか、土地が駄目になったかだな）

適当な民家に目をつけ、ヨウは何回かノックをする。予想していた通り返事をするものはなく、ヨウは罪悪感の一つもなさそうにその戸を押しした。

軋んだ音はむなしく響く。コツコツと木材の床を叩き、ヨウの靴は無遠慮にキッチンへと向かった。

（水は正常か）

勝手に入り込んできた客人は、勝手に人さまの家の水を飲む。それどころか、喉が潤い水の補給も済むと、次はキッチンになる棚へと手を伸ばし始めた。

「……………ちっ」

食料はすべて空となっていた。ヨウが触れたその先で、動かした缶の脇から「チーチー」と高い音をあげて小さな虫が四方へ散った。ヨウは袖についた虫を忌々しそうに叩きながら呟く。

こいつらの仕業か、と。

さわさわと散った虫達のいたところ、缶の底はたくさん穴が開けられていた。そこには漏れる中身もない。

「やっぱりか……………」

ヨウはあたりを見た。やはりそこにはこの家の主人と思える人影はなく、時間が止まってしまったかのように人が住んでいたころの形を残しただけの室内があった。

(こいつらがいるとなると、確実にこの町には期待できないな)

さっさと次に行くか、とフードを外し、ヨウは外へ出た。

空は今の気分を表しているがごとのグレー。今にも降り出してきそうなそれを見ると、ヨウは不機嫌にはならずにはいられない。見つけた町は廃墟と化している。食事もない。しかも虫だらけ、だ。

(……………くそ)

ヨウは今出た家へと火を放つ。これは彼なりの礼だった。亡き者たちへの弔い。そして、“仇打ち”とでも言えよう。

「チーチー」と鳴く虫は、指先の大ききくらしいかない白い体をしていた。ヨウはこの虫を知っている。自分の故郷の大陸で、時たま姿を見ることがあったのだ。だが、あちらの人々はこの虫には敏感だ。なにしろこちらの大陸に比べると出現率がはるかに高い。二匹だろつと一匹だろつと、姿を見たらすぐに焼き殺していた。手に負えなくなるのだ。こつも増えてしまつと。

(この町のように……………)

ヨウは火のはぜる音を背に道の先へと歩み始める。

歩いている分には普通だ。だが、小さな影、日の当たらない乾燥した場所には“彼ら”がいた。白い身を寄せ合い、小さなコロニーをまだらに作っている。

この土地はたいいていの湿度がある。だから、乾燥した場所を好む彼らにはあまり出会うことがない。だが、この地のように、こちらの大陸にしては幾分か湿度のないような場所となると、こちらの大陸にすんでいる“彼ら”にとっての恰好の逃げ場所となってしまうのかもしれない。湿度を嫌う彼らがこの地に集まり、町を食いつくしてしまったのだ。

とくに民家や蔵などと言った場所には、日の当たらない乾燥した場所がたくさんある。きつと、ここに住んでいた人々は、あの虫に住む場所を奪われてしまったのだろう。

「哀れなもんだな」

ヨウは気持ちのこもっていない声音でぼつりとつぶやいた。

そしてぼつりと、彼の頬に雨粒が舞い降りた。ヨウは「くそ、」とまた毒づく。

民家はもううんざりだった。食べ物があった名残のせいか、あの虫がいたるところに巣くっている。どこかいい場所がないかと視線を走らせた先に見つけたのがあの協会だった。

ギイイイ

錆びついた蝶つがい音が音を上げる。

中はまるで青味が掛ったような空気をしていた。ただ一か所、ステンドグラスを通して入りこむ光に照らされた場所だけは様々な色に飾り立てられ賑やかな雰囲気を作り出している。その賑やかな光とは不釣り合いに置かれた棺はどうも皮肉っぱさを感じて仕方がない。

棺の正面には翼をもった女神の像があった。優しい微笑みをたたえ、肩膝をつき、まるで左手を棺へさしだすかのようなポーズをと

つっていた。右手に握られた槍は地面に突かれ、その尖った刃先を天井へと向けている。

「つまらない場所だ」

ヨウは棺の前に立ち、ステンドグラスに照らされて輝く槍の先を見上げた。

「まっただろ？」

返された声に、旅人はばさりと身構える。

「おいおい、まっただろよ。久々のお客さんに拳をふるうつもりなんてないさ。なあ、旅人さんこっちに来てみないか？ いい眺めだぞ」

ヨウが見上げた槍の先、さらにその上にはステンドグラスを正面に眺められる通路があった。そこに、手すりに体を預け、こちらを見下ろしている青年の姿がある。

ヨウは無言でそれを見上げた後、さらに黙って右手に見える階段を上った。

「やあ、はじめまして」

こけた頬を持ち上げて、青年はよわよわしい笑顔を浮かべた。

ヨウは微笑み返すこともせずに尋ねる。

「あんただけか」

「ああ」

青年はまた手すりへと体を預けた。彼の言葉の通り、確かにここからの眺めは良かった。まっ正面にステンドグラスを構えるこの通路は、下にいた時より幾分か明るく温かい。だが不思議なことに、眺めがいいと言った本人はステンドグラスに背を向け、あの棺をじっと見つめていた。

ヨウも彼にならってそちらを眺める。女神と、棺と、それと多分ここでたき火でもしたのだろう。黒い炭の後と焦げたような床が見えた。

「ずっと、話し相手がほしかったんだよ。聞いてくれないか？」

「話し相手、か。だがあんたの言葉からだ、話し相手というより

むしろ聞き手がほしかったという感じだな」

青年は小さく笑う。

「……………正解。悪いな。積もった話で少し長くなりそうなんだが、聞いてもらえるか？」

ヨウは眼を細める。

「そうだな……………、俺の質問に答える。そしたら聞いてやる」

「俺に答えられる範囲なら、なんなりと」

そうか、と返し、ヨウは少し時間をおいて口を開く。

「さつきも尋ねたが、この町にはもうあんたしかいないのか」

「ああ。そうだ」

となるとやはり、皆虫に町を引き渡して逃げたということだろうか。ヨウの「近くの町村へ避難したか」という呟きに、「いや」と青年は首を振った。そして、悲しげな瞳でじつと棺を見つめる。

「皆死んだよ。流行病さ」

「流行病？　じゃああの虫は」

「ああ。もう奴らを殺す住民もいなくなったからね。人がいなくなつてから勝手に増えたんだよ」

「なるほど」

ヨウは手すりに両腕を組み、その上に顎を乗せた。

「あんたも見ただろ？　この町は奴らが集まりやすい。だから皆、奴らには最善の注意を払っていたんだ。この町に人が栄えていたころは、奴らの居場所も少なかったもんさ」

「あの数だしな。あんた一人じゃ相手にならないってか」

「ああ」

「で、病に死んだ住民の後始末もあんたってわけか」

ヨウのつまらなそうな言葉に、青年の「ああ」という悲しげな返答。

「でも、皆を埋め終わったのも最近なんだ。この教会の裏に、全員分眠っているよ」

「へえ、あんた一人で、か。そりゃ大変だったな」

ちつとも大変でなさそうに、ヨウは臉を半分落として棺を見つめた。

「ああ。けど思ったより楽だったさ。なにしろ皆、もう骨だったからな。余計なものは、全部“彼ら”が食いやがったよ」

「そうか」

その頷き以降、ヨウが口を開く気配はなかった。青年は隣の旅人をちらりと横目に覗き見る。

「旅人さんは、あちらの大陸の人間か？」

静かな沈黙の後、「そうだな」という返答。青年は苦笑いを浮かべた。

「やつぱり。その外見じゃ、こつちの大陸だと苦労するだろう」

「まあな。でも、あつちの大陸でもあんま変わらないさ」

「そうか」と苦笑交じりに返し、青年は頭に浮かんだあの単語を口にせずに飲み込んだ。空気で伝わってきたのだ。この旅人が、あの物語の彼に例えられるのを嫌っているのだと。

青年も旅人も、じつと下の階を見つめたまま口を閉じる。

やがて、ぽつぽつと雨粒が壁をたたく音が目立ち始めてきたころ、青年は静かに小さく切りだした。

「話してもいいか。俺の事、それと………彼女の事を」

ぽつぽつと、ぽつぽつと、雨粒はステンドグラスに降り注ぎ、その影は女神の像と棺へと落とされる。

## 15 【町と病と虫と罪と…後】

\*

病の進行はもうどうにもできなかった。

この町唯一の医者であった彼は、自分の無力さと愚かさをたたった。

「この町の人間を殺した病。それを持ち込んだのは、他でもないこの俺だった。……ある日、知り合いの医者仲間が、良い話があるって手紙をよこしてきたんだ。俺はその内容に興奮したよ。大金が手に入るチャンスだった。まだワクチンの出来ていない病原菌がその医者仲間の町で見つかったらしくてな。そのワクチンの値はともじやないが、俺の一生をかけても手に入らないような額だった。俺はすぐにその病原菌のサンプルを送ってくれとそいつに頼んだ。サンプルは驚くほど早くに送られてきたさ。その医者仲間の『出るだけ早く頼む』っていう手紙と一緒に、な。その手紙の意味を、俺はあまり深く考えていなかったんだ。俺はその後、何度かそいつへ手紙を書いた。だが全て、返事が来ることはなかった。……壊滅していたんだ。あいつの町も。今の、この町と同じように……」。どうやら、俺に初めの手紙を送ってきたころにはもう、あいつの病も末期だったらしい。だから、自分の町の外にいる俺へ助けを求めた。けど、俺も手遅れだった……。気づけばこの町にもあの病が感染していた。俺はワクチンを研究し続けたさ。俺自身の体を実験体にしてな。もう、ネズミを捕まえる様な体力はこの町にはなかった。だから、まだ保証のない薬を他人に投与するのは気がひけたから、俺は自分自身で試し続けたんだ。何回か生きることがあきらめたこともあった。でも、薬は完成した。そのころには、もう、生きている人間は二人しかいなかった……。俺と、俺の大切な人さ」

彼は、彼女を助けた。やがて、彼女の看病も必要なくなった頃は、この町の主導権はあの虫たちのものとなっていた。

\*\*\*

チーチーと、聞きたくない音が聞こえてくる。

彼女は手に取った瓶の全体を確認し、その中を覗き込む。

「ナオシ！ あったわ、まだこれは大丈夫！」

ナオシは苦笑し、彼女の肩にのった虫を払った。

「これで3つめだな。食料探しはこれからおまえに頼もうかな」

「あら、だめよ。どうせさぼりたいだけなんでしょ」

ぷくりと膨らまされた彼女の頬を見て、ナオシはぷつと噴き出した。彼女もそれを見て噴き出す。

くすくす、くすくすと二人で笑いあい、その間だけは生きていることは喜びだと思えていた。

\*\*\*

「けど、やがて、食べ物もそこを尽きた。畑の植物も全部奴らに食いつくされた。新しく種を見つけても、芽をだしてすぐに食いつくされるだけ。人間は雑食だと言うが、さすがにあの虫を食べようとは思えなかったしな」

「ここを出ようとは思わなかったのか？」

ヨウの問いに、青年は力なく首を振った。

「彼女が、いやだと言ったんだ」

\*\*\*

「嫌よ！！ ここは私たちの故郷でしょ？！ 諦めるなんて無理、

「……ねえ、まだ間に合うわよ、二人で何とかしましょ？」

「無理だ。たった二人じゃ、あの虫を全部追い払うなんて出来やしない」

「じゃあ、じゃあ助けを呼びましょう？ 一緒に虫退治してくれる人を、他の町から呼んでくればいいのよ！」

「一番近い町でも、車で3週間はかかる。そんな場所に行こうなんてお人よし、いたとしても2〜3人だろ？ それだけじゃ足りなすぎる。お前もわかってるはずだ。これ以上ここにはいられない。早いとこ俺らが出て行けば済むことなんだ！」

「なんで?! あなたっていつもそう! すぐにそうやって弱音を吐くの。まだ何もしてないのに、そうやって……。反対することなら簡単でしょ?! もっと、もっと一生懸命考えれば、きつと何かいい手が……」

「この土地にこだわる必要なんてないだろ!!」

\*\*\*

「ちよつとした、事故、だったのかな……」

青年は力のない笑顔を浮かべ、両手で頭を抱えた。

「いつもの小さな喧嘩だと思ってた。少し言い合いをして、少し別れて、顔を合わせてみたら元通り。いつもならそうだった。でも、あの日は……。運が、悪かっただけ……。なんだ。食べ物も全く見つからず、もうずいぶんと水以外口にしていなかった。虫も増えていく一方。お互いにいらいらしていた」

小さな口喧嘩は、いつの間にか取っ組み合いになっていた。

彼女に服をつかまれた青年は、思わず本気で相手を突き飛ばしてしまったのだ。お互いにボロボロだった。体力も精神力も、減るだけ減ってまるでぼろ雑巾だった。

「ダンって、すごい音がして……。彼女は、動かなかった……。変な冗談とかそんなんじゃないやなくて、彼女はそれ以来ずっと、動かな

くなくなった」

熱を失っていく体。光を吸収しつぱなしの瞳孔。

どうしたらいいか分からず、ただ、寂しさを間際わらすように動かない彼女を抱いていた。自分の熱でまた温まって、蘇ってくれるんじゃないかと馬鹿な空想を思い描いて。

だが翌朝目覚めてみれば、空しく自分の隣に転がった一人分の亡骸があるばかり。

青年はもう、それを彼女として見ることもできなくなっていた。

「そこに、数匹の虫が現れたんだ。彼女の皮膚にへばりついて、チーチー鳴いて……………」

ヨウは何も言わなかった。ただ、下にある棺を見つめ、目を細める。

青年はふらりと向きを変え、ステンドグラスを振り仰いだ。雨粒をたたく音が絶え間なく室内に響く。だが、中よりも明るい外の光は、ステンドグラスを通して淡い灯りとなり薄暗い室内を照らしだす。

笑っていた。

青年はその鮮やかな色彩に照らされ、笑っていた。

「……………美味そうに見えたんだ」

ヨウは向きを変えることなく、ステンドグラスに背を向ける。手すりに乗せて組んだ腕の中、わずかに鼻をくすぐるほこり臭さに眉を寄せる。

「俺は、何よりも今満たされたいと思った。目の前にあるものが何であろうと、その欲求に逆らうことができなかった。祈ったんだ。形だけでもと思って。この教会に彼女を運び込み、胸の前に手を合わせた。……………そしてすぐ火をつけた。彼女の体から服を脱がせ、その服を雑巾代りにして彼女の体をきれいに洗って。ほっつておくとすぐに虫が寄ってくるから、あまり火からは遠ざけないようにしておいておいたんだ」

下に見える床の焦げ跡。そこに、見えるはずのない光景が浮かび

上がる。

「始めは手が震えていた。でも、包丁を彼女の肩に突き立てると、もう俺の頭は食欲という動物的な欲求でいっぱいになった。一日目は両腕。次の日は片足。その次の日も片足。そして胸を腐る前に焼いて、最後に頭が残った。どうしようかと思ったださ。もう、食べられるか食べられないかでしか判断できなかった俺は、それを置いておくことにした。食べられそうにない。そう思ったからだ。そして、どうだ。3日も経ったら、腐る前にそれは骨になってたよ。全部、奴らが食いやがったんだ。髪と骨を残して、……………結局彼女は、他の奴らと同じ末路をたどることになった」

でも、俺は生きている。

彼は両腕を広げた。ステンドグラスから入り込む光を一身に受け止めようとしているかのように、大きく、大きく腕を拡げて微笑んでいた。

ヨウは黙って下の階を見下ろす。

「話……………聞いてくれてありがとうよ」

「いや。暇つぶしにはなった」

「そうか。そりゃよかった」

青年は痩せこけた体を持ち上げ、手すりの上に座り込む。眩しそうに光を見つめて、心からの笑顔を浮かべて。

「ずっと、待ってたんだ。誰か来ないかって……………俺が何をしたか。彼女がどうなったか……………聞いて、ほしかった……………」

「罪悪感か」

「いや。もうそんなものどっくに忘れたよ。何かを思うのも疲れた。何かを悲しむのも、悔やむのも、もう……………」

「疲れすぎて、ここから出る気も起きないって、か」

「ああ、そうかもしれない」

もう、引き際なんだよな。きつと……………」

そう聞こえた。

ヨウが顔を上げると、青年が天井へと手を伸ばしているところだった。手を伸ばし、そのまま後ろへと倒れこむように、手すりの向こう側へと体を落とす瞬間。

その真下で待つのは、女神の持つ槍。

鮮やかで柔らかな光はその光景をやけにきれいに映し出し、青年を、女神を、棺を、全てをまるで芸術作品にでもでっち上げようとしているかのように照らしていた。

\*

コツ、コツ、とあいつの靴がコンクリートの地面に音を上げる。

俺の亡骸は静かに、その音に首を向けることもなく、このよくある廃墟と化した教会の天井を見上げ笑っていた。

薄暗い室内をステンドグラスが鮮やかに彩る。

胸を貫いた槍が、外から入り込む光にきらきらと輝いていた。

「お前は、これで満足か？」

真つ赤な英雄のそいつは無表情に俺へ尋ねた。

俺の亡骸は、ただほほ笑む。

\*

ザアアアア……………

雨が降っていた。

16【治せる病：村の病】（前書き）

少しのほんとした話かもしれませんが。

14、15、16と続きまた病の話ですが、あきれることなく見ていただけると幸いです。

では。

## 16【治せる病：村の病】

村の近く、死骸をみつけた。

薄汚い布の下に見える、虫のわいた腐臭物。ちらちらと見える骨を、蛆がのろのろとたどっていた。

獣の食い散らかしを、さらに食い散らかす虫たち。

「悪いけど、今は他人事ひとごとと思わせてもらうよ」

カイは、運の悪い誰かへ手を合わせることもなくその場を後にした。

\*

ここは前の街から随分と離れた場所にある森。

カイ自身、自分がもう何日間野宿をしているのかわからなくなっていた頃だった。

だが、こちらに村があると道中の商人に聞いたのは確か。カイはただ、ひたすらにその情報を信じて歩き続けていた。もしもその情報が嘘だったとしても、歩いていけばいずれどこかにはたどり着くだろう、と、軽いながら間違っではない考えからの結果でもあった。

頼りは連れの獣だ。獣は匂いに敏感だ。今は村からするであろう匂いをかぎ分けてもらってはいるが、本当なら真の目的物である“ヨウ”の匂いを追ってもらっていた。しかしどういうわけか、前の街でその匂いを失ってしまった。そのおかげで、今は一つの村を頼りにカイは彷徨うはめになったわけだ。野垂れ死にはごめんだと言い聞かせながら、諦めず必死に歩いてきた甲斐があったというものだろう。

村がこの奥にあるという確信はあるのだ。森の中、カイは少し地形のせり上がった場所から小さな家々の集まりを見た。そのおかげ

で、今は何の心配もすることなく森を突き進むことができています。それに獣の鼻は確かだ。彼がこちらだというのだから、それに間違いない。

(運がいいんだか悪いんだか)

カイは自分の今の状況に苦笑して、進む足を緩めることなく歩きつづけた。

\*

しばらくすると、木々が開け低い丘の向こうに小さく村が見えた。低い丘は簡単に越すことができ、カイの足は喜びからかしばし歩調をあげていた。本人はそれに気付いているのかいないのか。取りあえず“暖かい食事”と“ゆっくり休める”という期待から、瞳はキラキラと輝き、あつという間に目的のその地へとたどり着く。

カイは到着地点で足を止めるとじっくりとあたりを見回した。

低く簡素な柵に囲まれた田舎風な村が目の前に広がる。家々のほとんどが木材で作られており、たまに簡単な土が塗りつけてある。白と茶色で構成されたようなその風景は、なんともどかなものだった。

(……………誰も……………居ないな。よし、)

カイは村柵を跨ぎ、中へと入る。入口がどこかにあるのだろうか、回り込んで探すのも面倒だった。

「まずは宿をさがすか」

罪悪感の欠片もないカイの言葉に、隣を歩く獣は「はっはっは」と舌を出すのみ。

しばらくも歩かないうちに子供と出会った。みたところ5つ位だろう。カイは自分の腹位の高さにある子供の目をみて「こんにちは」と会釈した。

訪問者の挨拶に、出会った子供はびたりと動きを止める。まるで

小動物だ。

カイもどうしたものかと動きを止める。

獣はその横で尾を振って静止した二人を眺めていた。

「……………あ、ああ、あ……」

やがて子供の口はあわあわと動かし出す。その眼はだんだんと大きく見開かれ、視線は明らかにカイの髪を見つめていた。

「……………?」

カイは何が何だかで首をかしいでいたが、やがて何かに気づき、自分で自分の頭を触ってはっとした。

フードをかぶっていなかったのだ。

つい忘れてしまった、といったらそれで終わりだろう。

フードのないそこには、水色の髪がさらさらと日の光を浴びて輝いていた。

なにしろ“水色の髪”は忌み物の一つだ。それをよく知らない場所ですらとさらすなど、危険だと言いたいようがない。もしもこの村が物語への信仰の強い場所だとしたらなおさらだ。

(……………~~~~~)

カイは表情にはあまり出さないものの自分の失態を呪った。

子どもは微動だもしない。

(いまさら隠したって誤魔化せるはずないか……………)

水色がどうしようかと困っていたそこへ、すぐそばの家から一人の女性が出てきた。女性は子供の姿をとらえるなり、腰に手を当て、あきれた様子で近づいてくる。

カイも子供も、それにまったく気づいてはいなかったが、二人を外目から傍観していた獣は、第三者の登場にちゃんと気づいていた。その眼はくりくりと動き、カイと子供、そして現れた女を順々に見詰めていた。

「こら、レータ！ お使いに行つてからどれだけかかってんだい！」

びくり、と肩を揺らしたのは子供だけではない。カイもまた一緒に驚いていた。

“お使い”という言葉に、出てきた街の名残で反応してしまっただの。なにしろ使いつぱしりが故郷にいた時の彼女の仕事だった。条件反射とは怖いものだなとカイは苦笑する。

子どもは我に返った様子で、後ろに立つ母親へと駆けよるとその服をギュツと握った。

「か、母ちゃん!!! 化け物だ! ほら、見ろよ! よく婆ちゃんか話してた、水色の……………って!!!」

「何言ってるんだいお前は! 失礼な子だねえ」  
「え……………?」

予想外の母親の反応に、カイは呆けて目を丸くした。さらに、母親に相手にされないまでか、頭にげんこつを落とされた子供を見て、結局は笑うしかなくなっていた。

笑い出す訪問者に、子供は「失礼なやつ」とこぼしたが、彼の母が「失礼なのはお前だろう」とその小さな頬をつまみあげた。子供は涙目で「痛ててて……………!!!」と叫び声をあげる。

「お前はさつさと買い物に行っておいで」

母は子供の頬から手を離すと、ぴしゃりとそういい子供を押した。背を押され、子供はしぶしぶと買い物かごを持って去っていく。片手の添えられた頬はわずかながら赤く腫れている様子だった。

(ご愁傷様)

カイはくすくすと笑う。

母親は子供がちゃんとお使いに行ったことを確認すると、目の前のうつすらと目に涙を浮かべて笑っている旅人へと向かいなおった。

「こんにちは。外の人だね」

その言葉に、カイは涙をぬぐって答える。

「……………はい。偶然この村に着いたもので」

女性はふくよかなその手をカイへと差し出し、「レイシャだよ、よろしくね」と言った。カイは一瞬ためらうものの、その手に応え自分の手を差し出す。

「カイです……………はじめまして」

レイシヤは嬉しそうに会の手を握った。

「カイさんか。それにしても、あの子、本当に失礼だったわね。ごめんなさい」

頬に手を当て困った様子の婦人に、カイは「いえ、別に………」と苦笑した。実際、フードをつけていなかったのは自分がいけないわけで、ああいった反応にはもう慣れていた。

(今更「化け物」って言葉にいちいち傷ついてもいられないしな) そこに浮かぶのはやはり苦笑だった。

「？」

興味深そうに自分の顔を覗き込んでいたレイシヤに気づき、カイは驚き交じりで半歩下がる。

「それにしても珍しいね」

「……………えっと、は、はあ？」

「水色。……………きれいな色じゃないか。この村にはない色だよ」

こんなことを旅にでてから言われたのは初めてだった。カイはしどろもどろに「……………ありがとうございます」と言い、少し落ち着いてからちゃんとお礼は言葉になっていたのだろうかと不安になった。

(ほめられるの、私慣れてないのか)

今この場面で気付かされた自分の実態。カイは少し照れながら覗きこんでくるレイシヤから瞳をそらした。

その反応にレイシヤはクスリとする。

「そつだ。宿を探してないかい？ 是非私の宿に泊まっておゆきよ。ちようど今、どの部屋もすっからかんだからね。……………安くしとくよっ」

「……………安く」

水色は喜びに目を輝かせた。

「本当ですか?!」

そのあまりにも正直な反応に、レイシヤは盛大に嘖き出す。

「え、あ、あの……………」

「い、いや、いいんだよ。すまないね。別に馬鹿にしてるわけじゃないから、気を悪くしないでくれるかい」

レイシャの返答は笑い交じりだった。

カイは自分の発言に恥じたように視線を右下へと落とし頭を掻くが、隣の獣はやはり楽しそうに尾を振るばかり。

その一人と一匹を交互に見て、「本当に珍しいお客さんだ」とレイシャは面白そうに感想を漏らした。

何しろ、「狼をつれた水色の髪の少女」だ。

こんな客は今までに一度も迎えたことがない、と女主人はつきつきとした気分で客人をわが宿へと向かい入れた。

\*

「随分と静かな村ですね」

カイはレイシャに案内された部屋に荷物を置き終えると、普段食堂として使われているであろうカウンターに腰掛けた。

この宿の主人であるレイシャはコップに水を注ぎ旅の客人の前へと静かに置いた。

「そうだねえ。前はもつとにぎやかだったんだよ。でもねえ、皆もう、体が利かなくなってるんだ」

「利かなくなった？」

言葉の意を解せず、カイは顔を上げる。そこにはレイシャの困ったような顔があった。

何か申し訳なさそうな笑顔を浮かべ、袖をまくる。

「汚いものを見せるようで悪いんだがね。ほら、みんなこんな調子さ」

そこには赤くカサついた“ウロコ”があった。

「こんな調子、って」

カイは口に含んでいた水をこくりと飲み込む。

「これは何ですか」

今まで見てきた人間の皮膚とは全く違うそれに、水色の眼は丸く見開かれていた。だがそこには、異様な光景を気持ち悪がつたり畏怖するような色はない。ただ、初めて見る物に驚き、少しの好奇心が垣間見える程度だった。

レイシヤはその正直な瞳に小さく微笑む。

「皮膚がね、はじめは爛ただれたんだ」

「爛れた？」

「ああ。始めはみんな、ただの被れだと思っていた。けどね、そのうち爛れた皮膚はかたくなって分厚いかさぶたみたいになった。もしたら、硬くなった皮膚は輝ひびが入り、割れはじめてこの様子」

レイシヤは肩をすくめる。

「気づいたころには村の人間ほとんどにこの症状が出ていた。それからようやくよく、これが何かの病気だと気づいたんだ」

「病気、つて」

「もう死人も出ているんだよ。体中がこんなになって、ろくに身動きが取れなくなってるね。輝から血がにじみ出て、そりゃもう苦しそうな最後だった」

「……………そう、なんですか」

カイは視線を下げ、水を口へと運ぶ。

そして、「そういえば、」と口を開き、また顔をあげた。

「その言い方だと、レイシヤさんはその場において、その人を看取っていたみたいですね？」

その問い混じりの言葉に、笑い皺の入った口元が一瞬歪んだ。水色の瞳が目にしたのは、なんとも悲しげな微笑み。

「ただいまー」

ガチャリとドアが開かれる。

「……………ああ、お帰りレータ。籠は奥に置いてもらえるかい」  
「はい」

面倒くさげに返事をし、先ほどの子供が奥の部屋へと歩いて行く。それを見送り、レイシヤは蚊帳の外にいたカイへと向き直る。細

められた目彼女の瞳が、カイにはやけに悲しげに映った。

「……………その死んだって人は、私の夫でね。つまり、あの子の父親なんだよ」

ことりと、空になったコップがテーブルの木面を叩く。

「……………そうですか」

カイには、それ以外どう返したらいいのかわからなかった。

\*

部屋に戻ると、そこにはベットに伏せをする獣の姿があった。そして、予想外にもあの子供の姿も。

カイが戻ってきたことに気づくと、子供はあわてた様子で手を引っ込めて背中に隠した。その好奇心の塊のような瞳が、母のレイシヤにそっくりだと水色は思った。

「……………つわあ！ い、いや。別に俺、こいつに触ろうとしたわけじゃ、」

「触りたかったのか？」

「……………うっ」

嘘の下手な少年に、カイはくつくつと笑った。

「触りたいなら触ってみればいい。私は何も言わないよ」

そういつて、視界の端に少年と獣を眺めながら、カイは自分の荷物へと手を伸ばした。

その一方で少年は獣へと手を伸ばす。

自分と同じくらいの大きさがあるであろう生き物へよく手を伸ばせるなど、カイは半ば感心していた。そして、そういえば、と思います。自分があの獣と出会ったのは今の少年と同じくらいの年頃だったのだろうか。

(懐かしいな)

水色がくすりとはほほ笑むその手前。そおーっとのばされた手を感じて、獣は耳を動かし、うっすらと目を開く。

その茶色い視線と合っつてか、少年はぴたりと動きを止めた。獣は動かない。吠えもせず、唸りもせず。

安全であることを確認し、少年はさらに獣との距離を縮めた。

カイは荷物から薄手の上着を取り出し、それを羽織る。いつも着ているコートと同じような色をしている物だ。袖が長く、だがその丈は短い。もちろんフードは付いており、それは頭をすっぽりと隠してしまうほど深めのものとなっていた。

「さてと、」と振り返ったその先で、少年と獣の状況は面白い事になっていった。

少年があおむけに倒れこみ、その上で獣が牙をむいて唸っているのだ。

少年は今にも泣きそうな顔をしている。だが、獣から目を離す事が出来ないのだろう。

じつと見つめあっている二人の横で、カイは一生懸命笑い声を抑え込んでいた。目にはうつつすらと涙も浮かんでいる。

ようやく獣に解放され、少年はどくどくと高鳴る心臓を抑えてベツドの上に座り込んでいた。腰が抜けているようにも見える。

「そ、そいつ、俺を食おうとした……………」

「違う。ちよつとからかっただけさ」

腹を押えてくつくつと笑う水色へ、少年はまだ頭が呆然としているのかただ見開くばかりの黒い瞳を向ける。その愕然とした表情は、まるで地獄でもみたかのようにだった。

「悪かったよ」

カイは椅子に腰掛け、小さく詫びを入れた。だがやはりその表情は笑ったままだ。

少年の黒い瞳は椅子に座る水色から、その足もとに寝そべる獣へと移される。

「大丈夫。こいつは人を襲わない」

カイの言葉に、少年は我ここにあらずといった様子でうなずいた。

まだ放心状態なのだろうか。カイはまったくすすくと笑い、さっきの好奇心はどこへやら、と呆れた。

「で、お前、名前は？」

少し時間をおいたのち、カイは少年が落ち着いたことを確認すると尋ねた。

「レータ」

「そうか。私はカイだ」

レータは「カイ」と口をひらく。

「カイは？ その髪は病気か？ それとも化け物の呪いか？」

「呪いって……………」

真面目に言っているのか、それとも冗談で言っているのだろうか。とりあえずカイは苦笑する。

「生まれつきだよ。病気でもないし」

「生まれつきって、じゃあ、やっぱりカイは化け物の子なのか？」

レータは身を乗り出す。その瞳は真剣だった。

(……………冗談、じゃないのか)

「お前……………」

水色は呆れて頭を掻いた。

身を乗り出した瞬間獣が軽く見動きをしたので、レータは驚き、危なくベッドから落ちるところだった。

獣がレータの気を引いてくれたおかげで、化け物の話から話題をそらす事が簡単にできた。「それよりも」と持ち出された話。それは、この村に関する事。特に、先ほどレイシャから聞いた「病気」とやらの事だ。

話をする中でカイはもう気づいていた。レータも、その病気とやらに感染していることに。首筋に見えるのだ。背中広がっているであろう、赤くカサついた皮膚の末端が。

「じゃあ、誰が一番に発症したかとかはわからないのか」

「うん」

カイの問いにレータはうなずく。

「気付いたらみんななつてたんだ。それから、全然健康だった人までこの症状が現れ始めて。場所はみんなバラバラだけど、運が悪く足とか腕の関節部分がこうなっちゃった人たちは大変だよ。今までしていたことができなくなっちゃうんだから」

それは歩いたり、書いたりなど、日常生活に支障を来しているということだろう。

ウロコのようにひび割れて別れた皮膚と皮膚の間。無理に動かそうとすると簡単に血がにじむ。大人子供関係なく発症しだしたそれは、もうこの村の間人すべてが手にかかってしまったらしい。

カイが軽く考えに浸っていると、いつの間にかレータがベッドから降り、まん前に立っていた。

獣からはある程度に距離をとっているのがなんとも面白い。

「なあ」

まじめな様子の少年へ、水色はいつも通りの瞳を向ける。

「なあ、カイ。この病気、治せないか？俺、もう嫌なんだ。みんなつらそうにしてる。母ちゃんも、今じゃ自分で料理さえできなくなって。父ちゃんだって……。なあ、カイ……。ってうわあ！……！」

レータが顔をあげると、正面の椅子には誰も座ってなかった。そしてその代り、自分のまん前で獣が尾座りをしていることに気づき尻餅をつく。

「……………いつてえー。くそ。なあ、カイ」

ドアの前に立つ水色を見つけ、レータは声を上げる。

水色は戸を押し、この部屋から出ていこうとしていた。それを追って、獣も尾を振りドアへと向かう。

「なあ、カイは旅人だろ？色んなものを見ているんだろ？この病気、治せないか？じゃなきゃ、他の、もっと大きな街にいつて薬を貰ってくるとか、」

駆け寄ってくる少年へ、カイはゆっくり振り向き、目を細めた。

「私はさ、医者じゃないんだ。ただ旅をしているだけ。しかも、レイシャさんとかから見たら、まだ成人もしてない子供だ」

「でも、そんなの関係な……」

頭に手を置かれ、レータは言葉を失う。見上げる先にあったその瞳は、まるでこの村の状況になど興味はなく、「自分には関係ない」と言っているかのような憐みを含んだ冷めた色だった。

水色は少年の頭から手をどけると、ふっと視線を外し階段を下りて行く。

少年は水色の残像を目で追って自分の頭に手を置いた。確かに、今しがた置かれた手は、父のものとは比べ物にならないくらい小さく、母の持つような温かみもなかった。

……だが、彼はすがりたかったのだ。

何でも、誰でもいいから。

前に来てくれた旅人は、快く助けしてくれるといった。なのに彼はそのままどこかへ消えてしまった。そして、そこにカイが現れた。レータは、もう彼女しかいないと思った。

「……ちょっと、まってよ、カイ！」

二階の手すりから見下ろすと、カイがレイシャに食事のできる店はないかと尋ねているところだった。

説明を受け、外に出て行く水色。彼はそれを追って外に飛び出た。レイシャが、「おや、どうしたんだい慌てて」と首をかしげているのにも気付かず、彼は必死に水色を追って引きとめた。

「頼む！ なんでもいいんだ！ その狼にお使いに行かせることだつてできるだろ?!」

服の裾をつかむ少年を見下ろし、水色はため息をつく。

一瞬何かを口にしようとした彼女だが、少年の瞳を見て言葉を飲み込み唇を軽く噛んだ。

必死な子供の瞳。助けられるものなら助けたい。だが、自分を彼らを助けられるという確信はない。そして、その期待に応えられる

ほどの経験も自分にはないことを知っていた。だから、安請け合いはしたくなかった。誰だって、強い期待をしていたものに裏切られるのは本当にショックなことなのだから。

無情になれ。

頭の中のその一言で、水色はその瞳から感情を消す。

少年は少し驚いたように、服をつかむ手を緩めた。

かわいた風がよわよわしく吹く。

「私は外の人間なんだ。この村の問題に、かかわる気はないよ。……ただ、自分がゆっくり休んで、次の旅への準備ができればそれでいいんだ」

きつぱりと言いきる水色。レータはその両手を、自分の脇へ力なく下らりと下げた。

獣は茶色い瞳を水色へ向ける。その先で、彼女が唇を小さくかむのが見えた。獣の瞳は優しく細められる。

カイが道の先へ行こうと顔をあげると、偶然居合わせてしまったのか、同年代くらいの少年が黙って立ちつくしていた。15、……いや、一つ上だとして16。

自分より些か背が高いその少年の頬にもウロコを見つけ、水色は眼をそらす。

(……………お腹、空いたな)

気分を無理やり変えるかの様に内心でつぶやき、カイはレイシャに教えられた食堂へと、ゆっくり歩き行く。

\*

「私は外の人間だ。この村の問題に、かかわる気はないよ……………」

その言葉に少年は足を止めた。

黒い短髪に、黒い瞳。カイより少し背の高い彼は、ウロコのカサつく頬をびくりと動かした。視線の先で、見慣れた子供がショック

を受けたように立ち呆けていた。

そして、彼から逃げるように自分の横を通り過ぎて行った人間。見慣れない顔と、見慣れない水色の髪。

(旅人か?)

彼は、“彼”なのか“彼女”なのかよくわからない人物をかるく視線で追う。

『私は外の人間だ。この村の問題に、かかわる気はないよ』

先ほど聞こえてきた言葉が頭にこだました。

(……………それでいい)

頬にウロコを持つ少年は、小さく口の両端を吊り上げる。

## 17【治せる病：サジ】

「ウリコ……………」

子どもと呼ばれ、少年は視線を水色から外した。

「レータ。どうしたんだ」

眼を涙で潤ましている子供を見下ろし、ウリコと呼ばれた少年が尋ねる。

レータは泣きはしなかったが、じつと地面を見つめたまま、顔をあげようとはしなかった。

「俺達、ずっと……………ずっと、このままなのかな……………」

小さな少年の言葉に、ウリコが答えることはなかった。

ただやはり、水色と同じように、彼は小さな少年の頭に手を乗せ、その柔らかい髪を優しく撫でてやるのみだった。

\*

(ウロコ、ウロコ、ウロコ、ウロコ……………)

カイは歩きながら顎に片手を据える。

何かを思い出そうとしている彼女の顔を、下から興味深そうに獣が覗きこんでいた。

一人と一匹が通り過ぎて行った道の端、井戸端会議にいそしんでいた奥様方はひそひそと話に花を咲かせる。その視線の先は、やはりカイと獣だ。

念のためにとフードをかぶっていたが、こうも人の出入りの少ない村だと、フードをかぶっていようがいまいが、外の人間は目につくらしい。それどころか、真昼間から顔を隠し、しかも狼を引き連れた人間となると、どう見ても怪しいとしか思われなかった。

カイが食堂の戸を押すと、中から包丁を持った亭主が胡乱気な視

線を向けてきた。

「なんだお前？」

そのドスの聞いた問いに、「感じの悪い店主だな」とカイは呆れた。だが、一拍間を置き「もしや」と思い当たったのは頭にかぶせたフードだった。

カイはばさりとその深く頭を覆った布をおろす。

(予想的中、か?)

カイの見上げる先で、警戒心の強そうな亭主の視線は和らげられた。

「なんだ。子供か」

亭主はぼりぼりと頭を掻き、警戒とは違う好奇心の瞳をカイへと向ける。

「っへえー、珍しい客もあつたもんだ。坊主、旅人か？」

「坊主」と呼ばれ、カイは苦笑した。

「はい。まあ。レイシャさんのところで、二三日お世話になります」「ほお〜。そうかそうか。で、ここに来たってこたあ俺の飯を食いに來たってことだな」

なるほどなるほど、と亭主は頷く。

「レイシャの紹介つてことで安くしといてやる。たんと食いな！」その活気のいい言葉に、カイはほうつと安堵の息をつき、示された席へと腰をおろした。

レイシャといいこの主人といい、こここの大人たちは水色の髪を珍しい程度にしか思わないらしい。カイにとっては逆にそちらの方が珍しかった。

そして、自分の生まれた村を思い出し、考える。

もしも自分の生まれた地がここだったなら、いったい今頃、自分はどんな人生を送っていたのだろうか、と。それなりに友達ができ、それなりに親に愛され、それなりに近所の大人たちと挨拶を交わす。きつと、平凡で、温かくて……

(何考えてるんだ、私)

つまらない思想にふけていた自分に気づき、カイは苦笑を浮かべた。

「さて、何が食いたい？」

テーブルを拭き終えた亭主が、にんまりとした笑顔を浮かべカイへ訪ねる。

カイは「ああ、そうだった」と内心でぼやく。

「何でも。あ、でも、安いと助かります」

その言葉に「よし、まかせな」と胸を叩く亭主。カイはその人のいい亭主に「よろしくお願いします」と嬉しそうな笑顔を向ける。

そしてふと見た先に、亭主の後ろ、カウンターの奥、少し開けられた扉から何冊か本が並んだ棚を見つけた。

(……………本、……………本、そうか！)

前に故郷の町で、親友が読んでいた本のことを思い出したのだ。

亭主は食事の準備に取り掛かろうと袖をまくり去っていく。

カイは目の前に置かれたコップにも気付かず、その奥に見える数冊の本を眺め、記憶をたどった。

そう。偶然にも、カイは本で見たことがあるのだ。

みたことがある？ 何を？ どれを？

それは他の何物でもない、この村を侵す病の正体を、だ。

そして、治す方法も偶然ながら覚えていた。

(……………卑屈な話だな)

『私は外の人間だ。この村の問題に、かかわる気はない』

自分の言葉が鼓膜を叩く。

カイは自分を嘲るように口の端を吊り上げた。

\*

「あいよ！」と景気よく出された食事は、本当に安いのだろうか  
と疑問に思うものだった。量は丁度いい物の、肉やら野菜やら、少し奮発してあるように見える。

「えっと、これ……………」

(……………本当に安いのかなあ)

カイの不安げな視線を読み上げてか、亭主は「安心しな」と笑った。

水色はこうい場合何を言ったらいいのかわからなかったが、食事を見て、もう一度亭主を見上げうれしそうに笑む。

「ありがとうございます」

その言葉に、亭主もうれしそうに笑って鼻を掻いた。

食事をしながら、カイは思い出していた。

植物の本をたくさん持っていた友人。そして、それとともに置かれた大きく分厚い“虫”の本。そこに、このウロコのような皮膚が黒白の挿絵とともに記されていたのだ。

『ヤドリウシ』

本にはそう書かれていた。曖昧な記憶であまり自信はないが、挿絵にあった蝸牛カタツムリのような虫と、その虫の背負った貝殻とは似ても似つかない、なんともグロテスクな肉片のようなものとは、頭にしっかり残っていた。

(これはどうしたらいいんだ?)

手を出すべきか出さまいか。カイは悩んで食事の手を止める。

「あれ、お客さん?」

珍しいね。という初めて聞く声に顔をあげると、奥の部屋からひよこりと顔を出した同年代位の少年がいた。

少し渋い、緑の髪をした少年だ。先ほどすれ違った、頬にウロコのある少年と同じくらしい背丈をしている。

「おお、サジ。どうした。まさかもう借りた本を読み終わったんじゃないーだろうな」

亭主が少年へ声をかける。

亭主の言葉に「正解」と答え、サジと呼ばれた少年は両手で二冊四冊の本を抱え部屋から出てきた。

彼はカウンター越しでカイの正面に立つと、重たそうな本をどし

りと置いて首をかしく。

「この村の人じゃないね」

少年の言葉に、亭主が答えた。

「ああ。レイシャの宿に泊ってるそうだ」

泊まってるといつても、まだ今日来たばかりなんだけどな、とカイは内心呟いた。だが口にはせず、いつの間にか止まっていた食事を思い出し再開する。

「そついやサジ、お前と同じくらいじゃないか？ ん？ ……おつと、でも見たとこ一個二個下か？ なあ坊主、年は幾つだ？」

「え？ と、歳？」

カイはうーんと首をひねると、曖昧に「……………十、五？」と答えた。何しろ自分の誕生日を知らないのだから仕方がない。もしかしたら14かもしれないし16かも知れないのだ。

故郷の親友が気になり、以前調べてくれたことがあったのだが、結果的にはあまりしつかりとした裏付けにはならなかった。

『まあ、丁度いいですし、誕生日も私と同じ日ってことにしましようか』

友の柔らかい微笑みが蘇る。

「15なら俺より一個下だね」

「え？ あ、うん」

サジの気の良さそうな声に引き戻され、カイは話についていけない頭で呆然と頷いた。

「俺はサジ、お客さん名前は？」

「カイ」

「そつ。カイ、よろしく」

優しいサジの態度は、レイシャや亭主同様とてもなじみやすいものだった。やましい商人や人売りなどは全く似付かないそれを見て、カイは心の底から安心できていて自分を感じた。

「カイ、か。満足いくまでゆつくりしてけ」と言い残し、亭主は用事があるのかその場所を離れた。

サジは奥へ下がる亭主を盗み見て、コソリと口に手をあて耳打ちする。

「カイ、君、坊主じゃないよね」

この言葉にカイは苦笑した。親しみやすい人間とはどこにでもいるものなんだな、とサジを見て思う。

「うん。まあ。……でも今は坊主のままでもいいよ」

カイはカウンターに身を乗り出した少年を見上げた。そこに、渋い緑の髪がかかった首筋が目に入る。

(……ここにも、か)

一瞬カイの瞳から表情が消える。目の前で笑う少年の首ものとも、あの鱗を見つけたのだ。それは赤く腫れ上がり、どくどくと小さく脈打っていた。

食事の最中だから、というわけではない。だが、不思議とそのうろこのような皮膚はカイに不快な気持ちを思い出させる。

どうでもいいはずなのだ。通り過ぎていく地の、たった一つでしかないこの村など。

『私は外の間人だ。この村の問題に、かかわる気はない』  
他でもない自分の言葉。

(ああ、わかってるよ)

誰に言うでもない。カイは手元へと視線を落とす。

だあん！ と突然店内に音が響いた。

記憶の中の脈打つウロコにとらわれていたカイは、乱暴に開かれたドアの音にどきりと肩を揺らした。

「いらつしゃ、……なんだ、ウロコか」

「なんだ」という言葉にウリコという少年は「ふん」と鼻を鳴らす。

「なんだじゃねーだろ。お前、約束の時間忘れたか？」

「え？ あ！ もうそんな時間か。ごめん、忘れてた」

「……はあ?! お前なあ、」

「いい加減にしるよ」とため息をつく少年。カイは彼の顔に見覚

えがあった。

確かここに来る前、レータと別れた時に、偶然にも道ですれ違ったのだ。頬にへばりつくように出来たウロコは印象的だ。たぶん記憶の中の彼と今日の前にいる彼は同一人物だろう。

観察するようなカイの視線に気づくと、彼は目つきを変え、まるで憎い敵でも前にしたかのように彼女を睨み据えた。

(……………目付悪)

人のことを言えないであろうに、カイは呆然と他人事のように内心で漏らす。

もしかして、先ほどのレータとのやり取りを見られていたのだろうか？

(だから睨まれてるのか？……………まさか、こいつも私に病を治せとか言い出すきじゃ)

冗談でだした自分の考えに、カイは自分でくすりと笑った。

(んなわけないか)

あくまでも外見からの印象でしかないが、カイには眼の前の少年が、赤の他人にそんな重大な問題を任せるような人間には見えなかった。

だが、だとしたらなぜ彼はこんな敵意のこもった視線を自分へ向けるのだろうか。

(さっぱりだな)

カイには見当もつかない。そうして彼女が見上げた先、ウリコという少年は不愉快そうに視線を返す。

「……………おい、行こうぜ」

ウリコはサジの持つ本をいくつか取り上げ戸を押しした。頼んでもいないのに本をもって行ってしまふ友人の背を、サジは慌てて追いかける。

「またね、カイ」

サジの出て行った後、扉はしばらくギイギイと音をたてて揺れていた。やがてその音が止もうかと思われたとき、目付の悪い少年が

一人で食堂へと戻ってきた。

彼は戸を押し中に入ると、奥まで進み出ることもなくその場で足を止めた。そして、たった一人しかいない客人へ視線を向けたかと思つと、抑えた声音で用件を告げる。

「この村の事情に、首を突っ込まない方がいい」

「……………で、え。……………は？」

消えてしまった少年の代わりに、カイは呆然と蝶つがいを軋ませ音を発てるドアを見つめた。

(それを言うだけのために戻ってきたのか……………?)

何度目か知らないが、また手を止めることとなった食事は、いつの間にもやらさつぱりと冷めてしまっていた。

「お？ サジの奴また出かけたか」

亭主が戻ってくる頃には、カイは出された食事をきれいに食べ終わっていた。「ごちそうさまでした」という言葉に、亭主はなんとも嬉しそうな笑みを浮かべる。

「息子<sup>サジ</sup>さんも病気なんですね」

カイのこの言葉に、亭主は「ああ」と頷く。

「俺もな、腹に出来ちまったんだが。まあ、生活にはあまり問題ないな。前かがみになりすぎると少しきついんだが、……………まあ、こりや肥満のせいもある」

冗談混じりなその言葉につられ、カイも亭主と一緒に笑った。

食べ終わった皿を持ち上げながら、亭主の視線はドアへと向けられる。水色もつられてそちらを見る。

「……………あいつはな」

亭主の言葉。

カイはドアから目を離し、短いひげを蓄えた亭主の横顔を見上げた。

「サジは、俺の子じゃないんだ。俺の妹の子でな。けど、妹もその旦那も病気で死んじゃった。だから俺が気づかることになったわけ

だが……………」

亭主は一人首を振り、にこりと笑ってカイを見た。

「まあ、辛気臭い村だが、仲良くしてやってくれ。みんなお前さんのような旅人は大歓迎だからな。あいつとも、ここにいる間は仲よくしてやってくれな」

水色の髪が、窓から入り込む風に揺れた。

「……………、はい」

ここは良い村だ。

心底そう思った自分に、カイは少し困ったように笑う。

\*

夜。カイはもぞりとベッドから起き上がった。

どうにも眠れない。

起きる一瞬、ウロコの下で脈打つ、赤い塊の夢を見た。

「オヤ、ヤドシ、か……………。くそ、結構強烈だなあ……………」

カイは面倒臭そうに顔をゆがめた。

パタパタという音に気づき足元を見ると、獣が自分を見上げ尾を振っていた。カイは一瞬目を丸くするが、くすりと笑い、獣の頭をわしゃわしゃとなでる。

「散歩か。良いな」

獣は尾を大きく一振りし、「YES」の合図を送った。

町を出て、旅をして、最近ではもう何十年も経っているような気分だった。だが今こうして、何も変わらず獣とともに夜の散歩をしている自分に気づくと、今もなお、自分が親友の住む故郷にいるような気分になる。

「人間、どこにいても変わらないもんだな」と、カイは隣の獣へ呟いた。獣はただ首をかしく。

少し歩いていると、この村の中心であろう井戸にたどり着いた。

真つ暗で人氣がなく、寒々しい風景にも思えたそこに、予想外にもばしゃばしゃという派手な水音が響いた。

（なんだ？）と眉をよせ、水色の瞳は人影の見当たらない井戸周辺を見渡す。耳を澄ませば、微かにだが少し苦しそうな“ゼエゼエ”という荒い息も聞こえた。

音は自分とは反対側の、井戸のすぐ横から聞こえる。ということとは、誰かが井戸の影に隠れて何かしているということだろうか？

（こんな時間に。体でも洗ってる、のか？）

「まさかな」と自分に首を振り、音の犯人を突き止めるべく、カイは井戸の裏側を覗きこんだ。

じやりっという音を最後に、一瞬、カイと獣の気配は消える。

そして、その井戸の裏側に潜んでいた影が、静まった月を見上げようと顔をあげたとき、驚きに一瞬息を止めた。

「……………うわあ！！！」

「サジ？」

いつの間にか自分の横に回り様子を覗き込んでいた水色に、サジは呆然と眼を丸くする。水色もまた驚いたように眼を丸くしていた。

サジは昼間の客人を思い出し、力の入った肩を下ろした。

「あ。えつと、カイ」

「こんばんは」とのんきな挨拶を返してくれたサジへ、カイも「こんばんは」と返す。

水色の瞳が見下ろす先には、桶の中張られた水がゆらゆらと大きく揺れて月を映していた。

少年の首筋から水が滴り落ちる。

「痛むの？」

カイの問いに、サジは苦笑いを浮かべる。その呼吸と共に、喉からはヒューヒューと突っかかりのあるような音が漏れていた。さっきのあらい呼吸も彼のものだったのだと、カイは確信する。

「こうしてると、少し楽なんだ」

彼の首筋で、ウロコのようになった皮膚はじゅくじゅくと痛そう

に赤く腫れ上がり血を吹いていた。

「……………」

カイはそれを見て目を細める。手を伸ばそうとした自分に気づき、何気なくその手を引っ込める。

夜風が静かに吹いて、水色の髪を揺らした。

暗掛かりだが、それでもわかる少年の顔色。

赤く腫れ、もう一つの心臓がそこに納まっているのではないかと  
思わせる首筋。

水色は視線を全く動かさなかった。

月明かりに逆光して、サジには自分を見下ろす少女の表情があま  
りよく見えなかった。

「……………カイ？」

急に黙ってしまった少女へ、彼は名前を呼んで問いかける。

カイは“はっ”と肩を揺らした。

「つと、……………ごめん。……………そうだ。ちょっと待ってて」

何か思いついたのか、言葉を残してどこかへ走り去る水色。サジ  
は途方にくれてその背を見送る。

「えーつと……………」

気づけばその場に残ったのは獣と自分のみ。

「飲むか？」

桶の水を指差し獣へ尋ねるサジ。獣はふいっとそっぽを向き、桶  
の水には目もくれなかった。

少年は戸惑いをごまかすように苦笑する。

どうしたらいいんだか、と手元に揺れる水面を見て、彼はまた首  
に水を当てた。

少しすると、横にいた獣が嬉しそうに身を起した。

濡れた布を首に当て、井戸に腰掛けていたサジは振り返る。月明  
かりの下、カイが駆け足で戻って来るのが見えた。息を切らした様  
子はない。一体どこへ行っていたのだろうか。

おかえり、と口を開こうとしたサジより先に、カイは片手に握っていたものを突き出した。サジは言葉を失い、呆然とそれに目をやる。

「これ、使いすぎると毒らしいけど、痛み止め」

「……………どく？」

びくりと身を揺らす少年を見上げ、カイは首をひねり、そして苦笑した。

「前に、教えてもらったんだよ。この草、結構いろんな所に生えるんだけどさ、日陰になつて風通しのいい所、だっけか。……………それで、神経をマヒさせる成分を持つてるんだ。だから、医者とかは煎じて痛み止めに混ぜたりするらしんだけど、病気を治したり傷をいやしたりするわけじゃないから、使いすぎると神経を殺す毒にしかないんだって」

「だからほどほどに」と最後に付けたし、カイは「ほどほどってどれくらいだ？」と疑問に思う。

「……………初めて知ったや、」

サジはまた驚いたような眼をカイに向けた。この草なら見たことがあった。よく、畑の隅、木々の影など、葉の先を薄紫色に染めて数本で生えていた気がする。それがまさか、痛み止めの薬に使われているものだとは思いつしなかつた。

「ちよつと借りていい？」

カイはサジから濡れた布を借りてそこに草を挟んだ。腰からナイフを取り出し、その柄頭を使って布とともに草を叩く。数回たたくと、草の汁が布にしみてうっすらと紫色の染みが出てきた。

「……………はい」

カイにさし出されたそれを受け取り、サジは首に当てる。確かに、痛みがやんわりと引いて行くのがわかった。

顔色は良くないが、少しは楽そうになった彼の横顔を見てカイは口を開く。

「サジ、本を沢山読んでたよな」

「ん？ ああ、そうなんだ」

昼間、食堂であった時の事を言ってるのだろうなと思い当たり、彼は頷いた。

「そこに、この草のこととかは書いてなかったのか？ この草以外でも、傷に利くものとか、いろいろ」

カイの言わんとしていることを察し、彼は首を振る。

「違うんだ。俺が読んてるのはそういう類の本じゃないから」

「そうか。……どんな本？」

「あー、えっと。……び、病気、かな」

少年は言葉を濁すようにそう言った。

“病気”と聞いて、カイは納得する。この村を助けたいの、レータだけではないのだ。

(でも……)

カイは知っていた。幾ら病に関する本を開こうとも、きっとこの村を侵す元凶は見つけられないだろう、と。

「……頑張ってるんだな」

「うん。……いや。……カイも、旅をしてるだけあるな。薬草

について詳しいの？」

「いや。これは旅をする前に教わったんだ。植物に詳しい奴がいて、そいつにいろいろ話を聞かされたから。……ほとんど忘れたけど」

サジはくすくすと笑った。

「いや、でも十分だと思うよ。こうして役立ててるみたいだし」

「そうかな」

その“植物に詳しい奴”とやらを思い出し、水色は苦虫を噛んだような表情を浮かべた。

(忘れたとか言ったら殴られるだろうな)

怒ったときこそ輝きを増すミネの笑顔が頭に浮かぶ。

水色のその渋い顔を見て、サジはさらに笑った。

「なんで笑うんだよ」

「いや、ごめん。変な顔だったから、つい」

それは謝ってるとは言えないではないか、とカイは指摘した。サジはさらに笑ってそれを誤魔化する。

いつの間にやら他愛のない話に花を咲かせていた事に、彼等は気づかず、月の明るい夜は暖かに更けていく。

## 18【治せる病：ウリコ】

次の日、外は大雨だった。

部屋から出て下へ降りると、テーブルを拭いているレータと目が合った。

「……………おはよう」

「おは……………」

パタン、と扉が閉められてしまった。カイは、自分の挨拶が言い終わる前に去ってしまったレータの顔を思い出す。顔を合わそうともせずじつとうつむいたまま、気まずそうに背を向けた少年。

カイは溜息をついた。

「嫌われちゃったな」

横で獣は首をかしげてカイの表情を覗き込む。

「あら、おはよう、カイ」

レータと入れ違いでレイシャが一階へと現れた。カウンターへと入り込んだ彼女は、コップを手にし、そこに水を一杯注いでくれた。ウロコに覆われた片腕はギクシヤクときこちない動きだ。

カイは彼女の動作を目で追いながら尋ねる。

「あの、傘とか、あったら借りていいですか？」

レイシャはコップを置いた。そして驚いた様に目を丸くしてカイを見上げる。

「ええ、いいわよ。でもあなた、こんな天気で外へ行くの？」

「はい」と当たり前のような顔でうなづく客人に、レイシャはあきれた。

「風邪ひかないようにね。それに、明日も雨らしいから、旅、急がない方がいいわよ。つまらない村だけどゆっくりしてお行き」

身を案じてくれる彼女が、まるで母親のようだと思う。

カイは「ありがとうございます」と会釈し、傘を取りに行ったレイシャの背を視線で追った。

一体、この村に来て自分は何回「ありがとう」を言ったのだろう、と疑問に思う。

縁起が悪いと云われる“水色”を、こつも当たり前に受け入れてくれる人々。

(本当、すごいな……………)

口に出さずに呟いて、不慣れだった優しさに、こつも当たり前に居座れるようになっていた自分にも呆れる。

「人つて、簡単に環境に馴染んじゃうんだな」

横にいた獣に尋ねると、獣は耳をぴくりと動かしただけで、気持ちよさそうに居眠りを続けていた。「こいつ」とカイはほほ笑む。

やがてレイシャが戻ってきた。その手には大きめな黒い傘が握られている。どう見ても男ものだ。

「これならこの雨でも大丈夫でしょう。どうぞ」  
「どうも」

まさか、とカイは受け取った傘を見つめる。その視線に秘められた疑問を読み取って、レイシャはくすりと微笑んだ。

「主人のなのよ」

(…………… やっぱり、)  
予想的中、か……………。

カイは曖昧な気持ちで苦笑し、その傘を広げた。

\*

カイは軋んだ音をあげて開く戸に入った。丸テーブルがいくつか並んでいる店内が視界に広がる。

( やっぱり )

こつちもこつちで予想通りか、とカイは微笑む。店内は空から。

客は自分以外全くいない様子だった。経営は大丈夫なんだろうかと

少し心配してしまいそうだ。

カイは昨日昼食を取った時と同じ席に座った。亭主は「またきたな」とうれしそうに声を上げる。

「よう。こんな雨の中よく来た、坊主」

“カイ”だつてば、と口にせず苦笑し、坊主とやらは「どうもと笑う。」

「軽めの朝食、ありますか？」

「任せとけ！」

注文を聞くと、亭主はせかせかと奥のキッチンへと姿をくらました。カイは目の前に置かれたコップを手に取り、こくりとそれを一口飲んだ。

「ここ、ペットお断りなんだけど？」

不機嫌な声に顔をあげると、カウンター端の影になっている席に、あの目つきの悪い少年がいた。確か、ウリコと呼ばれていたか。

(……………こういつちやなんだけど、変な名前だよな)

失礼にもほどがあると自覚していたのもあり、カイは決して本人には言おうとは思わなかった。

(ていうか、客、いたんだな。私以外に)

全く気付かなかった自分もどうしたものかとカイは思う。

「お前、何しに来たんだよ」

鼻にかかる言い方だが、カイは気にした様子もなく澄まし顔で答えた。

「朝食を食べに」

雨粒が乱暴に窓を叩いていた。

ウリコという少年は「ふん」と鼻を鳴らす。

「何か詮索しに来たとかじゃないのか？ 言っただろ。この村の事情に首を突っ込むなって」

「わかつてるよ」

カイは水を飲む。

「それに、突っ込んだところで私に何ができる。原因も、対処法も、

何も知らない子供が何か嗅ぎまわったところであたのお遊びにしかならない。だろ？」

ウリコは目付の悪い目を細めた。彼の目付の悪さはさらに増し、カイは内心で「賊に向いているんじゃないか」と疑った。

カイ以外から見てもわかる。ウリコの瞳は敵意でいっぱいだ。

「何も知らない、か。じゃあなんでここに来るんだよ」

カイはコップを置く。

(それじゃあまるで、答えを教えたいじゃないか)

呆れたように息をつき、大切なものがあるならもつと慎重に隠せ、と言ってやりたい衝動を抑えた。

まったく何も考えていなさそう水色の眼は、真っ直ぐにウリコを見つめる。

「だから、朝食を食べにさ」

ざーっという外の音が一瞬大きくなる。

含む物もなにもなさそうな静かな返答に、ウリコは「はあ？」と気の抜けた顔をしていた。

自分の言葉に疑いを抱いていない、真っ黒な少年の瞳。

(……………正直馬鹿だな。ん？……………それを言うなら馬鹿正直、だっけか)

カイはこくりと水を飲む。隣で獣がぴんと耳を立てたかと思うと、キッチンから亭主が出てきてカイの朝食を持ってきてくれた。

ウリコとの問答がちょうど終わったところだったので、カイは亭主のタイミングの良さに感謝した。

「ほらよ。できたてのほやほやだ。お代はコレな。皿と一緒に置いてくれりゃいいから。俺はちよっくら、隣の畑で人手が足りないってから手伝ってくる。ウリコ、悪戯すんじゃないぞー」

「俺はもうガキじゃないっつうの！」

亭主がドアを押すと、風に乗せられてばらばらと雨粒が入り込んできた。亭主の羽織った耐水性のローブが、ざーざー降りの雨の中にはためきながら消える。

「……………つたく。いつまでも子供扱いしやがって、」とウリコの不機嫌な声が小さく聞こえた。

カイはくすりと微笑み、まだ温かい食事へと手を伸ばした。半分くらい食べ終わった頃だろうか。昨晚井戸で出会った少年が、カウンター横の階段から姿を現わす。

「ウリコ、今日は早いな。……………やあ、カイ。朝食？」

カイがこくりと頷くと、サジはカウンターの中へと入り込み、水色の客人の前へと回った。

「おーい。俺はスルーかよ」

ウリコは半眼し、やる気がなさそうに片手をはたはたとふった。

「ん？……………カイ、何か聞こえた？」

私にふるのか?! と心臓を跳ね上がらせ、カイはコホコホとむせた。コップに残った水を一気に飲み干し、なんとか落ち着きを取り戻す。

「……………この野郎」

ウリコはサジをぶすりと横目に睨んだ。

その冷たい視線にサジは「あはは」と笑い声をあげる。

カイはそんな二人を見て、やはり仲が良いんだなと内心でつぶやいた。こういう空気は嫌いじゃない。カイもつられてくすりと微笑む。

「昨日は助かったよ。あの後久々にぐっすりと寝れたし」

痛み止めの草の事だろう。カイは食事の手を止め顔を上げる。

よく眠れたというものの、やはり少年の具合はあまりよくなさそうだった。顔色が悪いと一目でわかる。

「朝起きた時、少し気持ち悪くならなかったか？」

痛み止めと言っても神経を麻痺させているだけ。傷や病は治せない。

しかも神経の感覚が戻れば、また以前と変わらない痛みや気持ち悪さも戻ってくるのだ。カイもその時の不快感を身をもって知って

いた。

「ああ。でも水を飲んだらすぐ良くなったし。本当に助かった」

にこやかなサジを見て、ならよかった、とカイはまた朝食を再開する。

（良かった、か……………）

その場しのぎにしかならない対処に、少し罪悪感を感じなくもない。

「……………」

会話の内容がよく見えないウリコは唇を尖らせる。

自分の知らないうちに、どういうわけか二人が仲良くなっているように思えたせいもあるだろう。とんとんと貧乏ゆすりをし、楽しくないといわんばかりの表情を浮かべていた。

「おいサジ。そいつよそもんだぜ？ あんま関わんねー方がいいって」

「別にいいじゃん。それに、今更かわるなって言われても、もうかかわった後だ」

「じゃあ今から警戒しろよ。旅だか何だか知らないけどさ、どうせ前いた場所で苛められてたから家出でもしてきただけだつて。化物だ何だ言われてたに決まってるね。水色なんてそうそうないもんな。……………それに、この村の流行病見て、自分より珍しい化け物見つけたつて喜んでんだらうよ。……………つたく。これだからよそ者は……………」

いやだいやだ、と話続けるウリコ。その様子に、サジは口を閉じる。

カイは気を害したふうもなく小さな皿に入ったスープを軽くすすり、獣は一緒に出された朝食を平らげ、気持ちよさそうに目をうつとさせていた。

「それにさ、そいつ昨日今日来たばかりだろ。この病見て本当はもうこんな場所いたくないって思ってるんだぜ。自分にいつ病がうつるか分らないもんさ。今日がこんな天気じゃなきゃ尻尾丸めて逃げ

てたにきまつて……………」

「ウリコ……………！！！」

がたん、とカウンターが音を立てる。カイもウリコも驚いて肩を揺らした。獣はやはり気持ちよさそうにうとうととしている。

「ウリコ、いい加減にしるって」

サジの怒ったところをあまりみたことがないのだろう。ウリコは呆然としていた。

「カイが、君に何か嫌なことしたのか？ それとも、この村の誰かに危害でも加えたのか？」

カイはサジを見上げた。

抑えた声。そこまで感情的になっている様には見えなかったが、やはりその眼には怒りの色が見てうかがえた。

「君はそんなにいやな奴だったか？ 前いた場所や、外見のことまで、なんで君に言われなきゃならない」

サジの言葉はもつともだろう。

本当なら、カイが一番怒らなければいけないことなのに、なぜか当のカイよりもこの村の、しかも昨日出会ったばかりの少年が怒ってくれている。

この状況は何なのか、とカイは一瞬混乱した。

だが、ウリコという少年から感じた、単に嫌みだけではない「何か」が何なのか、どことなくわかっていいるからこそ、逆に何も言い返せなかったのだ。彼は彼なりに一生懸命だと、そう感じたから……………。

「別に……………、俺はただ」

少年の視線が足元へと落とされていた。

カイは自分の思いついたことにニヤリと笑い、彼の言葉をさえぎった。

「嫉妬か？」

「は？」「え？」と、二人の少年の呆然とした顔。

カイは間の抜けたその二つの表情に「ぶっ」と噴き出した。

「嫉妬だろ？ サジになかなか構ってもらえないから、ウリコ、きつと私に八つ当たりしてるんだ」

「は？ お前何言ってる、」

「何だ。墓穴か」

「やっぱりな」というカイの言葉に、サジは目を丸くしてウリコを見た。

「墓穴………なのか？」

サジが尋ねる。

静かな空気が流れた。

渋緑色の瞳と、水色の瞳に見つめられ、ウリコは震える肩をいからせてガタリと席を立った。

「………んなわけねーだろ！！！！」

「だよな」とカイ。

「なんだ」とサジ。

二人はつまらなそうに息をついた。

「いい年してそれはないか」

「俺少しびっくりしたよ」

カイはいつの間にか済ませた食事に手を合わせる。

サジはその食器をカウンターの内側から腕をのばして回収し、キッチンへと運んで行った。

立ち上がって、しかも大声まで出した自分を無視して、他の二人はカチャカチャと片づけをはじめている。ウリコは一瞬でもむきになつてしまった自分を恥じた。一人馬鹿みたいに乗せられた気分だ。「つくそ！ お前、人をからかってそんなに楽しいか？！」

丁度お代を出していたカイにつかみかかり、ウリコはぐっとその自分より背丈の低い旅人の胸倉を掴み寄せた。

カイの手元からこぼれた小銭がちゃりんちゃりんとして音をたてて床に散らばる。

「からかってない。ただ、適当に言ってみただけが当たり前のように外れただけだ」

「だからその態度がからかってるっていうんだよ！ 人を見下したような眼で見やがって！ 馬鹿にしてるとしか思えないだろ！！」  
「部外者で、しかも水色で、この村の病気に自分より珍しい化け物を見つけたって喜んでる私が、あんたをからかうなんてそんなめっそうなこと、恐れ多くて出来やしませんよ」

カイはつまらなそうに眼を座らせて、棒読みの如く一気に言い切る。これは確信的犯行だ。相手の気に入らない物言いをして、カイはにやりと笑む。

それは、「はいそうです。私はあなたをからかっています」と告げているも同然の笑みだった。

「この野郎！」

「ウリコ！」

腕を振り上げた友に、サジが静止の声を上げる。

ウリコは悔しげにその腕を止めた。振り上げたまま行き場のなくなった腕はそのままの状態で放置される。

「だいたい、お前男のくせに“私”なんて、今どきどっかのご貴族様だっつかわねえよ」

これはウリコなりに相手を馬鹿にしたつもりだった。だが、彼はさらに墓穴を掘っていたことを知る。

「カイは、女だよ」

サジの抑たトーンの声が、ぼつりと雨音でうるさい店内にこぼれ落ちた。

「……………は？ ……………おん、な」

ウリコは拍子抜けな顔で、今掴みかかっている相手の顔を見下ろす。

確かに、男にしては少し華奢かもしれない。だが、この声と言い、外見と言い、まだ声変わり前の少年にどうしても見えてしまうのだ。

(……………言われて、みれば)

じっとウリコに見つめられ、カイは面白いことを考える。

「ウリコ」

にこりと微笑み、カイは自分の胸倉をつかむ相手のこぶしを両手で包みこんだ。

「……………胸、触ってるぞ」

「……………???!?!」

ウリコは顔を真っ赤にし、弾かれたようにその手を離した。

少し大袈裟すぎる動作と、その慌てた顔があまりにも間抜けなので、サジもカイも盛大に吹きだしていた。

「サジ?! ……………おい、この、水色! お前まで、何笑って、」

また怒鳴るかと思われた少年へ、水色の少女は眼を座らせる。

「へえ。女に手を挙げるんだ」

ビビる素振りを見せるどころか、逆に自分を脅すような視線を向けてくる少女。

サジはもう止めに入る様子もないようだと安心し、目に涙を溜めて笑っていた。その笑顔には、カイ同悪戯っ子な悪がきのような表情も混ざっている。

ウリコは両脇で強くこぶしを握り、ふるふると震わせていた。きつと、一生懸命自分を抑えているのだろう。

「お前……………」

その瞳も声も、「もし男なら本当に一発殴ってやるのに」と言いあげた。

「まさか、親友が女の子に手をあげる日が来るなんて……………」

わざとらしく項垂た、サジのからかうような言葉。

「……………!!」

暫く沈黙が流れた。

ビュービューと戸の隙間から風が音を上げる。かたかたとゆれる窓の音は、沈黙に便乗して自分の存在を出張していた。

「……………だああああああ!!!!!!」

ウリコは突然自分の頭を抱え髪をかき乱す。

「ったく、んだよ! くそっ!!! サジも結局そいつの味方だしよ!」

「なに言ってるんだよ。俺はウリコの親友だろ？」

「嘘くせえんだよ！ つんつたくよお！！」

だん、と大きく一歩床を踏み、ウリコはカイを指差した。

「お前、女だろうとなんだろうと関係ねえ！ 絶対に一発殴ってやる！」

「できるものなら」

カイは勝ち気に腕を組む。

売り言葉に買い言葉。

（案外この二人、気が合うのかも）

むしろ少し似ているのか？ と、にらみ合う二人を見て、サジは満足げに笑っていた。

その向かい、カウンターに並ぶ椅子の間で、獣は伏せたままうっすらと瞼を持ち上げる。その視線の先には楽しそうな表情を浮かべる水色の姿。

灰色の彼もまた、満足そうな表情を浮かべ、じゃれあう三人の会話を耳を傾けていた。

## 19 【治せる病：末期】

\*

次の日、人々の予想からは随分とはずれ、空はきれいな晴天だった。

きつと、雲は昨日のうちですべての雨を絞り出して流れてしまったのだらう。なにしろそう思えるほどの勢いがあったのだから。

近くの川は溢れずに済み、井戸の水が少々濁った程度で済んだのも幸いだ。

「……………なんだ。いい天気だな」

窓を押しあけ、カイは隣の獣へと話しかける。獣はハツハツと舌を出し、真ん丸な瞳でカイを見上げる。

「なあ、ちよつとき。悪いけど、今日は留守番してもらいたいんだ」  
獣はその言葉を聞くと、舌を引っ込め、カイにそっぽを向けベッドの下へと潜り込んだ。

一応了承はしてくれたらしい。だが、機嫌を損ねてしまったのも確かだ。

「ああ、……………やっぱり」

カイはごめんよと詫びを入れ、借り部屋を後にする。

下の階へ降りると、やはりレータが幾つかある丸テーブルを拭いていた。

「おはよう」

先に気づいたカイから挨拶をすると、レータからはまだ気まずそうな「……………おはよう」という返事が返ってきた。

（まだ気にしてるのか）

最も、気にするべきは自分も同じだらうに、と水色は小さく苦笑する。

『私は外の人間だ。この村の問題に、かかわる気はない』

『この村の事情に、首を突っ込まない方がいい』  
自分の声と、ウリコの声が記憶の中蘇る。

まったくその通りだ、とカイ自身そう思っていた。  
旅をする中で、自分が水色として生きていく中で、余計な問題に  
首を突っ込んではいけないのだ。それが自分のためであり、周りの  
ためである。少なくとも、“あの町”にいる間は……そう思っ  
ていた……。

けど実際では、最近の自分の考えがわからないのだ。  
人とかかわるとろくなことがない。でも、人とかかわって喜びを  
感じる自分もいる。

“なくなる”は、“悲しい”

怖い。

周りを受け入れたくない。

自分の存在を知らせたくない。

『それは……もとから何もなければ、何も失わずに済むから……  
…かい？』

(シン)

一瞬記憶の中の悲しげな笑顔に胸が痛む。

カイは何でもいいから叫びたいという気持ちを抑え込み、ついで  
にぶんぶんと頭を振りいたい衝動もなんとか抑えた。

なにはともあれ、自分はそろそろ、この村から身を引くべきなの  
かも知れない。

(少し残念だけど……、ざんねん?)

カイは苦笑する。改めて“情”という奴の恐ろしさを実感した。  
テーブルを拭き終わったレータが、ずっと立ち呆けているカイの  
横を通り過ぎる。それに“はっ”と我に返ったカイは、「ごめんな」  
という言葉が口から飛び出しそうになった。

しかし、その言葉は飲み込まれ、きれいに消化されることなく水

色の中でわだかまる。

謝ったところでどうにもならない。それにこれは、ただの逃げ言葉にしかないのだ。少なくとも、カイはそう思った。

レータはカイと目を合わせることなく、奥の部屋へと行ってしまった。彼の黒髪が、頬にウロコを持つ少年のものと重なる。そして、首元に覗く鱗が、渋緑の髪を持つ少年を思い出させる。

(関わるべきじゃない……………)

カイは戸を押し外へ出た。庭先で洗濯物を干していたレイシャに声をかけ、人の良さそうな笑みと温かな「いつてらっしゃい」という声を聞くと歩き始める。

(関わるべきじゃないんだ。……………けど、少し……………)

カイは見慣れてきた村の家々を眺めた。

道のあちこちにできた水たまりは空を映して青く輝き、風に振り落とされたであろう広葉を浮かべていた。屋根を補修している家が何件か目に入り、きつと昨日の雨で雨漏りでも見つけたのだろう、とカイはくすりと笑う。

(……………少し位、いいか。いや、少しでいいんだ)

水色は、ぴしゃりと水をはねた。わざと水たまりを踏み、ズボンの裾が汚れることも気にしない。

単純に、そう思ったのだ。少しでいい。話してみたい、と。馴れた足取りで向かうのは、あの食堂。

\*

「は？ 散歩？」

胡乱気な黒い瞳がカイをにらむ。

「違う、道案内だつつうの」

水色は訂正した。

それに対し、ウリコは「はあ……………めんどくせえ……………」とだらしなく椅子に腰かけ天井を振り仰ぐ。

「なあ、天気もいいし付き合ってもらえないか」

「はあ？　なんで俺たちが」

「一人より二人。二人より三人、だ」

「だ、じゃねーよ」

頬杖をついていたウリコが“だん”とテーブルを叩く。

「この余所もん。どうせもうサジにはOKもらったんだろ。それでどうせなら、ってサジに言われて今ここで俺にも声をかけてみたってわけか？」

「凄いなお前、ちゃんと言葉理解できるのか」

まるで自分を人外のものか何かと思っっているようなカイの言葉に、ウリコは「この野郎」と苛ついた口調で返した。

「いいんじゃないか？　ウリコ、さっきまで『暇だ』って喚いてたし」

サジのやんわりとしたセリフはやはりと言っべきか、非協力的なウリコとは対照的だ。

ウリコは「けっ」とそっぽを向く。

「やめとけやめとけ。お前最近顔色良くないし、あんま無理してるとそのうちぶっ倒れるぞ。出なくても最近足元ふらついてるくせに」  
「まだ大丈夫だって」

言葉とは裏腹に、サジは一瞬苦虫を噛んだような顔をした。だが、そっぽを向いていたウリコはその表情には気づかない。

「こいつと並んで散歩させられるくらいなら暇な方がまだ」

「……………だつてさ、サジ」

サジは苦笑していた。子供みたいな物言いをするウリコもウリコだが、それに対してノーコメントなカイもカイだと思った。

「すごいな。本当想像通りというか、予想的中というか」

つまりは、こうなることはもう分かっていたということだろう。

サジは「うーん」と顎に手を当て悩み、何も思いつかなかったのかすぐに考えるのをやめて息をついた。

「なあ、ウリコ。明日辺りカイもこの村を出るって言うし、一日位

いいと思わないか？」

「だからお前は甘いつ、て……………」

ウリコは人の好過ぎる友に一言言っただけで顔を上げたが、その深く深い緑色の瞳を見て言葉を切った。

たまに見る、微笑みとは違う、悲しげな瞳。それは、“あの時”以来、ずっと彼に付きまとっていた感情だ。

……………わかったよ。

長い沈黙の後、目つきの悪い少年は小さく息をつくようにそう言った。

\*

良い村だと思った。

だから、だろうか。

自分がこんな事をしだすなんて。

本当に余計なこととはしたくないのだ。軽く触れて、知るだけでいい。それ以上、波を立てることはしたくなかった。

あとは、すべては、ここに住む人々が決めることだと、そう思いたい。

カイはじつと空を見る。

「どうしたの？」

サジはななめ前を歩きながら、案内するべく旅人を振り返った。

その少年の隣には目つきの悪い彼もいる。先ほどからすねているように全く口を開こうとはしない。

「いや、何も。なんか、雨音が聞こえた気がして。気のせいだけど」

「雨音？ 近くで水巻でもしてるんじゃないかな？」

昨日の大雨の後でそれはないか。とサジは自分の言葉に訂正を入れ、気を取り直し先を指差す。

「ほら。あれが村長の家で、その隣が“学校”かな。とりあえずは

そう呼んでるけど、大きな町とか国とかにあるのとはずいぶん違うと思う。必ず3人は大人がいて、小さい子たちが字や水について学ぶ程度だから」

サジはほとんど先へ行く。あれは肉屋。狩りに行って獲った動物を、皮と肉に分けて売っている。あれは流商屋。外の商人から流れてきた品を売り買いしている。あれは診療所、村に一つしかなくてとても重宝しれいる……と、目につく家々をすらすらと説明する。

カイはたまに軽く相槌を打ちながら、二人の少年の後を追った。小さな村だ。案内といっても半日かからずに終わってしまいそうで、もう昼も近かった。

「お昼どうしようか。また俺ん家でもいいけど、飽きてない？」  
サジの問いかけに、カイは「構わない」と答える。相変わらずウリコは何も言わず、カイに一瞥をくれようともしなかった。

「なあ、サジ……」と口を開きかけ、カイは言葉を切った。紫色の汁が大量にしみた湿布を、渋緑色の髪がわずかに掛かる首元にみつけた。

日中にも痛むのか。

(ひどいな……)

カイはすつと目を細める。

水色の瞳はその色をわずかに濁らす。そこに見える感情は……。

「思ったより早く終わっちゃたね。ちょうど食事時だし、戻る？」

「……………そうだな」

カイは頷く。「ウリコは？」とサジに問われ、彼もまたこくりと頷いた。

食事時と言っても、村の端から端まで来たのだ。今からあの食堂に戻るとなると、またきた道を折り返さないといけないわけだから昼食としては少し遅めになってしまうだろう。

「ウリコ、ちょっと頼みがあるんだけど」

サジは足早に去つていこうとする友人を引き留める。立ち止まる二人を先に、カイはどうしたのかと足を止めた。

「何だよ。食事だろ。ならさっさと行こう」

「いや。俺よりいたいところあるんだ。先行つててくれないか？」

ウリコは眉を寄せる。

「どこだよ」

サジは自分の首筋に手を当て、睨みつけるような友の目を見上げた。

「先生のところ。薬、貰わないとな。今日は紙屋の婆を看に行つてらしいからさ」

「そりやまた、随分と診療所から離れた場所に行つたな」

「ああ。でもここからなら近いだろ。ついでにカイも用があるらしいから、案内してくる」

「なら俺もいきやいいじゃねーか」

ウリコは苛ついた声を抑える。

サジは首を振った。

「だから、君に先に行つて、食事を三人分用意しとくよう頼んで欲しいんだ。行つてから頼んでたらさらに昼食が遅れちゃうだろ？」

「別にかまわねーだろ。あいつも気にしないと思つぜ」

顎で後ろに待つ水色を示し、サジをにらむ。ウリコの気が立っているのはサジにもよくわかった。だから、なだめるような笑顔を浮かべるしかなかった。

「頼むよ。俺が腹減つてるんだつて」

手を合わせる友人に、ウリコは小さく息をついた。「早く来いよ」とそれだけを残し、彼はすたすたとその場を去る。

残されたカイはどうしたのかと、わかる二人を見比べた。

「さて」と振り返つたサジは、説明なしに「行こうか」と言い、目的地へと先導した。

村の一番端の小さな家。

「ここは？」というカイの問いに、「紙屋だよ」とサジは答えた。「ちよつと、ここで休んでいこう」

そう微笑む少年の顔色は悪く、額には脂汗も浮いていた。

カイは何も言わずにうなづく。

戸を押し入ると、奥からカシャ、カシャ、と定期的に繰り返される音が聞こえてきた。

「紙をすいてるんだ」

サジの言うとおり、奥には水の流れを原動力にしたような木製のからくりが、歯車や糸を伝い自動で動いていた。

「……………すごいな」

「……………」

奥へ一歩踏み出したカイへ、サジは指を立てた。何かと思い少年の視線を追うと、その先には窓際で暖かな日にあたりながら居眠りをする老婆の姿があった。

「起こしちゃいけないから、俺たちはこっちの部屋で」

サジは入口すぐにあるテーブルを指差す。

カイは何も言わず、何も訊かず、サジの言うとおりその席に座った。

「紙屋の婆って、俺たちは呼んでるんだけどさ、いつもこの時間居眠りをしてるんだ」

サジは馴れたようにコップを二つキッチンから持ってきて、水を注いだ。

「昔から、よくウリコと忍び込んで、あのからくりを見てたんだ」

カシャ、カシャ、と今も聞こえる音を、カイは振り返る。

ことりとテーブルに二人分のコップが置かれ、カイの正面にサジも腰かけた。

「ちよつと、時間稼ぎかな」

カイは言葉の意を解そうとサジを見た。その当のサジはと言うと、窓の外を眺めている。

カイもちらりと外を見やった。すると、道の奥からこちらに歩い

てくるウリコの姿が見えた。

「……………全く。あいつ、昔から疑り深いんだ」

サジは呆れたように苦笑し、手にしたコップを持ち上げた。そのなんてことのない動作に、彼の表情がゆがめられる。

「痛むんだな」

カイは確信のある言葉をむけた。

「話、あるんだろ？」

少年は首筋に手を当て、辛そうにしながら水を飲んだ。

「その草も、気休めにしかなくていい」

カイは自分に出されたコップの存在など忘れていた。

「俺、ずっと迷ってたんだ」

少年は一気に水を飲み干すと、コップをかたりと置き、両手でその傷口を抑える。

全くかみ合っていないような二人の言葉は、かみ合わないことでお互い「是」を示していた。

カイは静かに息をつき、下げた視界に入ったコップを見つめた。

そこでようやく飲み水の存在を思い出すが、手を出す気にはなれなかった。

コップの底に、荒い字で「ウリコ」と書いてあるのが見えたからだ。

きつと、今サジの前に置いてあるコップには、その底にこちらより丁寧な字で「サジ」と記されているのだろう。

「……………、行こう」

少年の声に顔をあげると、少年が窓を見て立ち上がっていた。

窓の外には、ウリコの姿はもうない。

サジはテーブルの上のコップもそのままに、戸を押して家の影に隠れるように外に出た。

カイは後を追う。

首のウロコに顔をしかめる少年は、思いのほか早い歩調で道の先にいた。半ば走っているようなその速さは、どうしても急いでいる

ようにしか思えなかった。

\*

やがて村を覆う柵を越え、二人は外に広がる木々の中へと入っていた。そして、その木々の合間をひたすら縫って、先ほどとは正反對の村の端へ出て、丘を越え、森につく。

カイはこの場所に覚えがあった。

小さな村がさらに小さく見える低い丘。うつそうとした木々が生い茂り、日中だというのに薄暗く見える森。

ここは、自分があの村に行く前に通った道だ。

サジは森の前に立ち、村の方を見る。小さな丘に隠されてそれが見えることはなかったが、きつと彼の眼にはちゃんと見えているのだろう。

「ウリコのやつ、きつとまた紙屋を確認しにくぞ」

ぜえぜえと息を切らし、彼は口元をぬぐった。そこには疑い深い友に呆れる笑いがあった。

ここに来るまでに、最後の方はもうほとんど全力疾走だったのだ。サジがあれだけ息を乱していても無理はなかったのだが、カイにはそれだけではないと分かっていた。

「無理してたんだろ」

カイは、よろけて膝に手をつく少年の前へと立つ。

サジは苦笑していた。悔しそうに笑い、悲しそうな眼をしていた。「案内、……………おおざっぱでごめん。細かく説明したら、こんな時間取れなかったと思うから」

息切れでとぎれとぎれの言葉に、カイは首をふる。

「そんなのいいよ。どうせ、昨日のうちに全部回ってた」

「ああ、やつぱり」

少年は笑う。

「で、村を見た感想は？ それで、わかったんだろ？」

膝に手をついたまま顔をあげた少年は、苦しさを一生懸命抑え込んでいる瞳を細める。

軽く充血し、わずかに赤いその瞳を見て、カイはそっと首をふつた。

「いや。何も。……もうとっくに分かってたから。この村に来て、サジにあつて。……私がこの村で見つけたのは、村で一番本があるって聞いてた村長の家にも、学校にも、“虫”について詳しく書いてある本が全くなかったって事だけだ。裏付けていうのかな。確率が高くなつたっていうか」

「……………そっか」

少年は、今だにその優しげな笑顔を忘れてはいない。

カイはぐっと、唇をかみしめる。そして、感情の読みづらい水色の瞳を彼へと向けた。

「サジも、知っていたんだろ。その“虫”のこと」

「ああ。……………教えてもらったんだ。前に来た旅人に。あの病の治し方も。そして、このままの状態が続けば、どうなるのかも」

「……………絶対に誰にも言わない。このまま知らないふりをする。そう決めたのは、きつとウリコだ」

「正解」

「治し方を知っているのに、それをしないって言ったのも、ウリコだ」

「正解」

「本を隠そうって悪知恵を提案したのも、ぜつたい、ウリコなんだ」

「正解」

カイはうつむいた。

サジはまっすぐに彼女を見据え、すべて濁りのない類笑みで答えた。苦し気に眉を寄せようが、痛みに歯を食いしばろうが、その水色を見据える彼の瞳に、怒りや恐れ、憎しみの色はない。

「……………ごめん」

カイは誤る。少年の目を見て言うことはできなかった。

少年はただ微笑みながら「いいんだ」といった。

「俺も、もう、覚悟はできてる」

サジは強気に膝から手を放し、まっすぐに背筋を伸ばした。

「分かってたんだ。なんとなく。君が、俺にこうすることを選ばせてくれるって」

「選ぶ？　こうする？」

カイは少年の言葉を繰り返して、目を丸くした。

「カイは、この病の治し方を知ってる。病を治すことができる」

「違う！　そうじゃない！」

カイは声を荒げた。

「お前は、誤解してる。……私は、ただ聞きたかっただけだ。……

……サジは、……ウリコも、知っていたのかどうかを。ちゃんと本人の口から聞いたかった。ただ、それだけなんだ」

力なく握られたこぶしに、腰に下げた短剣が当たる。だが、それが抜かれることはない。

「村の中でこんな話したら、どうなるかわかってる。だから適当に案内してもらった時、機会があったら軽く柵の外で話をしようと思っただんだ。けど……」

自分より、サジの方が行動は早かった。そして、ウリコもウリコで、また何か誤解をしていた。だからこういった今にいたっている。「私に、お前を殺すつもりは……無かった」

カイはまっすぐにサジを見た。その水色の瞳には、ちらちらと感情が漏れ出始める。

「無かった？」

サジの顔色は、先ほどよりも悪くなっていた。抑えた首筋に、赤く染まった湿布が垣間見える。

彼の笑顔は、ぐらりと歪む。

「変なことを言うね。それはつまり、今はあるってことでいいのかな？」

「今は……考え中だ」

「冗談のように、笑いながらいおうとした言葉は失敗して小さくすぼむ。

「だけど、カイ。俺を殺さなきゃ、あの村は、皆は、一人残らず死ぬかもしれない。……もう、あの村でこのウロコを持たない人たちはいない。皆、このままだと、体の中から食い殺される」

「……だから？」

「だから、って、……」

サジはカイの袖へ手を伸ばした。それを今出せる限りの力で引っ張り、伝えようとする。

「わかるだろ。カイだって自分の故郷がこうなったら、被害が大きくなるにうちに対処するはずだ」

「そうだな」と水色は言葉だけでうなずく。

「もしも自分の村だったなら、関係ない人間がサジの位置にいたら、私はきつとそいつを殺してる」

だがそれは、自分の身を守るためだけではない。ほかでもない、大切な友を守るためだ。

「でもここはサジの村だ。それで、ウリコの村でもある」

あくまで赤の他人だったなら、自分は故郷の友を守るために、被害を抑えるためにその人間を殺せただろう。だがもし、その元凶が赤の他人でなく、その友に宿っていたとしたら……。

……自分はきつと、殺したくない。

だからだ。

だから、カイはウリコの気持ちがよくわかった。

『この村の事情に、首を突っ込まない方がいい』

それはつまり、こういうことだった。

頑なに自分を嫌い続けた、自分へ敵意を抱いてた少年。

彼はただ、関わって欲しくなかっただけなのだ。今のままでもいいから、今までのように暮らしていたいから……。殺してほしくなかったのだ。そっとしておいて欲しかったのだ。

「ウリコは、親友を殺して生き抜くことより、親友を生かして死ぬことを選んだ。そうだろ」

「……………そう、なんだよ。本当。困ったよな」  
切なげな、悲しげな、友を思う洪緑の瞳。

水色の瞳もまた、同じ色をしていた。

「私は、自信がないよ。もし自分が本当に死ぬかもしれないってなつたとき、親友の命を優先するなんて、……………。口ならいくらでも言える。そう思うこともできる。でも、実際はどうなるかわからない」

殺したくない。絶対に殺さない。きつとそう思うはずなのだ。でも、そのままの状況が続き、真に自分の命の危機が迫ったとき。はたして自分は、病の元凶を宿した友を目の前にして生かしておくことができるだろうか。

「だから、ウリコを凄いと思うし、その気持ちを、私には踏みにじることができない……………のかな」

もう、それさえもわからない。

サジは、足もとに視線を落とす少女を見下ろす。

視界はもうぼやけていてよく解らなかった。意識もそろそろ危ないかもしれない。

つかんでいた相手の袖をそつと離し、代わりに彼は水色の肩へ手を置いた。

「約束を、して欲しんだ」

「約束？」

「俺を殺すかどうかは、保留にしてくれていい。だからさ、ウリコを守ってやってよ。あいつ、無茶ばっかするから。この村にいる間だけでもいいから。見捨てないでやって、くんないかな」

辛そうなサジの視線に、カイは無言で、目を見ることがもせず頷いた。

仲良くも何も、お前が死んでしまったら、他のみんなも死んでしまふのに、と言う言葉を飲み込んで。

「約束、絶対だ」

「……………」

カイは俯いたまま。顔を上げようとはしなかった。

## 20【治せる病】

このままではいけない……。いけなかった。

このままでは、彼は死ぬ。「オヤ」に寄生された、彼が。その一つの死は、沢山の死を招いてしまう。

人間の皮膚の下に潜り込んで増殖する『ヤドリウシ』。

『ヤドリウシ』は、中心になる一匹オヤからどんどん増えていく。オヤだけが心臓のように脈打つ肉の塊を背負っており、そこから胞子状の小さな卵を散らすのだ。

オヤに寄生された人間の皮膚は誰よりも早くウロコの形状になり、だが、広がる範囲は小さい。ウロコと化した皮膚の間、その割れ目から、オヤは卵をまき散らすのだ。

卵を体のどこかに受けてしまった人間は、孵ったヤドリウシの子供に寄生され、体をどんどんむしばまれていく。

今、目の前でサジが弱ってるってということは、誰かに寄生した卵から、次のオヤになる子供が孵ったということなのだ。

一つの代が終わろうとしている。

それは、その代を宿した生命の終わりも示していた。

オヤヤドリウシであるサジの死は、つまりはオヤムシの死だ。そして『ヤドリウシ』は、中心となるオヤが死んだ瞬間、その親から生まれた子供は寄生してた生き物の体を食いつくし、絶滅する。次のオヤムシとその宿り主だけを残して……。

「そろそろ、オヤの“死に狂い”がはじまるよ」

サジは首筋を抑える手に力を加える。その下に感じる、どくどくと脈打つ音は、自分の心臓と、あの虫の背負ったモノの音。

「お前………」

本当に全部知っていて、それでなお生きてきた。

それはきつと、自分の想像以上に辛いことだろうとカイは眉を寄せた。

「サジーーーー！！！！」

後ろから声上がる。

「サジ！！　おい！！　サジ！！！！」

ウリコだ。黒い髪をぐしゃぐしゃに乱し、呼吸もからがらに駆けてくる。

必死な顔で、今にも泣きそうな眼をして。

サジは視点の定まらない目を閉じる。

(見えない。けど……………聞こえる)

丘を下ってくる少年は、半ば転げ落ちているようだった。

「バカ野郎！　やっぱりだ、お前、ずっと死ぬことばっか考えてやがった！！　“あの時”から、ずっとお前、ばかみたいに辛気臭い顔して……………」

\*\*\*

始まりは、俺が拾った鳥だった。

親にも秘密で、こっそりウリコと看病していた。

翼の毛が抜けて、皮膚がウロコみたいになってて、とても苦しそうだった。

鳥の看病は、始のうちは楽しかった。ウリコと鳥のいる箱の中を覗いて、顔を合わせて笑っていた。……………そのころからだ。俺の首筋や、ウリコの頬が赤く爛れはじめたのは。

先生は何かのアレルギーか被れものだろうと言っていた。

だが、鳥が死んだころ、俺の首筋は赤く腫れ、ウロコのように割れていた。それで、父さんや母さんにまでウロコができて、気付いたら、この村の人間ほとんどにウロコは感染していた。

ウリコは、俺のウロコだけ少し違うと気づいているようだった。

でも、誰にも言おうとはしなかった。それどころか、俺にもみん

なにはばらさないことを約束させた。

まだその時の俺は、この腫れがどういうことか分かっていなかった。もちろんウリコも、知るはずもない。

この腫れと、脈打つ何か。

その正体を知ったのは、あの人 came ことで解明された。

そして、この村の行く末も……………

\*\*\*

「サジ、おい、この馬鹿!!」

アホ! 御人よし! 偽善者! ペテン師!

さまざまな罵声を浴びせられ、サジは悔しそうな笑いを浮かべる。

「ウリコ、なんでお前、ここがわかって!」

駆けてきた少年へ、カイは声を荒げた。

「つたり前だろ! どんだけその馬鹿と付き合ってると思ってんだ!」

サジは呼吸もまばらに、目の前で苦しそうに呻く友の姿を見た。

「お前、あいつを殺した時からずっとおかしかった。……………やつぱ

り、「後悔するな」なんて、御人よしのお前には無理だったんだ」

殺す。……………あの時。

「レータが、お前が、言ってた旅人、って……………」

ウリコへ視線を向けると、ぎらりと対抗的な瞳が返ってきた。

カイはそれを見て、一瞬の「まさか」を確信へと変える。

記憶によみがえったのは、この村を通ってきたときに見つけた哀れな骸。

サジは目を閉じたまま、頭痛でもするのか首から手を離し頭を押さえる。

その口元は、ぐにやりとゆがめられ、おかしい笑いを浮かべていた。

「…………その人は、…………殺し、たよ。他の人間に話されたら、迷惑だろ？俺が生きるために、仕方、ないじゃないか。…………俺が、俺は、…………死にたく、ないから、サ」

“死に狂い”

カイはあからさまに舌を打つ。

サジは血走った眼を開き、目の前にいる二人を睨みつけた。はあはあ、ぜえぜえ、と苦しげな呼吸を繰り返す口はだらりと開かれ笑い続ける。

「サジ、……………」

カイはどうしようもなく彼の名を呼ぶ。まだ、答えが出せてないのだ。ウリコの親友を思う気持ち。そして、サジの友を思う気持ち。どちらを優先すべきか。…………それとも、この二人を除外して、簡潔に被害の大小で決めるべきだろうか。

それなら…………… 答えは歴然ではないか。

カイは無表情に拳を握った。

……………きつと、ここにあの獣がいたのなら、彼の眼にはこの水色の表情は、とても悔しく悲しげに映ったことだろう。

「おいサジ、目をさま……………?!」

びゅつと風がなり、飛び出して行った友人へ、サジは腕を突き出し無防備な相手の首を握りしめた。

「お、い、……………この、ばか。一体何して、」

「俺、……………約束したんだ。ウリコ、と」

「ウリコは、……………お、れ、…だ」

「俺、生きないと、……………約束……………し、テ」

「サ、ジ……………」

ぐらりとウリコの視界が揺れる。カイが体当たりでサジを突き飛ばしたのだ。

サジは地面に転がると、よろよろと立ち上がり、逃げるように森の中へと重い体を引きずっていった。

「オ、れ、………生き、な、きや」

「サジ」

後を追おうとするカイを、ウリコが服を掴んで引き留める。

「離せ！ サジが行ってもいいのか?!」

カイは掴まれた服をぐいぐいと引つ張った。

それと共にウリコの体もずるずると引きずられる。

「あいつ、約束を守ろうとしてる。………最後まで、俺の言葉を守ろうと………」

「けど、サジはそれを望んでなかった」

「でも、今は“それ”を望んでない！」

ウリコの鋭い瞳は必死だった。

「………ウリコ」

カイは静かに彼の名を呼ぶ。

「………?」

「わるけど、私も約束したんだ」

お前を守れ、って。

がつつ、という鈍い音がした。

カイは短剣の柄で殴った相手の後頭部へ手を当てる。

大丈夫だ。当てる場所は間違えていない。

気を失った少年を寝かせ、その頬に目を向けた。

やはり、オヤが死にかけていることをその子供は感じているのだ

ろう。ウロコのようになった皮膚の割れ目から、ナメクジのようにテラテラとした表面を持つ何かがつごめいているのが見えた。

「約束、か………くそ、」

カイは唇を噛む。

行ってしまふ瞬間。渋い緑が自分へ向けられていたのだ。

自分へ向けて「来てくれ」と小さく言ったのだ。

声が聞こえなくとも、あの目がそう言っていたのだ。

「………さじ」

わかってしまった。彼が何を考えているか。自分に何をしてほし

いのか。

わかってしまった。

「ごめんな、サジ……………」

悲しげな瞳は森の奥へと注がれる。その瞼がそつと閉じられ、持ち上げられ。水色の瞳にはもう、目的を果たすこと以外の思想と感情は全て捨て去られていた。

決めたのだ。自分が何をすべきか。

約束のためではない。友情などという生ぬるい情のためでもない。人を脅かす、ムシへの憎しみのためでもない。

……………私は、お前を殺そう、と。

「お前が死んで多勢が死ぬのと、お前が死んで多勢が生き抜けるのと」

そんなの、比べるだけ無駄だろ？

水色は腰に下がるナイフと短剣に触れた。

「本当、数字っていうのは薄情でいて適確だ」

触れた二つのうちから選んだのは、古い装飾のしてある短剣だった。水色はそれを馴れたように握りしめ、行くべき我が道を睨み据える。

\*

垂れ下がる木の枝や木の葉を払いのけ、ずいずいと進みゆく先にあの少年の背が見えた。首から大量の血を流し、それでも彼は友との約束を口にし続け、歩き続け……………。

「サジ」

カイは、小さく声を向ける。

「喜べ。お前を、……………殺しに来てやった」

少年の肩はぴくりとゆれた。

無情で無色な言葉に、少年は何も返そうとはしなかった。ただ、おかしいな笑いを浮かべ、血走らせた目を水色に向け悲しげに鳴くよ

うな声を漏らす。

「お、れ、……………生きるんだ、……………生、き、て…また、一緒に、  
いたずら、ら、して……………、生き、なきや」  
「無理だ」

「……………いや、だ。生き」

「お前は死ぬ。そのムシの寿命に殺されるか、私に殺されるか。ど  
ちらにしても死しかない」

「おれ、は、生き」

「もう、お前の“時間”、無いんだろ？」

本当の時間。大切な時間。

びたり

少年は止まった。そして、小さく笑う。

「……………」

カイの唇はまっすぐに引き結ばれた。

その刃先は少年へ。

直線を経て、その心臓へ。

水色に迷いはなかった。そして、あの少年にも、もうそれを避け  
て逃げ切るだけの体力はなかった。

びゅつと、カイの耳にわが身が風をきる音が聞こえた。

だから気付かなかった。後方から聞こえてくる、木々を避け、草  
草を踏み荒らしく来る者の音に。

「やめるおおおおおおお！！！！」

……………

あたりは静寂に包まれた。

のろのろと、ゆらゆらと身を揺らすサジを背に、飛び出してきた  
ウリコが立ちふさがる。大きく開いた腕は、それ以上水色がわが友  
に近づくことを許そうとはしなかった。

「……………」

カイは何も言わずに彼を見た。

「だめだ、やめろ…………、やめて、くれ…………」

ウリコは眼に涙をためる。

「じゃまだ」

カイは一言、そう言った。だが、少年はかぶりを振り、その言葉を聞き入れようとはしない。

「サジ、聞こえるだろ？ まだ、間に合うはずだ。…………全部、…………まだ、大丈夫だって、いつものお前なら、それくらい、何ともないって…………なあ、言ってくれよ」

ウリコは背にかばう友へと語りかける。

後ろから息も切れ切れに、「生きる、生きる」と聞こえてきた言葉は、少年の涙にさらに拍車をかけさせる。

「昼飯、まだ食ってねーじゃん。…………おれ、もう腹減ったって。

…………ずっと不機嫌で態度悪かったから、からかってんだろ？ ンでさ…………また、その余所もんと組んで、俺を笑ってやるうって、そういう、作戦だろ」

「…………もういい」

「つくそ、…………さすがにここまでやられたら、俺だって、少しはビビるっつっつの」

「…………もういいだろ。どけ、ウリコ」

「いやだ…………。俺は、こいつを村に連れて帰る。連れて帰って、飯食って、食堂で時間つぶして、飽きたらまたふらふら外に出て…………」

…………  
「また、また、」と少年はうつむいた。涙は止まることがなく、その唇は震えていた。

「なあ、サジ…………っ、…………ぐ」  
ウリコの表情がゆがむ。

その首には、血で染まった指と、紫色に変色した爪が食い込んでいた。

「いきる、いきる」と呟きながら、渋い緑の髪を持つ少年は自分の友人であった彼を締め上げる。

「……………っ、つか、…サ、ジ……………」

ウリコは首に食い込む指に、自分の手をあてた。だがそれは大した抵抗をすることもなく、このまま友に殺されるか、我が生にしがみつくなかの合間で迷っているようにも見えた。

「や、く……………そく」

サジの唇が、小さく動く。

『約束』

「……………」

カイは動いた。

意識もおぼろになりつつあるウリコの横を通り過ぎ、無防備なサジの後ろに回り込む。

「やく、そくを、」

『やくそくをしたんだ』

「……………ああ、そうだな」

すべての音が消えたかと思った。

時間がいつもより少し遅く流れて、草木の揺れも、雲の流れも、すべてがまるでゆっくりで……………。

「……………っが、はあ、はあ、はあ、はあ……………っ、かつ、っほっ、

げほ、はあ、はあ……………っ、」

ウリコの体が地面に転がる。

荒い息を繰り返し、何度となくせき込み。

そして…………… その後ろには。

カイは手に伝うぬくもりを確かに感じた。

前にした少年の背。ほんの少し、こちらへと動かされた頭。揺れる緑。

充血した眼、口元かに伝う血、ウロコに覆われた首筋。

渋い緑色をした瞳は、わが背に感じる水色を視界の隅にとらえ、

そつと微笑んだ。

「ありがとう」

水色は顔を上げない。

だが、その言葉に小さく口元を緩め、いつもの声音で、いつものように返す。

「お前、演技下手すぎるんだよ」

どさり、と草草の中に少年の亡骸が倒れこんだ。

カイは手にした短剣をぎゅっと握り、それを見下ろす。

赤い皮膚。がさがさのウロコ。その中に、うねうねとぐぐめく異質な生物が姿を現した。

それは短剣の突き刺さった場所から這い出てきて、逃げるかのように地面を張って、真つ赤な線を地面に作る。

蝸牛のような外見。だが、背に背負っているのは貝殻ではなく、どくどくと鼓動を繰り返すこぶしほどの肉の塊。それは自分の想像以上に大きく、想像以上に鮮やで新鮮な赤をしていた。

水色は何も言わず、何も感じようとせず、逃げ去ろうとするそれへ、腰へ下がるナイフを投げた。

ぎいっ、という声を発し、ヤドリウシは絶滅した。その背に背負った肉片の鼓動も止まる。

「お前は、何も悪くない」

カイはムシに突き刺したナイフを回収する。

「……………サジ」

地面を這い、わが友の亡骸へと腕を伸ばすウリコ。からからに乾いた彼の声には悔しさと悲しみが色濃く混じっていた。

「ウリコ」

ウリコは困惑した表情でカイを見あげる。

「立てるか？」

カイは、手を差し出そうとはしなかった。だが、その瞳は手を貸せるものなら貸してやりたいと告げていた。

「……………ああ。大丈夫だよ。これくらい」

「サジに比べたら、全然……………」。

その真つ黒な瞳には、怒りと、悲しみと、だがどこかにあった諦めとが渦を巻いていた。

「……………なあ、ウリコ」

「……………」

ウリコは口を閉じたまま、生意気で、旅人で、実は女な水色を見た。その手には真つ赤に染まった短剣を握ったまま。

カイは、表情をあまり表に出すことなく、以前は“サジ”であった少年の軀を見つめる。そのまま少し、口を開けずにじつと立っているだけの時間が続いた。

やがて、ぼつりと口は開かれて、感情の見えない口元は小さく動く。

「……………私を、殴っていいぞ」

ウリコは、自分より頭一つ分背の低い水色を見下ろした。彼の瞳は、幼いころからの親友と、その中にいたであろうムシと、水色に握られた短剣とを順々に映し出した。

何かがポロポロと、自分の頬から落ちていく。

それは涙ではなく、蛆のような小さなムシだった。滑り気のある表面が、沈みかけた太陽の元、きらきらと輝いてきれいだった。

「……………止めておく」

薄暗かったはずの森なのに、実はちゃんと陽の光も入っていたんだなと彼は実感する。

少年は木々の合間から見える真つ赤な空を見上げ、堅くひき結ぼうと思っていた口を、ゆつくりとためらうように開いた。

「……………」

大声で泣き出す少年と、その頬を伝う涙、そして小さな命たちの死骸。

カイは俯き、前髪の下に水色の瞳を隠した。

その横で、渋緑色の髪を持つ少年の形をしたそれは、見慣れた優

しげな表情に、満足そうな頬笑みをたたえ笑っていた。

『俺を殺すかどうかは、保留にしてくれていい……………』

「何が保留だ……………」

(……………こうなる事を、あの時にはもう分かっていたくせに)

少年の泣き声は、静かな森にしんしんと響き渡っていた。

\*

宿に戻ると子供がいた。

真っ黒な髪、真っ黒な真ん丸な瞳を水色へと向け、そこに立ち尽くし呆然としていた。

村中大騒ぎだったらしい。

突然自分たちの皮膚から得体のしれない虫が転げ出てきたのだから当然だろう。だが、引いていく皮膚の痛みとその虫を見て、皆「まさか」と思ったらしい。

この病から解放されたのではないかと。

仁王立ちのレータへカイは尋ねる。

「レイシャさんは？」

「……………隣の、じいちゃんのこと」

彼はぼつりとそう言った。

「そうか」と答え、カイは二階へ上がる階段へと向かう。だが、その服の裾をつかまれ、ぴたりと動きを止めた。

「カイ、ごめん。俺……………」

一瞬、なぜかこの子供に、サジを殺したことを言割れるのではないかと思ってしまう、カイは目を見開いた。だが、すぐに察する。この子が彼のことを知っているはずがない、と。きれいに洗ったこの手が、先ほどまでどんな色をしていたかなんて、想像にもすることはないだろう、と。

(この間の、「助けてくれ」ってやつの話か)

カイは少年の頭に手を載せる。

「こつちこそ、ごめんな」

どうやらレータに寄生していたヤドリウシも死んだらしい。床にはいくつか、その死骸が見られた。

だが、その中の一つにおかしなものを見つけた。

貝殻ではなく、小さな肉片を背負ったカタツムリのような虫。

「オヤウシ……………」

カイは言葉をのむ。

まさか、次のオヤヤドシはレータだったとは。思ってもいなかった。

まだもぞもぞとうねっているオヤウシの子供へ、水色は無言のままナイフを投げる。

トン、と音をたてて床へ突き立ったそれを見て、レータは不思議そうにカイを見上げる。

「なんでもないんだ」

カイは静かに素晴らしい、ナイフを拾い上げる。

「カイ、まだ怒って……………」

「いいや」

違うよ。私こそ、本当悪かった。

そう言い、もう一度黒い頭に手を乗せ、ぼんぼんとなでてやった。レータは声をあげることなく泣き出した。悲しみの涙ではない。

安心の涙だ。

ぐずぐずと泣き出す少年の前に、カイは「男だろ？」と苦笑する。できるなら、今は涙より混じりけのない、喜びだけを浮かべた馬鹿みたいな笑顔をみたい気分だった。だが、そんなのは自分ひとりの都合でしかない。

「いつまでも泣いてちゃだめだぞー」とからかうような軽い言葉を残し、カイは荷物をまとめに二階へと上がった。

部屋につくと獣がベッドに寝そべりこちらを見ている姿が目に入る。

彼の尾はシーツの表面をなでるようにゆっくりと左右に揺られて

いた。それは、獣が何かを検索しているときに見せる、考えている時の動作だ。

カイは茶色い瞳の先にある、わが手を見て苦笑した。

「もう、お見通しか」

その手で獣の頭に触れて、わしゃわしゃと温かい毛並みをかき乱す。

「ただいま」

水色の手を拒むこともせず、獣はただいつもの瞳で彼女を見上げる。それを見て、小さく微笑えもうとした口元は一瞬で消え今にも泣き出しそうな表情に変わった。

カイはベッドに腰掛け、獣の毛並みに顔をうずめた。

泣きはしない彼女を灰色の獣はただ受け入れて、気が済むまでそこでおとなしく待っていてくれた。

日が沈み、暗くなり、それでも今日の村は家々のともしびが消えることなく賑やかだった。

\*

真つ青な晴天。

村と森との間にある、小さく小高い丘。

そこに一つの小さな塚ができていた。

「でも、それでも、俺はあいつに生きてほしかった……………」

この村を死に追いやる存在。そう分かっていったのに。ウリコは緩めに抱えた膝に顎を乗せた。

「お前の前にも別の旅人が来たって、知ってるよな。そいつは、この村の様子を見てすぐにサジがオヤウシの宿り主だって気づいた。

それで、……………それで、おれはサジと図ったんだ。サジははじめ渋ってたけど、俺がなんとか説得して、二人で、……………図ったんだ」

隣の少年の声が震えている。

カイは黙って、正面に突き立てられた木片を眺めた。  
風がさわさわと、その根元に手向けられた花々を揺らす。

「まず、サジがそいつを村から少し離れた場所に呼んだ。村の人たちをこれ以上困らせたくないから、とかなんか言って、旅人に自分をここで殺して欲しいって誘導したんだ。それで、俺は先回りをして二人が来るのを待った。その場所についたら、サジがナイフを取り出すんだ。『父さんの形見の大切なナイフだから、これで殺してくれないか』ってな。旅人はそれを受取るうとサジへ手を伸ばす。けど、サジはそこで迷ったふりをして少し身を引くんだ。旅人がそこでためらって動きを鈍らせた瞬間……俺は、それを後ろから狙う……」

「……作戦成功ってわけか」

「ああ、」

では、あの森の中に見た軀むくろは、やはりその旅人だったんだな、とカイは納得した。

「ってことは、私も危なかったってことか？」

もし表ざたに「この村を助けよう」とでも公言していたのなら、殺されていたかは知れないが、命の危機の一つや二つはあったかもしれない……の、だろうか。

カイの視線に問われ、ウリコはさっと視線をそらした。

「まあ、なんだ。そりゃ、少しは警戒したさ……」

齒切れの悪い言葉だ。

カイは眼を座らせた。

(こいつ、もしあの時レータとのやり取りで出くわしてなかったら、本気で私を殺しかかったな)

「……っ！　なんだよその目?!　外から来た人間を警戒するのは当たり前なことだろ！」

ウリコは慌てながらも「俺は悪くねえ！」と開き直った。

カイは呆れて言い返し、それにまたウリコの喧嘩腰な返答が返る。その後ろではのんきに大きな欠伸を獣がかき、風に揺れる草草が彼

のひげを揺らしていた。  
そののどかな風景を、一歩手前に作られた少年の塚が眺める。

\*

宿の少年とは仲直りができた。

丁度代替わりだったという時期もあり、自分の体にはムシの卵がついていないということもわかった。

最後にこうして“彼”に花をたむけ、一緒に村を眺めることもできた。

もう、心残りは無い。

風がぶわりと大きく吹いた。気づけば後ろの獣も起きて、いつでも行けるようにとお座りをしていた。

日向ぼっこももう終わりだ。

カイは言葉なく立ち上がる。ウリコは彼女を見上げ、「行くのか？」と尋ねた。カイは「ああ」と答える。

持ち上げた腰を軽く叩き、水色はこの村の少年へと「じゃあな」と告げる。少年も「じゃあな」と全く同じ言葉を返した。

そして、水色の瞳をもつ眼は優しく細められ、正面に立つ少年の塚へと微笑んだ。

「じゃあな、サジ」

お前はこれで、満足……………なんだよな。

風は吹く。

旅は続く。

\*

それは小さな村だった。

ヨウは森を抜け、小さな丘からその村を見下ろす。  
のどかで、何もなさそうなありきたりな村。

「まあ、休むには丁度いいか」  
彼は歩き出す。

さわさわと風が草を揺らし、暖かな陽光が柔らかく大地を照らしていた。

少年の塚は、その村より一足先に、あたらしい訪問者を歓迎する。

## 20【治せる病】（後書き）

ここまで付き合っていたいただき、誠にありがとうございました！  
何だかんだでちゃんと話の最後まで見通しがつきました。ですが、  
クリスマスだ年明けだでやっぱり更新は難しくなりそうだったりす  
るんですね・・・（A、）チエ

それに、ある程度全体の流れを書いてから見直してそれから投稿し  
たいと思ったりもしました。気分で

と、言うことで、2月くらいまで更新は先延ばしになりそうです。  
ここまで読んでくださった方、本当に感謝しております。

こんな事を言っただけなんですけど、もしかしたら次の更新は3月とか  
になるかも知れなかったりもします。でも気分によっては早く描き  
終えて1月中にでも更新してたり・・・？

はい。ようするにぶっちゃけ未定なわけです。

いや、そんなに熱いファンがいるわけでもないし気が楽には楽なん  
ですけどね（笑）・・・（涙）

まあ、気ままにやっつてこうと思います。

つてことで、これからもよろしくお願いします！

## 21【村で町で国だった町の牢屋にて】

俺の前には幾つもの鉄の棒。

さび臭く、そしてどこかじめじめしている。

正面には薄汚い服を着た男が、俺に見せつけるように、手にした鍵をちらちらと燭台の明かりを反射させて遊んでいた。

「その鍵はなんだ？」

俺は尋ねる。

「この牢屋の鍵さ。どうだ？ あんたいるか？」

男は答えた。黄ばんだ歯をむき出し、にんまりと笑っている。

「なんで俺がそんな鍵を欲しがる」

「なんでって、この鍵があればいつでもこの牢を開けたり閉めたりできるだろう。まるで我が家のように」

「こんな我が家ごめんだな」

「まあ確かにだ。けど考えてもみる。雨風は凌げるし、食事には困らない。生活するには十分な設備だと思わないか？」

俺は呆れた。面倒臭げに息をつく、鍵を持った男は「がはがは」と笑った。

「おいおい。まさかここで寝るとかいい出さないでくれよ。話相手がいなくなったら俺がさびしくなっちゃう」

「“寝る”はしないが、“帰る”はするかもな」

男は俺をなだめるように両手を軽くあげた。

「悪かった悪かった。まあなんだ。気をそんなに害さんでくれ。俺もちよつと話したいだけなんだ」

男が椅子に深く腰かけなおすと、「ぎいいいい」と木の軋むような音が牢に響いた。俺は冷たい地面に腰かけたまま、その様子を僅かながらに眺める。

「さて、旅人さんとやら。“ヨウ”だったかな？ 呼び捨てでも構

わないか？」

「ああ」

別に何でもいい、と言わんばかりの態度に、鍵を持つ男は苦笑した。

\*

「ヨウはこの町に来たばかりだってな？ まさか一日目からこんな場所に来るはめになるとは思ってもいなかっただろ？」

「まあな」

「牢屋は初めてか？」

「別に」

「だと思っただぜ」

男はさも面白そうだった。

ヨウはその男を格子越しに眺める。

「なあ、ヨウ。この町について聞いてくれ」

「好きにしる」

なら遠慮はしねえ、と男は思い出すように話を続けた。

「この町はな。昨日まで国だった。そんでもって、一昨日までは町だった。さらにさらに、町の前は小さな町、その前は古い古い村だった。村人から小さな町の人になり、さらに町人となった人々は、昔に比べはるかに栄え、賑やかになったこの町を、国にしないかって話し合っただ」

男はカギを弄びながらつらつらと話し始めた。きつと長い話になるのだろうな、とヨウは胡坐をかき、手に顎を載せる。男はそんなヨウへ、笑顔もそこそこに、わずかに神妙な表情を混ぜながら口を動かす。

「話はとても慎重に進められた。決まりを作り、国としての在り方や、国に必要なものは何かを考えた。そして、幾つかの“位”を作ることになったのさ。さて、ヨウ、わかるか？」

ヨウは深く考えようとしめない。ただ出てきた言葉を面倒くさげに出した。

「ジャックに、クイーンにキングか？」

「おお！ その通り！ だがクイーンはいない。『キングは大眾のためにあるべき』と考えた町人は、王は国にいる者全員を愛するべき、って決まりを作ったんだ」

「そりゃいい。平等の愛って奴は誰もがほしがる」

ヨウは適当な声音でそう言った。

男は苦笑する。

「その通り。で、問題はそのキングだった。王を誰にするか。国を支える人間をどう決めるべきか、話はすぐにまとまったさ。………推薦と立候補だ。そして多数決。決まり次第選ばれた人間は王となり、この国のためにあるべき決まりを一つ、玉座の上で声高らかに宣言、表明することになっていた。立候補をする者はたくさんいたさ。そして推薦される者もな。“ドリツシュ”、その男も、そうだった推薦された者たちの中のほんの一粒でしかなかった。家族や友人、仕事の仲間たちから押されていたそいつは、気付けば見も知らずの人間からも押され、支持されるようになっていた。おかしな話だ。本人は、王様になりたい、なんて一言も言っていなかったのにな」

男は格子の向こう、ぴくりとも動かず、まるで眠ってしまったているかのような若い旅人へ視線を送る。

男からすれば、彼が眠つていようと、別にきにはならない。話すための対象物があれば、ただそれだけで男の気分は満たされた。

「一体どんな気分だろうな、それは。………喜びか？ 優越感か？

その男が玉座に近づくとつれて、一握りの嫉妬はとても大きなものになって行ったさ。男は命を狙われた。そして、それは家族や、近い人間達へも被害が及んだ。その中でどうやって男は安息の時間を手に入れたものかねえ。多数決は最後、5人の中から選び出すことになった。その時、ドリツシュという男を含め他の4人もぼる

ぼろだった。周りからの嫉妬、期待、恨み。そこまでどう昇り詰めてきたかにもよるが、まっとうな方法でその場に残った者、自らの手も周りの手も汚れさせてなんとかその場に残った者、経緯なんて関係なく皆疲れ果てた表情を浮かべていた。誰もかれも、親族の中に少なくとも一人は死人が出ていた。親しき友も、兄弟も……対立しあう派閥の中で、そんな人間は格好の餌食だったからな。王になれなかった者達の恨み、自分の夫が選ばれなかつたかという女の一方的な恨み、名前が気に食わないからという些細な理由からも。支持対象でない王候補を傷つけるためなら、皆、何でもやったさ。だがな、そのほとんどは身体的な傷じゃあない。精神的な傷だった……

……」  
男は椅子の上、顔を手で覆い、疲れたように吐息を洩らした。とても疲れたように、顔をまるで水で洗うように、ごしごしと空の手で擦った。男がそれですつきりしたのかは知れないが、話はまだ続く。

「……最後の5人からは、3人が選ばれた。ドリツシユも、哀れなことにその中の一人だった」

ヨウはつむっていた瞼をわずかに持ち上げると、「王は一人じゃないのか」と訪ねた。眠っていたと思われる客人が、ちゃんと話を聞いていたことを知り、男は表情を崩しながら「ああ」と頷いた。

「王は一人だ。だが、多数決はこれで最後だった。……3人は、

「力」をみせつけると言われたのさ」

「力……」

「ああ……。王は“使い”であるべきだと、誰の口からもそう言われてたのさ。それも、この町一番の“使い”であるべきだ、つてな。3人は困惑したさ。なにせこうなることは誰にも伝えられていなかった。しかも、まさかそれが「殺し合い」だって事ならなおさらだ」

「じゃあ、その三人は大衆の“見世物”にされたってわけだな」

卑屈と嘲りの混ざったその言葉に、鍵を持った男は首を振った。

「3人はなあ、もつと別な方法を取ろうと言ったんだ。今までどおり多数決でも決められるんじゃないかってな。なにしろあんたが言うとおり、このままではただの“見世物”のようになってしまうと身の危険を感じずにはいられなかったからな。……まあ、3人つて数の中に入っちまった以上、やつらはもう充分に危険のど真ん中にいたわけだが……。……大衆は納得しなかった。力をみせつける、王は強くあるべきだ、って、みんなして繰り返しやる。3人はどうしようもなくなったさ。……そして、その男は、ドリツシュは、ある提案をした」

「なにかわかるかい？」そう訪ねてきた男は、初めのようなにんまりとした笑みは浮かべていなかった。ヨウに向けられているのは確かに笑み。だが、そこには明らかな悲しみのような複雑な感情が抱かれていた。

ヨウはまた、適当に答える。

「さあ……。……、ジャンケンでもしたか」

「おしいな」

男は沈んだ声音で笑った。

「くじさ」

しんと静まった監獄に、その言葉はいたずらに響いた。そこに帰るのは、ヨウが鼻で笑う音。男は構わず続ける。

「何も書かれていない紙を引いた二人は、即刻家へもどり身支度をし、家族もろともこの町を追放しよう。そして、印の書いてある紙を引いた一人がこの町に残り、王となり国を支えよう、と。……」

交渉し、説得したのさ、ドリツシュがな」

「なるほど。……で、被害はおさえられたか？」

「いや」

男はたんたんとしていた。鍵をちらちらと灯りに照らし、その光を伏せがちな目で追う。

「クジのことは、なんとか話を通った。だが、印の付いた紙を引いたのはあの男、ドリツシュだった。他の二人は即刻町を出ようとし

だが、……おかしいんだ。話が違った。……追放、約束したのはそれだけのはずだった。なのに、なのに……。……おれはなあ、捕まえて、王になる権利を取り上げるだけでもいいと思った。だが、最近耳にした話じゃ、家族もろとも死刑と来た」

話の途中、男は頭に血が上ったようにも見えた。だが、自身の力でそれを抑えると、彼は両手で顔を覆い、弱弱しく言葉を吐き出した。

「そりゃ刺激的な話だな」

ヨウは、そんな彼へ慰めをくれてやる様子もなかった。だが、ここに嘲笑っている色もない。言葉は淡々と、ただあるままに告げられていた。男は鼻で笑う。

「だろ？ だが、二人の内一人は、なんとか逃げ延びた。家族がつかまり、恋人が目の前で殺され、そいつは、明日から王となるという男に会いに行き助けを求めた。ドリツシュは王になる準備で、役所の一室に閉じ込められていた。滑稽な話だ。王になる人間が、あわや軟禁されていたなんてな。……奴は驚いた差。町を追放されたはずの同胞が、まさか窓から現れるなんてな。そして、人々の行いにも驚いた。なにしろ“処刑”だ。クジの当たりはずれで、こんなにも極端な扱いはないだろう。……いや。どこかで3人は気づいていた。だから“追放”を望んだんだ。家族も共に、安全な場所へ逃げたいと、誰もがその時そう思ったはずだからな」

いつの間についたのか。外はまだ明るいが、日の位置が変わり、入り込んでくる明かりが少なくなった。そのため、この一室に限り明かりが灯っていた。他の誰でもない、ヨウが点けたモノだ。

男の後ろで静かに火をともし蜀台がゆらゆらと揺らめく。

「ドリツシュは、逃亡者であるその人物が生きていることが知られてはならないと思えば、彼をかくまった。そして、町から国となる明日、浮かれ気分の民衆なら、きつと一人くらい外に出ても気づかないかもしれないと、賭けてみることにした」

揺れるのは炎か、それともその男自身か。

「次の日、ついに王が生まれ、町が国となる日、逃亡者の彼は無事逃げ切ったよ。そしてその男は、ドリツシユは、玉座に座った時の第一声、王の表明を何にすべきかも、もう決めていた。その男は、もうその時、家族も親しい友もいなかった。みな、多数決で敗れた者や、その関係者に殺されてしまっていた。だから、もうそう言ったことがないようにするのが、彼の何よりの希望だった。

さて、ヨウ。あなたなら何を命じる？ 国となって初めての決まりだ。国民は皆、それを守らなければならない」

男は今にも泣きそうな顔をしていた。

ヨウは僅かにあざけ笑い、口を開く。

「皆仲良く、とでも？」

男も軽く笑った。

「ああ、それもいいな。だが、その男の第一声はこうだった。『私は王になった。そして今、この声を聞く大衆たちに命じよう』」

『この国を、国とすることを禁ずる』

「『王を二度と作らないことを、私は望む。何故、王が必要であるうか。今までの町のままでも、十分に暮らしては豊かであられた。それがなぜ急に背伸びして、無理に王をきめようとするのか。この地に王はいらない。そして、これから王権を作ることはない。今までに話し合い、作られ準備されてきた“位”も必要ない。今日から、この国は“町”となる。そして“王”という頂点も消えるだろう』」

「そりゃいい。大胆な発想だな」

「ああ。そして“王”は無くなった。国もなくなった。王は玉座から立ち、王冠を外した。そしてその瞬間、兵士や従者で無くなった、ただの町人達から取り押さえられた。なにしろ皆、納得できなかっただろうからな」

「へえー」

胡坐をかくヨウの左手側。奥の方からコツコツという音が響いてきた。

「なあ、ヨウ」

そして、それは音だけでなく影となり、そして、近くに近づくとつれ、一人の細身の男であることがわかった。細身の男はこの町の役所の人間である印のバツチを胸につけていた。

ヨウは顔をあげる。格子の向こうには、あの男。

男は不安げな視線を向け、真黒な不精ひげには似合わない真っ青な瞳に涙を浮かべてた。

「……………俺は、俺の家族や、親友や、親族達の犠牲を、無駄にはしていないだろうか」

こつこつと、役所の者は距離を縮めていることを靴音で知らせる。ヨウはその真っ赤な瞳をその真っ青なにむける。牢の中にいる男からも、フードをしているその旅人の、赤く燃える炎のような瞳が見えた。

若い旅人は尋ね返す。

「あんたは、できる限りのことをしたんだろ」

それは半ば、疑問というより確信めいた言葉だった。

ボサボサな不精髭の下、薄い唇が少し驚いたように開かれる。そして、それはすぐにゆるい弧を描いた。

役所の人間であるある男は、ヨウに軽く会釈をし軽く眼で何かを訴えた。フードをかぶった頭は、一度縦に振られただけ。それを見て、役所の彼は一瞬目を見張り、唇を「なんで」と動かした。音はない。もちろんそれは格子の向こうにいる“彼”にはみえていない。役人は牢のカギを開け、罪人である男へ告げた。

「ドリッシュさん、準備は出来てますか。……………執行の、時間です」

“ドリッシュ”はのそりと立ち上がると、若い役人の前に立ち、低く、だが満足げな声でこういった。

「ああ、……………そうだな」

俺は、自分にできる精一杯のことをしたのだ、と。

「時間が流れるのは早いもんだ」と、話はじめたころとあまり変わらないとぼけた調子で、ドリツシュは開けられた牢の中から出てきた。役人は口を引き結び頭を下げる。

罪人であるはずの男への、その突然の行動は、普通ならとてもではないがありがたい光景だ。

「なんだあ？ 役人さん。俺を誰かと勘違いでもしてんのか？」

ドリツシュはわざとらしく驚き、そこにがはがはという笑いも付け足す。

役人は頭を下げたまま、じつと、真面目な面差で床の敷石を見つめている。

「いいえ……………これは……………。私なりの、敬意です。……………私もあなたを、……………あなたを指示していた人間の一人でした。……………いえ。今もそれは変わりません……………決して、変わることはないのです……………」

役人の声は、他の誰にも聞こえないようにか、それともほかの感情からか、とても小さく押し殺されていた。

ドリツシュは目を細め、暗闇に溶けてしまいそうな深い声で「ありがとう」と言い微笑んだ。

その言葉に役人はギョツと目をつむり歯を食いしばる。しばしの沈黙の後に頭をあげた彼の表情は、まるでたった今の出来事を忘れさせるかのように、悲しいくらいに歯切れよく切り替えられていた。「さあ、行きましょう」

背筋を伸ばし歩き出す役人の後ろ、ドリツシュはそのそとついて行きながら、ヨウを振り返った。

「これ、渡しといてくれねーか」

カシャン、という音をたて、ヨウの手に投げられたのは先ほどからあの男が手にしていたカギ。

「結局使わなかったからな。あいつによろしく頼むぜ。      じゃあな」

男は軽く手を振ると、またいつでも会えるかのように笑顔でそう

言った。

「じゃあな」

ヨウも同じように返し、牢屋の前の通路の上腰を上げた。去っていく男の背を見つめ、彼はつばやく。

「あんたみたいな奴、嫌いじゃない」

ヨウは、もうドリツシュと役人の影が見えなくなった通路の奥とは正反対の方向へと向きをかえ、つきあたりの階段を上り、日の光の射す出口を目指した。

彼がいなくなるとともに、牢の中の蜀台から灯が消え、そこを闇が占領した。

\*

外に出て町を歩き、高い壁の途中、町の外へと続く門を抜けると一人の男が待っていた。黒いローブで身を包み、顔を深く隠している。

「あの人に会えましたか?!」

男はヨウを見つけると、獲物に飛びかかるように尋ねた。声はまだ若い。20〜30代であることが想像できる。

「ああ。役人で、手を貸してくれた奴がいたからな。……………これ、あんたにだ」

ヨウは、先ほどドリツシュから渡された鍵を取り出し、「あんたのだろ?」とローブに身を包む真つ黒な男へと手渡した。

男はそれを受け取ると、「まさか」と言わんばかりに蒼白な顔をし、頭をあげた。

「これを渡して5日経つというのに……………。あの人は、逃げなかったと言つのですか?」

「ああ」

「なぜ……………、そんな……………」

「もう死刑は始まっているんじゃないか？」

ヨウのその言葉のすぐに、町を囲む高い壁の向こうから高い歓声が上がった。

その歓声にローブの男は蒼然とし、震える手で顔を覆い、がくりと力なく地面に膝をついた。

「……………だから、だからあの人は沢山の人々から支持されて、……………」

「それは、あんたも同じじゃないのか？」

ドリツシュと立場は同じ。彼もまた、最後の3人に残った一人だったのだから。ただ、ドリツシュと違ったのは、当たりくじかハズレくじかということだけ。

真黒な男は手だけでなく、声も震わせていた。

「そうかもしれないません。でも、あの人は、人が良すぎた……………。そして、失いすぎた……………」

「あんたもだ」

「……………そうですね。そうかもしれない。でも、あの人は早い段階から、大切なものを無くしすぎたんだ。家族や親友を……………親族という親族も……………だから、もう、心残りなんて作る理由もなかったかもしれない……………。あんなおかしな罪を、……………まさか……………まさか受け入れてしまうなんて……………」

ローブの男が向き合う地面、ぼつぼつと黒い染みができていった。雨など降ろうはずもない晴天。

町からはがやがやと賑やかな声上がる。そして一瞬の静まりと、何か落とされる重く素早い音。その後も続いた何拍かの静寂の後、先ほどよりももっと大きな歓声が一斉に上がった。まるで盛大なお祭りだ。

皮肉としか言いようのないこの天気にも、町のにぎわいにも、ローブの男は顔を悔しげにゆがめ、大粒の涙を流す。

ヨウは町を背にし、幾らか歩きだした。そして、ローブの男を少し通り過ぎた所で足を止める。

「あんたはどうするんだ？」

聞いたところで別にどうすることもない。だが、ただなんとなくそう尋ねてみた。

膝をつき俯いたまま、男は、一瞬返答に困ったようだった。

だが、もう決めたのだと、自分に言い聞かせるように口を開く。

「……………私は、行きますよ」

唇を噛み、悔しさも、怒りも、恨みも、すべてを飲み込んだ言葉。「故郷だろうが、家族が眠る地であろうが、もう、この場所にはいけないんだ。俺にも、俺を支えて犠牲になってくれた人間がたくさんいる。そのためにも……………」

家族、恋人、親友。今は亡きたくさん大切な人々を思い浮かべ、彼は最後にこういった。

「俺は、気づいたんだ。人は何よりも、自分のために生きなければいけない。……………俺は、俺のために生きる。俺が信じた方向に……………進む」

ヨウは振り返るそぶりも見せない。だが、一度下を向いたような動きをし、もう一度前を向くと、わずかに首を横に向け、男に返した。

「ああ。それもいいかもな」

横を向いた若い旅人の口元が、ローブの男には笑っているように映った。「じゃあな」と言い残す彼へ、ローブの男は見えないとわかりながら手を振った。

「私は、私だけの王であり続ける。それが、私にできること……………」

強い決心にもた眩きをこぼすと、男はしばらく壁の前に立ち、亡くなった元国王へ黙禱もくとうを捧げていた。

その町は、今も町であり続ける。

これからも、この先も

21【村で町で国だった町の牢屋にて】（後書き）

久々の更新です。3月には更新すると言った割に、なかなか時間がとれなかったのが事実というかなんというか。

いや、本当申し訳ないです。

ある程度完結まで話はできているんですが、まだまだ手直しをしている最中です。次の更新がいつになるかはわかりませんが、全体的な手直しがすみましたら毎日更新したいと思っています。

それまで気長に付き合っていたらただけると幸いです。

## 22【双子の話】

それは随分と昔の話だった。

自分が6つから7つになる頃。弟が、6つから7つになるかと思われた頃。

その日はざーざー降り of 痛い雨。ものすごく強い風に、稲妻が煩く真つ暗な日中。

その日はいつもそんな天気だ。

私は見慣れた川をじっと見ていた。どうしたらいいか判らず、どうする事も出来ず、ずっと、いつもの穏やかな流れとは違う、恐ろしい表情を浮かべる川を見つめていた。見つめたところで、どうにもならないと知りながら、ずっと、ずっと……見つめていた……

\*\*\*

人々が見つめる中、一つの大きな木箱を担ぎ、男の大人たちが険しい表情で荒れ狂う川に近づく。

木箱は壁に当たれば跡形もなく砕けてしまいそうな、そんな簡素なつくりをしていた。それは何を目的に作られたものなのか。この村の者たちは、誰もわずもがな、皆知っている。

ばつばつと雨粒が箱を叩き、風が箱の隙間を通り、びゅーびゅーと音を立てていた。まるで何かをせかすように。

村長であろう男が、その箱の横に立つと、険しい中にわずかな憂いの色を浮かべ、左手で箱に触れた。右手は握りしめられ、村長本人の胸へとあてられる。

その時村長は口に入ってくる雨も構わず決まった言葉を口にしたが、タイミングよく近くに稲妻が落ちたせいで、何一つ皆の耳には届かなかった。

短な台詞が済むと、長は箱から手を放し、それを担ぐ男たちへと目くばせした。男たちは静かにうなずき、川へと箱を放った。

箱が姿を消すのはあつという間だった。大きな流れに呑み込まれ、その中身が無事なのかどうかも確認できないまま、人々の視界の中から消えてしまった。

そんな中、少年はじつとその箱を探し、川を眺め続ける。水分を含みに含んで水を流す己の前髪など目に映ってないかのように、必死な様子で視線を走らせていた。

もしかしたら、自分が耳にしていた音のどこかにあの木箱が弾けて壊れる音も混ざっていたのではないのか。もしかしたら、あの声が最後に自分を呼んでいたかもしれない、と、空しい絶望に駆られながら、目を見開き、耳を澄まし。

彼はただ、必死だった。

\*\*\*

私はあの時、見えた気がしたんだ。いや、実は見られていたのかもしれない。

木箱が川へと運ばれる時、木箱が川へと入れ流され消えゆくまで、ずっと、ずっと。

簡素な板と板の隙間から、深い紺色の大きな瞳がじつと私へ向けられていたような、自分の視線と、それが絡み合ったような。そんな……、そんな気がしてしまうのだ。

もしかしたら本当に、ずっと……あいつは、川に食われる最期まで、……箱の中から、私の事を見ていたのかもしれない。恨みも後悔もない、純粹な瞳で……ひたすらにずっと。

\*

「えっと、その、……………ありがとうございます。……………助かりました」

カイはフードを外し、着馴れた焦げ茶のコートを脱いだ。その横では静かに大人しく、お行儀よく灰色の獣が座っている。

なんでこうなったのか、なんで自分がこうして何事もなく客人として扱われているのか、この水色には理解できる余裕も情報もない。ただ、初めて訪れたこの村で、初めて出会ったはずのその男に、気づけば示された椅子に腰を下ろし、お茶と菓子を進められていた。

一体いつから建っているのか知らないが、カイは、古くも作りのいい家の天井を見つめ、まったくもって腑に落ちないとも言いたげな表情を浮かべた。

「……………あの、」

茶を含み、もごもごとした調子で水色の瞳が正面に向かい合う男を見つめる。

「何だね？」

男は優雅なひと時でも楽しむように、湯呑に入れられたお茶を啜っていた。

カイはその様子に、今のこの状況に、違和感を抱かずにはいられない。

「えっと、あの。……………あなたは、この村の“長”ですよね？」

「ああ、」

さも当たり前、といった彼の答え方に、カイは更に問いを重ねる。

「……………この、あなたの治めている村は、『物語』を信仰していますよね？」

「ああ、そうだな」

「『化け物』の話もご存じ……………」

「もちろんだとも」

「……………その化け物は？ 何色をしてると伝わってますか？」

「何色………？ 何色、か………。そおだな。丁度お前さんの髪のように、澄んだ水の色をしていたと聞くが、違うかな？」  
まるでわざとらしい。

カイは茶を口に運びながら、その味とは関係なく顔を濁らせた。  
「いえ。私の知る話と大きな違いはないみたいです………」  
これではさも分からない。

自分はフードを外している。もちろん、水色の髪は当然のようにそこにある。この男は、物語を信仰した村にいるどころか、そこを納めている“長”だ。だとすれば物語についても、常人なみの知識はあるに決まっている。

「なのに………」と、カイは内心これから何が起るのか、考えようにも考えられないでいた。

物語を信仰している地域では、この“水色”という色は、絶対の“忌み色”でしかない。少なくとも、カイが知っている場所なら、水色の髪や瞳がばれただけで、役所に届けられ何らかの処分をされるのは当たり前だった。

だが、この男は家に自分を招いた上に、ここ二三日の滞在許可までくれた。そして、その間の宿泊もタダでいいという。

(タダより怖いものはない………)

何より相手は見ず知らずの人間だ。物語信仰という言葉だけでも信用にかけるといふのに、あまりに話がよすぎて怖いくらいだった。家へ招かれた時は、一瞬「処刑されるのではないか」と疑ってしまった。……いや、今も断続的に疑っていると言ったほうが正しい。

「あなたは、この長だというのに、掟をやぶって私を匿おうとも言うんですか？」

カイは冗談半分、真剣さ半分と言った調子で聞いて見た。  
すると長は、不適な笑みを浮かべ、小さな間の後に言ったのだ。  
こう

「ああ。そのつもりだ」

と。

その真つ直ぐで裏も表もないといった良い様にカイは顔をしかめた。その腰にはいつものごとく短剣とナイフが掛けてあり、その後ろにはダガーナイフも3つ下げられている。隣には獣も、薄目を開けたまま悠々と尻尾を振り伏せていた。

「あなたが嘘をつこうものなら、こちらはどうとでも動けるのだ。」

「

カイの周辺に漂う空気はそう告げていた。

長はわずかな敵意をむき出しにする水色を前に、本人には見えなように苦笑を浮かべた。

そして、もう少し様子を見る。この忌み子である若い旅人が、信用するに値する人物かどうか。まるで試すかの様に。

見知らぬ旅人と言葉を交わす長。

その二人の様子を隣の部屋からそつと覗く、7つかそこらの二人の少女の姿があった。肩ではっきりと切られた、青味を帯びた黒髪。くるりと大きな真つ黒の瞳。二人の少女は、違う個所など殆どなさそうな、「似た」というより「同じ」という言葉が当てはまるような、そんな容姿をしていた。

彼女らは、互いに不安な表情を浮かべ、確かめ合うように視線を交わす。握り合った手は、互いを励ますように強い力でつながれていた。

\*

この村は“縛り”が強い。物語の縛り。伝統の縛り。呪術的な縛り。神への信仰の縛り。……そして、古くからの、掟への縛り。

「つまり、娘さんを助けるために、私を助けたってことですか？」

「ああ。すまないがそういうことだ」

客人の問いに、長は重々しくうなずいた。

裏があるとは思っていた。が、カイはやはり少々表情を濁らせた。だが、それは彼女にとって都合のいいことでもある。カイは村長の話へ耳を傾ける。

「この村は、さまざまなものから縛られ、そして皆、それを当り前のように守っている。むしろそれが常識であるのだから、本人らに『決まりを守っている』という自覚はないかもしれない。……………もちろん、私もだ。……………ああ、そうだな。君を店で見つけたときは一瞬役所へ突き出そうかと思った。この眼には珍しい容姿だ。災厄を招くと言われている水色の髪と瞳、君はそれの両方を持っているのだからね。だが、私には丁度、この村の外、特に『遠く、どこか知らない場所から来た人間』が必要だった。それも、出来る限り“力”のある人間が……………」

カイはお茶をこくりと飲み、恨めし気に顔をあげた。

「あの、私はあの店で、フードを被っていた気がしますけど」

長である男は茶をテーブルに静かに置くと、澄ました顔でその疑問に答えた。

「ああ、それはこういうことさ。私は偶然にもコインを落としたり。そして偶然にも立ち上がる前に顔をあげた。すると、またも偶然にも、窓の外から顔を出したばかりの日差しが入り込んできた。その窓際を、まさかまたも偶然にも、君が通り過ぎた」

「……………それはそれは、とても素晴らしい偶然の連続で」

冷やかな言葉に、村長は苦笑する。

「まっただ。……………私は急いで君を捕まえた。そして家に招いて、君が子供で、しかも少女だと分かると役所へ突き出す事はすぐにあきらめたよ」

「少女、ですか……………」

カイは僅かに苦い顔をする。

「おや、その様子だと、女の子に見られたのは久しぶりですかな」

「……………そうでございませすとも」

ふっふっふ……………、と口に手を当てて笑う男を、カイは目を座ら

せて見つめる。先ほど出会ったばかりの初対面を小馬鹿にするとは、なかなか度胸がいいというか、神経がねじくれているというか。まあ、だからこそ長という立場でありながら、自分のような水色を匿おうと思えただろうな、と、カイは頭の片隅で納得する。

「で、その“古い掟”って言うのはいつです」

笑いが収まった様子の村長へ、カイはまるで世間話をするように軽く切り返した。

「3日後、だな。それまでゆっくり行って貰おうと思ったのだが、どうだね？」

「……………はい。じゃあ、……………そうしようかと」

村長は「よかったよ」と安心した声を小さく漏らし、腰を上げた。そして自分のコップを手に取り、流し台へそれを持っていこうかと足を踏み出した。と、その時、思いだしたように動きを止め、カイを振り返る。

「そうだ、その前に、カイ殿。先に見せておきたいものと、聞いておいてほしい話がある」

古い掟とは“人柱”。

この村では双子が生まれると、互いに競わせ“力”を測る。そして、弱い方が人柱として選ばれ、来る崩空ほうくうの日、村の隣にある山の一本川に流されるそうだ。

崩空はいつ来るか知られない。もしかしたらまだ双子が幼いころかもしれないし、もしかしたら双子が子供とも大人ともつかない時期かもしれない。成人して家族を持っているときもあり、白髪になり体が不自由になった老人の時もあった。だが、その歳などこの掟には関係ない。双子が生まれ、崩空の日が来れば、問答無用で弱い双一方が流される。それがこの村の常識であり、絶対のルール。

破られてはいけない。破ってはいけない。そう昔からある仕来たりなのだ。

カイは家の裏側へと回りこむ村長の背を追う。

「あなたはさつき、“力”のある人間だと助かると言っていた」

「ああ。『できる限り』“力”のある人間、だ」

「私は“力”が使えない」

「……………そうだな。先ほどから、君の水ノ音石が一度も鳴っていないから、そうではないかと思っていた」

カイは自分の胸元を見た。ころころと揺れる水ノ音石は、その擦りガラスのような淡い表面をぼんやりと白く輝かせていた。これは、この大陸でとれる特別な石だ。青使いの力に反応し、音を発するとされている。とても珍しいことを除いても、カイにとっては数少ない宝の一つだ。

「で、水を使えない子供をかくまう気は、あなたにまだありますか？」

「はっはっは、何を言う。“使い”ではない非力な子供が、一人で旅など続けられるものか。君は“力”を使えなくとも、生きる力は持っている。それに、撃つ手ならちゃんと私も考えてあるさ。頼む。娘を無事、崩空の日の前に隣町に届けてやってくれ」

カイは「ほう」と大きく息をついた。それは前に行く長の耳にも届いていた。だが、長の表情に不安の色はない。この男は、この水色がこの話を蹴ってはくれないものと、そう強く信じていた。

大きなため息と長い間。

ざくざくと草草を踏みわけ、裏にある倉庫にたどり着いたとき、カイは小さく言葉を漏らした。

「……………わかつてます」

村長は満足げに微笑む。

ぎいいい、と蝶つがい音が音を上げ、暗い世界に外の光が差し込んだ。

カイは倉庫の中に広がっていた闇が隅々に逃げ込むさまを眺め、そしてその奥、小さく潜む生き物を見つけた。

普通の服、普通の靴。そして、最近切られた様子の、真っ黒なお

かつぱの髪。

「ここに来る前まで酷い恰好をしていた。あれは、娘の服だ」

カイはちらりと服を見て、そしてそのまま少女の顔を見た。

毎日風呂に入れられているのだろう。ところどころに汚れはあるものの、どれも今日ついたものと思える。

決して周りを受け入れなさそうな瞳。訪問者が現れたというのに、倉庫の奥から動こうとしない小さな体。

カイは、何か良く知っているようなものを前にしている気分になった。

「先々週かな。山の向こうから買ってきた」

「へー。とても意図的な言葉ですね」

「ああ。……………これが、撃つ手だ」

「娘さんの身代わり、ですか」

「……………ああ」

村長は顔を上げようとしなかった。

蔭に座る少女は、この会話の意味を理解しているのだろうか。カイはじつと見つめる。

その水色の双眸に見つめられ、少女は一瞬怯える様な表情を浮かべた。それに気付くと、カイは小さく苦笑いを浮かべ「ごめんな」と音もなく謝った。

奥から出てこようとしない少女の様子に、長はゆっくりと倉庫の扉を閉める。

「鍵はかけていない。だが、出てくる様子は無い。家の中に招こうにも、それを拒まれてしまった。食事は毎日食べるし、ある程度の言葉も聞く。……………だが、やはり心は開いてくれないようだ」

「心を開かれたとして、あなたはどうしたいんですか」

カイの問いに、長は表情に影を落とした。

「ああ。……………それはまた、障害になつてしまつとわかっている。

このままの方がお互いにいいのだろうな。あの子も、きっとその方が私を心底恨みやすい」

恨んでほしいのだ。

村長の言葉に、カイも表情を曇らせる。

倉庫の前。二人のどちらも動き出そうとはしなかった。カイのそばに座る獣は、ぱたぱたと尻尾を振り、静かな二人を見上げていた。「町までは、どれくらいでつきます?」

沈黙を壊したのはカイだ。

いつもの声音は、まるで少女の事など忘れたかのように切り返されている。

長は沈んだ声音で「片道で一日はかかるだろう」と答えた。

そしてまたカイは黙りこんだ。

顎に手を当て、じっと何も無い地面を見つめていた。

三日後の儀式に、往復で二日はかかってしまう道のり。

今は夕刻。

カイは顎から手を外し、静かに顔を上げると真っ直ぐに村長を見つめた。

「報酬、たっぷりもらいますからね」

「あ、ああ。考えておこう」

「考える?」

「い、いや、払うとも! 元からそのつもりだ」

カイはその言葉にやりと笑い、まだ若さの残る村長の深い紺色の瞳を見上げた。

「じゃあ、今から娘さんと出発します。大丈夫ですか?」

「今から? なんとも急な話だ」

「はい。でも、出来るだけ事は早急に済ませたいと思いませんか?」

「まあ、そうだが……」

「私にも都合があるんで。今すぐに行かせて貰いたいです」

長は少し悩んだ結果、こくりと頷いた。

「分かった。娘との別れをもっと惜しみたかったが、仕方がない。

準備ももうしてはあるしな。生きていればいつでも会う機会はある」  
だがその裏に、消えゆく命もあるのだ。

カイは「でわ、」と長を仰ぐ。

「娘さん自体の支度を済ませてください。できるだけ早く」

長は「わかった」と言い置くと、駆け足で家へと戻って行った。

その大きな背を見送り、カイは倉庫の戸へ向きを変える。

「少し、話したいんだ」

獣は尾を大きくひと振りした。カイはそれを目の端に捉えほほ笑む。

「ありがとう」

\*

私は、弟を見殺しにしたのだ。

本当の贄は自分だったというのに……、それを、私は拒んでしまった。自分が贄となる日の前日、私は目の前に迫りつつある“死”の恐怖におびえていた。

弟が言ったのだ。

『きつと、ばれないよ』

だが、そんな言葉はどうでもよかった。ばれないという自信は私にもあったのだから。そして、弟と入れ替わることができたなら、とおかしな願いを抱いたこともあった。

だが、だが違うのだ。私は弟に死んでほしかったわけではない。

誰かを犠牲にしたくはなかった。

避けられない自分の死。

今までの贄は怖いと思わなかったのだろうか。いつもいつも、贄は当たり前のように箱の中にいた。泣き声をあげることもなく、恐怖に自己を崩壊させることもなく。それはつまり、己の死を認めていたという事だろうか。

私はそうはなれなかった。

ひたすら怖かった。

そしてここまで掟に忠実になれるこの故郷がおかしいとさえ思え

た。

だから、だから私は、弟に言ってしまったのだ。

『何で、僕が死ななきゃならないんだ………』

弟は私を見て、とても言葉では言い表せないような顔をしていた。憐れむような、悲しむような。そして、どこかそんな感情を彼の自身の中で打ち消し、希望を手に入れたような顔。

私は怖かった。

明日、自分がどうなっているか。弟が何をするきなのか。想像が出来たからこそ、怖かった。

あの日死ぬのは、私のはずだったのに

朝目覚めると、私は弟の部屋にいた。

そして、弟の服を着て、弟のお気に入りのミサंगाをつけていた。あんなに大事にしていたものなのに、何か大切な願いを込めていたはずなのに、それをなぜ弟が私に託したのか、その時は全く分からなかった。

私は眠気眼な頭で自分の部屋へと向かった。

すると、見慣れた部屋の真ん中に、見慣れない簡素なつくりの箱が置いてあった。

その中に、生き物の気配を感じた。

もう、考える必要もなくわかった。

中にいるのが誰か。自分が一体何の役を突き付けられているのか。私はどうしようもなかった。

中から弟の瞳が見詰めている。深い紺色の、幼い瞳が、自分の姿を映しこんで微笑んでいる。

そこに映り込んだ私の姿は、弟と全く同じものだった。

私自信、自分が誰なのかさえ混乱してしまうくらいに、私は弟と似ていた。唯一の違いであったはずのミサंगाが自分の手首にある。それだけで、私と弟は入れ替えを可能にしまったのだ。

『や、めろ……………、やめろ。だめだ……………』

私の声は震えていた。

「やめろ」と言いながら、その箱に触れることができず。だめだ、と言いながら、その箱の中には入りたくないと思っていた。

そんな私の言葉を無視して、弟は箱の中、小さくつぶやいた。

『願い事、ちゃんと叶えてね』

願い事。

『なあ、なんだよ。お前の願いつて……………、僕、お前、聞いたって教えてくれなかったじゃないか』

いつの間にか訪れていた“崩空”。

窓が揺れ、家が軋んでいる。

『……………だ』

『なんだよ、なんて言ったんだよ……………そんなんじゃだめだって。聞こえないんだ……………』

『……………。……………いいんだ。知らなくたって、トウイがそれを持っていてくれれば、自然と願いは叶うから』

『何言ってるんだよ、トウイはお前……………』

『違う。トウイはお前だろ？ だってお前は僕の弟なんだから』

『違う、僕はお前の兄だ！ トウイはお前だ！ 俺の弟だ！ トウ

イは贄じゃない！ 贄は僕だ！！！！』

私の最後の言葉は、大きな稲妻にかき消されてしまった。

『……………お前たち、何をしている』

私の背後には、気付けば父がいた。そして、父が初めて見る、とても恐ろしい形相をしていたのを覚えている。

私はその場で訴えた。泣きわめいていた。父に、自分が本来贄となるはずの兄であることを。そして、今この中にいるのは、生きることを許された弟であることを、切に訴えたのだ。叫び、怒り、泣きわめき。だが、父は私の言葉に耳を貸そうとはしなかった。

『またお前はそんなことを……………』と冷ややかな目を向けられ、頬を一発、強くはたかれた。

掟には逆らってはいけない。物語を信仰し、神を称えなければいけない。仕来たりは、村のためにある。父はそのようなことを言っていた気がする。だが、私はそんな言葉より、先ほど父が口にした『また』という言葉の方が気になっていた。その言葉だけが私の耳を支配し、ぐるぐると繰り返されていた。

「また」とは、「また」なのだ。それは数回目であることを示し、それはつまり、弟が、私の死に対して父に何らかの抗議の声をあげていたことを示している。

そしてそれは、何回か繰り返されるうちに、来る“崩空”の日、入れ替わった私が「自分が実は兄なのだ。だから、この箱の中にいる弟を出して、私をここに入れてくれ、」といつても、父の耳にそれが嘘だと思わせる働きをもたらしていた。父にとって、我が息子が己の片割れの死に抗議の声を上げるのは、日常の一部と化していた。

偶然にしる、図られたことにしる、私の言葉はもう誰の耳に届きもしなかった。

トウイはあの日死んだ。

私の代わりに、川に食われて。仕来たりに殺されたのだ。

そして私は生きていた。

だが村に変化が訪れることはなく、掟を破った私に、天が何らかの罰を与える様子さえなかった。

……いや。もしかしたら、もう罰は与えられているのかもしれない。死んだ妻が残した子供たちが双子であったこと。それこそがもしかしたら、私に与えられた罰であり、天が次こそ正しい贄を、と催促している結果なのかもしれない。

だが……、だからこそ、次こそ私はその掟に逆らって見せたいのだ。

私の大切な子供たちを守りきる。そして、今は亡き弟の願いを、成就させて見せるのだ。その願いが何だったのかは今もわかること

がないが、きつと、己の信じる方へと生きていけば、いつかきつと、それは成就されると信じているから。

私はトウイだ。大切な兄を失った哀れな弟。だから、次こそ守ってみせる。哀れな少女を犠牲にしても、本来の贄も、その妹も、どちらも無事に、何事もなく平穏な日々を過ごしてほしい。

\*

カイは少女の手を引いた。

「大丈夫か？」

肩で切りそろえられた少女の髪が揺れる。こくり、と彼女は縦に頷き、真ん丸な瞳をフードの人物へと向けた。

「ねえ、父さんが言ってた。……………あたしは、死なないの？」

「ああ」

カイは暗い山を地道に進んだ。

「ねえ、じゃあ誰が死ぬの？」

「さあ」

「……………ササヤ？ ササヤが死ぬの？」

「いや、大丈夫だ。お前の妹は死なないよ」

「じゃあ誰？ これは仕来たりでしょ？ 私たち以外に双子がいたの？」

「いや、いない。というか……………、私は君達の村のこと、あんまり知らないから」

「そう……………」

少女はうつむいた。

ただ引かれる手に遅れをとらないように、早足に歩き続け、先を行く旅人の急ぐような空気を感じていた。

「ねえ、」

少女はまた訪ねる。

「……………誰も、死なないの？」

返答は、先ほどまでの流れとなんら変わらない感じで返された。

「ああ。もしかしたら」

カイはただ、先へ続く道の、さらに先を見つめていた。

朝になれば見えてくるであろう街へ、ひたすら歩き、時に少女を背をい、水色の少女はただ先へ進み続けた。

\*

その日はまた、いつもの通り“最悪な日”だった。

ざーざー降りの雨に日の刺すことのない真つ暗な空。

手抜きだとしか思えない手作りの木箱は、中のものなど全く守り切る様子も見せず、きしきしと軋んだ音をあげていた。

「長、そろそろ……………」

箱を担いでいた若者の一人が、遠慮勝ちに私へと声をかける。私は胸に右拳を当てると、空いた左手を少女の棺となる箱へと持ち上げた。

「……………」

ふと視線の先に、こちらを見つめる少女の瞳を見つけた。

そこにはひたすら恨みと念としか見つけることができなかつた。

だが、じつと自分を抑えているのか、それとも全てに疲れてしまったのか、彼女の瞳に浮かぶ感情はからからに乾いているように思えた。

親から引き剥がされたのか、もとからいなのか。身勝手な世界に振り回され、見ず知らずの村で贖の代わりとして殺されるこの少女の生を、今更哀れだと思った。

しかし、もう後戻りはできないのだ。

私はこれから、取り返しのつかない罪を犯す。

人々の目が箱という一点に集まり切ったところ、私は両手を下ろし、

川へと向かい直った。

「“崩空”の日にて、私は神に捧げよう！ 川は治まりし、村は榮し！」

紺色の瞳が、少女の真つ黒なそれと重なった。

箱は荒々しい川へと静かに下ろされる。

風がごうごうと吹き荒れて、人々の手元から、いち早く贅を食らつてやるうと箱を揺らした。

……………いや、

見えるはずもない箱の中、少女の口がそう動いた気がした。大きな瞳が、さらに大きく見開かれていた気がした。

「俺を、恨んでくれ」

叩きつける雨粒の音と、風と稲妻と。私の声にはその場の誰にも聞こえやしなかった。もちろん、箱の中の彼女にも……………

\*

カイは走っていた。

双子の少女の片割れを、今は亡き母の故郷へと、祖母のもとへと送り届け、村への往復の帰路。三日目の午前。

村に向かうにつれ雨粒も風も乱暴のものへと化していく。

「はぁ……………はぁ……………はぁ……………」

余計な考えもなく、ただ信じるべきモノを信じ、ひたすらに走り続ける。

靴には水が入り込み、ズボンの裾は泥で汚されていた。だがそんなことを気にする水色ではない。

それはただ走る。

彼女がひたすら走ったその先に、やがて荒れ狂う川が見えてきた。それはあの村から僅か下流。儀式が行われるという場所から、そうは遠くない川岸。

「……………やったんだな！」

びしょ濡れになった彼の姿を見つけるなり、カイは風や稲妻にかき消されないよう声を張り上げた。

岸に突き出た大きな岩の上でカイを待っていたのは、あの灰色の獣だ。獣は「はっはっは」と舌を出し、こちらへ駆けてくるカイへ誇らしげな目を向けた。

カイは雨に濡れて滑る岩肌に手を突き、なんとか這い上がると、その獣の隣で濡れ雑巾のようにびしょびしょになって地面にこびりついている塊に目をやった。

それは近くへ寄れば、はっきりと少女の輪郭を取り戻す。

黒いおかつぱに、赤い衣を着せさせられた少女。

その体を持ち上げ、カイは彼女の呼吸を確認した。そこにはまだ命が強く根付こうとしており、ひゅーひゅーと風の漏れるような音が青く染まった唇から洩れている。

カイは上着を脱ぐと、自分のそれもびしょびしょであることには変わりがないのだが、冷え切った少女の体に巻きつけた。

「さあ、行こう」

とうとうと少女を背負い、獣を連れてカイは川を上り始める。

\*

『お前、人が嫌いか？』

こくり、と少女が頷く。

『じゃあ、約束覚えてるよな？』

もし私がこの約束を守ったら、……………人を、好きにならなくてもいい。だけど、誰かを恨むことは、しないでくれ。

少女は無言だった。

ただ、自分の下を感じる体温と揺れに体を預け、じっと眼を細めていた。

『別に皆を認める必要はないよ。ただ、最低限の身の回りの人間は

理解しようとしてくれ、ってこと。これからの生活への障害は、少しでも減らしておいた方が良いだろ？」

「……………これから？」

少女は目の前に揺れる水色の髪を見つめる。

「そう、「これから」。だってお前、飢え死になんて御免だろ？」

こくり。少女はまた頷く。

「じゃあ、約束しろ」

「……………」

……………こくり。

少女はうなづいた。

それを感じて、水色はほほ笑む。

だがきつと、「人を恨むな」という約束は、この少女にとって酷なものとなるんだろうな、と思うと、苦笑いをかみしめるしかかった。

\*

まだ風はやむことがない。

だが、雨粒は徐々に小さくなりつつある。

「……………くそ、何が“贄”だ」

長である男は小さく毒づき、がたがたとつるさい窓にカーテンをかけた。

「父さん、サヤサは？」

姉の消えた屋根の下、どうしようもない表情を浮かべ、少女は父を見上げた。

「サヤサ……………。大丈夫だ。サヤサなら、大丈夫」

「大丈夫？ サヤサ、生きてる？」

「まだお前には何も言えないんだ。だが、そのうちきつと……………」  
その言葉を遮って、風とは違う何かかドンドンと戸を叩いた。  
長は誰だろうかといぶかしげな表情を浮かべる。その足元で、少

女が小さく「サヤサ？」と、期待と不安の入り混じった声を上げた。そんなはずはない、と長が戸を押すと、外からびしょ濡れの獣が室内へと駆けこむ。その少し後に、またもびしょ濡れとなった水色の頭をした人物が家へ上がってきたものだから、窓の脇にいた少女はびっくりだった。

「……………ばけ、もの」

化け物、と呼ぶものの、その言葉に敵意や悪意はなかった。これはただの代名詞だ。彼女はこの水色の人物が、三日前に父が招き入れた客人であることを知っていた。名前を知らないから、呼び方に困り、化け物と呼んだにすぎなかった。

「カイ……………」

長は低く唸るように、カイのそばへと駆け寄った。そして、その背に抱えられたものを見て、まさか、と唇を声もなく動かした。

長はカイの上着の下から現れた少女の瞳を前にして息をのむ。

「そんな……………だが、いやしかし……………まさか、」

カイが少女を下ろす中、獣は勝手に家の中のものを拝借したのか、乾いたタオルを3つ持ってきた。

「ほら、自分で拭けるよな？」

カイに頭からタオルをかぶせられ、少女は無表情にこくりと頷く。カイも自分の分のタオルを獣から受け取ると、最後にあまった一枚を見て、目を丸くして獣を見つめ返した。獣は「はっはっは」と舌を出し、尾をぴしゃりと一度、大きく振った。

「つたく、ちやつかりしてるよ」

カイはくすりと笑いをこぼし、毛を拭いてくれるのを待っている獣の上に、タオルを大きく広げてかぶせた。その下で獣は、満足げに尾を振る。

その様子を呆然と見詰めている長の娘に、カイは思い出したように水色の瞳を向けて微笑みかけた。

「なあ、サヤヤ」

「……………え？」

名を呼ばれ、少女ははつと我に帰る。

「サヤサが心配か？」

「……………うん！」

自分の前で両手を握りしめ、熱心に首を振る少女へ、カイは頬笑みを浮かべたまま「そうか」と言った。

「じゃあ、その子を手伝ってあげると言い。彼女はサヤサの命の恩人だから」

「……………え、じゃあ、サヤサは、」

「生きてるに決まってるだろ？ ほら、早くしないと、彼女が冷えて風邪ひいちゃうよ」

カイの言葉に、サヤサの妹であるサヤサの顔から不安の色が一気に吹き飛んだ。

少女は自らの姉の命の恩人のために、自分の代えの服を取りへと自室へと駆けて行った。

その背を見送り、獣の体を一通り拭き終わると、次にカイは自分の頭を大雑把に拭き始めた。そして立ち上がり、いまだ目の前のものが信じられない様子の“彼”へと体を向ける。

「で、あなたはこれからどうすべきか、……………わかりますよね」

それは問いではなかった。

半ば有無を言わせない強気な響き。

男はこくりと唾を飲んだ。

「……………勿論だ」

次の日、朝早く旅人はその村を発った。

村の長は彼女と約束をする。

「私は、この掟をいつか絶対に無くして見せる」

旅人はしどろもどろに答えた。

「え、いや、別にそこまで言っていないってどうか……………」

「ああ、だが、私はそうしなければいけないと思うんだ。それがきつと、トウイの願いだと思っているから」

「トウイ……………？」

旅人は不思議な顔をする。

長は懐かしげに眼を細めた。

「私の、双子の弟だ。ミサンガを預かってな。代わりに願いを叶え  
ると、約束したんだ」

「……………そうですか。で、そのミサンガは？」

「ああ、それが、もうずいぶん前に切れてしまって。今は大切に  
まっているよ」

さーさーとやわらかい雨が降る中、旅人は一瞬首をかしげ、小さ  
く笑った。

「じゃあ、案外その願い、もう成就しているんじゃないですか？」

生きて欲しい。僕の兄さんに、僕に分まで。……………神様、

兄さんを食べないで。

二人の少女が手を振っていた。

この村の長の隣で、水色の旅人と、灰色の獣を見送り。

\*

その村には昔、掟があった。

その地形から、無定期に来る大きな嵐。その嵐が来たとき、村に  
いる双子の片割れを贄として川に流さなければいけない。

そして、物語の信仰が強いここでは、こういう掟もあった。

忌みし色の緑子が生れし時、また、忌みし色の者が村に踏み入っ  
たとき、紅き炎でその者を清めなければならぬ。その命を見逃す  
ことがあったなら、神はこの地に災いを呼ぶだろう、と。

だがそれも、数十年前の話。

その村ではもう、贄もいなければ、水色を拒む者もない。

## 22【双子の話】（後書き）

誤字脱字目立ちますね…。

後々ちゃんと直しておきます。

ここまで読んでいただき有り難うございました！

### 23【腐った水：後に来た人】

その夜ソレは、腐った水を口にしました。

とてもとても喉が乾いていて、どうしようもなかったから、近くにあつたそれへ手を伸ばしました。

\*\*\*

(ち、子供しかいないな)

ヨウは村の中を一通り歩き終わると、適当に見つけたはずれの廃屋に荷物を下ろした。

宿を探そうにもそれを運営する大人がいないのだ。どうしようもない。炭と灰に化した家々の中には、もともと宿として作られていたものもあつただろうに、今ではどれも同じような外見になってしまつてどれがどれかわかりもしない。まあ分かつたところでどうしようもないのだが。

ヨウは息を吐いて、崩れて横倒しになつた壁の上へと腰を下ろす。そして村を歩いてきた時に適当に拾つた、ちようどいくらいの木を枝をどさりと正面に置いた。そろそろ日も暮れる。焚き木の準備は万端だ。あとは火だけ。そんなもの彼の手にかければ幾らでも、だ。

廃屋の崩れおちた壁の向こう、殺風景なせいで広々と見渡せる村の奥、幾本にも続く木の群れがオレンジの明かりを背に黒く染まつていた。そのオレンジの明かりは眩しく輝き、ヨウの真つ赤な髪をさらに赤く染め上げる。

その目に突き刺さる眩しさに、ヨウは眼を細めた。その瞼の下の瞳も鮮やかな赤。

「くそ」

彼は右手から差し込んでくる落陽の光から顔をそらすと、着々と薪を丸く並べ始める。

日が落ちてから数時間。ぱちぱちと火のはじける音と、壁に揺れる大きな影だけがその廃屋を賑わらせていた。本来なら家々に淡い灯りが灯って夜道を照らしていてもいい時間なのだが、明かりがともりだす家などあるはずもない。崩れた壁の向こうに見えるのは屋根や壁が吹っ飛んで瓦礫の塊となった建築物の死骸ばかり。ヨウはつまらなそうに己の目の前に焚いた火の下をみつめる。

幾つか見える人の足跡。そして自分が来た時にはもうあった、火の痕跡。

どうやら誰かいたらしい。

そして、人の足跡よりは少ないが、わずかに獣の足跡も残っていた。ここに来るまでに森で何度か遭遇しかけたが、まさかここも彼等の行動範囲内ということだろうか。だが、それにしても足跡の数が少ない。(……………迷い込んだだけならいいんだが)

ヨウは後ろの瓦礫へと背を預け、頭の後ろに腕を組んだ。本当ならそこにあるはずの天井は、半分を残して綺麗に夜空で埋まっていた。雲ひとつ無かったのは幸이었다。

今日は寒くもないし、この地域は気候的にもどかだと聞く。

大人がいたなら、きっと畑や家畜でにぎわっていただろうに。そして、今晚はまともな飯を喉に通すことができただろうに、とヨウは少し残念な気持ちになった。

どういうわけか知らないが、子供だけで共同生活をしているであろう村の中心へ行けば、きっと何かしらの食料や飲み物位は分けてもらえたのだろう。が、ヨウはどうにもそんな気にもなれなかった。同年代の者が4〜5人いるので、彼等の生活はちゃんと成り立っているようにも見えたのだが、何にしるヨウは子供が嫌いだった。嫌いだったので、彼等のリーダー格の少年の、「ここに泊っても良い

のだが……」という誘いも断った。

……わかつているのだ。ヨウには、簡単に想像ができた。

この赤い髪や瞳を見られたり、少し焼けた色の肌を見られたり。それだけで、この大陸の子供はあちらの大陸よりも異常に反応する。そして、何よりも気に障るあの単語を口にするのだ。

「……………えいゆうだ」

そう。これ。ヨウがこの世で二番目位に嫌う単語だった。そして、一番となるのはもちろんあの男の名。『君の赤は、この村

で最も英雄らしい赤なんじゃないかな』

蘇る、朱色を持った彼の無邪気そうな声。なぜあの時、彼にそう言われたことがうれしく感じたのか、今思い返すととても疑問だった。きつと、自分が幼すぎたのだ。あの頃はまだ、老長も彼に対してそれほど敵意も持っていなかったから……………。

ヨウは苦い顔をして俯き、横においておいた水筒をつかんだ。

「えいゆう、……………英雄がいる、……………英雄がいる！」

水筒を持ち上げた薄い小麦色の手が止まった。

今の声。いや、そう言えば先ほどもあった。だが思想にくれていて気付かなかつたのだ。

ヨウはびくりと眉をよせ、あまり表情を変えないままに顔をあげた。

正面に向かう壁に、戸がはめられていたであろう長方形に切り取られた穴の中、一人の少年が壁に身を隠すようにひよこりと頭だけ出してこちらを覗いている。その、自分を見つめる好奇心と憧れの眼差しに、ヨウはさらに口を引き結び、表情を硬くさせた。

少年はヨウと目が合うと、びくりと肩を揺らし、いったん壁の向こうへと顔を引っ込める。

「レイラ、英雄だよ！ 旅人さん、英雄だった！」

どうやら少年には連れがいるらしい。後から向かってきているで

あろう連れへ呼びかける声が、わんわんと少年の立つ通路に響いていた。これで「英雄」と呼ばれ6回目。ヨウは瞼をとし、自分の中にこみ上げる、

「あの子供をぶん殴ってやりたい」という欲求を押し殺す。

「……………ほら、見てよレイラ、英雄なんだ、英雄！ 馬鹿なココが頭に絵具を塗ったのとは違う、本物の英雄だ！」

「ちよつと、ケール。英雄って……………」

興奮気味の少年に続いて、少年と同じくらいの年であろう少女が顔をのぞかせた。

「英雄」という言葉を聞いてこれでちょうど10回目。ヨウは俯いたまま目を瞑り表情を誤魔化す。ぱつと見て怒ってはいるように見えないものの、その内心では不愉快さがつもりにつきもり、ここ一体に火を放ってやりたいと体が疼く位だった。

「……………本当だ、えいゆ つ……………」

英雄、と言おうとした少女は、顔おあげた旅人と目が合い言葉を飲み込む。

うつすらと細められた瞼の下、真っ赤な瞳が爛々と輝いているのが見えた。それはまるで威嚇だ。恐ろしい獣にでも睨まれたように、少女は言葉も忘れて恐怖に身を固める。

「レイラ？ おい、レイラ、どうしたんだよ」

ゆさゆさと少女の肩を揺らす少年。

そのどちらも、7つか8つ位の歳に見えた。

ヨウは少女から目をそらすと、手に持っていた水筒を口へ運び、携帯していた水分を軽く口に含む。

ああ、この状況。どうしてやろうか。……………面倒臭い。

そう思うほかなく、ヨウはまた小さく吐息をもらす。

「ねえ、旅人さん！」

少年は好奇心旺盛な瞳を輝かせ、人見知りなど知らないように、焚火の元までやってきてヨウの正面に膝をついた。その真ん丸な瞳は赤い瞳を見上げ、くるくるとうれしげにゆれていた。

それを正面から見る気にもなれず、ヨウは堂々と顔をそむける。  
返答がないために、少年はまた、諦めずにヨウへ話しかけた。

「ねえつてば、旅人さん！」

やがて、未だ驚いた様子の少女も少年の横に並ぶと、大事そうに竹で作ったであろう筒を抱えながら、その場にゆっくり膝をついた。真ん丸な瞳は、離されることなくヨウへと注がれている。

「たーびーびーとーさーん！ てば！ 聞こえないの?!」

少年はゆさゆさと身を振って、自己アピールに励んだ。

その小さくも根気強い努力の末か、ヨウは眼の端に入って仕方のないそれへ、無愛想に

「……………なんだ」とかえした。なにかしら返事をくれてやらなければ、いつまでも少年がそうしているように思えたからだ。「目障りだから消える」と言ってみてもいいのだが、その言葉は偶然にも今のヨウの気分には合わなかったため口にされずには済んだ。

だが、そっけなかつたとうとうと、今の少年にはヨウから言葉が変えるだけでそれは喜びに代わるらしい。うれしげに頬を高潮させ、満面の笑みを浮かべたその少年に、ヨウは呆れて顔を濁らせる。

「ねえ、旅人さん！ 旅人さんはえいゆ」

「英雄じゃない。ただのあちらの人間だ」

少年の言葉をさえぎり、ヨウはこれ以上の

「英雄」をびしゃりと拒んだ。

少年はヨウの

「あちら」という言葉に身を乗り出す。

「じゃあ、あちらの大陸の人はみんなそういうカッコをしているの？！」

そういう格好、というのは赤い髪と瞳のことか。

ヨウは

「いや、」と正直に言おうとした言葉を飲み込む。

この外見があちらでも珍しいのが事実だ。だが、今ここでそれを

告げれば、やはりその希少な色に少年は自分へ向けまた

「英雄」という言葉を口にするに違いないと思った。

ヨウは相変わらずのポーカフェイスで、少年に向かい当たり前のように口を開く。

「ああ。あちらだとみんなこうだ。こつちの大陸で青やら紺やら黒やら、普通にいろのと変わらない」

その言葉に、少年の瞳はキラキラと輝きを増した。

「へー！ すっごいんだなあ！ みんな英雄とおんなじなんだ！」

「ああ。だからもう俺を英雄って言ってくれな」

ヨウは腰当りの悪い小石を拾い上げると、適当な場所へそれを投げる。カツカツと音をあげて地面にそれが転がると、もう一度後ろの瓦礫へと背中を預け直した。

少年は飛んで行った小石など視野にも入れず、初めて目にするあちらの大陸からきたという旅人へ、子供らしい高い声で楽しげに話しかける。

「じゃあさじゃあさ、旅人さんは何て名前なんだ？ 俺はケール。

こつちはレイラだ」

少年に示されたことに気づき、レイラと呼ばれた少女は小さく頭を下げた。その瞬間にまたもヨウと目が合い、少女の肩がびくりと揺れる。

「こいつ、旅の人がいるって俺が見に行こうとしたら、『じゃあスープを分けてあげなきゃ』って着いてきたんだぜ？ 俺本当は一人で来たかったのにさ」

ケールは小さくふくれっ面を作った。ぼーっと旅人の赤い髪に見とれていた少女は、またも少年の話題に自分が出ていたことに気づいて肩を揺らした。そして、少し裏返った声を上げ、こくこくと首を縦に振った。

「そ、そう！ そうなの！ 旅人さんに、スープを上げようと思っ  
て、……………は、はい、こ、ここ、これ、どうぞ！」

何をそんなに緊張しているのか、レイラは舌のまわり切っ

い言葉の後に、ずっと大事そうに抱いていた筒をヨウの前に突き出した。そして、ヨウが受取るうと手を出すと、少女の瞳がまた、不自然に髪へと向けられる。じっと、真つ赤な髪に視線を囚われた少女から、「こくり」と唾を飲む音が聞こえた。

ヨウがもう筒を受取り、手の中が空になっていることにも気付かないのか。少女は用が無くなったにも関わらず、旅人の少年を見つめ続けていた。小さく震える白い手が、その燃えるような赤へと呼び寄せられるかの様にのばされる。

「どうした」

身を退くこともなく、ヨウはただ遠回りな言葉だけで少女の行動を拒んだ。

「……!!!」

少女は静かな問いかけに我に返り、飛び上がるように後ろへ退いた。

真つ赤な瞳が、特にといった感情もなく自分へ向けられている。

少女はまた喉を鳴らす。

「ご、ごめんなさい。は、はじめてみた色だから、……その、ついで」

口元に手をあて、わなわなとケールの隣に座りなおすと、彼女はそのまま膝を抱えて黙りこんだ。ケールは彼女を慰める心づかいなど知らないように、

「俺も後で触らせてもらおうと思ったんだ」などと無邪気に笑っていた。

レイラの様子をちらりと見て、ヨウは受け取った筒の中を覗きこんだ。ポンっ、という音をあげて、小さな口の栓を抜くと、まだ温かいままの柔らかい湯気が細く立ち上った。おいしそうな香りに、ケールは物欲しげな視線をヨウへ向ける。

ヨウは自分のカップにスープを注ぐと、少年へ「のむか」と筒を差し出した。

「良いの?!」と瞳を輝かせたケールの横で、レイラがびしゃりと

声を上げる。

「だめ！ ケールはさつき食べたでしょ?!」

レイラのその強い口調に、ケールはしゅんと肩を落とした。

ヨウは二人のやり取りを眺めると、差し出した筒の中身も、全部自分のカップの中に注ぐ。ミルク色のとろみのある液体が、とぶとぶと音を立ててカップへと納まりきった。中には、小さな黒い粒や、見たことのある木の実などが浮いている。それは小さく口に含むと、やわらかくなった木の実が噛まなくとも形を崩し、黒い粒が舌に押されてぶちぶちとはじけた。

不味くはない。………というか、正直に言ってしまうえばおいしいのだ。

ヨウはカップから口を離し、もう一度スープを眺める。

レイラは食い入るように、スープを口にするヨウを見つめていた。ケールもまた、おいしそうなスープの香りにじっと耐えながら、ヨウとカップとを交互に見つめる。

ヨウはカップを傾け、ゆらゆらとスープを揺らし眺めた。中で、小さな具達がゆっくりと波打つ。真っ赤な視線がじっと細められ、あたりがしんと静まる。

ゆっくりと顔を上げた旅人とまたも目が合い、レイラは今度は驚くことなく、声を裏返すこともなく、しっかりと言葉を口にするこ  
とができた。

「えっと、あの………おいしい、ですか？」

その問いに、ヨウはカップを口につけ「ああ」と無表情に答えた。少女はぱあつと嬉しそうな笑みを顔に咲かせると、「よかった」と小さくつぶやくようにそう言った。その隣でケールは指を咥え恨めしげにヨウの手の中的カップを見ていた。

「この村の大人はどうした」

やがて、カップに口をつけ、離し、付け、離し、を何度か繰り返したころ、ヨウは、足もとの小石いじりを始めたケールと、どうし

ようもなくただヨウがスープを飲んでいる姿を眺めていたレイラとに問いかけた。

ケールは小石をいじり続けたまま、顔もあげずにぼそりと答える。  
「……………死んだ」

「死」という言葉にもヨウの表情は動かない。ただ返すのは、「何でだ」という無機質な言の葉。

ケールもレイラも、決して旅人の目を見ることはなかった。二人とも俯いたまま、小さな拳を握り、ケールの小石いじりを除いてはまるで置物のように動く気配がない。

俯いているせいでよく見えないケールの唇から、ぼそぼそと質の悪い音だけがこぼれ出る。

「……………みんな、戦で死んだんだ。父さんたちが村を出てから何日か経って、全滅したって、知らせが入った。……………母さんや婆ちゃんか、地上に残って、あとは、俺とか、レイラとか、他のみんなとか。……………子供と、大人が10人位地下に避難させられた」

その声はまるで壊れかけのラジオから流れているかのように静かな廃屋の中に溶けて行った。壁や天井が大きく崩れている、「屋内」と呼ぶにふさわしいかどうかさえ分からないその場所では、少年の小さく呟くような声など反響するはずもない。

「皆が、この場所を捨てても良かったはずなんだ……………。なのに、……………なのに、母さんたちは、ここを守るためにも戦って死んだ父さんたちに、『メンモクがたたないだろう?』って……………。俺達が地下から出た時には、もう、全部なくなってた。俺の家も、畑も、学舎も……………全部、燃え、ちゃった……………」

大きな影が、柔らかく入り込んだ外気に揺れた。少年の声も、影とはまた違くはあるが、揺れている。……………いや、震えているのだ。ヨウは、己の記憶の中で燃え盛る炎に現実を忘れそうになる。

目も、口の中も乾ききってしまったらしいそんな熱風。大切なものが灰になっっていく悲しみと悔しみ。自分の目の前で亡くなっっていく命。

すべて、すべてがただ、自分にはどうしようもできないのだと、

無力さを訴えかけてきた。

ぼう………

三人の中心で穏やかに燃えていた焚き火が、風もないのに大きく揺れ、一瞬だが、その身を大きく膨れ上がらせる。それは瞬きも忘れたヨウの眼の真上へと腕を伸ばし、真つ赤な前髪をふわりとなでた。少年の頬へ熱のある指を這わせ、涙を乾かし、少女のからからに乾いた喉元をさらに干上がせるかのように熱風でくすぐりかける。

「あつつ、」

「きゃ、」

少年と少女の声に、ヨウはいつの間にか体に入っていた力を抜いた。

これはどういうことか。

己の怒りが、無意識に火へ伝わってしまった。

強く握りしめられ、若干汗ばんだ掌を真つ赤な瞳が見つめる。

「………すまない」

ヨウの謝罪の言葉に、ケールとレイラは意味を掴み損ねた。不思議そうに見上げてくる二つの小さな視線の先で、ヨウは片手で顔を覆うようにこめかみを押さえる。「兄ちゃん、大丈夫か？」という少年の問いが聞こえていないのか、ヨウは答えることもなく深いため息をついた。

………今でも、やはり悔しいのだ。

あの時の全てが理解できないこと。あの時、ただの第三者でしかいられなかったこと。そして“彼”の最期でさえも、話で聞くことでは知れなかったこと………。

すべてが悔しい。そしてやはり、あの真つ赤な記憶からは、悲しみと悔しさと絶望と、誰に当てるでもない強い怒りばかりが先走って頭の中を占領していきこうとする。

(……………くそ)

また息をつき、顔をあげると、ケールの心配そうな瞳と目が合った。

「……………」

あの瞳。まるであの頃の自分を見ているようだ。ただ決定的に違うのは、そこに真っ黒な負の感情が宿っていないことだけ。

『殺してやる』

真っ赤な髪と、真っ赤な瞳。怒りにまかせた、幼い記憶の姿。

怒りに沈みきった、哀れな少年。

(……………つたく)

いつの間にか嘲るように吊り上がっていた自分の口元に触れ、ヨウは苦虫を噛んだような顔をする。もう一度顔をあげると、この村の少年はまだ心配げに自分を見ていた。

「なんだその顔」

まるで己に問うように、ヨウはこちらの大陸の、赤の他人である少年へと問いかけた。自分を見上げる自分。自分を憐れむ自分。自分を蔑む自分。ケールという少年の中に、子供の自分を重ねて、ヨウの口元はまたも嘲る。

ケールは「はっ」としたように自分の顔に触れ、目を丸くしてヨウの問いに問い返した。

「俺、そんなに変な顔してた？」

そういう意味ではないのに、少年は真面目に自分の顔をぺたぺたと触る。

卑屈のこもった言葉を、真っ正直にそのまま受け止めた少年を見て、ヨウは一瞬目を丸くした。一拍おいて、「すっ」と少年から顔をそむけると、その口元を片手で隠した。

少年はその旅人の姿に目を座らせ、ふてくされたように尋ねる。

「何笑ってんだよ、」

むすりとした表情に、ヨウは「いや」と言ってまたなにもなかったように正面に向きなおる。だがやはりその口元は少し緩んでおり、笑っていたことは明確だった。

少年の横の少女も、なぜヨウが笑っているのか理解できず、不思議な顔をする。

「で？」

突発的な促し。

ヨウは思考が追いついていないであろうケールとレイラのために言葉を付け加える。

「それで、その10人位の大人つてのはどうなった。今日はいなかったようだが」

「……………ああ、」

ケールの声はもう、ぼそぼそとくぐもってはいなかった。だがそこに抱かれた悲しみは、言葉の端々にこぼれ出ていた。

「病気が流行って……………。大人だけじゃない、……………子供の大半も、その時死んだ。運よくかからなかった奴と、かかったけど、なんとか回復した奴が今ここにいる全員なんだ」  
なるほど。

ヨウは握っていたカップを口につけ、そのまましばらく目を閉じた。

この村の事情。知ったところでどうでもないが、知れたことで納得は出来た。

眼をつむり考えに浸っているのである。旅人から視線をそらし、少年はごもごもと口元を動かした。遠慮勝ちに向けられた視線は、旅人に気づかれることはない。

「……………あの、さ」

ケールの言葉に、ヨウは瞼を持ち上げる。

「なんだ」

火は静かに燃えていた。

少女は、黙って旅人を見上げているだけ。

少年は、目を合わせないままに、旅人へと問いかける。

「あの……………兄ちゃんは、この村の周辺で、女の子を見たりしなかった？」

問いの目的が掴めず、ヨウはただ首を振る。

「歳は俺の3つ上くらいで、髪は俺と同じ色、目が青いんだ」

「…………知らないな」

思い出すまでもない。この村に着くまでの2日間、誰にも会っていないのだから答えるのは簡単だった。

いったいなぜそんなことを訊くのか、ヨウが尋ねなくとも、少年の方から事情は説明した。

「皆が病から立ち直ってから、何人が、…………どこかに行ったまま帰ってこないんだ。少しずつ、少しずつ、知らないうちにいなくなつてて、…………最近、姉ちゃんも……………」

ヨウは静かな瞳を焚火の近くの地面へ向ける。そこにあるのは消えかかった足跡。

「獣じゃないのか」

少年は首を振った。

「あいつらは、村にまでは入ってこないから。そのいなくなった皆は、まだ村から出ることを許されてなかった。危ないから、“兄ちゃん”や“姉ちゃん”しか村からは出ちゃいけないことになってて……………」

ヨウは眼を細める。

「俺の姉ちゃんも、まだ、村から出てないはずだったんだ。なのに、この間からどこかに行つて、…………ずっと、ずっと、帰ってこない……………」

少年の隣で、少女は膝に顔をうずめていた。たまに隣の少年へ目をやるも、その表情はあまり動かされないまま。

誰も口を開かなくなり、あたりはしんと静まった。

カランカランカラン、とスチール製の乾いた音が地面に転がる。それとともに、じゅっ、という蒸発の音と、明かりが一気に小さくなり、ぶすぶすとくすぶる音とが連鎖的に上がり、辺りは騒然としながらも賑やかになった。

ヨウはぐらりと後ろの瓦礫へ背を預ける。その前には、スープをかけられ消えかけの焚き火が、喉にへばりつく様な匂いと煙をあげ

ていた。

月明かりだけが頼りとなったその廃屋で、ケールは転がったカッ  
プを拾い上げ、驚いた様子でヨウの前へと駆けつける。

「に、兄ちゃん?!」

レイラもケールの隣に並び、恐る恐るヨウの顔を覗き込んだ。

「……………だい、じょうぶ?」

驚きに見開かれた彼女の瞳は震えている。

「ああ」と応えたヨウの視線は、どこを見ているのか判断し難い  
ものだった。片手で覆われた両目の下、薄く小麦色がかった口元だ  
けが面倒くさげに動かされる。

「……………少し、眠い」

そのままうつすらと瞼を下ろし、ヨウの息は小さくなっていく。

少年は今にも寝てしまいそうな旅人のコートを掴んで、このまま寝  
てしまわないようにと揺さぶった。

「なあ、なあ、寝袋とかあるだろ、いいのか、こんなところでこのま  
んま寝て」

少年の気遣いに構う様子もなく、赤い瞳はとろとろと瞼の下に沈  
んでいく。レイラに手を引かれるも、ケールは足を動かさずとはせ  
ず、眠りに就こうとするヨウに聞こえるようにと声を上げた。

「兄ちゃん、なあ、聞こえてるか?! 俺、今日一緒にここで寝て  
もいいか? 寝袋とか、自分のやつちゃんと持ってくるから、……  
…なあ、なあ、兄ちゃん」

ゆさゆさと赤い髪が揺れるのをみて、レイラは力いっぱいケール  
を引っ張り、その手を旅人のコートから引き剥がした。

「なんだよ」という胡乱気な瞳に、少女は口の前に指を立て、少  
し怒ったようにケールを見上げる。

「旅人さん、つかれて眠いんだよ。今日はもう帰ろう」

「でも俺は……………」

「一緒に寝るのは明日でもいいでしょ? 私たちだって、こんな時  
間まで外にいたってばれたら怒られちゃう……………」

「それは……………」

どうしてもここに残りたい様子の少年に、レイラは痺れを切らしたのか、強引に腕を引き、来た道を引き返し始めた。

「ほら、帰るの、ケール」

ずりずりと足を引きずる音が尾を引く。少年は後ろ髪を引かれる気持ちだったが、前に行く少女の言葉も確かだった。今日はもう、帰った方がいいのかもしれない。話なら明日すればいい、と、少年は無理やりに自分に言い聞かせ、ちゃんと自分での意志で足を動かし歩き始めた。

遠のいていく二つの足音を聞きながら、瓦礫の上、ヨウは小さく脛を持ち上げる。

灯りの消えた廃屋の中、入りこんだ月明かりに、真っ赤な瞳は地面にちったスーパの残骸を眺めていた。

\*

平べったく地面に倒れた、壁か、もしくは天井の残骸の上、赤の旅人がコートを被せただけの状態で横たわる。

物音ひとつないそこで、遠くに獣の遠吠えのようなものだけが細く空に響いていた。虫の声も少なく、少し前のように火のはぜる音やくすぶる音もない。寝息さえも、小さすぎて聞こえない。

ただの暗闇と月明かりしかないそこに、わずかだが人の気配が近づきつつあった。

ヨウは相変わらず横になったまま、脛を持ち上げる様子はない。

じゅり……………」

小さく砂の擦れる音。唯一の客人がいる廃屋の一室、扉のない長方形の穴の前に、小さく黒い塊が立っていた。

その手には、白銀に輝くナイフが握られている。

こつっ、と踏み出したその足から、膝、腿、腹、肩へと、月明か

りが照らし出す。そして、最後に現れた頭は、まだ幼い少女のもの。  
レイラだ。

レイラは、ごくりと唾をのみ、自分の正面に眠る真っ赤な髪を見つめた。

先ほど水を飲んだばかりのはずなの少女は、激しい脱水感におかしな汗を浮かべていた。

「……………みず……………みず」

小さな唇が、小さな音をこぼれさせる。

真っ赤な髪、真っ赤な瞳。先ほど焚火を囲んでいた時のあの色が、少女の頭にこびりついて引き剥がせないでいた。

少女はわなわなと震える手を見つめ、両手でナイフの柄を包み込んだ。

「みず、……………みず、を……………」

理性があるのかないのか。その真ん丸な瞳は、欲求に蝕まれ始めていた。

「……………みず……………！」

風が鳴る。

銀の奇跡が線を作った。

ためらいなく振り下ろされたナイフの真下、ヨウは素早く身を返し、その切っ先を目の端に見据える。

突然現れた二つの赤い瞳に、少女はぜえぜえと息を荒げる。

「なん、で、」

乾ききつてもつれる舌で、レイラはおかしなものを見るように誰かに尋ねた。べつに答えを求めての言葉ではない。だが、ヨウは丁寧にも教えてやる。

「見覚えのある“具”が入ってたから……………。悪が、俺は好き嫌いが激しいんだ」

固いベッドから立ち上がり、ヨウは地面へ向かい軽く腕を振った。まるで風から火が生れ出るかの様に、スープで湿った焚き木の上に炎が起こる。それは何の変哲もないただの火だったが、もくもくと

月へと昇る分厚い煙は不自然だった。ぱちぱちと何かが弾ける音がするも、それも火のはぜる音とは別物。

ヨウは喉にへばり付く“あれ”が燃える匂いに眉を寄せた。だが、口元はうつすらと嘲笑を浮かべてもいた。

「名前なんて知ったこつちやないが、あの“種”。この村の周りではよく見たな。どっかの商人が言っていた。『味も匂いもないから、食べ物に混ぜるには打ってつけ』だってな」

ほんの一口、ヨウはスープを口に含んだ時に感じた、あのぷちぷちと弾けた粒の事を思い出す。味も、匂いもなく、ただの食感を楽しむための物にも思えたが、旅をする中で覚えた「警戒心」が、彼にこれ以上スープを進めようとはしなかった。

だから、形だけ飲んでるように振る舞ったのだ。見つめてくる少女の視線を感じながら。

（“眠り薬”、か。ったく。可愛げも何もない）

“シャジャリ”という草の種なのだが、ヨウはその名前を思い出そうともしなかった。ただ、記憶にとどめているのは、そのペンペン草のような形と、膨らんだ葉の中にびっちり詰まった黒い種。そして、その草に火をつけると、特有の喉にへばりつく様な匂いがする、ということくらいだった。

あの時スープをこぼしたのは、その可能性を確かめるため。そして、その粒が“シャジャリ”であるとわかった後も、眠気に襲われたのは、仕込んだ人物が何を狙ってこの犯行に及んだのかを知るためだった。

だが、蓋を開けてみれば簡単だったようだ。

なぜ自分を眠らせようとしたのか。眠らせてどうする気だったのか。

それは単純に、「殺すため」でしかなかった。

ヨウはつまらなそうに息をつく。

少女はさも今の状況が信じられないかのように目を見開いていた。「そんな、そんな」と口にしながら、ヨウへとナイフを突き出して

くる。

「もういい。この村の事情も大体理解した」

小さな子どもの荒っぽく雑な攻撃など、どうってことでもないように、ヨウはすいすいとそれをかわした。だが、少女はもう後には引けない。

ずっと、この渴きを潤すことができると思ってたのだ。その期待はパンパンに膨れ上がり、これ以上我慢することはできないと自分に訴えかけてくる。

早く飲みたい。早く飲みたい。早く飲みたい。……早く！

自分を突き動かす衝動に身を任せ、少女はひたすらナイフを振った。

「水、水を……、真っ赤な、暖かな……」

欲しい

大きなひと振りが、近くの地面に突き立っていた木材へと引つかかった。びりりと破れた少女の袖の下、赤い線となって暗闇に傷が浮かび上がる。

少女の鼻を、温めたバターのような香りがくすぐった。香ばしくて、どこか甘味を含んだような……。

少女の動きが急に止まったのを見て、ヨウも静かに足を止めた。

ヨウの目の前で、少女は周りの何もかもを忘れ去ったかのように、自分の腕に出来た傷をじっと凝視していた。

渴いてかさかさになった唇が、「みず」と僅かに動いた。

そして、関を切ったかのように、少女の口から「水、水、水」と溢れだし、自分の小さく細い傷口にしゃぶりついた。だが、その少量の血では今の渴きを潤せないらしい。

少女は全ての分別を捨て去り、自分の腕へとナイフの切っ先を突き立てた。

それは悲鳴なのか歓喜の声なのかわからない。ただ、狂ったようにけたたましい声が廃屋の壁を揺らし、ヨウに不愉快な感覚を与えた。

なんどもなんども腕に凶器を突き立てては、そこから溢れだす真っ赤な血潮に喜び、貪りつく少女。  
ヨウはもう、自分が彼女の視野になど入っていないことを知ると、そのヒトなのか動物なのか知れない声の響く廃屋を後にした。

\*\*\*

あの夜ソレは、腐った水を口にしました。

とてもとても喉が乾いていて、どうしようもなかったので、近くにあったそれへ手を伸ばしました。

掴まれたそれは最期に「にゃー」と鳴きました。

聞いたこともないくらいに、か細く、聞いたこともないくらいに、悲しい声で。

その時ソレは初めてのその感覚に、味わったことのない快楽を覚ええました。

己の生の実感。

喜び。

生き抜くことで湧き上がる優越感。

そしてソレは、その腐った水の味を忘れられなくなりました。

その真っ赤な、鮮やかな、命の味のするその水を

### 23【腐った水：後に来た人】（後書き）

お久しぶりです。

なかなか思うように「毎日更新!」とはいけませんね……。せめて「毎月更新」でいけるようがんばりたいです。

ここまで読んでくださった方ありがとうございました。

まだまだ少し続きますので、もう少しつきあっていただけると幸いです。

## 23、5【ある天気の良い日】

ざーざーと、大粒の雨が沢山の広葉に当たりはじける。大きな木だが、さすがにこの量の雨粒を完璧には防ぎきれないらしい。立派に張り巡らされた枝の下に立つも、葉から葉へと転がされた雨粒が、ぼつぼつとまばらに肩や袖に落ちてくる。

だが、そんなことには構う事無く、その二人の旅人は話に花を咲かせていた。

片方は一頭の鹿の類の獣を連れており、また片方は、一匹の灰色の獣を連れていた。

二人の話の横で、二匹の獣は距離をおいて静かに雨がやむのを待っている。灰色は湿った地面に伏せ、自分の手の上に頭を置く。鹿のような獣は、灰色のの獣を幾度も見ながらそわそわとした様子だ。そこに決められた距離でもあるように、鹿のような獣はこれ以上灰色との幅を詰めようとはしない。

「……………そうそう、だからこの間訪ねた町はひどかったよ。町と町の衝突、村と村の衝突、村と町の衝突。そこもそんなのを繰り返していた一つだったみたいだね、見事に完敗した様子だった。家は全部崩れて、石ころの集まり見たいになっていたし、子供も大人も関係なく、皆飢えに苦しんでいた。私の連れも、なんと食われそうになったことか、」

大人の方の旅人は、己の連れである獣を示して笑う。

子どもの方の旅人は、フードの下笑いながらも、少々曖昧な表情を浮かべていた。

「ああいう場所は本当に恐ろしい。誰かれ構わず襲ってくるし、理性を失った人間ってのはなりふり構わずなんでも口にする。自分が何を食っていようと、生きようとするとする本能が優先して、物の分別に蓋をしちまう」

大人の方の旅人の、フードの下から覗く口元がわずかに強張る。その時の様子でも思い出しているのだろうか。とても笑い話に出来る様な場面ではなかったように伺える。

子どもの方の旅人は黙ってその横顔を見上げる。「……………」  
「そうだ、こういう話を知っていますか？」

大人の方の旅人の問いかけに、子供の方の旅人は  
「なんでしょうか」と答える。その口調は柔らかく、大人の旅人に大人びた印象を与えた。  
大人の旅人は答える。

「……………依存の、話です」

強ばった言葉の出だしと、少々喉に詰ったかのような声に、子供の旅人はフードの下表情を曇らせた。

大人の旅人は、雨で薄まる遠くの風景に目を細める。「飢えに苦しんだぎりぎりのところで、人間が生き延びた時……………、生き伸びた時の“要”となったものが、……………つまり、『その時それを口にしたから、そのおかげで何とか生き抜くことができた』というものがあつたとしたら。……………人間も動物も、『その時口にしたモノ』に依存性してしまうことがあるらしい」

大人の旅人は、頑なな口元に曖昧な笑みのようなものを浮かべていた。それは痛みを耐えるかのようにも見える。

目の前にあるものから、目を離したくも離せないでいた痛み。

「辛かったですか」

子どもの旅人は尋ねる。

その問いに、大人の旅人の口元から表情が消える。辛かったのかと尋ねる小さな旅人の声に、視線に、そこにこそ痛みを知る何かを感じて。そして、だからこそこうして赤の他人を労われる心を感じて。

大人の旅人は、見えもしない子供の旅人の瞳を見つめ優しく微笑

んだ。

「ええ、そうですね。……きっと、そうだったのかもかもしれません」

二人の周りに緑を転がり抜けてきた雨粒が落ちてはじける。

たつぷりと水気を帯びて満足そうな木々の上、空は少しずつ晴れ始めていた。

## 24【全ては愛すべき仲間のために】

そこはまだ随分と新しい研究所だった。清潔感を漂わせた真っ白な壁と天井。窓は見当たらず、大きな換気扇のようなものが天井付近の壁で回っている。

ヨウはつまらなそうにあたりを眺める。

「どうですか？ 面白いでしょうか？」

「そうですね」

「あれは雨を奪う装置です。ここから微量の電磁波を空中に分散させ、空に刺激を与えます。……………そうですね。何と言えはいいのでしょうか。わたくし共の天才的な発見を他の地から、しかもあちらの大陸からの方に伝えるにはどのような言葉を使えばいいのか……………」

コツ、コツ、と固い床を鳴らしながら、白衣姿の研究員は困ったように腕を組んだ。

隣に上がる「うーん……………」という唸り声を無視して、ヨウは道があるままに先に行く。

「ともかく、我々はこの先祖から代々に受け継がれた頭脳を持って、周りに群がる村町を追い払ってきました。我々を利用せんとする者たちが後を絶たないのです。……………ああ、それは風を止める装置ですね。われわれに与えられた“水を使う力”。それを利用し、空気中の微量な水分を使い、その空気自体の振動を止めるという装置です。逆に風を起こすこともできるんですよ、……………ああ、そうそう、あれは……………」

研究員はまた別の装置を指さした。

どれもこれも馬鹿にでかいばかりで、それぞれの違いがよくわからない。

ヨウは、それらの機器の中心に見える、幾つかのカプセル状の金属の塊を眺め数えていた。

「ああ、あれはまだ実験途中なのですが、水を使い火を起こそうという試みの装置です。空気中の水分を媒介にして空気を動かし、その空気と空気の摩擦を火へ変えよう、というものなんです……。いえいえ。これがなかなか……。やはり、火を使うことが許されるのはあなた方だけなんではないでしょうか？ ……いや、しかし！ われわれにだってこの頭脳があります！ あなた方のようにとはいかないかもしれませんが、我々もいつか水同様に火を使えるようになるのだと、そう信じて研究に励みたいのです！ ……、ああ、あれは土を液状に変える装置でして……」

案内をする研究員の話もどこ吹く風で、ヨウの赤い瞳はほかの場所へと泳ぎ暇を持て余す。

様々な装置。そこに施された読めない文字。そしてたくさんのパイプ。

一つの大きな装置の横を通った時、その中心からぼこぼこと気泡の立つ音が聞こえた。ヨウの案内をしている研究員はちらりとその装置を見やり、またすぐに通路の先へと視線を戻した。

ヨウもすぐに通路へ向き直る。コツコツと先へ進む音が二つ分、その装置の前から遠ざかる。

「そうそう、旅人さん。その髪、その瞳、その肌。とても興味深い限りです。宜しければ幾つかのサンプルの採取を願えないでしょうか？ ……そうですか。なら仕方ないですね。研究員としてとても魅力的ではありませんが、ご本人のご了承が貰えないのなら仕方ないですね。……ああ、そうそう。あの装置なんて私のお気に入りの一つなんですが、数人の“使い”の力を一つにまとめましてね、その凝縮されて濃厚になった……。そうですねえ、『波動』とでもいいましょうか。それで急激に低温を作り出す、というものなんです。あれもまだ未完成でしてね。水を媒介にし、火の時とは逆に物質の行動を止めてしまおうという考えです。物質と言っても、

我々が目にする服や時計のようなものではないんですよ？ もっと微粒で、小さく細かな段階の物質です。それらの“行動”が高温、低温といったものを作り出しているんですが、それらの“行動”を水を通して止めてしまうことにより、急激な温度の低下を作り出すことができるかもしれないのです。それはつまりどういうことかわかりますか？ この装置が完成すれば、我々は水を個体にすることも可能かもしれないのです！ それはつまり、戦やら戦争やらといった場面で、相手を圧倒することにもつながるのですよ！！ 液体の水よりも、さらに大きな攻撃力となること間違いなしです！ どうですか？ すごいでしょう？！ そうそう、そのためには大きなコストもあります、扱う“使い”の体温も急激に下がってしまうという難点も改善しなければなりません。あ、そのための装置が今こちらで実験段階にあるんですが……………」

熱心な研究員は眼鏡を輝かせて旅人を案内する。身振り手振りでその情熱を表すが、当のヨウはとうとうわの空だ。あたりの装置を見回し、その中心部に取り付けられた青いランプの数を数える。

( 56、57、58…………… )

まだ何か熱弁を披露している研究員の後ろ奥、梯子状になっている通路に4〜5人の人だまりができていた。

遠目に見る白衣の男たちの中心に、何かがつごめいている。その前には運転を止められたであろう何かの装置。その装置についたランプの色は赤だ。

(…………… 57 )

ヨウのカウントが一つ手前に戻される。

赤いランプの真下、その装置だけではないが、どの装置にもランプの下には一人一人分の楕円型をした扉がついていた。そして、あの赤いランプの下のそれは、透明の液体を滴らせながら楕円の口をだらしもなく開け放していた。

「それですね、私たちは考えたのです！ そうだ、土台となるあの円柱の幅をもっと…………… ああ、あれは」

話に夢中になっていた研究員は、ようやくヨウの視線に気づきその興奮を押し鎮める。ヨウの視線をおい、眼の先にあつた光景をみて、彼の眼鏡の下の瞳は先ほどの興奮などなかったかのように冷めきっていた。

「あれは、なんでもありません。たまにあるんですよ、……………ああいった“誤作動”が」

ヨウは隣の研究員の言葉を耳に入れながらもじつと、遠く小さく見える何かを肉眼で確認しようと目をこらした。

それを取り囲む4〜5人の研究員が邪魔だが、たまにちらちらと人の隙間に見える姿には見覚えがある。……………“人”だ。それも、多分女。

長い髪がたつぷりと水気をおび、まるでタコやイカの足を連想させるように床に広げられていた。その下に沈められた顔は確認できない。皮膚は……………よくわからないが、ふやけているのだろうか。

全体的に水浸しの彼女は、もううごめいてもいない。先ほどまで立ち上がるうともがいているようにも見えたが、今では地面に這いつくばったままだ。研究員達はその様子を眺めながら、なにかを書き記している様子で手元のファイルにかじりついていた。

「もう行きましょう。……………あれは被験者です。我々の研究のため、自らここを訪れた者」

隣の研究員がヨウを促す。

ヨウは研究員に初めてまともに向きなおり、足を進めながら口を開いた。

「あの女、自分からあんな物の中に入ることを望んだのか？」

研究員は微笑み、メガネをずらす。

「……………はい。それも当然です」

ヨウは研究員の誘導の元、次から次へとその施設に作られた装置を紹介された。

そうしているうちにいつの間にか日は暮れて、すべての装置の説

明が終わる頃には夜になっていた。

( 1 1 2 )

青いランプの数を忘れていないことを確認し、ヨウは興味なさそうに来た道を振り返る。“あの光景”を憐れんでいるわけではない。まだ“やるべき事”が残っているのだ。

案内した研究員はというと、旅人の反応など全く気にした様子もなく、すべてを案内し、説明した事に満足し浮足立っていた。

「どうぞ、あとはご自由に見学なさっていいですよ。……… ああ、そうだ。くれぐれも装置にはお手を触れないようにしてください。あなたを信用していないわけではないんですが、もしもの事がなくもないので。どうぞ装置への接触はご遠慮ください。では、私はここで失礼させていただきます。長い旅の道中です。ゆっくりと楽しんでいってください」

そう言い残すと、研究員は足早にその場を後にした。後ろになびく白衣を見届け、ヨウは近くの装置を見上げる。

「楽しんでいってください、か」

つまらなそうに研究員の最後の言葉を繰り返し、彼は後ろに続く道へ向き直った。

「メインルーム、どこだったかな」

「ごぼごぼと、近くの装置の中心から、気泡が吐き出されるような音が上がる。」

\*

施設の外に出ると、そこはまるで荒野だった。

いや。随分遠くではあるが木々はある。だが施設の周りはこちらの大陸にいるということを忘れさせるぐらいに荒れ果てていた。

外灯など見当たらずに、10歳前後であろう一人の少年が立っている。

彼は施設から出てきたヨウを見ると、駆け足に近づいた。

ヨウは黙ってコートの懐から一枚の紙を取り出し少年へと手渡す。少年はそれを受け取ると、小さくうなずいて手招きをした。

「こつち」

裸足で駆けていく少年を追い、ヨウもコートを風に揺らして走る。そして、施設の裏側に回り込み、ずっと走り、やがて地面が大きく窪んだ場所へとたどり着いた。その窪みの中、少年は地面の土を払って何かを探す。

「あつた。ここだ」

彼の示す場所には、地面と同じような色をした分厚い布があつた。その布をめくると、大人一人までならぎりぎり通れそうな穴がある。ヨウは何もいわれなくともその穴に入り、手元に小さな明かりを作つて奥へと進んだ。

そこには、大きく地面をくりぬいたような空間があり、それはまるで自分の故郷の大陸によくある村町を思い出させた。

「お待ちしておりましたよ、ヨウさん」

大きな地下の部屋の中。端の椅子に腰かけていた老人が待ち人の帰りに声を上げた。その隣に、先ほどヨウをこの地下へと招いた少年が駆けより、ヨウから受け取った紙を老人へと手渡した。老人はそれを受け取ると少年の頭に手を乗せ礼を言う。

「さて、」

老人は皺の下に沈んだ瞳をヨウへ向け、ゆっくりと口を開いた。

「私達の大切な家族たちは一体どれだけでもっているようでしたか」

「…………… 112。言われた通り、ところどころに小さな穴を開けてきた。メインルームの線も、装置の奥に組み込まれている部分は全部焼き切っている。多分何かあつてもすぐには作動できないだろう」  
その言葉に、部屋の中は一瞬しんと静まった。だがすぐに、「おお」と感嘆の声を上げる者もいれば、幾人かのすすり泣くような声小さく続いた。

老人は「ほう……………」と、安堵からか悲みからかわからないような息をつく。その口はまた、重たげに開かれる。

「私たちは、昔からこの地に住む一族でした。この荒れ果ててしまつた地には、最低でも5つの小さな村が点々と根付いていたはずなんです。それが、……………いつの間にやらやってきた、あの物語を侮辱する者等に……………」

老人は皺くちやな顔をさらに皺くちやにして俯いた。

「いつの間にやら緑は消え去り、池は泥に埋もれてしまいました。そして、気付いた時には村人さえも減つていた。……………あの者達。家族を取り返さんと立ち上がった村々を、『自分たちの頭脳を妬む愚かな猿ども』と愚弄しおつた。その拳句、その乗り込んだ人々をさらに捕らえ……………」

うああああああ、と奥から大きな泣き声が上がつた。

そこには薄汚れた服に身を包むまだ幼い少女が仁王立ちになつて涙を流している。その横で、困つた顔をして頭をなでてやる老婆の姿があつた。その少女を憐れむように、そのからからな老婆の手は優しく前から後ろへと細い髪の毛を撫でてやる。

周りの人々は、その少女を安心させるような言葉を投げかけていた。

「見ましたか？ 彼らの研究とやらを。……………とても愚かで、下らないとは思いませんか？ あれらの中心となつているのは、全て生きた“人間”です。我々の土地を研究とやらでこんな、草の一つも生えない荒野にした拳句、その原動力にこの地を愛した人々を利用したのですよ。それが、どれだけ痛ましく酷いことか……………。しかも、300人はいたと思われる被害者が、112にまで減つていますと？ ………………どうすればこの怒り、捨てきれましょうか」

周りの人々は、老人の言葉にこくこくと頷く。

その眼には皆決意の色があつた。何かを固く誓い、覚悟するかのような瞳。

ヨウは何も言わずにただそこに立つ。

「ヨウさん。さあ、これを受け取ってください。私たちにはもう関係のないものだ。モノを売り買いする風習は、この数十年でいつの

間にやら失われてしまった……。そしてこれも、対して私たちに  
は必要性を感じない。もう、この地に愛想をつかした者たちはとっ  
くに立ち去りいなくなってしまった。他の町や村を目指そうなどと  
いうものは、もうここには一人もないことだろう……………」

ヨウはパンパンになった小袋と、動物の皮から作ったであろう紙  
を手に取り広げた。

「本当にいいんだな。俺は、あんた達がこれから何をしようと、も  
う一切手を貸そうとは思わない」

その突き放すような言葉に、老人は「ほっほっ」と笑う。

「ええ、ええ、いいのですよ。これは私たちの問題だ。他の地の方  
を、しかも、これから沢山の地を巡り歩こうとしているまだ年若い  
少年を巻き込もうなど、そんな身勝手出来ようもはずありません。

ヨウさん、私たちはもう十分あなたに感謝しています。ですから、  
日の昇る前にこの地を去ることを進めます。少し離れた場所に、獣  
を一頭準備しておきました。それに乗って、この荒野から出来るだ  
け遠くへ駆けてください。……………そろそろ、東の山に登った者達が  
古くからこの地に繋がっている溪流へ行きつくころです。お急ぎく  
ださい」

「獣、それも貰っていいって言うのか？」

「ええ、あの年老いた十尾トオでよろしければどうぞ。きっと、迫りく  
る水の気におびえ、最後の最期に今までにない速さで駆け逃げるこ  
とでしょう」

ヨウは無表情に地図と金銭の類を見つめ、顔をあげた。

「わかった。遠慮はしない。もう何も言うこともない」

「……………ありがとうございます。あなたの様な心優しい英雄に出会  
え、私は本当に満足です。きっと、他の者たちもあなたへの感謝の  
気持ちは死んでも忘れない所存でありましょう」

周りで手を合わす人々を視界の隅に捉え、ヨウは表情を濁らせた。

「もういいか。俺は行く」と愛想のない言葉を残し、ヨウは老人  
に背をむけ、ずかずかと先ほど入ってきた穴へとつながる通路へと

歩き出す。

後ろから、「ありがとうございました」「ありがとう」など、ちらちらとその背へ投げかけられる言葉があった。

ヨウは外に出て、丸く輝く月を見上げる。その下で、わずかに大地が震えていた。

ヨウは足を持ち上げ、止まることなく小さくうごめく影の方へと早足に向かった。何も無い荒野の先から、獣の嘶いななく様な声とひずめの音が聞こえた。

長い鬣たてがみに目をすっぽりと覆われた鹿のような獣。その尾はふさふさとした毛が十本の束のようになっていた。

十尾トオは本能からかこの地の危険に興奮していた。地に打ちつけられた杭に頑丈そうな紐でつながれ、一生懸命に地面を蹴る。その鬣に、日に焼けたような手が乗せられた。ぶると鼻を鳴らし、獣は荒い鼻息を繰り返す。

ヨウの脳裏に、想像だが地下に潜った人々が、東の溪流に向かい掌を向け、ひたすらに目を閉じ祈っている姿が小さく浮かんだ。

「さて。『研究』と『愚かな猿の弔い』と、お前はどっちが勝ると思う？」

問われた十尾はその言葉に全くの興味も抱かない様子だった。

「どっちだろうが関係ない、か。全くだな」

ヨウは嘲たような笑いを僅かに浮かべると、そろそろ本気で暴れだしそうな獣の背へひらりと飛び乗った。獣の首に巻かれた皮の首輪に荷物を括りつけ、口元につながれた紐へ手を当てる。

紐は「ぼっ」と音を上げ一瞬で焼き切れた。

繋ぐものから解放された獣は、一目散でその場所から走り去る。

一瞬ヨウの体はぐらりと揺れバランスを失うが、すぐに十尾の鬣を握りしめ体制を立て直す。

地面からは「ごおおお………」と唸りを上げる様な、何かか迫りくるような音が響いていた。

まだだ。

だが、そろそろだ。もう水は走り出している。

「これは………愚かな猿の勝利かな」

くすりとほくそ笑み、風を切って駆ける獣の背の上ヨウは面白そうに低く呟いた。

## 25【道中のちょっとした出来事】

「それはそれは、なんとも素晴らしい狼ですね」

声を掛けてきたのは、ひとりの商人だ。

きつちりとした服。きつちりとした靴。きつちりとした髪。その話し方も経験からのものなのか、なんとも丁寧で落ち着いていた。カイは隣に並ぶ獣をちらりと見て、フードの下小首を傾げる。

(素晴らしい……………のか?)

視線の先で、獣は誇らしげに鼻先を少し上に向けた。カイは口元に苦笑を洩らす。

コートにフード姿の子供の隣、大人しくお座りをする獣を見て、商人は鼻に掛けていた小さな丸縁眼鏡を軽く持ち上げる。ちらりと輝いた薄いレンズの下、緑の瞳は興味深げに瞬く。

「この毛並みといい、品のある顔つきと言い、本当に素晴らしい……………」

「……………は、はあ？」

「人里にまぎれているところを見ると、相当に人には慣れているようですし。あなたといるところを見ても、主に対してとても忠実なことが伺えます」

「……………主？」

「ああ……………えー……………そうですね……………。生きていて、なお人馴れしている狼。ころは本当に珍しい。さて……………これくらいでいかがでしょうか？」

紙にすらすらと何かを書きだしたかと思うと、商人はカイへそれを差し出し

「にこり」と笑った。

カイは表情を曇らせる。

「あの、こいつを買う気ですか？」

「おやおや。これはこれは、とんだ失礼をいたしました。……………では、これでいかがですか？」 次にカイに差し出された紙は、先ほどの値に訂正線を引き、その下に二倍に跳ね上げた値を記したというものだった。

期待に満ちた緑の瞳に見つめられるも、フードの下の水色は色を変えない。

カイは商人には伝わらない程度に息をつく。

「残念ですが、こいつは私の所有物じゃないんで」

そういうと、商人は小さく驚いた声を上げた。

「おや、ではやはり、坊ちゃんは何処いすこかの旦那さまか誰かに頼まれてお使いをしているところですか？　これはこれは、引きとめて

しまうなんて！……………申し訳のないことをしてしまいました」

「私はそんなんじゃない……………」

「で、坊ちゃんのご主人はどちらの富豪様ですか？　こんな立派な狼を  
使いの者に遣わせるお方だ。きつと気遣いがある、心の広いお方に  
違いない」

「いや、だから……………」

「ぜひ坊ちゃんのご主人様にお目通しただけじゃないでしょうか。この狼をいくらなら譲っていただけるか、お伺いを願いたいのです」

「……………はあ、」

丁寧に頭を下げる商人を前に、カイは肩を大きく揺らすほどに息を吐きだした。

その横で獣は他人ごとをきめこみ大口を開いてあくびを浮かべる。

「あの、私は誰の使いでもありませんし、この街の人間でもありません。確かにこいつは私の連れですが、私がこいつの主になった覚えも、ましてやペットにした覚えもない。それに、あなたが一番勘違いしているのは、私が『坊ちゃ……………』」

「ああ！！　もしかして旅の方でしたか？！　これはこれは、またもとんだご無礼を……………。わかりました。あなたにその狼を譲る気がないというのなら、私はこれ以上あなたに付きまတွってご迷惑を

かけるような真似はいたしません。どうぞ先へお行きください。とんだ足止めをくらわし、本当に失礼いたしました。旅の坊ちゃん」

「……………」  
「ずらざらと非礼の詫びを並べ、商人は一步後ろへ下がりましたも頭を下げた。」

カイは謝られた気分にはなれず、フードの下で不機嫌そうに眼を座らせていた。

だが、ずっとこうして商人のやけに形のいいお辞儀をみてもしょうがない。カイは「それじゃあ、失礼します」と言ってその場を立ち去った。

狼連れの旅人が立ち去り顔をあげた商人は、断られたというのに残念そうな様子もなく、小さく苦笑を洩らし軽く首を振った。

\*

その夜、風とは違う細かな物音にカイは眼を覚ます。……………と、いうより、起こされたのだ。獣に。

胸の上を感じる圧迫感に、カイは「うううう……………」と唸り、目を覚ました。そこに飛び込んできたのが獣の鼻先と、その奥に見える月明かりに輝いた黄金色の瞳<sup>こがね</sup>。普段日の下では茶色に見えるそれが「すつ」と細められ、カイは事を察した。

「誰だ？」

感じる物音と、数人の気配。人のおいなど人であるカイにわかるはずもないのだが、その勘は不思議と何人かの男の匂いを水色に感じさせていた。

こんな時間に客が来る予定はない。

ひらりと床へ獣が降りると、カイは静かにベッドを抜け出し窓に手をかける。このまま屋根へと出て逃げることは簡単だ。だが、今の「気分」とやらが、カイのその動作を止めた。そして、静かに窓を開け放ったままに、カイは扉のすぐわきの壁に背中をつけた。

出る者のいない窓が、風と外の明かりを部屋へと招き入れる。薄いカーテンはゆらゆらと揺らめき、淡く白に輝いている。

獣は窓辺に佇んだままカイを振り向き、不思議そうに首をかしく出ていく気配のないみずいろは、「……………そろそろ金欠なんだよな」と口の前に人差し指を立てて苦笑した。

獣はぴくりと耳を震わせると、ゆらりと尾を振って窓から離れた。月明かりに照らされ、銀に輝く灰色は、カイとは反対側の扉脇へと息をひそめ、その身を闇へと沈めた。

「ありがとう」

カイは、反対側の部屋の隅に輝く金の瞳へ小さく微笑み、外の物音へと耳を澄ました。

\*

扉の開く音はなく、その影だけが妙に間延びしていた。

カイは扉の影で息をひそめたまま侵入者の動きに注意する。

一番初めに入ってきた男は、足音も少なく早足にベッドの前に詰め寄る。その手には大きな斧を持っており、「こんな恰好で町の中をうろついたのであるか？」とカイのおかしな笑いを誘った。

カイと獣の存在に気づいていない斧男は、「おい、どういこうこと」と不機嫌そうな声をあげる。持っていた斧をブンっと空で振り、「おい！」と扉を振り返り声を荒げた。

その男の言葉に、疑問の色を浮かべながら二人の男たちが部屋へと入ってくる。斧男は、扉の前で部屋のなかを見回す二人を睨みつけ、そしてその後ろ隅に輝く二つのビー玉に目がとまり声を上げた。おかしな場所にぽっかりと浮かんだ金の輝きを見つめる斧男の顔は、誰が見ても間抜けなものだった。入ってきた二人の男がその間抜け面を見つめて数秒。

「う、うわああああ、狼だ！」

斧男の顔からは一気に血の気がうせ、真っ青なものに変わった。

「狼?!」

「どこだ?!」

反応に遅れた二人の後ろ、二つのビー玉は闇からずりりと抜け出し、月明かりの下銀に輝く灰色の毛皮を一瞬でまとった。その姿はまさに狼だ。

そんなに大きくもないが小さくもない。毛皮としては並みの値には違いないだろうが、この男たちの目的はその毛皮ではない。

「いいか?! 生きたままだ! 生きたまま捕まえる!!」

そう怒鳴った斧男自身、自分の言葉をちゃんと理解しているのだろうか、大きな斧を容赦なく振り獣の胴へと狙い下ろす。

こいつらは果たして、ちゃんとした腹の足しになるのだろうか。と、疑問に思いながらカイは身を起こした。

獣に夢中になっている斧男の後ろ、どう参戦しようかと様子がかがっている二人の男。カイはその二人のうち、自分に近いほうへ素早く距離を詰め、最低限の音だけをあげてその首の後ろをナイフの柄で強く殴りつけた。

「……………つご、」

いきなり白目をむいて床に伏せつた連れを凝視し、もう一人の男は急ぎ足で周囲を見渡す。

その視界の隅に水色の何かが見えた気もしたが、すぐにそこへと視線を戻したときにはもう何もなかった。

気のせいだったのか? と、男が思ったその一瞬、「あれ、腕上げたかも」という嬉しげな声と、首の後ろに感じた鈍い痛みとがが鼓膜に響いた。

どた、っと床に倒れこむ二人目の男を見下ろし、カイは手に握つたナイフをと、自分の手を交互に見た。

「ん……………やっぱり、腕上げた」

旅の中でちやくちやくと、あがって来ている自分の戦力だが、どういうわけかうれしくもあり悲しくもある。

曖昧な気持ちはさておきで、カイはナイフを握りなおし、正面で

ぐしゃぐしゃになった無残なベッドへ眼をやる。

そこには、気を失っているのか斧を手にしたまま男が大の字で倒れこんでいた。口にあふれている泡は偽物には見えない。

「ナイスチームプレー」

カイはお座り姿の獣をくしゃりと撫で、くしゃりと笑った。

\*

「あまりいい値ではなさそうだなあ」

深夜の町を歩きながら、カイは気の抜けたつぶやきを小さく落とした。深夜ではあるがいくつかの店は内に明かりと賑わいを点している。道の端などで絡み合う男女や、地に突っ伏した酔っぱらいなど、まばらに感じる人の視線だが、それもとうぜんだろうかと、カイはあきらめ同然にフードの下困ったように息をつく。

後ろに従えた3人の男は、腕に縄を巻かれ、それをフード姿の自分にひかれている。しかも、そのうちの一人は気を失ったままで、意識のある二人のうち一人に担がれていた。

一体どういう経緯でああったのか、と詮索するような人々の視線を知って知らぬふりして、そのおかしなパレードの先頭、カイは目的地へと着々と向かった。

どうせ朝が来ればこの町を出ようと思っていたところだ。これ以上の滞在を必要としないこの町で、「隠密でめだたないように」はそもそも不要だった。

そろそろ役所が見えてくるころだろうか、とカイが道の先を眺めると、そわそわした様子でベンチに腰かけている人影があった。そのまわりには数人の取り巻きのような者たちも見える。

その道を歩き続けるにつれて、ベンチに座る影が昼間の商人であることがわかった。周りの取り巻きの人数も、大体7〜8人であると察する。

カイはフードを深くかぶったまま、その前を静かに通りすぎよう

とした。

「……………あなたは！」

だが、コートの子供と、獣と、3人の男たちがその場を行き流す前に、商人は立ち上がり声をあげて引きとめた。

カイに縄でつながれている、意識のある二人の男は、声を上げた商人の姿に顔色を変える。商人はそんなことには目もくれず、カイへと駆けより笑みを浮かべた。

「いやいや、奇遇ですね。いったいどうしたんですか、こんな時間に」

カイはちらりと7、8人の取り巻きたちに目をやり、「別に何も」と答えた。

さつさと切り上げようというカイの意図を無視し、商人はお構いなしで訊いてもいない事を話し出す。

「何もないとは、そんな無粋な方々を連れてよくおっしゃる」

はっはっは、と聞こえてきたのはなんともわざとらしい笑い。何がそんなに面白いのか。カイは内心眉を寄せる。

「私はここで人と待ち合わせしていたんですがね、時間を過ぎたというのに全く来やしない。簡単な使いを頼んだだけのはずだったのに、どうしたものか、と、痺れを切らしそうになっただけのところなんですよ」

にこにこにこにこと、楽しそうに喋る商人へ、カイは「そうですか」と薄っぺらい言葉を返した。商人はその言葉に「そうなんですよ、そうなんですよ」と熱心に頷く。

「本当に困りました、これから使いのために使いを出そうと思っただけなんですがね……………」

「ですがね？」

「ですが、よかった。その必要はないようです……………まさか獲物から使いの者達を連れて、こちらへやってきてくれたなんて、」

商人の合図で取り巻きの者達がカイと獣を囲みこんだ。

「ここまで来たらってやつかな」

カイはフードの下からちらりと商人を覗き、嘲るように口の端を小さく吊り上げる。商人は気づかない、僅かにだが、水色の瞳が待っていたとばかりに輝いたことを。

「子供の方はどうでもいい、獣は絶対に生捕にしろ！」

おおおお！ と声をあげて迫ってくる男たちの中心で、カイは困ったように獣を見下ろす。

「お前、そんなに価値があるなんて知らなかった」

獣はまるで「自分には関係ない」とでも言うように、能天気にあくびをかいた。

「……………ちえっ」

カイは腰のナイフに触れる。両手にダガーを握り、姿勢を低く向かってくる男たちの中へと走り出す。

「今日はなんか調子良いんだよな」

たくさん動きたい気分だったんだ、とこぼす言葉はやけに不機嫌だった。

すべては自業自得なのだ、あの商人の。なら仕方がない。

カイが走りだした方向とは正反対の方へと駆けだし、獣も軽やかに参戦した。

子供はフードが外れたことなどお構いなしで、己に襲い掛かってくる男たちへと立ち向かう。

やがて、最後の一人が獣に押し倒され気を失うと、カイはナイフを両手に握ったまま事のさまを呆然と眺めていた商人のもとへと向かった。

商人は口を中途半端に開けたまま、こちらへ向かってくる子供へと視線を向け続ける。目は真ん丸に見開けられ、その視線を水色から離せないでいるようだ。

カイは商人のずれ落ちている丸眼鏡を覗き込み、「一緒に来てもらってもいいですか？」とわざとらしい微笑みを浮かべた。

縄でつながれていた男たちは、道の隅で静かにその様子を見てい

るのみだ。今更手を出そうとも、あの水色と灰色にかなわないことは百も承知だった。

商人は自分の正面に立つ子供を見下ろし、あわあわと膝をついてしゃがみ込む。

「……………？」

商人の様子がどうもおかしい。カイは驚くでも怖がるでもない商人のおかしな表情を正面に見て疑問符を浮かべる。

獣は大人しくお座りをしていた。気を失った男の上に腰掛け、「ゆさり」と尾を振りカイと商人を眺める。

「おい、どうし……………」

商人は不安そうに眉をひそめる水色の子供を高さと同じにしたその視点からぼーっと眺めていたかと思うと、突然その両肩を汗ばんだ手で掴み、口を開いた。

「素晴らしい！！！ あなた！ 私にあなたを売ってくださいませんか？！ その水色の瞳、髪。そこまで完璧な忌み色はそうそうないですよ！ そうですね……………最低でもこれくらいの値が……………」

向けられた紙の額に、水色の子供はにこりとほほ笑む。それを見て、商人の表情はさらに輝きを増した。

「……………やった、……………やった、やったあ！！！ おいお前ら！ 早く、早くこの餓鬼を捕まえる！ ははは、ははははは！！！！

俺の、俺のもんだ！ これでまた一気に稼げ……………」

どす、

商人の言葉は最後まで続かずに途切れる。

どさり、と倒れこんだ商人をため息交じりに見下ろして、カイは背中に垂れ下がったフードをかぶりなおした。

「報酬、幾らかは上がるかなあ」

## 26【腐った水：先に来た人】

はじめはとても臭いと思いました。

悲しい音。悲しい声。

でも、気づけばソレに夢中になっている自分がいたんです。

腐っていると感じたソレが、気持ち悪いと感じたソレが、不愉快にしか思えなかったその色が……。

いつの間にかそれらすべてが、私に生きていることの実感を与えるようになっていました。

私は、いつしかソレなしでは生きていけないと思うようにまでなっていました。

ソレのためなら何でもしようと思っていました。

どんな手を使っても。

何を犠牲にしても。

誰が死のうとも。

\*\*\*

そこには子供しかいなかった。

(変ってるなあ)

カイは村の中を一通り歩き終わると、適当に見つけたはずれの廃屋に荷物を下ろした。獣は置かれた荷物の周りをくるりと一回りすると腰を下ろす。

「宿もなければ大人もいない、か。どうしようもないよな」

炭と灰に化した家々の中には、もともと宿として作られていたものもあつただろうに、今ではどれも同じような外見になってしまつてどれがどれだかわかりもしない。分かったところでどうしようも

ないが、一つ一つ見て回れば何か良い掘り出し物でもあるかもしれない……、と思い、カイはすぐ自分の考えに首を振った。まるで墓荒らしにでもなった気分だ。

カイは息を吐いて、崩れて横倒しになった壁の上へと腰を下ろす。そろそろ日も暮れる。焚き木の準備をしなければ。

獣を見ると、ちょうどそこらに落ちていたのか、いつのまにか二、三本の枝を啜えていた。カイはそれを受取って小さく嘖き出す。もしこれを投げたら、この獣は犬のように尻尾を振って枝を拾いに行くだろうか、と。

ためしにやってみてもいい。だが、きっとそう言う時に限って相手にされない。

「失礼だよな」

すまない、と頭をなでられ、獣はきよとんと小首を傾げた。

「さて、さつさと火を焚く準備をしなきゃ」

もうすぐに日が暮れる。

廃屋の崩れおちた壁の向こう、殺風景なせいで広々と見渡せる村の奥、幾本にも続く木の群れがオレンジの明かりを背に黒く染まっていた。そのオレンジの明かりは眩しく輝き、カイの水色の髪を金色に染め上げる。

「今日はいい天気だな」

水色は右手から差し込んでくる明かりに気持ちよく伸びをし、小気味よく立ち上がった。

フードをかぶり、焚き木の準備だ。

カイは廃屋の周りをぐるりと回り、丁度いい枝や木材を適当に集める。

村のはずれということもあり、廃屋の外を歩いていても、誰とも出会うことはなかった。

(フード、はずしてもいいかな)

もう日が暮れて薄暗く、冷たくなってきた外気。

カイはくすりと一人笑った。

(やめておこう)

なんてことのない、これはただの気分。

\*

夜、ぱちぱちと火のはぜる廃屋。

何かすることもなくとうとうととしていたカイの横を、突然黒い影がかすめて退いた。一体何か、と眠気を忘れて顔を上げると、一緒に焚火を囲んでいた獣の姿がない。

今の影は獣だと思いが、なぜ彼が急に身を隠したのか？ ……

カイは考えなくとも察した。

(誰か来た)

もしくは「何か」。

遠くから少しずつ近づいてくる何かの気配に、カイはそれが獣か、人か、と耳を澄ます。

たつたつたつた、と等間隔で聞こえてくるこの音は、靴が地面を蹴る音だった。

(……………ひと)

瓦礫の上、軽く地面に足をつけ、カイは己の腰へと手を構えた。その姿勢は自然と低く下げられる。

たつたつたつた……………たつ、と一歩。カイの正面に構える、ドアのはめられていない長方形に切り取られた穴の中、一人の少女が足を止めた。一瞬驚いたように眼を見開いたかと思うと、こちらをじつと見つめているコートをかぶった旅人へ、怯えたように後ずさる。

(女の、子?)

7、8つ位だろうか。

まだまだ幼いその少女に、カイは警戒を解きナイフからも手を離した。

「えっと、あの……………」  
「ごめんなさい」

少女は遠慮勝ちに、だがあわてたように頭を下げる。

まだ怯えているのか、一步もそこから動こうとしない。

「あ、あの、……………す、スープを、持ってきたの……………旅人さんが来たって聞いたから、……………あの、お話とかいっばい、聞かせてもらえないかなって、……………えっと、その、……………思っ……………」

そのとぎれとぎれな言葉に、カイはフードごしでも相手に伝わるよう笑って見せた。

「ちょうどお腹すいてたんだ。ありがとう」

少女の顔にも小さいつぼみが綻ぶような笑顔が咲いた。

少女は軽いその体で地面を蹴ると、カイと向かい合って焚火の前に立つ。「どうぞ」というカイの言葉にその場に腰を下ろすと、彼女は大事そうに抱えていた竹でできたであろう筒を差し出した。「どうぞ」と、今度は少女がそう言った。

カイが筒の中を覗くと、小さな穴の奥、とろりとした液体がおいしそうに波立つのが見えた。

コップにスープを注ぎ、軽く匂いを嗅ぎ、小さく口に含む。そんな事していると、じつと少女が自分を見つめていることに気づいた。カイは苦笑を浮かべる。

「バツが悪い、と言うべきであろうか。まさかこんな子供に、と思うものの、どんな時でも警戒は怠ってはならないのだからこれは当然のことだ、と思ってしまう自分もいる。申し訳ない思いながらも、カイはもう一度、確かめるようにスープを口に含んだ。だが、特におかしな匂いや味はしない。

心配そうに見上げてくる少女に、旅人は小さく頷きやわらかく口を開く。

「うん、おいしい。ありがとう」

少女はほっつと息をつき、安心したように胸に手をあてた。

カイは荷物からもう一つカップを取り出し、自分のと同じくらいの量でスープを注ぎ、それを少女へと差し出した。少女はためらいがちにそれを受け取り、温まるようにカップに手を添えた。遠慮し

ているのか、少し上目使いでちらちらと自分を見上げてくる少女に、「ずっと見ていては悪いか」と、カイは自分のカップへと視線を移した。中を覗き込めば、ミルク色のスープに、細かく刻まれた穀物が浮き沈みしている。一度乾燥させたのであろう赤い実、皮をきれいに取った黄緑の実、何かの種であろう、黒い粒。

温かい食事に安心しているのか、カイは意識の隅に淡い眠気を感じ始めていた。

\*

この村の話聞き、ここに来る前の町の話をしていたころ、カイは大きな欠伸に言葉を切った。

すごい眠気だ。そんなに疲れていただろうか。

ぐらりと倒れそうになった体をなんとか手で支えるも、視界がぼやけているおかげで平衡感覚も麻痺してしまってる。驚いた少女がカイへと駆け寄り、体を支えるのを手伝った。

カイはなんとか今の姿勢を保ったまま、自分を心配している様子の少女へと顔を上げる。

「ごめん、ちよつと、……………今日はここまでって、こと、で」

「旅人さん、だいじょう……………」

カイが目をあけていられたのはそこまでだ。そのあと、真つ暗な意識の中、少女が何か尋ねてきた気がした。だが、カイはそれに自分が何と答えたかはわからない。ただ、眠たさに支えていられなくなった首を、言葉もなく下におろした気もする。

全部、よくわからないまま。気づけば深い眠りに落ちるしかなかった。

少女は倒れこんできた旅人をなんとか支えると、自分の耳元に聞こえてくる相手の寝息にすっと口元を綻ばせた。目の前に覗く旅人の首筋。そこから、あのバターのような温かい香りがしてくるよう

だった。

折りたたみ式のナイフを持っていたが、このままではそれを手にすることができない。

なんとか眠りについた旅人を後ろの瓦礫へともたれ掛らせ、少女は空になった手にポケットから取り出したナイフを握りしめた。小さな刃先が月明かりに冷たい輝きを放つ。

フードをしていて相手の顔は確認できないが、眠っていることは確かだった。相手の持っていたカップも、ほとんど空に近い。これならきつと、ナイフの一刺しや二刺しでは気づかないだろう。……

……今までの獲物も、そうだったから。

少女の表情がよろこびに歪む。

「みず……みずを……」

二つの銀が、月明かりの下風を切った。

一つは凶器。一つは 獣。

旅人の首筋を狙い振りおろされたナイフに、灰色の影がすごい勢いでぶつかり軌道をそく。少女は手に感じた温かく柔らかい毛並みに驚きと困惑の表情を浮かべる。そして、自分と旅人との間に立ちふさがるかのように現れた獣を、怯えた眼で見上げた。

「おお、かみ……？」

獣の登場に驚きつつも、少女の飢えた瞳は「ちらり」と、深い眠りにつく旅人へと向けられた。

少女の視線が自分からそれた一瞬、獣はその身をひるがえし、目の前の小動物となんら変わらない彼女の体を押し倒した。そこにはいつもの澄まし顔はなく、齒をむき出し荒々しい唸り声を上げる、血肉に飢えた獣の姿しかない。

少女は即座に、自分が食われる側なのだという、絶対的な力の差を感じ取った。

今にも自分の喉に食いついてくるかもしれない爆弾を前に、彼女はゆらゆらと瞳を震わせた。

このカンジを、知っている……

迫りくる黒と、自分の中で止ろうとしようとする。テンポ。

お腹が減って、のどが渴いて、冷たくなって、真っ暗になって……

「……………いや、いや、」

小さく、掠れた声が唇からこぼれ出る。

少女の中で、記憶にこびりついた死への恐怖と“今”とが交差した。

「……………いや、いやよ、……………いや、……………いやああああ！！！！！！」

細い腕と足がばたばたと何も無い中を掻く。その瞳は獣の後ろへと向けられ、まるでそこに死神でも見ているかのよう。

獣は少女の目の前に剥き出しにした牙を突き付ける。少女は「ひっ」と小さく息をのみ、思い出したようにその視線を獣へと戻した。震えた瞳は乾ききっていた。

「あ……………ああ……………あああああ……………、」

月夜が一瞬、静まり返った。

「キヤアアアアアアアアアア！！！！」

「！！」

関を切ったようにまた、なりふり構わず暴れだす少女を、獣はいつも簡単に解放した。

少女の頭にはもう、自分が食われるという恐怖しかなかった。彼女は何度もつまずき、転びそうになりながらも、その度に体制を立て直し、あつという間にその廃屋から逃げて行った。

獣は少女が立ち去り、もう戻ってこないことを確かめると、ちょっとやさつとでは起きそうのないカイへ向き直る。なんとも呑気な寝顔が、フードの下、わずかにはみ出て月明かりに照らされていた。わずかに漏れる水色が、さらさらとやわらかく揺れた。

床に倒れこんだ壁だか天井だかの瓦礫の上、獣は座った状態の力イのコートを加えると、ずるずるとその体を横たえてやる。荷物から簡単な毛布を出し、上へ被せてやれば完璧だ。

次の日、カイが目を覚ましたのは昼過ぎだった。  
何でこんなに眠ったのかと、カイは不思議そうに首をかしげているた。

焚き火はもう消えているし、少女の姿などあるはずもない。

二つ置いたままのカップは、片方は全く手の付いていないまま、昨日の夜に風でも吹いたのか、砂だらけになって食べられようはずもなくなっていた。

「つたく、おかしいよなあ」

廃屋の裏にあつた井戸でカップを洗い、毛布を適当にくるんで荷物に詰めて、カイは未だにあの眠気は不自然だと考え込む。

獣はそんな水色の横であくびを浮かべ、のんきに日向ぼっこをしていた。

\*\*\*

私はきつと、化け物になってしまったのです。

だから英雄がこの村に来たのです。

私を殺すために。化け物を退治するために。

## 27【根の張り病】

それは病気だった。

偶然にも一粒の種が彼女の足へと付着し、そしてそこに寄生してしまつた。

“根の張り病”

書はそう記す。

だから人はそれをそう呼ぶ。そう。

私は私を、そう呼ぶ。

\*

この世は植木鉢だ。

私は最近そんなことしか思わない。

誰もが自分たちに用意された“肉体”という鉢の中で育ち、更には“社会”という鉢の中でまた根を張る。

一体何が楽しいのやら。

少なくとも私は何も楽しくなかった。

錆びれた街並みが目の前に広がる。

私が根を張つたのは、この街の一角にある小さな教会の鐘の下だった。

小さなステンドグラスに、漆喰の白い壁。可愛らしいブラウンのドアに、艶を失った金色のドアノブ。エメラルドグリーンの屋根の上には、お世辞にも大きいとは言えない鐘がぶら下がり、音をだす事を辞めていた。

いつからだつたか、私は神に祈る事をやめていた。

それは、この教会の鐘が鳴らなくなるのと同じ頃のことだった。

年老いたシスターに拾われてここで育ち、いつしか自分がシスター

ーの亡きあとをついで、ここの鐘を決まった時間に鳴らすという毎日を送るようになっていた。

そしていつしか私の足に不思議な植物が芽を出し始め、それが成長するとともに私の行動範囲は縮んでいった。

そしてさらにいつしか、根に体のほとんどを侵食されていた私は、ここの鐘を鳴らすのをやめていた。

別にどうってことのない事だ。

私がここにこうしていた事で、誰も気には留めもしない。この鐘の音に耳を傾ける人間もいなければ、こういった教会がある事さえも知らないでいる人間が山ほどいるのだ。

私は根の成長を体を感じつつ、いつしか水を飲み、寝ることしかしなくなっていた。

ベッドに身を横たえ、気が向いたら水を飲み立ち上がる。ベッドの上にある窓から日光を感じ、目を細め、日が沈むころにはそこを閉じて眠りにつく。そんな毎日の繰り返しだった。

気がつけば排出物といものもなくなり、トイレに行く手間も省けるようになっていた。多分それという物質も、この根にとっては格好の肥料なのだろう。

彼等は私のすべてを吸いつくし、私のすべてを包み込もうとしていた。

このベッドに彼らの根がいきつくのは時間の問題。

私は、自分の人生はこのベッドの上で終わる事だと思っていた。

だが、どういうわけか自分はここにいる。

動かしづらい体をなんとか引きずりだし、この何も無い鐘のもとへと着ていた。そこにたどり着き、私が視線を上げた瞬間、ついにその時がきて、私は移動のかなわない体となっていた。

やつらが、私の体を通してこの鐘の下に根を張ってしまったのだ。おかげで、最近ではずっと、この変わらぬ街並みと変わらぬ人々を眺めていなければならぬ事になった。

どうしようもない。どうにもできない事だ。

根と私は一体化してしまっているのか、彼らが痛いとも私も痛くなる。地面に絡みついた根を無理やり引き抜こうとすると、私の脳髄も、裏と表をひっくり返されているんじゃないかと思うくらい痛みを発する。

仕方なくそこにいてみれば、雨は降るわ、風が吹くわ、気持のよい太陽光が当たるわで、この根どもの生活に適したものに恵まれてしまっていた。それは根を通して私にまで栄養をいきわたらせてしまったため、死を待つだけの私をどうにかこうにか生きながらえさせている。

もう、この植物が死なない限り、私の死もかなわないのだろう。とても皮肉な話だった。

私の体の自由を奪った植物が逆に、こうして私に根を張り巡らせたことで栄養補給を共にし、命の源を分け与えてくれているのだ。まるでこの植物の家畜にでもなった気分だった。

\*

「あれ、人がいたのか」

その人が現れたのは、私がもう一年近くその場所に根付き、生きることに対して飽き飽きしていた頃だった。

私はあつて間もないその人を、天の使いとさえ感じた。まだ自己紹介さえしていないその人へ出た言葉は、長い間私がここで願っていたことだった。

「燃やしてください」

私は、自分がまだ喋れることに感動した。もうずっと言葉を出したことはなかったのだが、多少の乾いたようなかすれの感じ取れるものの、私の口はしっかりとその言葉を発音してくれていた。

「お願いします。この教会に、火を放って下さい」

挨拶さえもかわしていないというのに、一体こいつは何を言って

いるんだ。

その人の瞳はそう言っていた。

いや、何かそれ以上に、冷たくて重々しくて、内から嫌悪するような何かを感じた。

だけど私は、ただ伝えたかった。

「見てください。私のこの体はもう植物同然です。皮膚を破り、表面を覆い、寄生した生き物の生命に関わる機能を賢く避けて、この植物はちやくちやくと成長を続けています。私の脳も、いつかはこの植物の肥料となり、虚しく朽ち果てるだけです。私はそんな終わりを迎えるなら、その前に、自分が人であるうちに死んでしまいたいのです」

この言葉がうまく相手に通じているかは不明だった。何しろ、先ほどまでとの短いセリフとは違う。私の唇は今では乾いた木の表面のようにかさかさで固くなっていた。だから、昔のようになめらかな動きは期待できず、舌足らずで拙い音の羅列にしか自分では思えなかった。

「俺に、あなたを殺せと？」

その人は怪訝な顔をした。

言葉は通じていた。だが、この人はだめかもしれない。

私は期待していた胸の高ぶりを、一瞬で失った。

「一つの雑草を、根から焼き払うだけです」

自分のことを雑草と言う事に対して、全くの抵抗が感じられなかった。もう、根が張り体の自由が利かなくなってきたころから、心の奥深くでそう思っていたからだろう。

私の乾いた瞳はじっとその人を見つめた。

もうだめだ。またほかの訪問者を待つか、死をじっと待つしかのどちらしか無い。

内心そう思いつつも、小さな希望を捨てきれず、私はその人をじっと見ていた。

「まいったな」

その人は頭をかく。

「なあ、少し時間をくれないか」

「時間？」

「ああ。人を殺すっていうのは、そうすぐに決断できる事じゃない。でなくても俺は優柔不断なんだ」

納得できなくもないが、その人がまだ私のことを人と見ている事に抵抗を感じた。

「分かりました。でも、もう私を人と呼ばないでください。雑草です。そこら辺に生えたくさと一緒です。人と見るからためらうのです」

「ああ、そうかもしれないな」

その人は小さな苦笑を浮かべると、私の視界から消えていった。もう、首の自由も聞かない体だ。私は耳を澄まし音で判断する。あの人は階段を降り、下へと戻って行ったのだと。

それからあの人が戻ってくるまで、私は二回ほど日の浮き沈みを見ることになったのだった。

\*

人と呼ばれると、とても切なくなるのがわかった。

人であったときの自由を夢見、またあの頃に戻れたらいい、そう思ってしまう瞬間があつて怖かった。

もうすべては終わってしまったことだというのに、今の体にながら、私はまた人に戻れたらと望んでしまう。

そんなこと、無理だと分かっているというのに。

「おはよう」

その人は、三日目の朝、再び私の前に現れた。

「ここの鐘、昔は毎朝この時間に鳴ってた」

私の返答など聞かず、その鐘は何年ぶりの音色を空へと歌い出

した。

どういつつもりかと、瞳だけでその人を見つめるが、その人はそれに対する答えなど返してはくれなかった。

自分の鳴らした鐘の音を視線で追うように街を眺めると、一つ溜息をついて私へと向き直る。

「結構すつきりするな」

さわやかな風がその人の髪を揺らした。

真っ赤な、まっすぐなきれいな髪。

「答えは出ましたか」

「ああ」

「じゃあ、」と言いかけて、私はすぐに言葉を飲んだ。その人の瞳は、まっすぐと自分へ向けられ、揺らぐことを知らない。私はすぐに理解した。この人が自分に火を放つことなど絶対にないのだ、と。

そして、うなだれる事も出来ない首から、すつと力を抜き、私はその人から視線だけをそらした。

「……………帰ってください」

その言葉は、ぼとりと落ちてその足もとに影を落とす。全てをあきらめたいのに、人がいるだけで何かを期待してしまう。そんなもの、無駄だと分かっているのに、叶わないと思えば思うほど、いままでよりも強く望んでしまうのだ。

……………ぼつ、ぼつぼつぼつ、と自分の足もとに湿気を感じた。

こんな体になっても涙は出るのだろうか。そうであったならどれほど嬉しい事か、と私は視線をできる限り下に落とした。

すると、驚いたことに、私の視線に入ったのは、足もとにしゃがんで如雨露（あめつゆ）を傾けているあの人の姿だった。

「何をしてるんですか!？」

私は自分で言っておきながら、そのすつとんきょうんな声にびっくりした。

「何って、朝食だよ。スープの方が良かったかい? ………………もしか

して、パンとか固形物の方？」

それ以前の問題だというのに、と私は首が振れない代わりにぎゅっと目をつぶった。

「何をしてるんですか!!！」

私はもう一度繰り返す。

「誰も水なんか頼んでません。私が頼んだのは火です！」

水なんか与えられては、この植物が喜ぶだけではないか。と、その人の行動に怒りさえ感じた。だがその人は私の心境など知った風もなく、水をかけ続けながらこう言ったのだ。

「植物が元気になれば、一体化してるあんたも元気になるんじゃないかと思ってる」

元気になる必要はないのだ。余計な事はやめてほしい。

私はじつとその人を睨む。するとその人は「おいおい」と言っただけで座を座らせた。

「まあ別にいいけど。あんた、自分じゃ死ねないんだろ？」

「ええ」

「なんで」

「体が動かないからです」

見てわかるでしょう、と小さくため息をつく。だがその人から帰ってきたのは、「そうか」というなんとも薄っぺらい相槌だった。

そして、私の意志とは関係なく、その人は又突然勝手なことを言い出したのだ。

まだ朝だというのに、人騒がせにもほどがあると思うような事を突然

「俺、少しの間ここに住みたいんだけど」

\*

ひどい話だった。

あの人はここに住むという事を“植木係”だと言っていた。  
私という植物でも人間でもない中途半端な存在に毎日水をやる。  
それが最低限の仕事なのだ。あとは鐘を鳴らすこと。それ以外の  
時間は好きにすると、そう言って家の中へと消えていったのだ。

あれから二日。

根の張った私の体は、今日もまた日光を食べて生きる。

そして私を中途半端に生かす。

今日はいい天気だった。かさついてひび割れそうな肌を、柔らか  
な風が通り過ぎて行った。

「

．．．．」

私の唇から、なんとも懐かしい音が紡ぎだされる。

ずいぶん昔、私を育ててくれたシスターがよく歌っていた歌だっ  
た。

空を、水を、大地を謳う歌。流れる風に想いを預け、緑と共にこ  
の地で生きようと、．．．．．緑と、とも、に．．．．．。

私は瞼を閉じた。

「

．

．．．

」

ろくな声ももう出ない。

この歌声がどんなにひどいものか、自分でも重々承知していた。  
だが、そこに偶然にも居合わせた人物がこう言ったのだ。

「綺麗だな」

ぴたり、と、かさついた音の集まりは動きを止めて姿を消した。

つまらない歌の残像は風に流されてはるか遠くへと消える。

「どうしたんだい？」

私は視線を自分の肩越しへと動かした。だが、ぎりぎりのところ  
でその人の姿が捉えられない。

「いつからいたんです？」

「さっき」

その“さっき”とやらがいつなのか。できればそこを答えて欲し

かったのだ。

「その歌、俺も知ってるよ」

「そうですか」

「まあ、こちら辺に住む人間なら皆知ってる歌だらうけど」

「そうですか」

「俺は、本でしかその歌を知らないんだ」

「そうですか」

一拍置いて、その人が小さくクスリと笑った気がした。

「そうなんですよ」

私の口調を真似したもののなか。その人はその後、くすくすと笑ったのち下へと消えていった。

「……………」

……………」

人の気配が無くなった鐘楼で、また懐かしいメロディーが紡がれ始める。

緑を揺らすその音色に、鐘楼の下、階段に腰を下ろし、耳を澄ませる男の姿があった。

男はゆっくりと瞼を閉じ、歌に聞き入る。

人が随分の間生活をやめていた室内は、少しくすんだ茶色の空気を満たしていた。

そこにその男が存在し始めたことで、ここは徐々に、人の気配を取り戻しつつあった。

くすんだ茶色は、温か味のあるブラウンへと色を変える。

\*

今日もあの人は私に水をやりに来た。

鐘を鳴らし、その場に腰を下ろし。

「こつという生活もいいもんだな」

私はもう視線を動かすのもおっくうになっていた。だから、斜め後ろに感じるその人の視線を感じて「そうですか」と、適当に返す。「ここからの眺めは嫌いじゃない。町を見渡すのに高過ぎず、低過ぎず。丁度いいと思わないかい？」

「さあ……………。もう見慣れすぎてしまい分かりません」  
そうか、という声が苦笑したように聞こえた。

「あの町に行つたことは？」

その人は私に尋ねる。

「もう、ずいぶん昔の話です」

「そうか」

暖かい日差し。

ゆっくりとした時間が流れ、その人の言葉もゆっくりと流れる。

「煉瓦の街並みが、きれいな町だ」

ああ、そう言えばそうだったかもしれない。

私の記憶がその人の言葉に重ねあわされ、脳裏に淡く浮かんだ

「悪事なんて言葉からは程遠い、平和ボケしたともいえる、のどかな場所だ。毎日が平凡で、繰り返して、幸せしか無い」

そうだ。

毎日がくりかえしだった。あの町だけではなく、この場所も。

毎日生きて、鐘を鳴らしていた。

毎日が類似しすぎるがために、何が幸せなのかわからなくなっていた。

健康なのが幸せ？ 五体満足で、自由に動けて、不自由のない生

活が幸せ？

『……………そうか』

私の唇が小さく動いた。

気づいたのだ。

今も前も変わっていない事に。毎日を繰り返し、日々ゆっくりと近づいて来る死を、ただじっと待っていた。

体が自由でいようがどうしようが、自分はいつでもただ待っているだけだったのだ。

動こうとせず、先にあるものを眺めて、「ああ、今日もまた近づいてきているな」と目を細めるだけだった。

待っている。今もただ、待っている。

「もう、生きていることにも疲れていた」

いつの間にか遠のいていたあの人の声が、急に耳元で囁かれたかのように近くに感じた。

私は驚いて視線を動かそうと目を

目、を？

私の眼は、いつのまにか何かを移すのをやめていた。

\*

「あなた、あの町の人間ですか？」

「いいや」

そんなこと、見ればわかった。

「では、あの町の出身者かなにかですか？」

「いいや」

それだって、とつくに知ってる。

「ではなぜ、あの町の事をご存じなんですか」

私が聞きたかったのは、ただそれだけ。なのに、無駄に繰り返された質疑応答。

彼の、くすりという笑いが聞こえた気がした。

「今日はやけにおしゃべりだね」

「そうですね」

「それにやけに素直だ」

ははは、と笑う彼に、私は少々むっとした。けれど、いろいろと話しておきたいと思った。

特に理由はない。

ただの……、そう。きつとただの気分だった。

彼は旅人だそうだ。

『あの町には、昔、俺の尊敬する人が行ったことがあるんだ』  
彼がそう言っていた。

それは、まだ彼が小さい頃の話らしい。今は遠い故郷で、誰かが彼に伝えたのだ。あの町の風景、物語り、歌、人々。

ただの好奇心だった。

彼があつた町を訪れたのも。彼がここを訪れたのも。彼が私を、見つけたのも。

『町は、どうでしたか』

私は尋ねた。昔に聞いたのどかで平和な町は、一体どうその瞳に映ったのか。

彼は『ああ、』と、風を撫でるように口を開いた。

『変わらない。聞いた通りだった。のどかで、平和で……。ずっとそのままだ。……。変わらない』

彼は今、きつとこの鐘楼からあの町を眺めている。

雑草になってしまった私の存在など知りもしない、あの町を。

でも、それでいいのかもしれない。あの平和ぼけした町には、こんな辺鄙な話必要ないのだ。ずっとこのままのどかで、平和でいればいい。ずっとそのまま、変わらなければいい。

そう、ずっとそのまま、私は

「私、きつとあなたが好きです」

返答はなかった。

ただ、何か柔らかい風を感じた。この堅くなった皮膚に染み入るような、温かい風。

「そんなことを言われても、君を燃やすなんてしてあげないよ」

感情の感じ取れない響きで、感情などもとから無いのではないかと思わせる無機質さで、彼の言葉は私の鼓膜を震わせた。

その音にも、キシキシという雑音が混ざる。

「やけにお喋りだなと思っただら、少し静かになって。そしたら今度は告白か」

静かに鐘が鳴らされた。

あの音が、少し遠くに感じられる。

「ええ、気分なんです。ただの。だから言わせて下さい」

ここから見える青空が好きだった。

ここから見える夕日が好きだった。

ここから見える大地が好きだった。

狭苦しい植木鉢でしかない、世界が、社会が、町が、この教会が。今のこの私の居た場所だった。

居る場所なのだ。

「人には誰でも、しみりする時くらいある」

彼はきつと、小さく笑っている。そんな音がする。キシキシと、

キシキシとするその奥に、彼の声が聞こえる。

「……………歌ってるんですか？」

そんな私の声も、キシキシしていた。

「下手くそだろ」

「まったくです」

聞いてもらえない。

そんな事を言っただけ私は笑った。

彼は困ったように苦笑を浮かべ、また懲りもせず歌い出す。

「です」

彼は歌う。あの町の歌を。

空を、水を、大地を謳う歌。流れる風に想いを預け、緑と共にこの地で生きようと、……………緑と、とも、に……………生きようと、と。

「わたしのなまえ　　です。なにもない、はなも、みも付かない  
ないくさのなまえ」



「　　んだ。俺の名前。シン。……………ソーゼ」  
今は無い草の名前。

花のように地に生える、白い草の名前。

食料にも、染料にも、薬にも、毒にもなる草の名前。

だからいつしか摘み取られ、絶えてしまった草の名前。

青年の見つめるそこには、小さなピンクの蕾に埋もれた塊があった。

その塊は先程まで、彼の歌を下手だと言って笑っていた。

自分を覚えてくれと、伝えていた。

自分はここにいるのだと、涙を流していた。

「君は、気づいていたかい？」

泣いていたことに。

変わらぬあの町に。

そう。ずっともう、何も変わらないのだ。

あの町に変化はない。

ずっと、ずっと……………

\*

一人の旅人が訪れたその町は、時間が止まったように平穏な風景を残し、住む人だけを消していた。

人はいた。

いや、人の形はあった。

だが、それは大体がそれぞれの家の中に、椅子に座ったり、ベッドの上に横たわったり。外にあるものはほとんど無かった。

牛や馬、鳥、猫、犬。家畜やペットの類も、地に伏したまま動く

ことはない。その身に蔓を茂らせ、地に縫い付けられたまま。もう、決して自分の意志で動くことはない。

この町は絶えた。  
そう思った時に見つけたのが、あの教会だった。

\*

あれ、人がいたのか

あつて間もないその人は、天の使いでした。

## 27【根の張り病】（後書き）

ずいぶん前に書いた話なのですが、この話の一つに混ぜ込んでしまおうとリメイクしてみました。本当は短編で恋愛っぽく書くはずだったんですよ。

使い回しだなんて・・・、まさかここですばらな性格が出てしまうだなんて・・・

またこれはこれで、いつか別に短編をUPしてみたいと思います。無理やりな流れ等あってよみずらかったかもしれませんが。すみませんでした！でも読んでくれてありがとうございました！

## 28【赤の匂いの道の途中：前】

「こんにちは旅人さん！」

小さな集落。コートにフード、灰色の獣をお供に添えた子供は、そこに足を踏み入れるなりあげられた歓迎の声に肩を揺らした。

カイはコートの上から胸を押さえ、声のあげられたほうを見る。

(なんだ。子供か……)

自分も子供ではあるが、そこにいた子供はさらに自分より幼い。

そんなこともあり、カイは内心で自然な流れでその子供を子供呼ばわりする。

隣に行く獣はその気配に気づいていたのだろう。隣の水色と比べ、全くその子供のあげた声に驚いた様子はなかった。

子供はカイへと駆け寄り手を伸ばした。

「こんにちは！ 旅人さん、お名前は？」

手をぎゅっと握りしめ、嬉しそうに笑うその子供を見下ろし、カイはほうつと息をつき、自分の落着きを確かめるように声を出した。

「カイ。……えっと、はじめまして」

カイは握られた手を軽く握り返す。

「僕はシューリ。カイ、僕たちの村にようこそ！」

シューリは人見知りなど言う言葉も知らないように笑った。

シューリに手をひかれるまま、カイはその集落の中心へと連れられる。その間、通り過ぎる人々、皆シューリと同じように友好的な声をカイへと投げかけた。

「おお、旅の方が」

「いらつしゃい、旅の方」

「いい供をつれてるねえ、旅の方」

「旅の方、ゆつくりして行くといい」

「あらシューリ、旅の方にこそ無礼のないようにするんだよ」

カイはすれ違いざますれ違いざま、わざわざ声をかけてくれる村人たちに軽く会釈をしながら困ったように手を引くシューリを見た。「な、なあ、シューリ」

「ん？ 何、カイ」

「いったいどこに行くんだ？ っていうか、みんな随分と旅人に鼻屑してないか？」

そもそも、カイがシューリに道案内を頼んだ覚えもなかった。勝手に手を握ったかと思うと、この少年は勝手に手を離さないまま歩きだしていたのだ。

迷惑、というほどでもないが、喜ばしいことでもなかった。正直、今のカイの頭に浮かぶのは「困った」という、少年の行為に対して非礼にも当たるであろう言葉一文字。

足を止めるかどうか迷っているカイの隣で、獣はふさふさと尾を揺らし歩く。

「カイは、こんな辺鄙な地に、まさかこんな集落があるだなんて、思ってもみなかっただろ？」

「あ、ああ」

「皆そうなんだ。ここに来た旅人さんたちは、みんな『こんな所に人が住んでたのか』って驚く」

「まあ、そうかもな」

「それと同じなんだ。僕らも驚く。『こんな辺鄙なところに、外から人が来るなんて』って。でも、確かに来なくもない場所なんだ。この古い渓谷を抜ければ、たくさんの街があるし、さらにその向こうには国もある。この渓谷は、栄えた地に向うには一番の近道になる」

「そ、そうなのか」

（私はただ匂いを追ってきただけだからな。そんなこと知りもしなかった）

カイはちらりと隣の獣へと視線を向けた。

シューリは驚いた様子でカイを振り向く。

「『そうなんだ』って、まさかカイは知らないでこんな場所をさまよってたの?!」

「……………いや、多少は話に聞いてた」

面倒くさかったから、そういうことにしておいた。

「でも、人がいるなんて知らなかったよ」

カイはへたくそな作り笑いを浮かべる。

「ああ、だから僕らは歓迎するんだ。みんな知らないでここにたどり着く。別にここに来る予定でもなかったらうに、旅の人たちは偶然でここを見つけてくれるんだ。ね？　なんだか嬉だろ？」

「そ、そうなんだな」

「うん！　それに、旅の人たちは外の話を持ってきてくれる。報の出入れがでなくても難しいこの地では、旅の人たちの話って本当にいいプレゼントなんだ。あと、珍しいものを無償でくれるから、僕、旅の人が本当に大好き！」

（これは、遠まわしに無償で物をせがまれてるのかな）

カイは「そうか」と発した自分の言葉を、まるで他人が言ったかのように感じながら苦笑いを浮かべた。

\*

着いた場所は小さな小屋。カイは「なるほど」とただ納得した。

「長おさの家だ！」

シューリはその小屋の前、「ジャーン」とでも言いたげな笑顔を浮かべ右手で示して見せた。

誇らしげな彼の黒い頭を、カイはぼんぼんと叩いてやる。そして小屋の前へと一歩二歩進み出て、足を止めた。

見上げたそれは、小さな看板だった。

（『モリルの靴工房』……………職人か）

普通、通常、ごく一般的に、町や村の長は力量によって決められる。宿っている使いの力や、応用力など、その時を納めている長に

認められた人間が“長”という役割を委ねられるのだ。

だから家のでなどはほとんど関係ない。裕福な者が長となることもあれば、貧しい家の者が長となることもある。昔は男がなって当然、という見方もあったが、今では男女問わず相応しいと思われる者になれることができる。ただ、使いであることは必須ではあるが。

(ミネの時は宿屋だったからな)

懐かしい友人の父はその町の長であった。長であり、宿屋の主人であり。だからこそあの家は自分を受け入れてくれた。なにしろ宿屋なのだ。部屋など幾らでもある。

まあ、実際にカイにあてがわれたのは、物置当然の小さな部屋だったのだが……。

カイは十年近く世話になったその家を思い出し「クスリ」と笑いをこぼす。

「カイ？」

シユーリの不思議そうな声にカイは今へと向き直る。

「いや、何でもない」

懐かしい記憶に浸るのもいいが、今はその時ではない。ここに連れてこられたということは、それなりの話があるのだろう。

(歓迎会でも開いてくれるのかな)

冗談さながら、カイはまったく小さく笑いと小さく笑いその小さな小屋のドアノブを握った。

「シユーリ、入っていいんだな？」

「うん！………て、ああ、だめだめ、僕が戸を開くよ！」

という少年の優しさを背に、カイはキィィときしむ戸を手前に引いた。

中は「昔ながらの」という言葉が似合うような古めかしさがあった。ずらりと並んだ木造りの棚には、いろいろな素材で作った靴が片足ずつ並べられている。だがよく見ればその靴達には埃がかぶっており、かぶった埃の分厚さで作られた順が見て確認できるくらいだった。

カイはひとつ、靴を手に取り「ふー」と息を吹きかける。

「……………つけ、つけ、ごほっごほっごほ……………」

散った埃にむせながら、カイは口や鼻元に手をかぶせて手に持った靴を品定めする。

横で、くるくると瞳を大きくして、不思議そうに眺めているシューリ。獣はさらにその横でお座りをし、あたりを静かに見回していた。

「いい品だ」

靴の外、そして中へと視線を移し、カイは小さくそうこぼす。

「だろう？」

若い旅人のつぶやきに帰ったのは低い男の声だった。

カイは声のほうへと顔を上げ、まるでもとからその男がそこにいたかのように、当たり前前に話しかけた。

「これ、モリルさんが作つたんですよね。すごい。私のいた町に目のいい物売りがいたんですが、前にそいつに、あちらの大陸の大きなアブラムシの話をされたことがあります。胃袋が丈夫で、軽くて水をよくはじくから靴や服には最高の生地だって。鞆は『牛食いのクモ』、靴は『砂潜りのアブラムシ』、コートは『海峡のコウモリ』って、教えられました」

どこか嬉しげな瞳を向けられ、奥の部屋から現れた男は声をあげて笑いだした。

なんとも盛大な笑いつぶりに、「少々しゃべり過ぎただろうか……………」とカイは少し不安になる。

「モ、モリル……………」

不安げなのはカイだけでないらしい。隣に並ぶシューリも、どうしたものかと心配そうな面持ちでその男を見つめていた。

久々の旅人を、と扉の前にのぞきに來ていた集落の住人たちも、どうしたものかと目を丸くしていた。

「え、えっと、あの……………」

カイは戸惑いながらも言葉を探す。だが、そんな旅人に、モリル

は「いい」とでも言うように、あいている片手を振って見せた。

ふさがっているもう片手は、笑いを抑えるように顔を覆っている。

「ひっひっひ………」と喉で抑えた笑いをこぼしながら、モリルは視線を扉のほうへ向け、大声をあげた。

「おい、お前ら、もういい！ 今回ののは客人だ！ 俺が歓迎しておく！」

その言葉に、扉の前のヤジ馬はぶつくさと文句を垂れ始めた。何か恨めしげな視線をカイに向け、不愉快な空気をまといながら背を丸めて帰っていく。

そんな彼らの姿を見届けたのち、ずっとカイの隣にいたシユーリも、不満げな瞳を向けモリルに問いかける。

「ねえ、どういうこと?!」

カイにはその問いがどういうことか理解できない。

モリルは納得できない様子の少年の頭に、なだめるように手を置いた。

「まあ落ち着け。すまない、今回は俺の気が変っちゃまったんだ」

「『今回も』、だろ！」

シユーリはこぶしを握り、身を乗り出す。

カイは何となく想像できた今の現状を頭の片隅に置きながら、なにも言わず、ただ確信をつかむために二人のやり取りを眺めていた。

「モリルは、この間もせっかくの獲物を逃がしたじゃないか！」

少年は頬を膨らます。

「あの人、きつといい値で売れた。それに、持ってる物に面白いものはなかったけど、身に付けているものはそれなりにいいものだった、服屋のリーレが言ってたもん！」

「おいおい待て、確かにあいつを逃がしたが、そのあとに来た二人にはしっかり儲けさせてもらったはずだ。お前だってあの時、ちゃんと納得してただらう?」

「けど、でも、今回カイは、別に何もしてない！」

確かに何もしてない。

カイは蚊帳の外で、ずっと手に靴を持っていたことを思い出し、それを柵に戻す。

「まあ、そうだ。だがこれからしてもらうさ。ヨウの時もそうだったろう?」

「え、なつ、ヨ……………」

「ヨウは強かったから!」

『ヨウ』という名に声を上げかけたカイ。だが、その声はシューリの高い声にかき消されてしまった。

「ヨウは、ヨウは仕方なかった。だって大人たちが束になってもかなわなかったんだから! そ、それに……………リーレ……………リーレ、が……………あいつのこと……………」

「リーレがあいつに惚れてたってか? ったく。自分の惚れた女の惚れた相手だから許すってか? 生意気言いやがって。お前みたいなチビが一端の男ぶるな」

「ぼ、僕だって、」

「ならまずその『僕ちゃん』言葉をどうにかすることだ。このがきんちよめ」

いいからお前もさっさと出てけ、と邪魔扱いされる始末。シューリは若干目を潤ませながら、あふれ出てくる言葉を飲み込むように唇を噛んで店から出て行った。

カイは何も言っただけやらないほうがいいだろう、と気遣い、黙ってその背中を見送る。

「で、旅人さんよ……………『カイ』だっけか」

「あ、えつと、はい!」

「大体の流れは、今ので十分わかったか?」

口髭の下、黄ばんだ歯を見せながら、その唇はにんまりと笑っていた。

この風体、こうして集落の長と言われればそれで納得もいく。だが、これがもし野山にいたなら……………がっしりとした体格、大きな肩、手入れがされているのか疑問に思うぼーぼーの髪……………。

カイは小さく息をつく。

(まあ、いいか)

こういうのも面白いかもしれない。

深くかぶったフードの下、小さく微笑んだ旅人の口元を見て、この集落の長は「いいだろう」と満足そうにこぼす。

旅人に友好的な集落。まるで逃がすものかとびったりにそばに付きそっていた小さな少年。『今回の客人』であるらしい自分の前に、客人であった様子のヨウ……………。

カイは軽くフードの下から瞳をのぞかせ、まるでそれが自分の中の礼儀でもあるかのように相手をまつすぐに見上げた。

「見逃していただき感謝します。追いはぎさん」

その水色は、楽しみに片手を差し出した。

\*

差し出された手を握り返し、モリルは旅人の瞳を見下ろした。

見間違いか、真正正銘のそれか。一瞬その男は動きを止める。

大の男のなんともいえない表情に、まだ15歳そこらの旅人は苦笑いを浮かべ問いかけた。

「この集落の信仰は、根強いですか？」

それは物語に関することだ。男は一瞬その問いの意味を解せず、またもあいまいな表情をする。そして、見上げてくる水色の瞳が小さく首をかしげたのを見て、「ああ、」と口を開いた。

「そうだな……………。確かに。ああ、そうだ、そうだ」

何への納得なのか。カイは口を閉じ続きを待つ。

モリルは腕を組み何度かそうやって一人頷き、満足したのか「よし、ならとりあえず来い」と言っただけカイを奥の部屋へと招き入れた。カイは黙ってそれに従い、その工房の主人のあとに続いた。

招き入れられたのは小さなリビング……だろうか。

丸いテーブルに、椅子が二つしまわれている。それを手前に引き、職人であり長である男は、カイにも椅子に座るようにと促した。

「まあ、ゆっくりしてくれ」

その言葉に、カイは静かに腰を下ろす。

その隣に、かちかちと足音を立てながら獣も並んで腰を下ろす。

「そうだな、さっきの質問だが、……ああ、そうだ。お前と言いつ、前の客人と言いつ、物語の信仰の影響は大きいことだろう。安心しろ、この集落でお前を本物の『化け物』と思いつ込む輩はいつないよ。だがまあ、商品として狙われる危険は十分にあるわけだが……」ところてカイ、お前のそれは、瞳だけか？」

真黒だが、わずかに藍のような色合いつを浮かべる瞳に問われ、カイはかぶつていついたフードを外す。その下にはもちろんのこと、水色の頭が姿を現す。

その見事な水色に、モリルは「おやおや、」とあきれた様子で片手で頭をおさえた。

「今からでも『客人』から『獲物』に格下げしますか？」

未だ客人であるその相手の含んだ物言いつに、モリルは呆れながらも冗談交じりの笑顔を浮かべた。

「それどころか、こりや『獲物』から『化け物』への昇格だな」

それはカイがかぶることになつた不運への皮肉か何か。カイ本人への嫌みはいつないが、見えない何かへの嫌みは感じられた。

カイは「上手い」とくすくすと笑つた。

「で、なら、私はまだあなたの『客人』に変わりはいつないんですね」

「ああ、もちろんだ。だが、こりやまた集落の奴らにどやされちまう。……前にきた客人同様、今回もまた『大物』を逃しちまつたわけだからな」

「くそっ」と吐き出すものも、男の顔に心底の悔しさは見られないつ。だが、前の住人たちの

「どやし」とやらが効いているのだろうか。片手でこめかみを押さえる姿は、これからのたくさんのかたがたや不満を想像し、まいつているように見える。

哀れには思うが、特にどうしてやることもできない。特に自分に責任を感じることでもないと思い、カイはとりあえず今聞いておかなければならぬことを訊く。

「先ほど話に出てきていた『ヨウ』は、それも旅人でしたか？」

こめかみを押さえていたモリルは、尋ねてきた客人をちらりとみやり「ああ」とうなずいた。こめかみにあつた手を顎へと移し、肘をつく。

「そうだ。お前の2、3人前にここを訪れた旅のもんだった。……

…知り合いか？」

ざらりと小さく輝いた長の瞳に、カイは軽く肩をすくめて首をかしいだ。

「さあ。でも確かに、私にも『ヨウ』という名前の知り合いがいます。が、そのあなたの知る『ヨウ』と同一かはわかりません」

「まあな。それもそうか」

モリルは視線をテーブルへと移し、ぽつぽつと記憶にある事柄から口に出していく。

カイは見た目には落ち着いたものの、その男の言葉を聞き逃すまいかと耳を澄ます。

沈み始めた外からの明かりにしか頼ることのないその部屋で、ほそぼそとした声だけがその部屋にある人の気配を知らせた。

「そうだな。あいつは、お前とは『正反対』だった」

つまりは。

(そうか)

カイは小さく口の端を上げる。その表情の変化に、眼の前の男は気付いただろうか。水色の瞳の先、幸いでも不幸でもないが、男は嬉しげな客人の顔に気づいた様子はなかった。

「忌みであるおまえとは対になるかのように、俺の知る『ヨウ』は真

つ赤な英雄の色をしていたよ。おまけにその肌も、物語をそのまま表したかのように日に焼けていた」

水色へと視線を移したモリルの眼には、特に先ほどから動きを見せない子供の顔があった。

それが本当に同一の知り合いかどうかは知らないが、モリルは自分の勘が告げるほうへと素直に従う。

「あいつと付き合うのなら、気をつけんとな。あれは、人を味方につけやすい。だが、それと同じぐらいに敵を作りやすい。恨みもたくさんかっていることだろう」

この集落の長である男の、重みのある忠告に、カイは僅かな微笑みを浮かべる。

「つまりは、『プラマイゼロ』ってことですね？」

「まあ、そういうことだな」

モリルはぼさぼさの頭を搔く。その適当な返しは、解釈の自由を現していた。

「で、さっきシューリも言っていた通り、私は何もしていない」

「ああ、そうだな」

「ヨウは、どうやら襲われた後に客人と認められたみたいですが、私は襲われるどころか、今さっきこの集落を訪れ、今さっきあなたと顔を合わせたばかりだ」

「ああ、ごもつとも」

「まさかあなたは『靴をほめられたから』といった生ぬるい理由から折角の獲物を見逃してやったとでもいいませんかよね」

「全く、そりゃあ馬鹿な話だな」

この集落の長は首を振った。

「じゃあなぜ」とカイは返す。

モリルは、先ほどからずっと、構えることもなくのんびりと床に伏せる獣を客人の横に感じながら臉を少し座らせる。

外が暗くなり始め、部屋の中も薄暗い。モリルはギィィと椅子を引き、立ち上がるとその部屋の中心にぶら下がるランプへと火を

灯した。

「獣をつれた人間つてのには、注意しなくちゃなんねえ。特にそれが、荷を運ぶ類の獣でなかった時はな」

ランプの明かりなど関係なく、ざらりと鈍い輝きを灯したモリルの瞳はカイをとらえていた。その視線の先で、カイは敵意も何も無い瞳でこの集落の長へ視線を返すのみだ。

長は柔らかい弧を口元に描き、またぼりぼりと頭を掻いた。

「まあ、こんな暮らしをしている村だ。そこらへんの詮索は常日頃。獲物が一体どんな抵抗を見せてくるか、手の内を読もうとするのは仕方のないことさ」

だから悪く思つな。そういうことだろうか。カイは隣に寝そべる獣を眺める。

「動物つてのは正直なもんだ。自分より強いものにしか従わない。自分の命の危機となればすぐにどっかへ逃げちまう。野放しの奴らときたらなんとも単純でわかりやすもんだ。そうなりや警戒すべきは主の方……だが。飼われた獣つてのは、何をしだすかわからない。自然の摂理なんか関係なしに、身を張って、命に代えても自分の主人を守ろうとすることもある。そうなりや警戒すべき対象は獣の方つてことになるだろう？ もしもお前の『それ』が、そういうつた類の連れだつたら、俺らも狩りの仕方を考えなきゃなんねえ。……そいつが前者の獣として、お前を上と認め一緒にいるのか。それとも、後者の獣として、忠実に訓練されたものなのか。……それによつてもお前と、その獣の処分の仕方もかわる」

獣が、その前者にも後者にも当てはまらないことをカイはよく知っていた。己の足元で、自分の話をされているというのに全く興味を示さない獣の態度に、カイは内心呆れて苦笑する。

「……………それにな、お前等のような年頃の旅人つてのは読みづらい『お前等』とは自分と『ヨウ』のことだろう、とカイは察する。

「大した大人でもないくせに旅人の風体で歩き回つて。見た目につられてなめてかかれれば痛い目にあうかも知れん。……………ヨウの時も

それだな。あの馬鹿ども、俺の言葉も無視して、早まって勝手に自爆しやがった。……………まあ、大半は見た目通りってのもあるもんだが、世の中そうそう甘く見るもんじゃねえ。……………さて、カイ。お前は一体どっちだ？」

「……………さあ」

売り言葉にも聞こえるそのセリフに、カイは、投げやりにもなく挑発的にでもなく返した。カイ自信わからないのだ。旅を始めてそんなに長くもない。だが、一端の大人並みには体力の自身はあった。だが、それが眼の前の追いはぎにとって「強い」と受け取れるものかはわからない。

若干自分の腕に迷いを覚える水色の顔。

モリルはそれを見て、面白そうに笑う。

「そうだな。蓋を開けてみて『ただの子供』であるようなら俺はきつとお前をすぐに売り払ってやることだろう」

「それは……………なんとも嬉しい心づかいです」

若干苦い顔を浮かべるカイに、モリルはまたさらに笑った。

テーブルの端に覗く灰色の尾は、たまにユサリと揺れ、モリルにその存在を思い出させた。僅かに動く獣の耳は、この会話を聞いているかのように見える。だが、これからの危険の予知を獣の主人であるカイに言っているにも限らず、牙をむくこともなければ唸って威嚇をする様子もない獣のゆうゆうとした様子は、余裕を見せつけられているようで、モリルにとって逆に油断の出来たものではなかった。

これはただの見かけ倒しか。それとも実際にもつ力量からのものか。生まれながらにこの集落で様々な獲物を見てきたかれにも測りかねる。

「さてと。どうする、カイ」

外もそろそろ夜だ。長引いた話も早く切り上げようと、モリルは最後の話題に入った。

「どうする？」

カイは片眉をあげる。

どうしてほしい？ とでも尋ねるように、手を広げて肩をくすめたモリル。それはまるでわざとらしい動作だった。

「どうせあなたが決めることだ」

自分のことばなど聞く気もないくせに。そうひねくれても聞こえる口調。そもそもカイは、この集落からただで出ていくことなど半ばあきらめていた。

追いはぎの頭であるその男からは、そのような優しさを感じる雰囲気は全く感じられる気配もない。それに、悪いようにはされないだろうという確信めいたものもある。

大した損はしない、というおかしな自信が、今のカイにはあったのだ。

「こりゃあ、ちゃんと通じてるようで安心したな」

モリルは意地悪な笑みを浮かべる。だが、すぐに見せるのは気のいい笑顔だ。

やはりこの男……………。

モリルの笑みを見て、カイも小さく笑いをこぼす。

「まあ心配することはない。ヨウ同様、お前にやらせるのも、軽いお使いみたいなもんだ」

「な！」と固そうな胸をぽんと叩いたその姿に嘘はなさそうだ。

(……………どうにも、嫌いになれないな)

まったく、しょうがないものだ。

カイは自分にあきれる。

(私、人を見る目ないのかも)

目の前で笑うひげ面の男は、もうカイにはどこからどう見てもただの「人の良い追いはぎ」にしか見えなかった。

## 29 【赤の匂いの道の途中：後】

用意された部屋は、『モリルの靴工房』からそうそう遠くない距離にある小さな宿の一階だった。

カイは荷物を置き、夕食をこちそうしてくれるという気の良い追剥のもとへとすぐに向かった。

夕食の会で聞いたお使用の内容は、「早朝から森に入り共に狩りをしよう」というものだった。

カイはその晩、久々にできたての暖かな食事をたらふく食べるこ  
とができた。ひたすらこの渓谷を獣について歩いてきただけの彼女  
には、これは何とも予想にもしていなかった幸運だった。

\*

「で、準備は出来てるだろうな？」

モリルはてに革製の手袋をはめながらカイへ尋ねる。

「んー……………、まあまあ」

そう返しながら、水色はフードをかぶることなく大きな欠伸を浮かべる。周りから投げかけられる胡散臭そうなものを見る視線を無視し、カイは呆然と眼をこすった。

集落の者たち皆、昨夜の晩餐ばんさんの時にフードをまもっていない客人の姿を見てからさらに、「なぜ長はこいつを売りさばいてしまわなののか」という不満を倍に膨らませていた。ヨウの時と違い、カイはその力量を村人たちに認められたわけでもない。モリル以外の人々は、今にもこの水色の子供を捕って金に換えてしま得ればいいのに、と心の底から願っていた。

もしかしたらモリルの目のないうちに襲われるかもしれない、という心配もどこ吹く風で、カイは今ひたすら日の昇っていない朝の眠気と闘っていた。

「おいおい、本当に大丈夫なのか？ 言つとくが、俺はお前のことを守つてやつたりはしないからな？」

モリルはナイフ以外には全くの丸腰な少女を見下ろし、腰に手を当てて呆れかえる。

だが、カイはナイフ以外の武器は持ち合わせていないのだから仕方がない。

（まあ、私としてもこれで十分満足だし……）

いいだろう、と思いとりあえず薄手の上着を着て『モリルの靴工房』までやってきた。時間になり獣が起こしてくれなければ寝過していたところだろう。

「おいおい、長。足手まといになりやしないだろうな？」

カイより先に来ていた男が厭味をあらわにモリルへ尋ねた。

この男も一緒に狩りをするらしい。カイとモリルのほかに、5人の村人が一緒に森に入るようだった。その内に青年が2人。モリルと同じくらいの、30〜40位の年層が3人。

カイへいやみを言ったのは青年等のほうだった。二人していらいらとした面持ちでカイを見下ろしている。

一緒に行く他の三人も、口は出さないものの青年たちと同じような気持ちらしい。カイを見る目に好意はあまり感じられなかった。だが、青年たちと違いそれをあまり表情に出さないのはカイにとつてうれしいことだ。誰だつて団体行動の中、半分以上の人間から露骨に嫌われていてはやりづらい。

目立たなくていい。せめて、自分の役割だけ果たせればそれで十分だ。

モリルはそれ以上のものを期待しているらしかったが、カイはただ自分にそう言い聞かせた。

森に入り、先をゆくモリル。そのあとに、カイ、青年二人、中年の男たちの順に続いた。

「何を狩るんだ？」

カイの問いに、モリルは振り向かず小声で返す。

「クマ……あたりだな。食料になるし、皮もワタも使える。便利なものだ。いなかった時はイノシシとシカだな。まあ、一番の本命はクマだな。おぼえてろ」

その言葉に加え、後ろを歩く青年が伝える。

「クマは『ゾン』、イノシシは『テツテ』、シカは『イツツノ』だ。『ゾン』はクマの中でも上から数えたほうが早いがかさだ。もうビビってるようなら、今から一人、ウサギ狩りに変更させてもらえ」「ご丁寧にどうも」

いまさらどうする気もない。カイは和やかに返す。

それに『ゾン』というのが一体どれだけ大きいのか、わずかではあるが……いや、「結構」興味があった。来るときは連れの獣のおかげか、全く野生の動物と出会わなかったのだ。まさかここにきてこんな集落の狩りに同行させてもらえるという、考えてみれば面白い体験に、今更ながらわくわくしてくる。

「ほら、見る、」

けもの道すらなかったそこに、わずかに草草が踏みつぶされて開けた場所があった。

( やつと道か )

幅は人二人、並んで歩けるくらいのもの。真新しいにしてはでかい。しかも、小さな動物が通った形跡は全くなかった。

カイの首筋がちりちりとかゆみを感じた。昔山によく行き来していた頃の思い出と、旅に出てから見てきた動物たちとの記憶が交差する。

( すごいな )

この『ゾン』という生き物がどれほど大きく凶暴か、カイは断片的な情報から自分なりに想像を膨らます。これが身勝手な想像なのか、それとも実物に近いものなのか。

モリルに示されたほうをちらちらと見ながら、カイは足もとのまだ新しい『道』を眺める。

ところどころに足跡が残っている。その足が、胴が、進むに従って道を作ったのだろう。土をくぼませる爪のあとも立派なものだ。しばらくその『ゾン』の足跡をたどっていると、前を行くモリルが急に足を止めた。カイは思わずその背にぶつかりそうになる。急いで止めた脚は、わずかにつまずきかけたが、なんとかモリルにはぶつからずに済んだ。大きな背中の方こう、皆の視線が交わっているであろうそこに、地中に大なる空洞があるであろう地面を見つけた。

あれが巣か。

誰が説明するでもない。もう皆、静かに戦う体制へと入っている。カイも腰に手を当てる。握るのは古びた短剣の隣につるされた、御用達のサバイバルナイフだ。

皆が静かに巣に近づく。巣の中に、熊の背のようなものを見つけた瞬間、カイはぴたりと足を止めた。

「……………なにか……………」  
他の6人はさらに近付こうとしたが、止った水色につられて歩みをやめる。

「どうした」という視線を、モリルが水色へ向けた。他の5人は、胡散臭そうな顔をしてカイをにらんだ。「ただビビっただけだろう」「今更足がすくんだか」「だから邪魔だと言っただ」「みなそれと言ったような眼だ。」

だが、じつと動かない水色の様子に、モリルは「まさかな、」と身構えた。

静かな時間が経過する。

「……………おい、カイ、」  
モリルの小声な呼びかけに、カイは身動きひとつ返さない。

モリルはもう一度呼びかけるべきかと考えた。

「……………おい」  
「……………か、」

わずかに返ってきた水色の声に、モリルだけではなく他の5人も

耳をそば立てる。

「……………にか、きこえた。たぶん……………シカの声」

その言葉の後、いくつかのため息が上がった。だが、モリルはじつと、足音すくなくカイの横に並ぶ。

話を聞くつもりだろうか？ 無駄なことだろうに。と誰とも言わず心中につぶやいた。だが、そんな周囲の思いなど知っていて無視するかのようには、モリルは一人の青年と男に指示を出す。

『2人で先に巣をやれ』、と。

示された二人は一瞬困惑した面持ちでモリルを見たが、すぐに指示に従い動き出す。二人で大丈夫なのだろうか、という心配そうな他の3人の空気もその背に、モリルはじつと、カイの見つめる木々の奥へと視線を縛り付けていた。

「子供だ！」

巣の中から声上がる。そしてやはりか、とモリルは固唾をのんだ。

「……………！！！！！！」

巣の中から、ゾンにしては少々高めの声が上がったかとおもうと、木々の中から地面を震わすような唸り声が響いてきた。それはすごい速さで近づいてきたかとおもうと、カイの前に並んでいた木々をぱっくりと割り、姿を現す。

真黒な空間。

そこに浮かぶシカの死骸。

正面に立つカイは、それをただそう感じた。

だが、その真黒な空間は荒い鼻息をくりかえし、己が生き物であることを教える。シカは浮かんでいるのではない。口元に啞えられ、鮮血を滴らせていた。

堅そうな毛の奥から、小さな丸い眼が二つ、真っ赤になってカイを見下ろしている。

怒っている。

巢を荒らされ、子供を襲われ。

「う、め……………」

いまさら謝るうとも、どうにもならなければ、許される問題でもない。

子を助けてやりたい気も、親子でそつとしておいてやりたいという気も、あるからと言って今のこの状況には何の役にもたない。

カイにもカイの、このクマを狩らなければいけな経緯があるのだから。

内心で、言葉にもならないくらいに小さく再度謝ると、カイはナイフを持っていない左手で腰からダガーを抜き取り、それを素早くゾンの頭へと投げた。

それは誰もが予想にもしていなかった素早い「作業」だった。

ダガーは狙いを外すことなくゾンの右目に突き刺さる。

「よくやった」

横を駆け抜けていったモリルが、カイの頭にポンと手を乗せた。そのまま駆けていく彼の背を、他の3人がぴたりとついてく。

暴れまわるゾンへ、カイはもうひとつ、ダガーを投げた。

それは何ともあっさりと、ゾンの残されたもう一つの眼を潰し、その生き物に赤い涙を流させる。

両目を失い暴れ狂うゾンを前に、カイはサバイバルナイフを握りなおす。

子供はもうとらえられ、手のあいた2人は狩りが住むのを静かに待っていた。

\*

捕らえた二頭のゾンを集落に運び終わったころには、空は茜色に染まっていた。

「お疲れさん！ 風呂にでも入って少し休んでこい。さっそくあのゾンを食わせてやらあ」

そう言われ宿に戻ってみれば、シューリが戸の前に立っていた。

「お疲れ、カイ」

薄暗くなっていたのもあり、その少年の表情ははっきりと見るこ  
とができない。だが、声が僅かに震えていた。

「いったいどうしたのか。」

カイは疲れた頭で考える。

だが、出てくるのは自分を「獲物としてとらえるべきだった」と  
この村の長に訴えていた昼間の少年の姿。今はもう怒っていないの  
だろうか？ とさらに疑問に思う程度。結局声の震えの正体はわか  
らない。

何と言葉を返そうか、とカイが考えていると、シューリが背にし  
ていた宿の戸が静かにあいた。中から出てきたのは数人の青年だ。  
その中の一人には見覚えがある。

「ほら、行くぞ」

と、シューリの背を押ししたのは、やはり、狩りへ一緒に行った青  
年だった。二人ともお揃いのようだ。あと二人、見知らぬ顔だが一  
体……。

特に気にするべきでもないだろう、と視線をそらそうとしたが、  
嫌がおうにも「ソレ」は自然と目を引き付けた。

皆、服のそこかしこにつけた黒い染み。

狩りにいった時の返り血だろうか？ だが、なぜ狩りに来ていな  
かった二人にもそれがある。

不自然に4人、手は皆ポケットにしまわれていた。

カイが呆然とそれを眺め、考えていると、その横を青年たちが通  
り過ぎて行った。一人がわざとらしくカイの肩にぶつかる。

シューリは何度かカイを見上げ、振り返りながらその青年たちを  
追いかけて行った。

（なんで血が……）

「！？」

そこに見たのは獣の毛。

先ほど青年のぶつかつた肩に、わずかな血とともに……。  
なんで……………。

カイの頭は真っ白になる。  
宿でおとなしく待っていたはずの獣。

朝出てきたとき、ベッドの上で朝日を浴びながらのんびりと眠り  
につこうとしていた彼の姿。

それが、先ほど狩ってきたクマと重なり合う。

カイはただ、自分の瞳が冷めるように、だが熱くなっていくよう  
にも感じた。

\*

呆然とする頭でたどり着いたのは自分にあてがわれた宿の部屋だ  
つた。カイ自信にここに辿り着いたまでの記憶はない。だが気づけ  
ばここにいた。

頭は真っ白だし、目もただあけられているだけのようなのに、な  
のに、心の奥底が焦っている。

ドアノブを握る手はやけに冷たかった。

そして、それをひねり、押すという行動がやけに荒々しかった。

あせている。

自分でもそれはわかる。

だが、あせらずにはいられない。

\*

肩についていた毛を握りしめ、水色の髪を持つ少女は静かに部屋  
の前、仁王立ちになっていた。

細い月明かりに優しく照らされる室内に、濃い赤の匂いが充満す  
る。

彼女はこの匂いが好きではない。人であろうと、それ以外の動

物のものであると、どこか頭をのぼせさせるようなこの濃く滑りめ気のある匂いが嫌いだった。

それがいま、普通ではないくらいに密度で部屋を満たしている。真っ赤に染まったベッドの上、まだ体温が僅かに感じられる灰色の毛皮。それを見下ろす瞳は、やけに澄んでいて静かだった。きれいなくらいに透明で、冷たくて、何もなくて……。

彼女の頭から、何もかもが消え去っていた。

「おい、見たか。あの顔」

ぞろぞろと歩きゆく青年たちの一人が、ふと小さく口を開いた。そこには嘲りの色があり、これ以上はないという位の楽しさを含んでいた。

他の青年たちはくすくすと声をあげて笑いだす。

「ああ、あの顔、とんだ間抜けだな」

「まったく。ゾンの狩りを手伝ったくらいで……。勘違いもい加減にしろだ」

「ははは、あんな餓鬼、さっさと売り払ってこの村の肥やしにしちまえばいいのに」

青年たちは楽しみに、あの「客人」を話の種に花を咲かす。

シューリはそのあとに付きながら、何度か後ろを振り返り足を止めた。

その小さな少年の行動に、青年たちは気付くこともなく先へと行ってしまう。

足をとめ、道の真ん中でぽつんと一人立つ少年。

その茶色の瞳が、薄明かりの中、早足で近づいてくる人影を見つける。

それはやけに目立っていて、暗闇の中淡く光っているようにも見えなかった。

月の明かりを反射する水色。

シューリはぞくりと背筋に冷たいものを感じる。

「カ、イ……………」

少年の呼びかけに、横を通り過ぎようとした瞳だけが動かされる。その二つの眼に一瞥されただけで、少年は声も出せなくなった。彼はただ、水色の背が少し遠ざかったのちに、やっと我に返り、本能的にその場から駆け去ることしかできなかった。

「あいつはどこだ」

静かで冷たいその言葉に、一番後ろを歩いていた青年が足を止める。そして彼は、そこに見た人物を前に鼻で笑った。

他の仲間たちも「彼女」の存在に気づき、そろそろと足を止める。4人の青年たちを前に、カイは無表情で、瞬きもなくまた口を開く。

「あいつは」

一番前を歩いていた青年が、その言葉に鼻を鳴らした。

「ばーか。見りゃわかんだろ、」

ポケットから出された手と、そこから漂ってくる血の匂い。

他の青年たちのポケットから出された手も、同じように赤く染まっていた。

カイはそれを静かに見つめる。

ただじつと。

その血を確かめるように。

動かない彼女の前に、一番前を歩いていた青年が立ちはだかる。

「ゾンをやったくらいで調子に乗ったか？ こっちだって儲けなきや食っていけないんだ。長がなんと言おうと関係ない。ここでやられるようなら、お前もあの毛皮と一緒に売りさばいてやるよ」  
体中の血が、頭に上っていくようだった。

カイは、ゆっくりと視線を上げ、見覚えのある顔を見つめた。

一緒に狩りに出た青年の顔が、やけにくつきりと瞳に映った。

瞳が……………冷たい。

水色に見つめられ、青年は冷や汗を首筋に垂らす。  
なぜだろう、温度が下がっていく。

「く、そが」

かげつて見えない「客人」の顔。だが、そこに不思議と浮かび上がってくる水色の冷たい眼光が不快だった。

その「不快」やはら、怒り、憤りと言った感情から来るものではない。ちいさく胸の内に竦む「恐怖」からだ。

それをどこかで感じ取り、少年自身また不快になる。

「生意気、なんだよ」

かなりの至近距離、青年は自分の胸あたりにある水色の頭に向け拳を振るいあげた。そして、それとともに水を集める。

勢いよく振り下ろされた青年のこぶしの周りには、槍のように切っ先を光らせた水がまとわりつく。

がっ

青年のこぶしはじんじんと痛んでいた。

そして、殴った少女は、殴られた方向へとうつむき、静かにそこに立っていた。

吹っ飛ばすつもりで、その顔を血だらけにしてやるつもりで殴ったというのに、なぜ彼女はそこにいる？

青年は呆然とした瞳で彼女を見下ろした。それとともにズキリと痛んだ己のこぶしに、弾かれたように視線を向けた。

一瞬その凶に思考が固まる。

見慣れない風景だった。

いや、見なれたはずの自分の手。だが、それは握りしめられたまま動こうとしない。そして、なぜかそれは肘のあたりまで傷だらけで、赤いものを生はやしていた。

大から小までの切り傷。そこから流れる血はなく、その代わりにいうように、真っ赤なつららが四方八方をむいてつき出ている。

「なんで………痛っ」

気づいた時には右腕からどんどんと体温が奪われていた。傷の冷

たさから来る痛みにも、青年は唇をかみしめる。

「おまえ、いったい何を……………」

自分の腕を抱きかかえるような青年を前に、他の仲間たちは何かを察す。

そして、考える間もなく自分たちに集められるだけの水を集めて、水色に向け放っていた。

拳銃程ではない。だが、少なくとも皮膚を切り裂くことはできる勢いで、その水弾はカイへ向かって全速力で駆ける。

パン！ パンパン パン！ パンパンパンパン……………

次々と、水の弾が当たってはじける。

はじけた水が霧となり、水色の周りに充滿した。

青年たちはその霧と、音だけを頼りに更に水弾を放った。

腕を抱えた青年は、流れ弾を軽く受けながら、少女の前から後ずさる。

もう彼女の姿は霧に覆われて見えなくなってしまったが、そこに何かはまだいて、自分をじっと見つめている、という感じがぬぐい捨てきれなかった。

パン……………

最後の水弾がはじける。

音だけがそれを知らせた。

しんとあたりが鎮まり、世界が止まったようにさえ感じる。

なぜだろう。青年たちはじっと一点に視線を集中し、動かない。

なぜだかはわからない。だが、何かに脅えている自分たちがそこにいた。

ぴたりと止まった世界。

静かに霧が、薄まっていく。

青年たちは濃くなってくる人影に、背筋を凍らせた。

「客人」はじつと青年たちを見つめ立っていた。傷一つなく、そこに一片の感情もなく。ただ、やけに冷たい瞳の水色を輝かせて。

周りには、大きくて一メートルはあるであろう氷柱つららが、水晶の群

を思わせるように地面から空へ向かって突き出している。

右腕を抱える青年は、その氷柱と自分の傷から生えた赤い円錐とを見比べる。

「ば、ばけものー！ー！！！」

一番カイから離れた位置にいた青年が腰をおろして叫んだ。

地面に尻をついて、がたがたとその足を震わせ。

「だ、だれか！ 助けてくれ！ 化け物だ！！！」

あまりろれつの回っていないその口で、大声をあげて助けを呼び始めた。

腕を抱えた青年が、あわてたように仲間を振り返る。

「や、止める！！ 誰か、そいつを黙らせる！」

だが、誰も彼を止めようとはしなかった。むしろ、みなその場にしゃがみこんで同じように叫びたいくらいだった。「助けてくれ。

化け物がいる。殺されてしまう」と。

やがて、気づけば錯乱して喚き散らす青年の頭の上には、先ほどまでとは比べ物にならないくらい大きな水の塊が浮かび上がっていた。

それは弾ではなく、刃物のように鋭く、平べたく、形を変えていく。

彼は抵抗しようとしていた。

殺られる前に、殺ってしまわねば、と。

水色はじつと、その透明な凶器を見つめていた。恐れも怒りも感じさせない瞳で、冷たく。

いけない

腕を抱える青年は自分の腕と、水色の周りにある氷柱とを思い出す。

そして、あの大きな水の塊がどうなってしまうのか。自分たちがどうなってしまうのか。

制止の声を上げる間もなく放たれた凶器が、冷たい風を切って「客人」へと牙をむけた。

だめだ。

腕を抱える青年の頭に、弾き飛ばされる水と、それに串刺しにされる自分たちの姿が浮かんだ。きつと、自分の力ではあれを防ぎきることができない。

ぎゅつと目をつぶり、彼が死を感じ取った瞬間、何かが大きく割って入った。そしてそれと共に「止めるおおお！！！」という声が、青年たちの鼓膜を揺らした。

バシヤツ

凶器が水色へと当たる音が小さく、腕を抱える青年の耳に届いた。

「う、あ、あああ、あああああ………」

錯乱状態の青年が、意識も盲ろうつに駆けつけてきた人物へと腕を伸ばす。

その腕を振りほどきながら、モリルは声を荒げて怒鳴った。

「止める、離さんか、………この馬鹿！ 愚か者共！！！」

朦朧もうちゅうと中を掻く青年を殴り、気を失わせ、モリルは腕を抱えて座り込む青年のもとへと駆け寄った。

その見たことのない傷に目を丸くし、弾かれたように青年の顔を見る。

だが、青年はうつむき、モリルと目を合わせようとはしなかった。モリルはなにも言わず道の奥を指差し、青年も何も言わず、他の青年たちをひきつれて指さされたほうへと去って行った。あとには、気を失った青年の、足が地面にすれる音だけが小さく尾を引く。

彼らに指示を出してすぐ、モリルはカイへと駆け寄った。

そして、呆然と左のこめかみから血を流すカイを前に息をつく。

周りに突き出す氷柱の群のせい、空気が僅かに冷えていた。

「遠くから見えたぞ。あの塊、首を落としてもいい位だった」

カイはその言葉など届いてもいないように眼を丸くしていた。見つめるのは一点、先ほどまで腕を抱えた青年と、自分との空間のちよつと真ん中あたりの地面だった。

いや、正しくはその地面の上に立つ「灰色」だろう。

「防いだのか？」

左目の上、あの青年の水を浴びたにしては傷が浅い。

モリルはカイの瞳をのぞき込み尋ねるが、それが自分を見ていないことに気づき、視線を追って獣を振り向いた。そして、その少し離れたところからわずかにおびえた様子でこちらを眺めている少年へと目を向ける。

自分と呼んだのはあの少年、シューリだった。

『カイが、…………セルリド達が、』と、客人とこの村の青年数人を示し、口を開くが、混乱して何と言つていいかわからない様子だった。とりあえずで彼の後を追うがまま来てみればあの有様。いったいなぜこうなったのか、モリルの知りえる情報だけでは想像し辛いものがあつた。

「おい、カイ」

静かに、そして優しく、口を開きかけたモリルが見たのは、一瞬泣きそうになった水色の瞳だった。そしてそれは本当に一瞬で、すぐに小さな苦笑へと変わった。

「つたく、なんだよ」

やっと聞けた水色の声は、小さくこう言っていた。

それが自分に向けられたものではないとすぐに気づき、モリルはただ水色の視線を追い、こちらにやってくる獣の姿へと眺める。

カイはどくどくと流れるこめかみの傷になだ知らない様子で、自分の目の前に腰をおろした獣へ腕を伸ばした。

獣に抱きつく少女。その口元から小さく、何に対してか「……………だよな」という言葉がこぼれた。

獣は何度か水色の傷を舐め、抱かれるがままにおとなしく待つ。

モリルはその様子を見て、小さく息をついた。そして、後ろでじつと待っていた少年へ視線を送り、「おまえはもう帰ってる、」とやわらかな声をかける。

カイは静かに、出されたお茶を手にそのカップの中を見つめていた。

その前で、モリルも自分の淹れた茶をすすりながら、青年たちのたぐらみについて話していた。

高額な値で売れたであろう「獲物」が、「客人」となったことに不服だった村人たちのこと。そして、ゾンを倒す程度の内容ではその不服が拭われることがなかったこと。宿の主もその企みに手を貸し、部屋の鍵を開放していたこと。さらには、獣もおとなくそれに従っていたこと。

(こいつ……………)

カイは目を座らせ、獣へ視線を送った。

だが、獣はわざとらしく大きな欠伸を掻き、床に伏せて気持ちよさそうに目を閉じるのみ。

つまりは、この獣。自分の焦る姿を見て楽しみたかっただけではないのだろうか、とカイはなくもなさそうな予測をする。獣のほんの悪戯心。そう言えなくもない。もしこの予測が嘘にしる本当にしろ、青年の怪我は自業自得だし、獣には何の損もない訳なのだから。まさかここまでこの獣が人のような考えを持つだろうか、と自分に問いかけ、カイはそれもおかしな話だ、と己にあざけた。

何がどうにしろ、獣は餌に釣られシューリの部屋へと招かれていたのだし、部屋に置かれた狼の死骸を見て気付けなかった自分も自分なのだ。こうなってしまったことには変わりがない。

(けど、普段なら絶対餌なんかにつられやしないだろうに……………)  
どうしても獣自身の意思を感じずにはいられないカイは、じとりとまた獣を見下ろす。

「と、いうわけで、この一軒でみな、お前が客人であることに納得したわけだが、」

モリルの声が思い出したように耳に入ってきて、カイはあわてて

正面に座る彼を見た。

この集落の長は呆れたように頭をかいていた。

「あの氷。お前は“使い”ではないと勝手に思い込んでいたが……

……」

息をつく彼の視線は、カイの胸元にある首飾りに向けられる。

「水ノ音の音が聞こえていた。その石、あいつらが帰った後も小さくなくなっていたしな」

何よりも、「『青の力』で『氷』ができる」などと言った話を、モリルはいまだかつて聞いたこともなかった。

だが、水ノ音石が鳴ったということはあれもこちらの大陸の「力」ということに変わりがないのかもしれない。

「……強いか弱いか……、それ以前の問題になっちまったわけだな」

またも小さく息をつき、モリルはお茶を口に運ぶ。

「まあ、今回の事はこちら側の責任だ。悪かったな」

あつらも反省してるよ、という彼の言葉から、これ以上あの氷についての詮索はしないという意味が伝わる。

カイも小さく息をつき、お茶をこくりと喉に通す。

「ありがとう」

\*

次の日、約束通りゾンの肉をごちそうになった。そして、お詫びだということ、ゾンの肉を燻製にしたものと、ゾンの爪を粉末にしたものが入っているとかの小瓶を渡された。

カイは小瓶の中に詰められた、黄色味のある灰色の粉を眺める。

「くすり……とか？」

「いや、毒だ」

モリルの返しに、カイは瓶から顔を上げ苦い顔をする。

モリルはその顔を見て笑った。

「安心しろ。毒つつつてもそんな強力なもんじゃない。ゾンの爪にはな、僅かだが獲物をしびれさせる毒があるんだ。お前も狩をした身だ。見ていて気づいたか？ あのクマ、他の種類より幾分でかいせいで動きも他に比べちゃ鈍い。だからな、素早い獲物にはひょいひょいっと逃げられちゃうわけさ」

つまりはそのための毒だ。

どう使うかは迷うものの、普通に店で買おうとすれば高くなる物のようなので、カイは迷わず受け取っておいた。

モリルは、瓶を荷の中に入れてしまう少女を見下ろし、その頭に手を置いた。

「傷のわびだ。大切に使ってくれ」

カイは大きな手を頭に寄せたまま顔をあげた。

そして、水色の瞳を静かにこの集落の長へと向けると、にやりと笑う。

「そういえばこの間の靴、サイズが丁度よさそうだったんだよな」  
気にしないでくれ、ただの独り事だから、と言ってまた荷物へと視線を落とす水色。

モリルは苦虫を噛んだような顔をし、「まいった」と頭を掻いた。

\*

集落を出たカイの背を、一人の男の声と、少年の声が見送った。

あの長は、旅人から得た荷を、溪谷の外に出て金に換えたりしていると話していた。それは主に18〜50歳の男が担う役であるから、もしかしたらあの青年等に外で会うかも知れないと。だからだろうか。もう姿は見えないが、木々を割ってうしろから「もしもの時は宜しくしてやってくれ！」という声が聞こえてきたのは。

カイはどうしようかと獣へ目配りする。

そして、その際にちらりと目に入った新品の靴を見てくすりと笑った。

「まあ、代償としては十分なわけだし。…………お前にも責任はある」  
ふいつとそっぽを向く獣。

カイは首だけで後ろを振り返ると、「ああ」とだけ大きく返した。  
それは何よりも手短で単発な、「YES」の頷き。  
帰ってくるのはもちろん。

「よろしくなあ！」

長の嬉しげな野太い声だった。

### 300【ヨウの知り合いということ それはつまり】

それは大きな川でした。

一人の15〜16歳の子供が、川の岸できよろきよると辺りを見回し橋を探します。その横には灰色の獣が一匹、大人しく腰を下ろし、旅の共を見上げています。

「どうしろって？」

子供は連れの獣へ尋ねました。だけど、その言葉を獣が理解するはずありません。何の返答もない獣の様子に小さく息をつき、子供は足元の石を蹴りました。

「おやおや、これはこれは」

やがて、子供がその川を泳ぐ決心をつけた頃、独りの男が川の上に現れました。彼は簡素な船に木箱を積み重ね、上流から川を下ってきたようでした。商人でしょうか。それともただの運び屋か。子供には解り兼ねます。

子供は商人も運び屋も好きではありませんでした。頭にかぶっていたフードをさらに深く被りなおし、顔を隠します。

「やあやあやあ、旅人かね、坊ちゃん」

川に現れた身の細い彼は、気さくに笑いかけました。

ですが子供は“坊ちゃん”と呼ばれるのが好きではありません。

むすりとした口元で、

「まあ、そうです」とぶつきらぼうに返します。

男はその子供の返しようにケラケラと笑いました。

「いやいや、これはこれは。私の何かが気に障ってしまいましたか？」

男はお詫びに向こう岸まで運ぼうと申し出ました。

上流から下りてくる途中、どうやら岸で困っている子供の様子が見えていたようです。彼はもともとそのつもりで子供に声をかけた

のだと説明しました。この辺りは旅人が行き着き、川を渡れずに立ち往生していることが多いのだ、と。

「勿論お金は取りますがね、なにしろ坊ちゃんはまだ若い。私も大人だ。若者にそんな高額を請求したりしませんよ」

この言葉に、子供は少し考え、にこりと笑いました。

もしタダで運ぶと言われたら、子供にとってそれは胡散臭いことこの上無いことでした。しかし、金をとるといふ男の行動には、これで終わりのビジネスを感じます。人を船に乗せる、という商売にそれ以上の裏を感じられませんでした。

「ありがたく、お願いさせていただきます」

子供は二人分の金を男に渡しました。

男はそれを受け取り苦笑します。

「まいど。けどそちらさんの分はいいさ。箱の上に座っていて貰えればね」

そう言って、子供が渡した獣の分の運賃を返しました。

子供は礼を言い、獣とともに船に乗り込みます。

獣は子供が何か言う前に、自ら男が言っていた通り積み荷の上に腰掛けました。

「できたお連れさんだ」

脱帽もの、とでも言うように男は頭を搔いて笑いました。

\*

船はゆっくりと向かいの岸へと近づいていきます。

荷物の上に乗っている獣が必然的に一番高い位置から、舟を漕ぐ男とその正面に座る子供とを見下ろす形になりました。

「このあたりには、橋がないんですか？」

子供は尋ねました。

「このあたり………とは言いませんが、もう少し下へ行けばね。なくありません」

男は困ったように笑います。

子供は男の言う「下」とやらを眺めましたが、橋という橋は全く見つけられませんでした。

これは男にのせてもらって正解だったな、と子供は内心安堵しました。

「ところでなぜ、ここらへんや上流の方には橋を造らないんですか？」

さすがと言うべきでしょうか。子供に問われても、男の舟を漕ぐ手は休まることもなく、一定のテンポを保ったまま働き続けます。

「はあ、それがねえ……。ごくたまにですが、とんでもないスコールがくる場所がありますね。そこらにはいくつか村もあったりするんですが。私は理解できませんよ。なんであんな場所に人が住もうとするのか。そのスコールのおかげで、いくつ作ろうともこちらの橋は全滅ですよ。坊ちゃんは見ただことありますか？ 全くの天気の良い日、川だけが妙にあらぶっていてね。こりゃあ参った、って眺めていたら、そりゃあもうこの川の深さが三倍四倍になるような大量の水が、でっかい蛇が突っ込んでくるように流れてくるんですよ」

いやだいやだと首を振り、男は「はあ、」と息をつきました。

「なので、ここらには皆、もう橋を造ろうとはしないんです。作っても川に壊されてしまいますから。……。だから、舟を扱っている人間は人渡しも副業としてやっているんですよ」

「へえ、なるほど」

子供は男の話にうなずきながら、川の上、周りの景色を眺めます。もう半分は来たでしょうか。すーっと流れていく船は、若干流れとともに川を下ってはいますが、着々と向こう岸までの距離を縮めていました。

「この間も、旅の人をむこう岸まで運ぼうとしたことがありました」暇そうな子供を気遣ってか、ちょうど思い出し、誰かに聞いてほしかったからか。男は呆れた具合で口を開きます。

「珍しい方でしたよ。……………肌が焼けていまして、真っ赤な髪をお持ちの方でした。あちらの大陸の人間だと言っていました。彼は、……………坊ちゃん？」

ばかりと口をあけたまま動かない子供を前に、男は疑問符を浮かべます。子供は「あ、いえ、すみません。続きを、」と男の話を促しました。しかし、男は話の続きより、子供の様子のほうが気がかりだったようです。自分の話はおいて、先に子供の話をと語り口を譲りました。

子供は少しの間迷った様子でしたが、自分の中で整理をつけたのか小さくも大きくもない、いたって普通の声で話します。

「その、珍しい方ってのは、私の知り合いかもしれません」  
男はその言葉を聞いてしばし、呆然としていました。ゆっくりと舟を漕ぐ手は止まり、やがてゆっくりと、向こう岸へと向かう船の動きも止まりました。船は静かに、川の流れの行くままに静かに流されます。

男の様子に、「あの」と子供は口を開きかけました。ですが、子供の声はその口から出される前に、船がぐらりと揺れ、男のひよろりとした影がコート姿の子供の上に覆いかぶさりました。

子供は突然の出来事に思考が回りませんでした。  
ただ、自分の気管を締め付けるためらいのない圧力と、どうしようもない位に歪んだ男の顔だけが意識と視界を満たします。

「よくも、よくも私の家を！ 女房を！！ 私のいとおいしい家族を！！！」

男の顔は真っ赤に、その瞳は涙を流したげに。先ほど出会ったばかりの子供の首を、男はぎりぎり締めあげます。

子供は状況の理解ができないまま、気付けばなれた手さばきで腰のナイフを握っていました。

船はまた、ぐらりと大きく揺れました。

「……………っ、かつ、っは、……………は、は、は……………」

今度は、子供が男の上に覆いかぶさっていました。

子供の頭にかぶっていたフードはずれ、その下から水色の髪と瞳がのぞいています。それを下から見上げて、男は首元のナイフなど関係なしに怒鳴りました。

「私は、私は物語など信じない……………神など、英雄など、化け物など、し、知ったものか、……………お、お前たちが何であるうが、私には関係ない。神を、物語を、信仰していないという理由で罰せられていいものか！……………返せえ！！ 私のすべてを！ 私の信仰を！ 私の、私の家族を返せ！！！」

子供は男の言葉に目を見開き、構えたナイフを忘れました。しかし、またその手に力を入れなおすと、落ち着いた様子で男の首にナイフを当てなおします。男はナイフの冷たさを肌を感じ、言葉を飲み込みました。

うらやましげな瞳に見つめられ、子供はたじろぐことなく、感情の感じさせない声音で小さく男に告げました。

「あなたが何を言っているのか、私には理解できません……………すみません」

そして、川の真ん中に、ぼちゃんと大きな水音と水柱が上がりました。

川に落とされた男は、ばしゃばしゃと水を掻きその場に浮かびます。流れていく船を追いかけることはしません。ですが、絶えることのない罵声をいつまでも、その船の上にいる子供へと浴びせつづけました。

子供は男の船を奪い、自ら川を漕ぎ進め向こう岸につくと、改めて川を見返し、そこに浮かぶ男を眺めました。その水色の瞳には、憐れむような色が混ざります。

獣は船から降り子供の横に座ると、同じように男を眺めました。子供は隣の獣へと視線を落とすと、また男へと視線を移し、そしてまた獣へと視線を戻しました。

「あいつ、一体何したんだか」

子供の呆れた言葉に、獣はわかった様子もなく首をかじげました。

「ちょっと悪いことしたな」

子供は、まだ聞こえて来る男の怒鳴り声に背を向け、多くもない荷物を担ぎ歩き出します。

獣は子供を見上げ、何の反応も返すことなく道の先へと視線を戻します。そんな彼の様子に子供は苦笑いを浮かべ、忘れていたフードを水色の頭へとかぶりなおしました。そして、ぽつりと口にしたのはこういう言葉でした。

「ヨウの知り合いつてのは、さんざんな事なんだな」

子供の言葉に、獣の尾は大きく一度ゆらりと揺られました。

### 31【知らぬ獣と翡翠の老婆：前】

それは、暖かな瞳をした大きな獣だった。熊のようで、だが熊にしてはどこか抜けたような顔をしている。

やわらかそうな灰色の毛並みをした、見たこともない獣を前に、ヨウはただただそれを見上げた。

獣も地べたにどさりと腰を下ろしたまま、どうする事もなく“ぼーっ”と見たこともない赤い髪少年を見下ろしていた。

「モ……………」

「は？」

「モーオ！ モーオ！」

突然上を向き低く鳴き出した生き物。ヨウは一步後ずさり、眉を寄せた。

「何だ……………？ 鳴き声……………、……………ていうか何だ、このぶさいくな生き物」

その言葉に、見知らぬ生き物の鳴き声は更に音量を上げ、なんとも耳障りなものへとなった。

その声のうるささに耳を覆っていると、いつの間にか森の奥から小さな影がこちらへと向かってきていることに気づく。

仲間だろうか？ それにしては小さい……………。

ヨウは耳を覆ったままに、その近づいてくる何かをじっと見つめた。

“何か”はゆっくりと木々の合間を縫い、草草を退けながら、少しずつそのシルエットをはっきりさせていく。ようやくそれが何なのか判別できるようになったのは、木々の開けた日のあたる場所にそれが出てきてからだだった。

(……………人？)

木々の影の下に見ていた時は、何かまた別の生き物のようにも見えていたのだが、ヨウの予想を裏切ってあの“何か”は人だった。



獣は最後に小さく鳴くと、ずっと空を仰いでいた頭を下げ、下に見える二人をまたも静かに“じー”と見つめた。だした。

「一体こいつはなんなんだ」

ヨウは獣を目で示し、老婆に尋ねる。老婆はただ「獣さ」と笑った表情のまま答えた。ヨウはがしがしと頭をかき、「そうか」とだけ返す。

老婆の後に付き奥へ奥へと森を進んでいくと、人が住んでいるようには思えないそこにぽつりと小さな小屋が見えた。

「あんたの巣か」

「ああ」

老婆はゆっくりと歩みながら隣の少年の言葉にうなずく。

そんな二人とは距離をとった後方に、あの知られぬ獣はそのそと付いてきていた。老婆はいつものことのようにその獣を無視し、自分の小屋へと歩き続ける。

キィ………、と蝶つがいが高くなり、入ってみれば見た目通りの小さな室内がヨウを向かい入れた。ヨウが軽く振りかえれば、老婆が戸を閉め、戸を閉められるまでずっとこちらを見つめる獣の姿。あの瞳は何なのか。全く考えがつかみとれない。そしてこの老婆も。「ほら、その椅子にお座り」

ポットをキッチンであるう小さな流しから持ってきて、老婆は陶器のカップを二つ、テーブルの上に置きコトコトと赤みのあるお茶を注いだ。

「あんたは、“探し人”、“追い人”だね」

しゃがれた老婆の声だが、その問いは柔らかい。

「何の話だ」というヨウの台詞に、老婆は今の会話からは適切とは思えない言葉を返す。

「私は翡翠の婆さ。名前はとっくに忘れっちまったんでね。この森の者達がそう呼ぶ」

「訊いてないことだ。それに、この森は誰もいなそうに見える」

くつくつくつ……。またこの笑い。気にするほどではないが、ヨウはただ何なのかと老婆を見やる。

「そうだろうね。ああ、そうさ。この森にはひとはいない。それと近しい形の者たちがいたとしても、お前さん達がいる場所からじゃ見えやしないさ。それと同じで、普段ならあの者達もこちらの人の存在になど気付きもしないはずなんだけどねえ」

くつくつ、くつくつ……。老婆はどこか楽しげだった。だが、その僅かな表情に初めて会ったヨウが気付くはずもない。

ヨウは老婆の笑いなど無視したように、カップに入れられたお茶を口に含む。僅かに甘みのある、良い香りのした飲んだことのないお茶だ。

ヨウがカップを口から離し、その中を覗き込もうとした時、外からなんともけたたましい音が飛び込んでくる。

ブオオオオオ！！……………オオオオオオオオ！！ モ、オオオオオ！！！！

この鳴き声、あの獣のものだろう。

何かと窓を見れば、その少し離れた木々の影に、あの獣がまたも空を仰いでいた。まるで狼の遠吠えのようだが、その座り方はやはり熊のぬいぐるみのよう。だが、その可愛い印象でもある熊のぬいぐるみとはそぐわない、おかしい形の何か獣の足もとに転がっている。

オオオオオオオオ！ ブモ、オオオオオ！！！！

「やれやれ、またかい」

ギギイ、と椅子を引き、老婆は呆れたように立ちあがる。

ヨウはそれを目で追い、カップをテーブルに置いた。老婆は自分を追ってくる赤い瞳に、一瞬意味深な眼差しを向け外へ出て行った。窓の外、獣のもとへ向かった老婆はなだめるようにその毛並みを撫でてやり、森の奥を指さして獣の体を押した。獣は少しした後、のそりと腰を上げ森の奥へと進みゆく。その影がまだ見えるうちに、老婆はあのおかしな造形物を適当に掴み、小屋の前まで引きずって

くる。

(鹿……………?)

ヨウは、真つ赤に染まったあれが何なのかやっとな理解し、あの老婆が戻ってくるのを待った。

一口、茶を口に含みその香りを味わっていると、戸の軋む音が背後から上がり、老婆の疲れたような溜息が横を通り過ぎて行った。正面に顔を上げれば、老婆が「やれやれ」と呟きながら腰を下ろすところだった。

「アレは、あいつがやったのか?」

ヨウの問いに、老婆は「ああ、そうさ」とカップを手に取る。お茶をすすり、一息入れて、あきれたように口を開いた。

「あいつはいつもそうさ。あれだから仲間にも見捨てられた。人見知りのくせして、どこかで接したいと思っている。だが力の加え方がわからない。だからああなる」

ずずずと茶のすする音。ヨウはカップの中にある赤を見て、先ほどの赤を思い出す。

つまりは、「遊びたかっただけ」というわけだろうか。

老婆は皮肉に笑い、ヨウ同様茶を眺める。

「人だろつが動物だろつが、どうしたってあいつは甘えたかった。だがね、結局はああなっちまう。だから珍しいことだよ。お前さんのように“生きた”客人に出会えることは」

「珍しい」とはそう言うことでもあったのか、とヨウは頭の片隅で呟く。

「それに……………」

ずずずと茶をすする音。ヨウは何かいいかけた老婆へ視線をやると、待ちうけていたような笑顔がそこにあった。それを見て、ヨウは軽く舌打ちをし目をそらす。

「それにだ、あの者達が人の存在に気づいたのは初めてだよ。お前さん、いったい何を持ってきた?」

また例の「あの者達」だ。馬鹿らしくなるも、ヨウは素っ気なく

「なにも」と返す。

老婆は「そうかい？」と言うと、口元を笑わせたまま席を立ち、ヨウの前へとやってきた。

ヨウはそれを無視し茶を口へ運ぶ。

「客人さんよ、失礼だとは思いますが、その瞳、この婆によく見せてもらってもいいかね？」

こくりとその日に焼けた色の肌に覆われた喉が音を鳴らした。ヨウは老婆を一瞥すると、黙ったままカップを下ろした。

「賢いお子よ。この婆に悪意がないかもわかりきってか」

くつくつくつく。老婆は一笑いし、皺くちやの手を伸ばした。

まだ若い少年の頬に触れると、老婆は遠慮気もなく二つの手でその頭を包み込み、真つ赤な瞳の奥を覗きこんだ。

翡翠の瞳に見つめられ、ヨウは己の中の小さなくすぶりに気がついた。

火だ。何か、自分のものとは別の、何かの、誰かの火を感じる。

「ほお……………そうかい、」

老婆の手から解放され瞳をそらされると、ヨウは己が中で燻っていた火の存在を感じなくなった。だがきつと、あれは気のせいではないのだろう。火があった。確かに感じたのだ。

「今のは何だ。お前の仕業か？」

老婆は首を振り、席に戻る。小さく小さく丸められた背に、緩やかな沈黙が訪れ、ヨウもまた返答があるまでと黙った。

もつお茶をすすする音はない。老婆の物も、ヨウの物も、カップの中は空っぽになっていたのである。

「さて、そうだねえ……………」

老婆の小さな声はそう言っていた。これはきつと独り言だろう。ヨウはカップのそこに残った赤い茶の葉を眺め、適当に揺らした。何も無い。ただ残された葉のカスがゆらゆらと揺らめくだけだ。

「ああ……………まあ、そうか……………ああ、ああ」

ゆっくりと頷くと、翡翠の瞳は寄り道をせずまっすぐとヨウへ

と向けられた。

「一つ、長い長い物語がある。どうだい、聞いてはくれまいかねえ」  
ヨウはことりとカップを置くと、表情も少なに手にあるそれを押しやった。

「もう一杯。……あと、お前が何かと、さっきのあの獣が何か。

その茶が何の草から出来てるかも」

老婆は朗らかに微笑んだ。

「はいよ」

語り部の老婆と、さびしがり屋の獣と、その甘い香りの茶について。話は始まり、物語が語られる。

### 32【知らぬ獣と翡翠の老婆：後】

昔の話。今に語られることはない、神の話。もしかしたらどこかに刻まれ、今はもう、記憶されない物語。

神は、獣を憐れんでいた。

\*\*\*

昔々、神に飼われる一匹の獣がいました。無邪気な風から命をもらい、清き水から体をもらい。神はその獣を大切にそばにおいていました。

しかし、大地に命を授けたあの日、獣は哀れにも、血の味と香りを覚えてしまいました。神の血はなににとも負けぬ極上の酒となります。その香りだけで、その一滴だけで、果実からとった汁に混ぜれば最高の酒ができるほどでした。香りは生あるもの達を魅了し、誘惑します。

神はそれを忘れ、獣を傍に置いたまま“命の儀式”を行ってしまつたのです。獣は血の誘惑に耐えきれず、神の喉元に食らいついてしまいました。

己の横に置いとけぬのなら、せめて他の命が根付く大地へと獣を住まわせ、遠くからでもそれを見守っていようと、神は獣を大地へと降ろしました。命は次々と生まれ、大地にも風が吹き、水が流れ、緑が茂るようになりました。

獣の住まう場所は、特に美しく清らかな物へとなりました。

獣の命は神の地の風から出来ているのであり、その体も神の地の水から出来ているのですから当然のことでしょう。獣の踏みしめる

一歩一歩が、大地に芽吹きを与えていました。

そしていつのことでしょうか、獣は寂しさから己が巣としていた場所を暫し離れ、神のもとへと戻る道はないかと探しに行きました。そしてそう長くはかからなかったはずの時の中で、いつの間にか様々な形の生き物たちが大地に生きるようになりました。獣が巣へ戻った頃には、神と同じ形をもつ生き物も多く生まれるようになっていたのです。

獣は神の場所へ帰る道を探すのをやめました。

神の血から生れし、神と同じ形をもつ生き物たちと、共にこの大地で生きていくのもいいかもしれないと、ゆっくり考え思い直していったのです。

あの血の香りは危ないと、獣も知っていたので、その「人」という生き物に近づきすぎないように気をつけながら、獣は人々の暮らしをその己の巣から眺めていました。しかしいつからと知れず、獣は人々の敵となっていました。人々は、獣の巣は自分たちのものだったと出張しだします。

この地以外に、獣が住める場所はありませんでした。

大地はもう、神の血から生れし命に覆われています。この場所から出れば、獣は嫌でも他の生き物と出会ってしまい、神の血に惑わされ、暴れ狂ってしまうかもしれません。

その地から立ち去ることだけは、獣はかたくなに拒みました。

人々はたまに数人の使いをよこすようになり、距離をとろうとしている獣に自ら近づいてくるようになりました。

血の香ってくる距離まで人々が立ち入ってくるようになると、獣にはもう己を抑えることはできません。神の血に惑わされるがまま、その血にしゃぶりつき、満足がいくまで血の浸みこむ柔らかかな肉を頬張るのです。

獣の我に帰った時の悲しみといたら、神も憐れむほどでした。

獣の叫びは天へ向けられ、神はその声を聞くたびに己が子たちと獣を思っ胸を痛めました。

そして、ある日神は決めたのでした。  
獣をまた、己の住まうこの地へと連れ戻すことを。

人々の願いに応え、神は力を与えました。  
水と、火の力です。

その力で、人々がいったい獣に何をしようとしているのかを、神は知っていました。その力で、神は人々に何をしてほしいのかを言いませんでした。

力を授かった人々は、血に惑わされた獣を前に、果敢に戦いました。獣をおぞましく汚れた「化け物」と称し、果敢に戦いました。そして、最後の一人となった男は、己の片腕を犠牲にして、ついに獣を追い詰めます。

喉を掴まれた獣は、燃え盛る火を前にしてまったく抵抗する様子がありませんでした。もう使い物になることもない男の腕から牙を抜き、そっと、その口元を動かすのです。

『これで、やっと……』

獣は低く穏やかな声でそう言うと、最期、一筋の涙を流し、安らかな瞳を男へ向け燃え尽きたのでした。灰は風に流され塵となり、残された水色の毛皮は、燃え尽きた化け物のまどっていたものとは思えないくらいに美しく、済んだ色をしていました。

英雄となった男は、答えの返ってくることもない問いかけを、腕に抱いた毛皮へ小さく落とすのでした。

『なぜ、こんなにも切なくなる』

その日は夜が明けるまで、雨が降っていました。どこか暖かく、しかし、誰かが何かを悲しむかのように、優しく切ない雨でした。

英雄の持ち帰った毛皮は、神の降りる祭壇へと祭られました。そしてその次の日、雨が止むと共に、毛皮は水へと溶けて消えました。そして力は、神の感謝の形として人々に残され、物語として語り継がれました。

男は「英雄」として、獣は「化け物」として。

\*

「男は、獣を殺して胸に小さな痛みを感じたのさ。なぜだろうねえ。……神の血から生まれた命。血を通じて、神の悲しみが伝わったのか。それとも、向けられた獣の瞳に、何かを見たのか……。何にしたって哀れな話さ」

老婆は一息つき、新たに注いだお茶を口に含んで正面に座る少年を見つめた。

ヨウも一口、茶を口へ運ぶと、少しおいて老婆へと視線を向ける。「さて、お客さんよ、この話をどう思う」

その問いに、ヨウはすぐ答えようとはせず、老婆が何を求めてそれを訪ねてきたのか、その瞳を眺めた。

「悲しい話だ。……しかし、まあ、獣は最後報われた。痛みや苦しみから解放され、神の元へと戻された。神は毛皮を膝に置き、愛おしくその毛並みを撫でてやったという話だよ」

「だが、残された痛みもあった」

少年の瞳の赤が、まるで何かを責めるように手元の茶に突き刺せられた。彼のむすりとして茶を口に拭くむ姿に、老婆はくつくつと笑い、「ああ、そうだね」と返す。

「痛みは残った。英雄と呼ばれた男以外の19人は確実に命を落としているのだからね。そして、その前に獣に喰われてしまった者達と、その家族。痛みは幾らでも残った。

獣のいた美しい場所も消えてしまった。最終的に、残った人々を満

足させたのは一匹の獣の死だけさ。それと力か」

その言葉に、ヨウは何か納得しきれないようだった。僅かに眉が寄せられ、口元も小さくではあるが歪められている。老婆はそれを見て、和やかな声でまた語り出すように口を開く。

「化け物に生き物を殺めたいという気持ちはなかった。しかし、そうしてしまう結果となった。そうなってしまった理由はあった」

「……もし、化け物が、もともと化け物になりうる素質を持っていたとしたら」

ヨウの問いは、押し殺されたように喉で押えこまれ低く空気を揺らした。老婆は向かい合う客人の瞳に僅かの怒りを感じて息をつく。「それはない。言っただろう。神は獣を愛していた。大切にしていたのさ。そして信じていた。だからずっとそばに置いていたんだ。」

……そして、獣が罪を犯した後も、神はずっと獣を見守っていた」  
「何が言いたい」

赤い瞳がまっすぐに翡翠色の瞳へ向けられる。白濁したろうばの片目は手に持ったお茶を見ているようだった。だが、翡翠の瞳はぴたりと固定されているように正面のヨウへと向けられている。ヨウにはまるで、老婆ではなくあの翡翠色の瞳が老婆の口を借りて話しているように感じた。

「わかるだろう。神は獣を見ていた。獣は罪を犯したが、信じられていた。人は人を見る。そして、そこにその人間の真意を見つける。その人間は信じられるものかどうか無意識にでも見定める。見定める期間が長ければ長いほど、それは確かなものへと近づいていく。」

それを人は、『信頼』と呼ぶ」

「見間違えていたら？ もし嘘をついていたら？信じられているとわかっていても、人は簡単に人を裏切る。『信頼』なんて言葉は、信用すべきじゃない」

老婆の声は柔らかい。だが、それとは対照的に、ヨウの声は聞くからに固い。

「確かにそうさ。裏切るのは簡単だ。……だがねえ、その行動を

起こす前の心の葛藤や、裏切りを起こしてしまつてからの罪を背負う足は重いはずだ。皆何か、己が罪だと思つた行動を起こした時は心を痛めるものさ。だから罪だと呼べる。だろつ？」

静かな沈黙と、ヨウの否定的な視線。どちらも老婆は感じていないのだろつか。お茶を飲む動作やその声から、柔らかさがなくなることはない。

「わかるかい、お客さんよ。これに似た誰かを、私は知っている」「英雄か、化け物か、」

「……………両方さ」

老婆はぎよろりと見開いた翡翠の眼に白濁した方の瞳も合わせ、正面の少年を見上げる。

ヨウは身じろぐこともせず、ただ向けられた瞳へと視線を返した。「お前さんは、その『信賴』を信じるべきだ。化け物はもういない。小さな少女が、お前さんの代わりに殺してやった」

テーブルの下で、膝の上に置かれていたヨウの肩手が握り閉められる。

「何であんたが口を出す。……………そうだ。確かにあいつは死んだ。けど、だからと言つて俺はあいつを許そつとは思えない。それに、随分前から嫌いだった」

「その嫌いが嘘にしる本当にしろ、あの哀れな『化け物』は真実を置いて死んでいった。……………それはつまり、お前さんに知つてほしいという意味があつたからじゃないのかね」

「真実？」

ヨウの目もとが小さく動く。それは本当につるさげで、腹立たしげで。

「そうさ。本人が直接、お前さんに見つけて欲しいと言つていたのを聞いたわけではないがね、誰かが追い掛けてくることに確信をもつて、あの青年は真実を残して行つたんだ。でなければそんな無駄はしない。……………これは、『信賴』というものじゃないのかね」

「……………あんたは、俺にそれを探せと？」

「探せとは言っていない。私はただ、随分と置いてけぼりにされた化け物の話を、誰かに話したくなっただけさ」

「そうか。俺は、あんたの言う『化け物』の真実やらには興味が無い。物語は物語だ。それに重ねられたあいつが、その物語の化け物と全く一緒だとも思いたくない。あいつはただ、俺の中で憎むべき対象であればそれでいい」

「そうかい。それがお前さんの真意」

老婆の瞳はそらされる。しかし、ヨウは確かにその翡翠の瞳がまだ自分を見つめているように感じた。いや、これは「ように」ではない。確かに見つめているのだ。その視線はずっと、自分の心の中か、もしくは頭の中かを見透かすように、瞬きも感じさせずに真っ直ぐな線突き刺してきた。

\*

やがて日も沈んできたころ、ヨウは老婆との話につきあうのも飽きてその小屋を発つことにした。

ここに泊まるうとすることのない客人へ、老婆はただ優しく「それがお前さんには正しい」と頷く。そして、あの甘い香りのするお茶と、幾らかの乾燥させた肉をヨウに渡し、見送るために小屋を出る。

「あんた、その目本当に見えてるのか？」

会った時からずっと瞬きの回数が少なく、たまに思い出したように瞼を閉じる老婆の姿にヨウは疑問に思っていた。老婆はヨウのその問いにくつくつと笑う。

「この目に気づいたのは、お前さんが二人目だよ。そして、生きた客人もお前さんが二人めさ」

「そうか」

ヨウは興味がなさそうに返す。

「どうだい？ この使い物にならなそうな腐った瞳は。昔は黒かったこれも、今じゃ色が抜けて物の影しか捉えやしない。けどね、私は今も昔も、こちらの目で生きてきた。」

こちらの目しか、見えなかつたんだよ。翡翠の瞳は、生活面で何の役にも立ちやしない。たまに気が向いたと思えば、私におかしな白昼夢を見せたり、ただひたすらに真つ暗な闇を与えてくるだけさ。

「……さて、お前さん」

老婆がまがつた腰を僅かに持ち上げ、腕を伸ばす。ヨウはカサついた指先を左目の下に感じたが、拒む間もなくその指は離れた。だが、そこにはなんとも言えない熱が残っていた。

「客人よ、お前さんはあの物語でいう英雄だ。化け物を追い、その息の根を止めんとする、英雄と呼ばれた男と同じ……これもとても、悲しい役目さ」

英雄という言葉がもともと好きではないヨウは、老婆のその言葉に僅かに不快感をもつ。しかし、それとは別の何かが、先ほど触れられた頬から瞳の裏へと伝わり、熱を宿した。その熱は自分とは別の火の存在をわずかに感じさせ、すぐに収まる。

「あんたは、その化け物の知り合いか？ それとも、それもその片目があいつの幻でも見せたか？」

老婆は音を出さずに笑う。それは苦笑にも似たわずかな動きを見せる。

「そうだねえ……幻か、現実か、……私にとって、それらに塚をつけるのはとても難しいことだ。だがねえ、あれが現実であつてくれたなら、私はたしかに『彼』と話し、先ほどお前さんとやったように、お茶を飲んだよ」

「なら、あいつが何をしたかも知っているか」

「いいや、……あの時は、そうだねえ。私の記憶が確かであれば、あの男とはこの森の事や、私の話しかしていない。……だけど、この瞳は、お前さんの『幻』とやらを見せていたらしい。それが実

際に起きたかどうかも、私には確かめられないことさ。けど、お前さんも一緒だよ。お前さんと話している間、この瞳はずっと私におかしな『幻』を見せていた」

「悪趣味な瞳だな」

「本当に、まっただくだ」

くつくつと笑う老婆。ヨウはそれを眺め、そろそろ行くところかと向きを変える。

「そうだねえ、お前さん、化け物の住んでいたといわれる地へはもう行ったかい？　今では小さな村や町が静かに栄えるのどかな場所さ」

「ああ。……その瞳が、そこに本物の『化け物』でも見つけたか」  
嘲る少年に、老婆は「いいや」と首を振る。

「あの場所に、化け物なんていやしない。少なくとも、私の見た幻が真実と一致していればねえ。……私が見たのは、寂しがりやな小さな子犬さ」

「子犬………確かにな」

ヨウは老婆の示す言葉が何なのかをさっしてくつりと笑う。

それを見てかどうか、老婆はその幻で見た者を伝えた。

「笑っていたよ」

あの子も、あの青年も。……まるで、昔の誰かさんと同じように。二人で。

「興味無いな」

ヨウはお茶と肉との礼を言い、その小屋を後にした。

久々の客人を見送る老婆の隣に、のそのそと木々の中からあのおかしな獣が歩み寄り、腰を下ろす。

隣に並ぶ獣を見ることもなく、老婆は小さな苦笑いを浮かべる。

「あんたも似ているね」

語り継がれる哀れな化け物。

そして、随分前に現れた男も。信頼する者に、殺されることを願った青年。

「けどあの子は……………」

化け物に出会い、化け物を慕った彼女はきつと、化け物でもなければ英雄でもない。

物語は、所詮物語。

「……………私は、あの町が好きだよ。あの湖も、あの地の水も」

「モ、オー……………」

隣で獣は小さく鳴いた。

「また、会いたいもんだね。あの子にも、あの客人にも」

静まり返った小屋の中。小さなランプに火が灯されて、それを窓の外から覗きこむ獣の瞳を、暖かいオレンジ色が照らし出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5832f/>

---

水色と灰色と赤の旅～かの人<sup>ひと</sup>の記憶流れ行くと共に

2010年10月24日13時21分発行